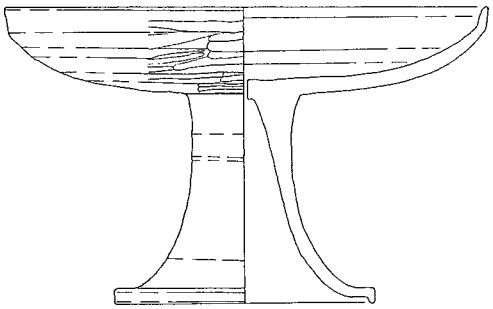
新発田市埋蔵文化財調査報告　第 44

地蔵潟 A 遺跡 発掘調査報告書

県営経営体育成基盤整備事業（佐々木南部郷２期地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ



２０１２

新発田市教育委員会

新発田市埋蔵文化財調査報告　第44

地蔵潟A遺跡 発掘調査報告書

県営経営体育成基盤整備事業（佐々木南部郷２期地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ

２０１２

新発田市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，新潟県新発田市飯島字地蔵潟 1184 番地ほかに所在する地蔵潟（じぞうがた）Ａ遺跡の発掘調査記録である。

2．発掘調査は，「県営経営体育成基盤整備事業(佐々木南部郷２期地区)」に伴う本発掘調査であり，新潟県新発田地域振興局から依頼を受け，新発田市教育委員会が調査主体となって実施した。平成 21(2009)年５月 25 日から９月 28 日に現地調査を行い，整理作業は発掘調査終了後に基礎作業を，平成 22 年度には基礎作業と本格整理作業，平成 23 年度に本格整理作業・報告書作成及び印刷作業を行った。調査体制は表１に掲げた。

3．本発掘調査に要した経費は，県農地整備担当部局が 90%，文化財担当部局が 10%を負担し，文化財担当部局分については国庫及び県費の補助金交付を受けた。

4．遺物と図面・日誌・遺構カード・写真ネガなどの記録類は，新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は，土器類については遺跡名を「ジゾウＡ」と略記し，グリッド・遺構・層位・遺物番号・年月日を記した。遺物は注記と分類作業を終え，報告書掲載とそれ以外とに分けてコンテナに収納してある。なお，報告書掲載遺物の土器類は，本書での図の通し番号を水色で追加注記した。

5．本報告書の編集は調査担当者の本田祐二（市教育委員会文化財技師）が行った。執筆は，墨書土器とその文字の判読，第Ⅲ章４の執筆は浅井勝利氏（新潟県立歴史博物館）に依頼し，第Ⅲ章の土器に関する記述と第Ⅴ章２は笹澤正史（市教育委員会臨時職員）が行い，残りの第Ⅳ章を除くほかは本田が担当した。

6．第Ⅳ章の自然化学分析は，１を㈱第四紀地質研究所，２を㈱パレオ・ラボ，３を㈱加速器分析研究所に委託し，それぞれの業務報告を掲載したが，１については受託者の承諾を得て本田が要約した。原本の開示請求は市教育委員会へ願いたい。

7．遺構図の編集は本田，トレス・版下作成は本田が作業員へ指示し行った。出土遺物の図化作業は，土器実測を笹澤・本田と作業員が担当し，拓本は本田の指示により作業員が行った。遺物図の編集は本田・笹澤が，実測図のトレスと版下作成は本田・笹澤の指示で作業員が行った。

8．現場の調査写真は本田・渡邊，遺物撮影は本田・笹澤が行い，写真図版作成は本田の指示により作業員が行った。

9．空中写真撮影は㈱太陽測地社に委託し，その成果品を本書に掲載した。

10．本報告書の内容と，これまでに発掘調査報告会等で報告した内容との齟齬が生じている箇所については，本報告書の内容をもって正式報告とする。

11．発掘調査から本書の作成まで，下記の多くの諸氏・機関からご助言・ご支援を賜わった。記して感謝の意を表す次第である。(順不同，敬称略)

相沢 央　相沢裕子　伊藤啓雄　春日真実　小林 弘　関 雅之　高橋春栄　藤巻正信　増子正三　水澤幸一　望月精司　新潟県教育庁文化行政課　新潟県新発田地域振興局農村整備部　佐々木土地改良区

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地 ---------- 1
2　周辺の遺跡 ---------- 3

第Ⅱ章　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯と調査体制 ---------- 5
2　グリットの設定と基本土層 ---------- 6
3　調査の経過 ---------- 9

第Ⅲ章　遺構と遺物

1　遺構・遺物の概要と記載方法 ---------- 10
2　遺構と出土遺物 ---------- 13
3　遺構外出土遺物 ---------- 68
4　墨書土器 ---------- 76

第Ⅳ章　自然科学分析

1　地蔵潟Ａ遺跡出土須恵器の胎土分析 ---------- 94
2　地蔵潟Ａ遺跡出土木材の樹種同定 ---------- 99
3　地蔵潟Ａ遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定） ---------- 103

第Ⅴ章　ま　と　め

1　掘立柱建物群の構成 ---------- 107
2　遺物の時期的な位置付けと特徴 ---------- 109
3　地蔵潟Ａ遺跡の変遷 ---------- 114

注・引用文献 ---------- 119
要　　約 ---------- 121
報告書抄録 ---------- 奥付

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 ---------- 1
第２図　復元地形 ---------- 2
第３図　遺跡周辺の古代の遺跡 ---------- 4
第４図　確認調査と本調査の範囲 ---------- 6
第５図　グリッドの設定 ---------- 7
第６図　調査区基本土層 ---------- 8
第７図　遺構配置図 ---------- （10-11 折込）
第８図　器種分類図 ---------- 12
第９図　１号掘立柱建物と周辺の遺構 ---------- 14
第 10 図　38 号溝遺物出土状態・１号掘立柱建物と周辺の遺構の土層 ---------- 15
第 11 図　１号掘立柱建物周辺の遺構出土遺物 ---------- 16
第 12 図　２号掘立柱建物と周辺の遺構 ---------- 17

第13図　２号掘立柱建物と周辺の遺構の土層 ---------- 18
第14図　２号掘立柱建物と周辺の遺構出土遺物 ---------- 19
第15図　３号掘立柱建物のエレベーション図と土層・柱 ---------- 20
第16図　４号掘立柱建物 ---------- 22
第17図　５号掘立柱建物と周辺の遺構 ---------- 23
第18図　５号掘立柱建物の土層と柱 ---------- 24
第19図　５号掘立柱建物周辺の遺構の土層と１号杭列出土の杭 ---------- 25
第20図　５号掘立柱建物と周辺の遺構出土遺物 ---------- 26
第21図　６号掘立柱建物と出土遺物・柱 ---------- 28
第22図　７・11号掘立柱建物 ---------- 29
第23図　７・11号掘立柱建物の土層 ---------- 30
第24図　７～11 号掘立柱建物の出土遺物と柱 ---------- 31
第25図　８号掘立柱建物 ---------- 32
第26図　８号掘立柱建物の土層 ---------- 33
第27図　９号掘立柱建物 ---------- 34
第28図　９号掘立柱建物の土層 ---------- 35
第29図　10号掘立柱建物 ---------- 36
第30図　10号掘立柱建物の土層 ---------- 37
第31図　２号柵列 ---------- 38
第32図　１号井戸・６号溝と出土遺物 ---------- 39
第33図　１号土坑と出土遺物 ---------- 41
第34図　２～９号土坑 ---------- 43
第35図　10～17号土坑 ---------- 44
第36図　２～16号土坑出土遺物 ---------- 45
第37図　ピット平面・エレベーション図 ---------- 46
第38図　ピット出土遺物 ---------- 47
第39図　１・２・21・23・24・35・36号溝 ---------- 49
第40図　10・11・18・20号溝 ---------- 50
第41図　12・22・25・26・30号溝 ---------- 51
第42図　27・28・31・34・37号溝 ---------- 52
第43図　29号溝 ---------- 53
第44図　32・33号溝 ---------- 54
第45図　39・40号溝 ---------- 55
第46図　溝出土遺物（１） ---------- 56
第47図　溝出土遺物（２） ---------- 57
第48図　１号流路 ---------- （58-59 折込）
第49図　１号流路遺物出土状態・土層 ---------- 59
第50図　護岸施設断面図と構築材 ---------- 61
第51図　１号流路出土遺物（１） ---------- 62
第52図　１号流路出土遺物（２） ---------- 63
第53図　１号流路出土遺物（３） ---------- 64
第54図　１号流路出土遺物（４） ---------- 65
第55図　１号流路出土遺物（５） ---------- 66
第56図　１号流路出土遺物（６） ---------- 67
第57図　遺構外出土遺物（１） ---------- 69
第58図　遺構外出土遺物（２） ---------- 70
第59図　遺構外出土遺物（３） ---------- 72
第60図　遺構外出土遺物（４） ---------- 73
第61図　遺構外出土遺物（５） ---------- 74
第62図　遺構外出土遺物（６） ---------- 75
第63図　掘立柱建物の群構成 ---------- 108
第64図　地蔵潟Ａ遺跡の遺構出土一括資料 ---------- 111
第65図　阿賀北地方における８世紀中葉以降の窯跡出土須恵器変遷案 ---------- 113
第66図　地蔵潟Ａ遺跡出土資料との比較資料 ---------- 115
第67図　地蔵潟Ａ遺跡の変遷（１） ---------- 116
第68図　地蔵潟Ａ遺跡の変遷（２） ---------- 117

表　目　次

表１　調査体制 ---------- 5
表２　墨書土器一覧表 ---------- 76
表３　遺構一覧表 ---------- 77
表４　遺物観察表 ---------- 84

図　版　目　次

図版１　調査区遠景・全景
図版２　38 号溝出土赤彩土師器高杯
図版３　調査区近景・基本土層（１）
図版４　基本土層（２）・調査風景・１号掘立柱建物と関連遺構
図版５　１・２号掘立柱建物と関連遺構
図版６　２～４号掘立柱建物と関連遺構
図版７　５号掘立柱建物と関連遺構
図版８　６～10 号掘立柱建物
図版９　８～11 号掘立柱建物・２号柵列
図版 10　１号井戸・６号溝・１号土坑
図版 11　１～11 号土坑
図版 12　13～17 号土坑・ピット
図版 13　１・10～20 号溝
図版 14　21～29 号溝
図版 15　30～36 号溝
図版 16　39・40 号溝・１号流路・護岸施設
図版 17　遺構出土遺物（１）
図版 18　遺構出土遺物（２）
図版 19　遺構出土遺物（３）
図版 20　遺構出土遺物（４）・遺構外出土遺物（１）
図版 21　遺構外出土遺物（２）・底部ヘラ記号
図版 22　墨書土器・転用硯ほか
図版 23　木製品（１）
図版 24　木製品（２）・柱・杭・板ほか

凡　　例

１．本書に掲載した地形図は，国土地理院発行の 1/50,000「新発田」（平成 15 年）・「中条」（平成 15 年），および佐々木土地改良区作成の 1/2,000「佐々木南部郷地区地形図」を縮小したものである。

２．地形図は図の「天」が真北で，遺構図の方位記号は真北を示す。

３．グリッド杭の国家座標は第Ⅷ系，基点となるＡ24 杭（QRqr 杭）が〈Ｘ＝213,938.483，Ｙ＝68,153.328〉，北側のＡ23 杭が〈Ｘ＝214,385.374，Ｙ＝68,252.682〉である。この２点を結ぶ南北グリッド軸の方位は，真北に対して N -12° 32′ 3″ -E である。

４．挿図の縮尺は，遺構平面図 1/40～1/100，断面図 1/20～1/50，遺物は 1/3 を基本とする他，1/4・1/8 とし，適宜スケールと縮尺を示した。

５．土層説明および遺物の色調での土色は，小山正忠・竹原秀雄 2003『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社 を使用した。

６．遺物は，種別を問わず，挿図・写真図版とも同一の通し番号を付した。ただし，業務委託した第Ⅳ章の図表と第Ⅳ章２の写真図版は，節ごとに独立した番号である。

７．遺構図に示した遺物の原位置は，須恵器を●，土師器を▲，木製品を■とした。

８．遺構写真で，スケールとして用いたピンポールは，直線部分が 50cm の長さである。

９．引用文献は巻末に一括掲載し，本文中では著者と発行年を括弧書きで示した。ただし，業務委託した第Ⅳ章は，各節の文末に記した。

10．挿図中のスクリーントーンで示す範囲は，下記の内容を表す。

〈遺構図・断面図〉　地山　柱・木質

〈遺物実測図〉　赤彩　コゲ・スス　外皮　砂

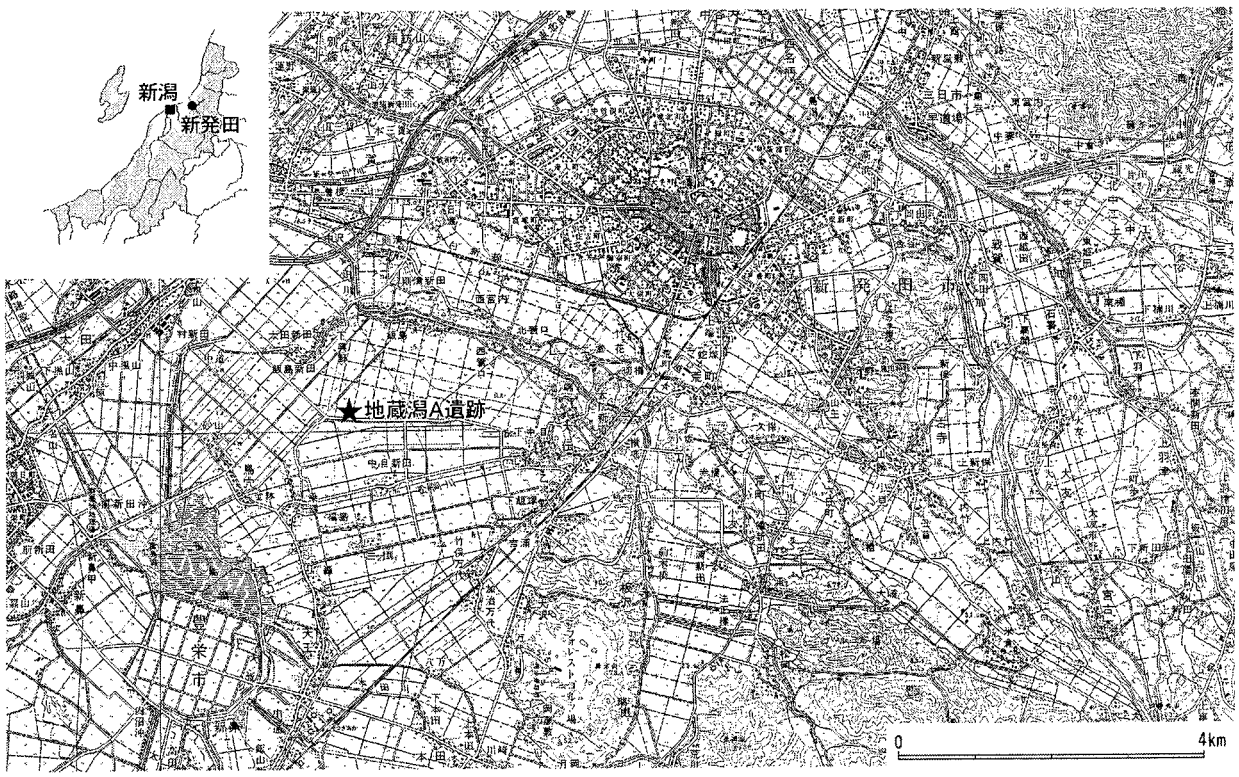
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は，新潟市の東に隣接する人口約10万人の県北部の地方都市である。市域は，東は山形県との県境となっている飯豊山地から，西は日本海に面する藤塚浜までの範囲にわたり，総面積は532.98 km^{2}である。住宅や商業施設が集中する市街地は，旧新発田藩の城下町とその周辺部に発達し，その周囲には，加治川水系の河川の恵みを豊かに受けて営まれる稲作農村地帯が広がっている。

市域の東側は，飯豊山地や五頭山地，櫛形山脈といった山々が連なり，平野に面して五十公野丘陵や真木山丘陵などの独立丘陵が点在する。山々から西流する加治川や太田川などの河川は，越後平野の一部である河成段丘や扇状地，沖積低地を形成した。これらの河川は，下流域で海岸線に並行して延びる新潟砂丘にぶつかり，日本海へと直接注ぐことができず，塩津潟（紫雲寺潟）や福島潟などの潟湖へ流れるほか，砂丘沿いを流れて阿賀野川と合流し，日本海へと注ぎ込んでいた。

地蔵潟Ａ遺跡は，新発田市飯島字地蔵潟1154番地ほかに所在する。市街地から南西へ約３kmに位置し，遺跡の周囲には田畑が広がる。本遺跡の所在する佐々木地区は以前から稲作が盛んな地域で，市内でも比較的早い時期に耕地整理が行われた。遺跡は，加治川によって形成された扇状地の扇端部に立地し，標高は約３ｍである。現在の加治川は，五十公野丘陵の東麓に沿って流れ，市街地の北側を回り，砂丘を開削して造られた人工の放水路を通り日本海へと注いでいる。遺跡の立地する扇状地は，かつて加治川の主流が五十公野丘陵の南側を流れてい

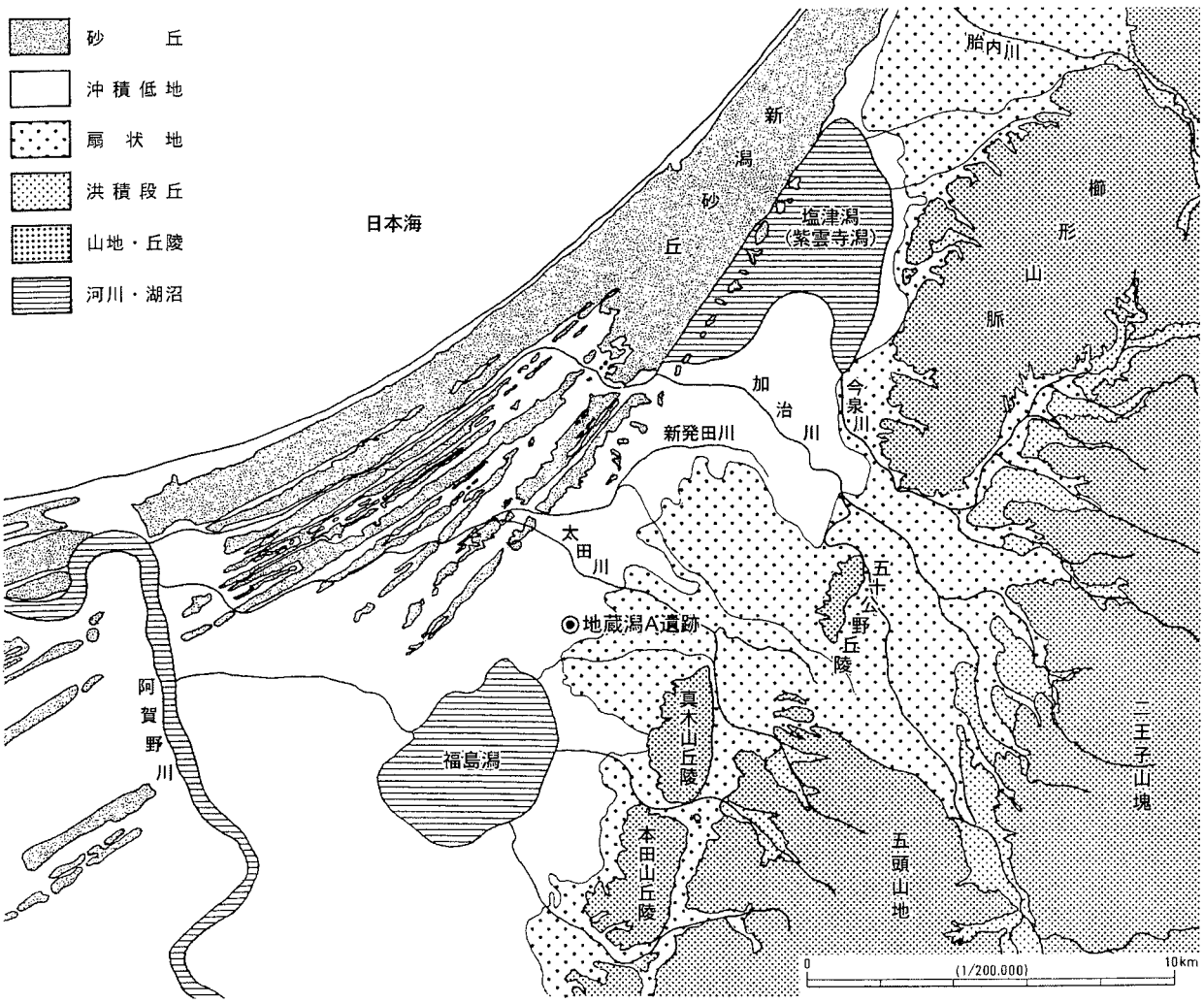


第1図　遺跡の位置

た時期に形成されたと考えられている（国土地理院 1993）。加治川はその後も度重なる流路の変遷があったと考えられ，溝口氏が入封した近世初頭の時期は，本流と支流の区別も明らかではなく，五十公野丘陵の東麓を通って姫田川と合流する流れと，五十公野丘陵の南側を通る二筋の流れがあったといわれている（加治川水害豫防組合 1926）。

現在，遺跡の周囲は平坦な地形となっているが，近年実施した確認調査や他の遺跡の本発掘調査の成果によると，南東から北西方向へと細長く延びる微高地が幾筋か存在していたことが判明している。微高地の周囲には未分解腐植層が厚く堆積する湿地が所々に広がり，小河川の跡も確認されている。当時の人々は，小河川により開析・浸食された細長い微高地上の，比較的地盤の良いところを選び，集落を営んでいたことが明らかになってきている。

なお，遺跡名の元となった字名の「地蔵潟」は，飯島地内に所在する常福寺に残る言い伝えによると，常福寺の開祖良薫禅師が，夢のお告げに従い池の中から地蔵尊像を探し当てたことにちなみ，その池に付けられた名前と言われている。かつてここに池が存在したという確証は得られていないが，明治 23 年大日本帝国陸軍第二師団測量の二万分の一迅速測図「新発田町」を見ると，遺跡の南西部に湿地状の広がりが描かれている。かつてはその場所に小さな潟があったと考えられる。地蔵潟Ａ遺跡は，その潟端に位置していることを図から読み取ることができる。



第2図　復元地形

2　周辺の遺跡

古代は律令制に基く中央集権国家の建設が進められ，その中で地方の整備も行われた。古代の行政区分では，新発田市域の大半は沼垂郡賀地郷に属していたと考えられている（桑原 1980)。賀地郷の範囲は，平安時代の末期に賀地郷内に設定された豊田庄と，郷名と同名の加地庄の庄域に当たると考えられ，現在の新発田市周辺の加治川流域から阿賀野川右岸の中下流域にわたる範囲と推測されている。このことから，地蔵潟Ａ遺跡も賀地郷に属していたと考えられる。

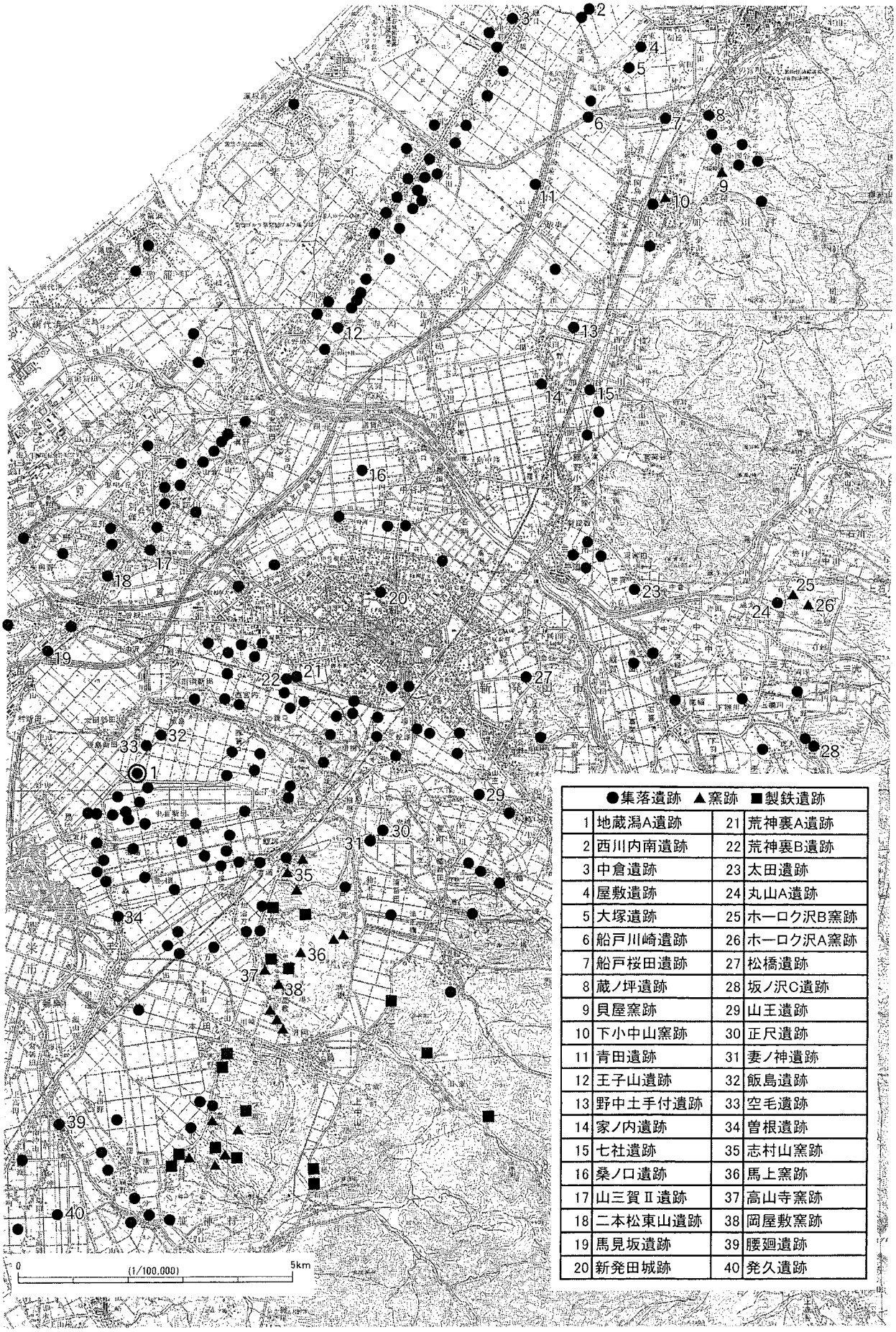
遺跡周辺の古代の遺跡の分布状況をみると，砂丘の内陸側や平野，丘陵，山麓などに広く分布が認められる。集落遺跡は砂丘上や自然堤防などの微高地上に多く分布し，窯跡や製鉄遺跡などの生産遺跡は丘陵や山麓に多く分布している。

古代の集落遺跡は，８世紀前半が少なく，山三賀Ⅱ遺跡（17)・荒神裏Ｂ遺跡（22）があるにすぎない。山三賀Ⅱ遺跡は，砂丘の内陸側に立地し，８世紀前半から９世紀後半まで営まれた集落である。古代の竪穴建物約 90 棟，掘立柱建物 27 棟などの遺構が検出されており，竪穴建物を主とした建物構成から，掘立柱建物を主とした建物構成へという集落の変遷を見ることができる集落遺跡である。律令国家により編成された新田開発集落と想定されている（坂井 1989)。

８世紀の中頃から後半になると集落遺跡数は増加し，９世紀初頭から前半にはピークに達する。発掘調査により集落の様相がわかっているものには，加治川扇状地上の微高地に立地する桑ノ口遺跡(16)，荒神裏Ａ遺跡(21)，太田遺跡（23)，飯島遺跡（32)，空毛遺跡（33）などがあり，福島潟沿いの自然堤防上に立地する曽根遺跡（34)，折居川扇状地上に立地する腰廻遺跡（39)，発久遺跡（40）などもあげられる。桑ノ口遺跡は新田開発に関わる富裕層の集落と目されており（鶴巻 2003)，発久遺跡は文字資料などの出土遺物から官衙関連遺跡と推定されている遺跡である（川上 1991)。また曽根遺跡は，遺跡周辺に須恵器や鉄の生産遺跡が多く存在することや，福島潟の潟端という立地条件から，これら生産遺跡の製品流通に関与していた官衙関連遺跡と考えられている（家田 1981)。古代の越後平野は潟湖や湿地などが点在し，それらをつなぐ大小の河川が網の目のように巡っていたと言われている。当時の人々はこれらの内水面を利用して交通網を整備し，盛んに交易を行っていたと考えられている（坂井 1996)。

集落遺跡の存続期間は，９世紀から 10 世紀の集落である桑ノ口遺跡・太田遺跡を除き，多くは遅くとも９世紀末には衰退している。当地域の遺跡の存続期間には９世紀と 10 世紀の間に画期がみられることが指摘されており（田中 2011)，古代集落を考えるうえで重要な指摘と考えられる。なお，９世紀後半になると山麓の段丘上にも坂ノ沢Ｃ遺跡（28）などの集落が営まれるようになり，山地に面した場所にも開発が及んだことがわかる。

古代の生産遺跡では，須恵器の窯跡と製鉄遺跡がみつかっている。新発田市周辺では８世紀前半に須恵器と鉄の生産が始まり，その後は県内でも有数の生産地へと発展した。須恵器は，８世紀前半に櫛形山脈西麓の下小中山窯（10)，真木山・本田山を含む笹神丘陵の志村山窯（35）で生産が始まる。以後，櫛形山脈西麓の貝屋窯（９)，笹神丘陵の岡屋敷窯（38)・高山寺窯（37)・清見寺窯・馬上窯（36)，二王子岳西麓のホーロク沢Ａ窯（25)・ホーロク沢Ｂ窯（26）で盛んに須恵器が生産され，９世紀中葉頃に終息する。なお製鉄遺跡は，真木山丘陵に多数分布し，操業時期は８世紀から９世紀に比定されている（関・本間 1981)。



●集落遺跡 ▲窯跡 ■製鉄遺跡			
1	地蔵潟A遺跡	21	荒神裏A遺跡
2	西川内南遺跡	22	荒神裏B遺跡
3	中倉遺跡	23	太田遺跡
4	屋敷遺跡	24	丸山A遺跡
5	大塚遺跡	25	ホーロク沢B窯跡
6	船戸川崎遺跡	26	ホーロク沢A窯跡
7	船戸桜田遺跡	27	松橋遺跡
8	蔵ノ坪遺跡	28	坂ノ沢C遺跡
9	貝屋窯跡	29	山王遺跡
10	下小中山窯跡	30	正尺遺跡
11	青田遺跡	31	妻ノ神遺跡
12	王子山遺跡	32	飯島遺跡
13	野中土手付遺跡	33	空毛遺跡
14	家ノ内遺跡	34	曽根遺跡
15	七社遺跡	35	志村山窯跡
16	桑ノ口遺跡	36	馬上窯跡
17	山三賀Ⅱ遺跡	37	高山寺窯跡
18	二本松東山遺跡	38	岡屋敷窯跡
19	馬見坂遺跡	39	腰廻遺跡
20	新発田城跡	40	発久遺跡

第3図　遺跡周辺の古代の遺跡

第Ⅱ章　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯と調査体制

地蔵潟Ａ遺跡が所在する県営経営体育成基盤整備事業佐々木南部郷２期地区は，平成15年に事業が採択された。新発田市教育委員会（以下，「市教委」）では事業の採択を受け，平成16・17年度に同地区内の分布調査を実施し，平成17年５月に地蔵潟Ａ遺跡の発見届を新潟県教育委員会教育長（以下，「県教育長」）へ提出し，平成18年３月に埋蔵文化財包蔵地として周知化された。

平成19年に地蔵潟Ａ遺跡周辺の工事が実施されることになり，平成18年10～11月に市教委は同遺跡の範囲確認調査を行った。調査の結果，周知の遺跡範囲内の中心部から北西部にかけての15,600㎡と南東部の1,750㎡の範囲で遺構または遺物包含層を検出し，工事予定区域に遺跡が広がることを確認した。この結果を受けて，市教委は事業主体である新潟県新発田地域振興局（以下，「県振興局」）と遺跡の取扱いについて協議し，15,600㎡分は盛土施工により遺跡を現状保存することで合意した。また，1,750㎡分は，盛土による遺跡の保存が難しいことから，工事実施年度である平成21年に本発掘調査を行うこととした。

以上の協議の経過を踏まえ，県振興局長は平成21年４月20日付け芝振農整第53号で「埋蔵文化財発掘の通知について」を県教育長宛てで市教育委員会教育長（以下，「市教育長」）に提出した。これを受け，市教育長は同年４月22日付け生学第181号「埋蔵文化財発掘調査の通知について（進達）」を県教育長へ進達し，県教育長は同年５月13日付け教文第168号の２「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で，事業者である県振興局長に工事前の発掘調査の実施を通知した。また，県振興局長は同年４月27日付け芝振農整第89号「遺跡の発掘調査について（依頼）」で，地蔵潟Ａ遺跡，及び同施工区域内の空毛遺跡，飯島遺跡の発掘調査の実施を市教育長へ依頼し，同年５月１日付けで県振興局と新発田市の両者は発掘調査費用負担契約を締結した。なお，調査費用の負担割合は，例言に記している。その後，市教育長は同年５月21日付け生学第408号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を県教育長へ提出し，５月25日から市教委は現地調査に着手した。調査体制

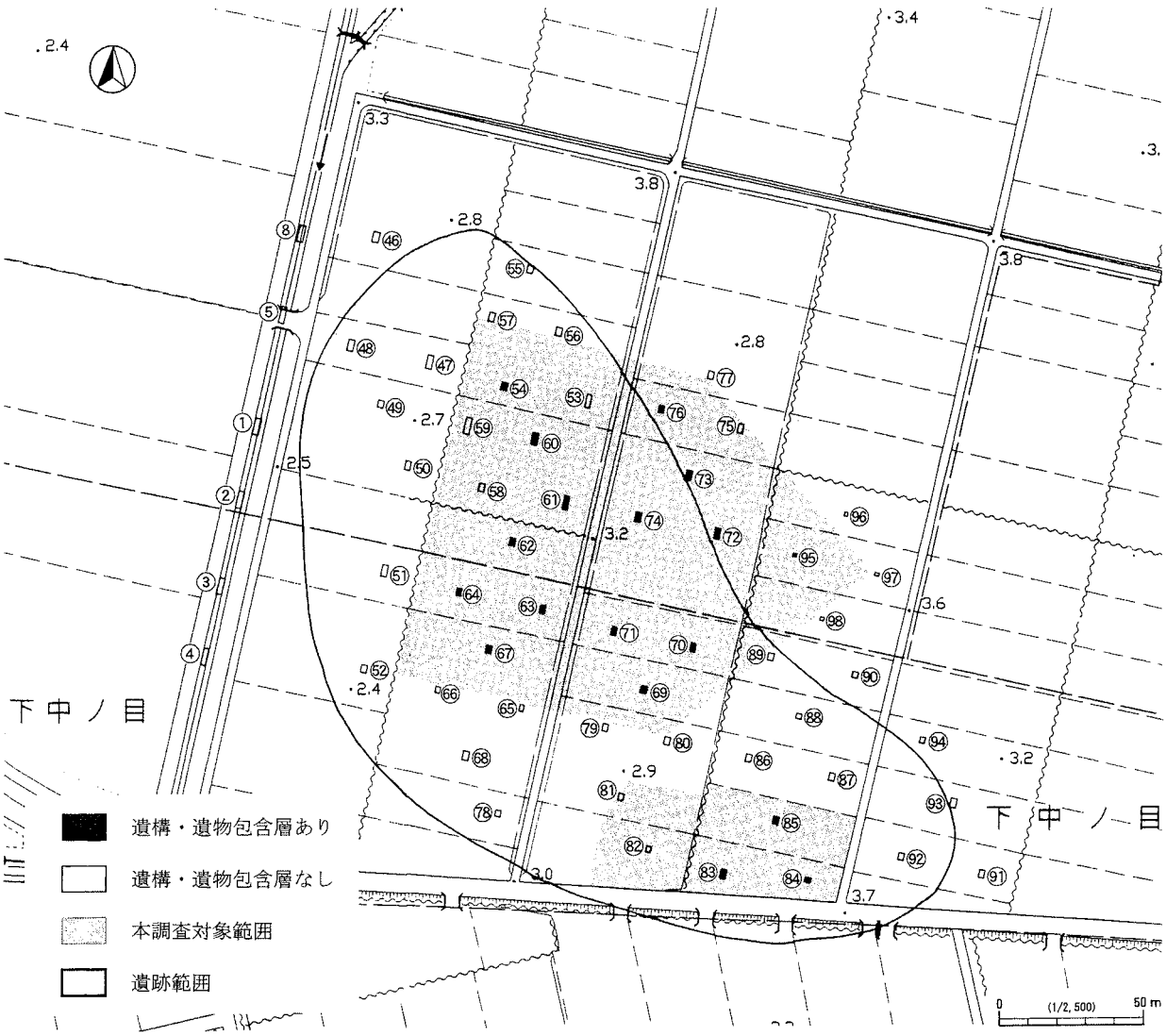
表１　調査体制

平成18年度（範囲確認調査）					
調査主体者	新発田市教育委員会（教育長　大滝　昇）		調査担当者	田中　耕作	（生涯学習課 参事）
監　理	築井　信幸	（教育部長）	調査員	本田　祐二	（生涯学習課 文化財技師）
総　括	土田　雅穂	（生涯学習課長）	庶　務	六井　浩子	（生涯学習課　主事）
平成21年度（本発掘調査）					
調査主体者	新発田市教育委員会（教育長　大滝　昇）		総　括	田中　耕作	（生涯学習課 参事）
監　理	土田　雅穂	（教育部長）	調査担当者	本田　祐二	（生涯学習課 文化財技師）
総　括	杉本　茂樹	（生涯学習課長）	調査員	渡邊美穂子	（生涯学習課 主任）
			庶　務	渡邊美穂子	（生涯学習課 主任）
平成22年度（整理作業）					
調査主体者	新発田市教育委員会（教育長　大滝　昇（～平成22年11月）・塚野　純一（平成22年12月～））				
監　理	土田　雅穂	（教育部長）	調査担当者	本田　祐二	（生涯学習課 文化財技師）
総　括	杉本　茂樹	（生涯学習課長）	調査員	笹澤　正史	（生涯学習課 臨時職員）
総　括	田中　耕作	（生涯学習課 参事）	庶　務	渡邊美穂子	（生涯学習課 主任）
平成23年度（整理作業・報告書作成）					
調査主体者	新発田市教育委員会（教育長　塚野　純一）		調査担当者	本田　祐二	（生涯学習課文化行政室 文化財技師）
監　理	新保　勇三	（教育部長）	調査員	笹澤　正史	（生涯学習課文化行政室 臨時職員）
総　括	荻野　正彦	（生涯学習課長）	庶　務	渡邊美穂子	（生涯学習課文化行政室 主任）
総　括	田中　耕作	（生涯学習課文化行政室長）		本田　祐二	（生涯学習課文化行政室 文化財技師）

は表１のとおりである。

２　グリットの設定と基本土層

調査区とグリットの設定　範囲確認調査の結果，遺跡の広がりは遺構または遺物包含層の空白域を間に挟み，北西部と南東部の２箇所に分かれることを確認したが，同一の遺跡として取扱うこととし，両者を含む範囲に統一のグリッドを用いた。グリッドはほ場整備工事区画に合わせ，調査区の南東側にあるＡ24 杭（X=213,938.483, Y=68,153.328）を基点に，その北側にあるＡ23 杭（X=214,385.374, Y=68,252.682）を見通す方向に南北のグリッドラインを設定し，一辺 10m四方の方眼を大グリッドとした。グリッドは北西を優位として，西から東へ「A」・「B」・「C」…とし，北から南へ「a」・「b」・「c」…として，その組み合わせで「Aa」・「Bc」のように呼称した。さらに大グリッドを東西・南北それぞれの方向に五等分した２m方眼を小グリッドとし，北から南，西から東へそれぞれ「１」・「２」…として，「1-1」・「1-2」…と呼称し，大小グリッドを組み合わせて「Aa1-1」・「Aa2-1」と示した。また，標高の原点は，ほ場整備工事用の仮原点Ｃ28（K.B.M.=3.875m）を基準点とし，調査区内へレベルを移動した。



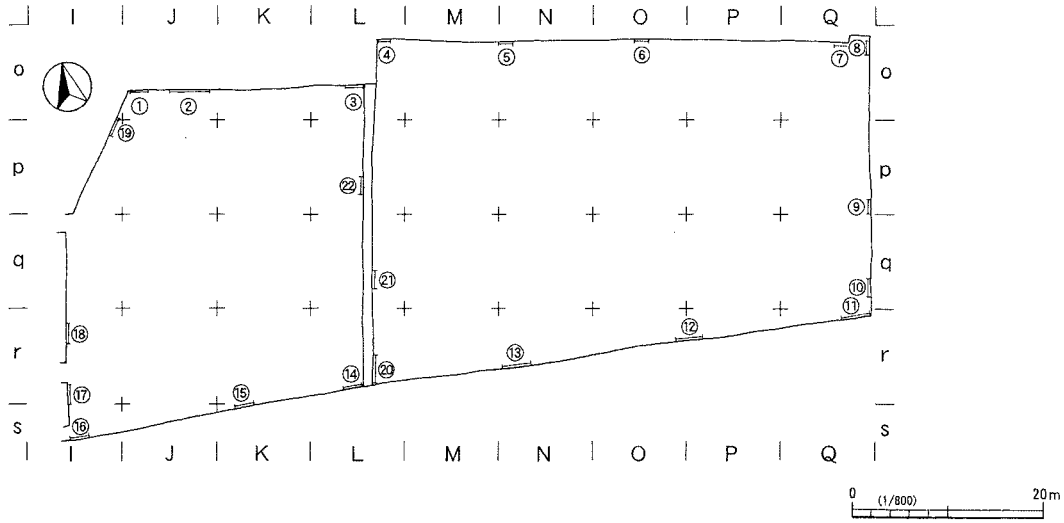
第4図　確認調査と本調査の範囲

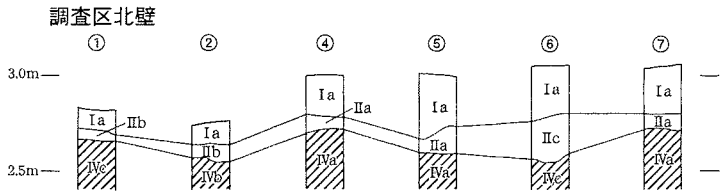
土　層　土層の観察は，調査区周囲の壁面及び調査区の中央部を南北に縦断していた排水路の掘削面を利用して，攪乱の影響を受けていない箇所を選んで観察と記録をした。なお，基本土層はローマ数字，遺構埋土は算用数字で表記し，さらなる細分にはアルファベットの小文字を付した。

基本層序は，表土を含めⅠ～Ⅳ層に分類した。Ⅰ層は表土で，耕土であるａ層と盛土であるｂ層に分けられる。Ⅱ層は旧耕土，またはその他の堆積層で，炭化物や未分解腐植の有無でａ～ｃに細分できる。未分解腐植を含むⅡｃ層は，調査区北部の流路や谷地とその周辺の上部にのみ堆積が認められる。Ⅲ層は，黒褐色～暗灰黄色のシルトまたは砂質シルトで，古代の遺物を含む遺物包含層，またはこの包含層に相当するが遺物を含まない層である。遺物包含層であるⅢａ層は調査区の中央部周辺にのみ広がり，調査区西側にかけては包含層相当層（Ⅲｂ・Ⅲｃ層）が広がっている。Ⅳ層は地山であり，オリーブ灰色粘質土であるⅣａ層と，オリーブ灰色シルト～細砂のⅣｂ層，流路の痕跡と考えられるオリーブ褐色～オリーブ色粗砂のⅣｃ層に分けられる。

今回の発掘調査は，Ⅰ・Ⅱ層の掘削には重機を使用し，Ⅲ層を人力で掘り下げ，Ⅳ層の上面で遺構の検出作業を行った。なお，遺構検出面の標高は2.5～2.7ｍであり，東から西へと緩やかに傾斜している。

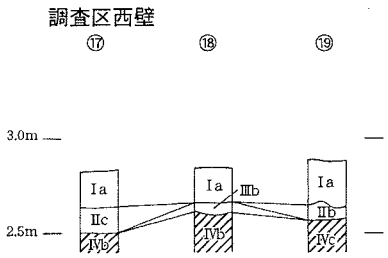
第5図　グリッドの設定

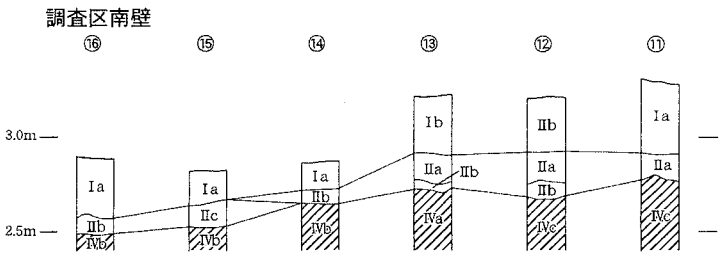


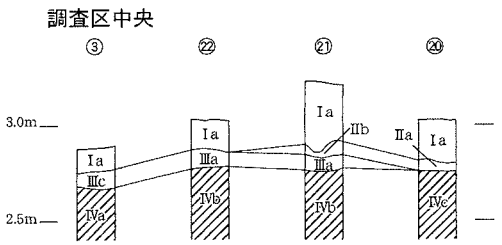


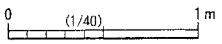
小グリッド

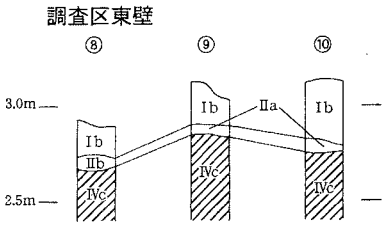
1-1		3-1		5-1
1-3		3-3		5-3
1-5		3-5		5-5











Ⅰ層（耕土・盛土）
- a層　2.5Y3/1～5Y2/1黒褐色～黒色シルト、粘性・しまり弱、地山ブロックを含む。ところにより赤褐色粒・炭化物を含み、砂が混じる。耕土。
- b層　10YR3/2黒褐色シルト、粘性・しまりやや弱、地山ブロックを多量含む。盛土。

Ⅱ層（旧耕土・谷地状堆積物層）
- a層　2.5Y3/2～5Y3/1黒褐色～オリーブ黒色シルト～粗砂、粘性弱・しまりやや強～弱、地山ブロックを少量含む。ところにより赤褐色粒を多量含む。
- b層　2.5Y3/2～5Y3/2黒褐色～オリーブ黒色シルト～砂質シルト、粘性・しまりやや弱、炭化物を少量含み、ところにより地山ブロックを多量含む。
- c層　5Y4/2灰オリーブ色シルト、粘性やや強・しまりやや弱、未分解腐植を多量含む。谷地状堆積物層。

Ⅲ層（遺物包含層・遺物包含層相当層）
- a層　2.5Y3/2～5Y3/2黒褐色～オリーブ黒色シルト～砂質シルト、粘性弱～やや強・しまりやや強、炭化物・地山ブロックを含む。遺物包含層。
- b層　2.5Y3/2黒褐色シルト、粘性・しまりやや弱～やや強、炭化物を微量含む。遺物包含層相当層。
- c層　2.5Y4/2暗灰黄色シルト、粘性・しまり強、炭化物を微量含む。遺物包含層相当層。

Ⅳ層（地山）
- a層　2.5GY6/1～5Y6/2オリーブ灰色粘質土、粘性・しまり強。地山。
- b層　5Y5/2～5Y6/2オリーブ灰色細砂～シルト、粘性極弱～やや強・しまり弱～強。地山。
- c層　2.5Y4/3～5Y5/4オリーブ褐色～オリーブ色粗砂、粘性・しまり無。地山。

第6図　調査区基本土層

3　調査の経過

発掘調査の経過（調査日誌抄）

平成21年5月25日～6月1日　器材搬入，重機による表土掘削を東側から行う。乾燥を防ぐため，調査区の3分の1を残して重機掘削を一旦終了した。その後，調査区南西部から東側へ向かって人力で遺物包含層を掘削し，遺構検出を行う。調査区北東部には未分解腐植物を多量に含む土が広範に堆積しており，谷地状地形の広がりが考えられる。Mqグリッドで赤彩された高杯が出土し，Mq・Nqグリッドにまたがる掘立柱建物を検出する。工事用の杭に合わせてグリッドを設定，調査区内に測量杭を打設し，レベル移動を行う。

6月2日～12日　調査区西側の排水路から調査区内へ水の染み出しがあり，調査に手間取る。Nqグリッドで素掘りの井戸1基を検出，内部を4分割して，記録作成と掘削を並行して進める。また，当初予定していたよりも西側へと遺跡が広がっている様子がみられることから，後日，調査範囲の変更について事業者や土地改良区と協議を行うこととする。

6月15日～22日　降雨により地下水位が上昇し，湧水が著しいことから掘削，記録作成ともに手間取る。Mp・Mqグリッド周辺の掘立柱建物3棟の掘削，記録作成を中心に作業を進める。これらの建物のうち2棟は，雨落ち溝と考えられる溝を伴うことが判明する。

6月23日　現地説明会の開催と，調査区西側への調査範囲の拡張について県振興局担当者と現地で協議し，了承を得る。

6月24日～7月1日　掘立柱建物・ピットを中心に，遺構掘削，記録作成を行う。柱根が残っているピットがいくつか見られ，断ち割りは後日実施。調査区北東部に広がる谷地状地形の落ち際で，完形の須恵器短頸壺と割れた土師器小甕が一緒に出土する。調査区基本土層の記録作成を行う。

7月2日　調査範囲拡張を検討するため，調査区西側の田面に確認トレンチ3か所を掘削する。溝等を検出し，遺跡が西側へ広がることが判明する。

7月3日～24日　拡張することが決まった西側調査区と掘り残していた東側調査区北半部の表土を重機で掘削し，人力で遺物包含層掘削を行う。測量杭の打設を実施する。

7月25日　現地説明会を開催，122名が来場する。

7月27日～8月5日　Mo～Ooグリッドで遺物包含層掘削，遺構検出，遺構掘削を行う。谷地状地形に面して掘立柱建物と柵列を検出し，これらの遺構掘削と記録作成を行う。

8月6日～12日　東側調査区では引き続き遺構掘削・記録作成を行う。西側調査区では北半部の遺構検出に着手し，遺構の疎らな分布を確認する，西側には谷地が広がり，遺構も見られない。

8月17日～25日　お盆休みを挟み，調査を再開する。東側調査区では，谷地状地形部分を残し，主だった遺構の掘削は終了したので，記録作成を中心に作業を進める。西側調査区では北半部の調査を終了し，南半部の調査に着手した。調査区中央から東側にかけて広範囲に攪乱を受けているが，掘立柱建物などの遺構を検出する。

8月26日～9月7日　引き続き西側調査区の遺構検出・掘削と記録作成を実施する。調査区の西側で倉庫跡と考えられる総柱の掘立柱建物を検出し，掘削を行う。

9月8日～14日　遺構の掘削が概ね終了したことから，記録作成を行い，9月11日に完掘状態の空中写真撮影を実施する。東側調査区の谷地状堆積物の下から2筋の流路跡を検出。柱根や杭の残る柱穴・ピットの断ち割りを行う。

9月16日～25日　調査区中央を縦断する排水路部分の調査に着手する。重機で表土掘削をし，人力で遺物包含層掘削と遺構検出を行う。この部分の掘削により，以前検出していた掘立柱建物の様相が判明する。これらの遺構の掘削と記録作成を行い，並行して東側調査区の流路跡及び杭列の掘削・断ち割りと記録作成，調査区基本土層の記録作成を実施する。現場器材の返却や搬出，不要な測量杭の撤去等，撤収作業に着手する。

9月28日～30日　東側調査区の流路跡の記録作成を行い，残った器材の搬出を行う。また，仮設建物の撤去や借上げ器材の返却を行い，現地での作業を終了した。

整理作業の経過

現地調査終了後，遺構図面・写真の整理と出土遺物の水洗・注記を行った。平成21年度内にこれら基礎的な整理作業を終えることができなかったことから，平成22年度には引き続き基礎的な整理作業を実施し，併せて遺構カードの作成，遺物の接合・復元と分類・選別，実測・浄書作業を行った。また，出土した須恵器の胎土分析と木製品の放射性炭素年代測定及び樹種同定を，外部の分析機関に委託して実施した。平成23年度は遺構図面の浄書，遺物の実測と拓本採取，浄書と写真撮影を行い，出土文字資料の解読および原稿執筆を外部の研究者に依頼した。その後，図版版下の作成・原稿執筆を行い，報告書を印刷・刊行した。

第Ⅲ章　遺構と遺物

1　遺構・遺物の概要と記載方法

遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は，掘立柱建物 11 棟，柵列２列，井戸１基，土坑 17 基，ピット 90 基，溝 41 条，杭列３列，流路１筋である。地山面は粗砂や細砂（流路跡），シルトや粘質土が複雑に入り組んでおり，遺構はいずれも地山面からのみ掘り込みを確認することができる。なお，全体に地下水位が高く，柱根や杭，木製品が比較的良好な状態で遺存している。これらの遺構は，おおむねＪグリッド列からＯグリッド列の範囲にまとまって分布している。西は 29 号溝北西側，10 号掘立柱建物・33 号溝南西側には 13 号土坑以外の遺構は検出されておらず，東はＰグリッド列以東では遺構は検出されていない。調査区北東部に流路があり，北西部には谷地が広がっていることから，居住域は流路や谷地，溝に囲まれたごく限られた範囲に形成されていたことが確認できた。今回の調査では，一部が南側の広域農道下へ広がるものの，ひとつの集落の居住域をほぼ丸ごと調査し，その構造を明らかにした。

遺構の帰属時期は，出土遺物からおおむね８世紀後半から９世紀中葉のものと考えられるが，出土遺物の少ない遺構が多いことから，その帰属時期を遺物からだけでは判断することが難しい。そのため，遺構の主軸方位や遺構相互の重複・新旧関係，配置などから検討を加えて遺構の帰属時期を決定し，当遺跡には４時期の変遷が認められると判断した。

遺構の記載方法

遺構の記載は，種類ごとに遺構番号順で掲載することを基本としたが，互いに関連する遺構は種類が異なってもまとめて記載をした。各種遺構の記載方法は下記のとおりであり，各遺構の詳細な計測値は，遺構一覧表を参照されたい。

掘立柱建物は，柱間数の多い方向を桁行（長軸），少ない方向を梁行（短軸）とし，建物規模を「(桁行）○間（長軸）×（梁行）○間（短軸)」と表記した。間数が同じものは長い辺を長軸，短い辺を短軸とした。桁行および梁行の長さは，両端の柱または柱痕跡（柱位置が不明なものは柱掘方の中心）の心々距離で測り，建物面積は桁行（長軸）の数値に梁行（短軸）の数値を乗じて算出した。主軸方位は，桁行（長軸）の方向が北を基準に東西に振れる角度で示している。なお，遺存していた柱根は，図化・計測に耐えうるもののみを掲載し，柱材の木取りの分類は（加藤・猪狩 2004）に準拠した。柵列は，検出されている両端の柱穴の柱または柱痕跡（柱位置が不明なものは柱掘方の中心）の心々距離で長さを計測している。両端の柱穴を結んだラインを主軸とし，主軸方位はこの軸が北を基準に東西に振れる角度で示している。井戸・土坑・ピットは，平面形のうち最も長い部分を長軸とし，主軸方位はこの軸が北を基準に東西に振れる角度で示している。深さは検出面からの計測値で，平面形及び断面形は（加藤 1999）の形態分類に準拠した。溝は，同一線上に延びるものを同じ溝と捉え，途中で断絶しているものはアルファベットの小文字で枝番号を付して表記した。長さは断絶部分も含めた距離の総延長で示している。深さの計測方法や断面形の形態分類は，井戸・土坑・ピットに準ずる。

遺物の概要

遺物は，古代の須恵器，土師器，赤彩土師器，木製品がある。遺構一括資料は限られるものの８世紀後半から９世紀前半の資料がまとまって出土しており，当該期の土器組成を理解する上で良好な資料が得られた。記載は，

I
J
K
L
M
N
O
P
Q
o
p
q
r
s
谷地
2号柵列
41号溝
16号溝
1号坑列
3号坑列
1号柵列
護岸施設
24号溝
1号土坑
22号溝
23号溝
5号掘立柱建物
19号溝
17号溝
35号溝
36号溝
21号溝
15号溝
9号土坑
2号坑列
1号流路
26号溝
11号土坑
12号土坑
25号溝
11号掘立柱建物
28号溝
27号溝
34号溝
17号土坑
7号掘立柱建物
29号溝
9号掘立柱建物
13号土坑
10号掘立柱建物
14号土坑
16号土坑
15号土坑
33号溝
32号溝
31号溝
10号土坑
30号溝
6号掘立柱建物
8号掘立柱建物
4号掘立柱建物
3号掘立柱建物
2号掘立柱建物
1号掘立柱建物
7号土坑
9号溝
8号溝
7号溝
3号溝
38号溝
1号溝
5号溝
13号溝
14号溝
1号井戸
6号溝
8号土坑
12号溝
10号溝
11号溝
4号土坑
5号土坑
6号土坑
3号土坑
2号土坑
39号溝
40号溝
2.6m
2.5m
2.7m
0
(1/300)
20m

第7図　遺構配置図

器種分類を基に遺構出土遺物，遺構外出土遺物の順とした。詳細は，遺物観察表を参照されたい。

器種分類（第８図）

分類は，器種ごとに器形や大きさによる区別をＡＢＣＤ，細部の形状や成形・調整技法による区別を１２３４，ａｂｃｄとし，これらを組み合わせて表記した。法量による区別は，組成を提示する場合に同一器種に対して用いることとし，Ⅰ（小），Ⅱ（大）と表記した。

ａ須恵器　器種は，有台杯，無台杯，折縁杯，有台盤，高杯，円面硯，長頸瓶，短頸壺，横瓶，甕がある。

有台杯　口径 11～14 cm，器高指数(器高/口径×100)35 以下の有蓋浅身をＡ類，口径 15 cm前後で器高指数 40 以上の有蓋深身をＢ類，口径 11 cm程度より小さく器高指数 40 以上の無蓋深身をＣ類，口縁～胴部に沈線が巡る金属器模倣杯と考えられるものをＤ類とし，それぞれ口縁部の形状差で細分した。

無台杯　丸底をＡ類，平底をＢ類，椀形をＣ類とし，それぞれ内湾口縁１類，外傾・外反口縁２類に細分した。Ａ・Ｂ類とＣ類は区別しづらいが，同時期と判断したものでより深身のものをＣ類とした。

折縁杯　胴部の形状で区別し，杯形をＡ類，椀形をＢ類，皿形をＣ類，盤形をＤ類とした。

有台盤　大形で皿状の杯に台が付くもの。

高杯　無台杯に長脚の台がつくもの。

円面硯　硯面が円形で陸の周囲に海が巡る形状のもの。脚部に透かしを入れる 200 と，透かしを省略して沈線で表現した 104 がある。

長頸瓶　大形をＡ類，小形をＢ類とした。Ａ類には，頸部に環状の凸帯が巡るもの(115)もある。

短頸壺　肩が張り，短い直口口縁が付くもの。胴部に沈線を巡らすもの(129)もある。

横瓶　俵形の胴部をもち短い口縁部が付くもの。

甕　胴部をタタキ成形し，広口の口縁部が付くもの。

ｂ土師器　器種は，無台椀，有台盤，甕，鍋，鉢，甑がある。

無台椀　器高指数 30 未満の浅身の椀１点のみある。

有台盤　皿状の杯にやや長脚の台部がつくもの。

甕　長胴甕をＡ類，小形甕をＢ・Ｃ類とし，Ｂ・Ｃ類は口径 15 cmを目安に大Ｂ類，小Ｃ類に区別した。細別は，成形・調整技法の違いと口縁部の形状により，ロクロ・タタキ成形を１類，輪積成形でハケメ・ケズリ調整を２類，丸縁・面取り口縁をａ類，摘み上げ口縁をｂ類とした。

鍋　大きさにより大Ａ類，小Ｂ類とした。甕と同様に成形・調整技法と口縁部の形状で細分し，ロクロ・タタキ成形を１類，輪積成形でハケメ・ケズリ調整を２類，丸縁・面取り口縁をａ類，摘み上げ口縁をｂ類とした。

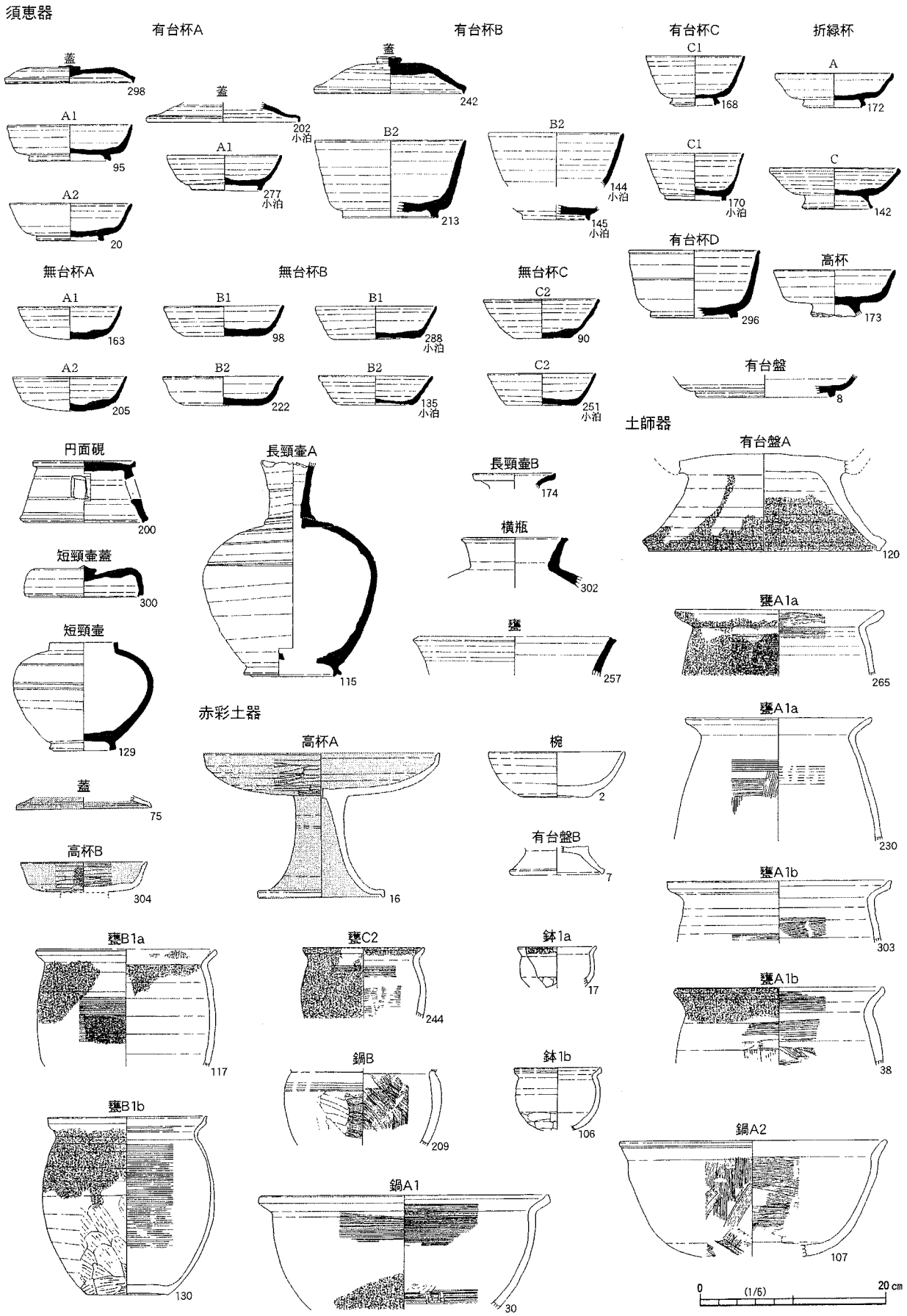
鉢　器形は鍋と同じであるが，口径 10 cm未満と非常に小形であり鉢として区別した。細分は，鍋に準じる。

甑　胴部が筒状を呈し，底部が中空となるものを甑とした。１点のみの出土である。

ｃ赤彩土師器　全面赤色塗彩されるもので，精製された胎土を用いて入念なヘラミガキ調整がなされる。杯蓋，高杯がある。高杯は，大形と小形の２器種あり，大Ａ類，小Ｂ類とした。

須恵器の胎土について

須恵器の胎土は，肉眼観察で４種類程度にまとめられる。ここでは特に分類はしないが，笹神丘陵の窯跡資料に対比させると，（１）生地がモルタル状で割れ面がブロック状の凹凸を示し，長石・石英粒が多い＝岡屋敷窯(中川ほか 1962)，（２）シルト質または粘性の強い生地で，長石・石英粒が多い(長石・石英粒が少ないものは，山三賀Ｃ類(坂井 1989)胎土との区別ができない)＝高山寺窯・馬上窯(戸根 1986)，（３）粒子の粗い砂質の生地で，長石・石英粒が非常に多く，一見してほかの窯資料との区別ができる＝堤上窯(小林 2004a・b　一部岡屋敷窯に


須恵器
有台杯A
有台杯B
有台杯C
折縁杯
蓋
298
A1
95
A2
20
蓋
202
小泊
A1
277
小泊
蓋
242
B2
213
B2
144
小泊
145
小泊
C1
168
C1
170
小泊
A
172
C
142
無台杯A
A1
163
A2
205
無台杯B
B1
98
B2
222
B1
288
小泊
B2
135
小泊
無台杯C
C2
90
C2
251
小泊
有台杯D
296
高杯
173
有台盤
8
土師器
円面硯
200
短頸壷蓋
300
短頸壷
129
長頸壷A
115
長頸壷B
174
横瓶
302
甕
257
有台盤A
120
甕A1a
265
赤彩土器
蓋
75
高杯B
304
高杯A
16
椀
2
有台盤B
7
甕A1a
230
甕A1b
303
甕B1a
117
甕C2
244
鉢1a
17
甕A1b
38
鍋B
209
鉢1b
106
甕B1b
130
鍋A1
30
鍋A2
107
0
(1/6)
20 cm

第8図　器種分類図

類似する胎土がある)，(4) 粘性が強いねっとりとした生地で，細かい長石・石英粒を多く含む(長石・石英粒が少ないものは笹神丘陵の窯製品との消費地での判断は難しい)＝道婦窯(小林 2004 a・b)となる。笹神丘陵の須恵器窯は，花崗岩地帯の同一丘陵に立地するため，長石・石英が多く含有されるといった特徴があり，他地域の製品との識別は容易だが，長石・石英が少ないと判別が難しいものも多い。ただし，笹神丘陵内に限れば，北にある岡屋敷窯，高山寺窯，馬上窯がシルト質の生地を基本とし，南の堤上窯が砂質，道婦窯が粘土質の生地と，地点ごとにある程度まとまりがあるので，肉眼でもおおよその産地の推定は可能である。

2　遺構と出土遺物

1号掘立柱建物と関連遺構（第9～11図，図版2・4・5・17）

1号掘立柱建物（第9・10，図版4・5）

Mq・Nq グリッドに位置する3間（6.00m）×2間（5.16m）の側柱建物である。面積は 30.96 ㎡で，主軸方位は西偏 43° を示す。桁行の柱間寸法は 173～219 cm，梁行の柱間寸法は 247～263 cmで梁行が長く，全体にばらつきが大きい。柱穴の底面標高は 2.23～2.57mである。柱穴の平面形は円形・楕円形または不整形で，柱穴の規模は長軸 34～72 cm，短軸 30～65 cmであり，梁行の中柱の柱穴は他の柱穴に比べると規模が小さい。P1 と P2 の埋土中には土壌化した木質層が見られるが，柱穴の底面ではなく中位にあり，礎板の痕跡とは断定しかねる。柱根が残っている柱穴はなく，柱痕跡も P3 を除き不明瞭である。5・7・8・13・14・38 号溝に四方を囲まれており，このうち5・7・38 号溝は周溝と考える。P7 と 13 号溝は重複するが，新旧関係を判断することができなかった。なお，柱穴から遺物は出土していない。また，建物内に位置する遺構に P19・20 があり，2基のピットは平面規模がほぼ同じで，いずれも柱根が残存していることから，同一の建物を構成する柱穴と推測する。1号掘立柱建物の桁行に沿って掘られている周溝が両辺ともに2条ずつあり，そのうち南西辺沿いにある 13 号溝が柱穴である P7 と切り合い関係にある点から，1号掘立柱建物とは別時期の建物遺構が重複している可能性もある。

5号溝（第9～11図，図版4・5・17）

Mq・Mr グリッドに位置する長さ 8.26m，幅 58 cm，深さ 14 cmの溝で，断面形は半円状，底面には凹凸が見られる。主軸方位は西偏 44° である。1号掘立柱建物の南西柱穴列に並行して掘削されており，北側で 38 号溝と接続し，1号掘立柱建物の周溝を構成している。遺物は須恵器無台杯（1），土師器椀（2）が出土している。2の土師器椀は，確認調査時に掘削したトレンチで検出した5号溝の埋土中から，一個体分がつぶれた状態で出土した。1は，底部糸切りで椀形となるが，底部径が大きくB類の範疇とした。胎土は，道婦窯資料に類似する。2は，厚手で内湾器形であるなど，無台椀の中では古相を示すが，底径がやや小さく新しい要素も見られる。

7号溝（第9～11図，図版5）

Mq・Nq グリッドに位置する。長さ 7.54m，幅 53 cm，深さ 18 cm，断面形は台形状で，主軸方位は西偏 50.5° を示す。底面に凹凸が見られる。8号溝と重複関係にあるが，切り合い部分が少なく新旧関係を判断するには至らなかった。遺物は，須恵器折縁杯（3）が出土している。3は，口径が 13 cmを切り，口縁端部もシャープさを欠いていることから，A類の中では新しい。胎土は，馬上3号窯資料に類似する。

8号溝（第9～11図，図版5・17）

Mp・Mq・Nq グリッドに位置する。長さ 7.04m，幅 88 cm，深さ 13 cm，断面形は弧状で，主軸方位は西偏 44° である。底面に凹凸が見られる。7号溝との切り合い関係は先述のとおりである。遺物は，須恵器無台杯（5・6），須恵器有台盤（8），土師器有台盤（7）が出土した。5は，口径が 14 cm近い大形品で，厚手で重量があり古く見えるが，扁平で口縁部の外反度が強く，さほど古くはならない。6は，薄手で5同様口縁部が強く外反す

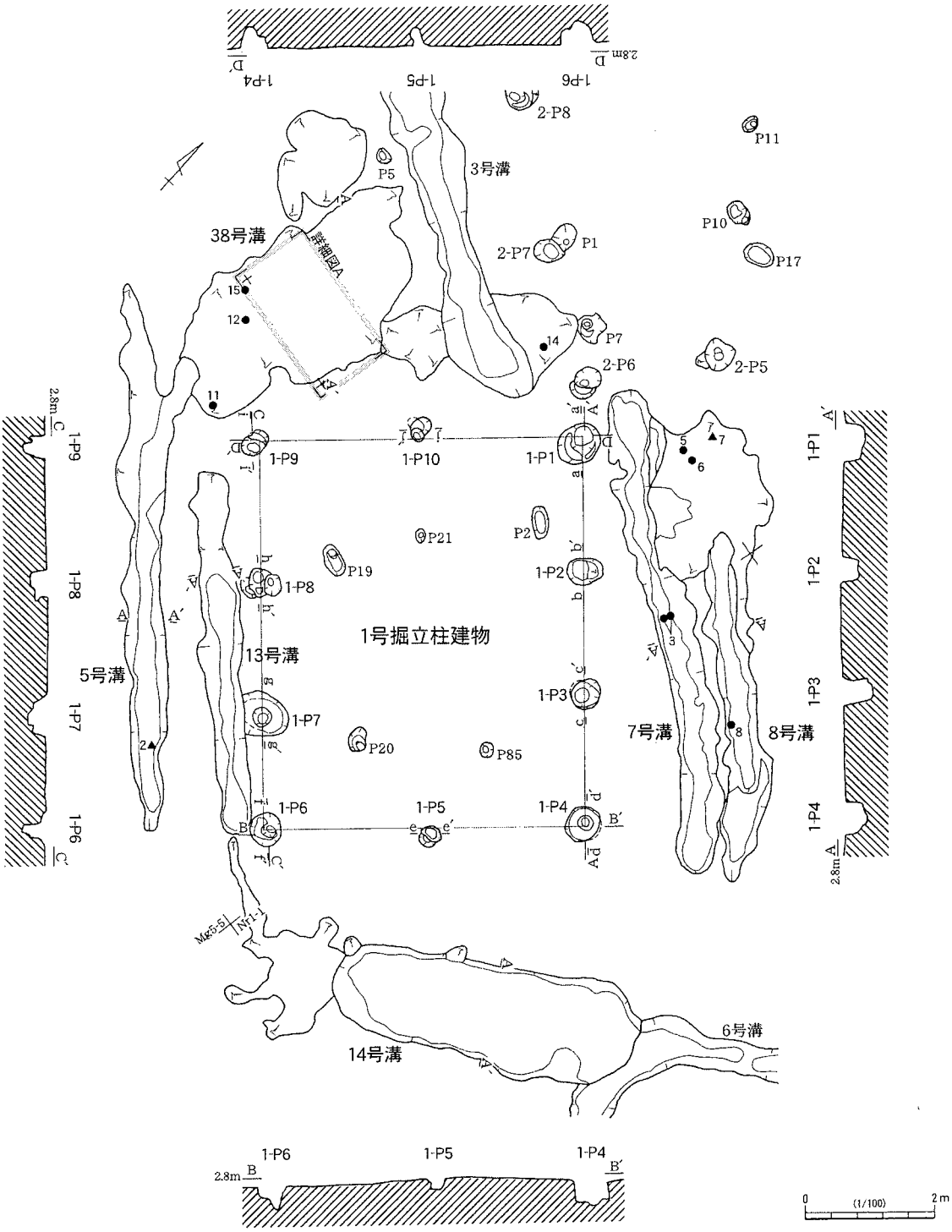
る。５・６は，高山寺窯資料に胎土が類似する。７は，小形の有台盤と判断した。８は，佐渡小泊窯群産で，３段階(笹澤 2011)を下らないであろう。

13 号溝（第９・10，図版５）

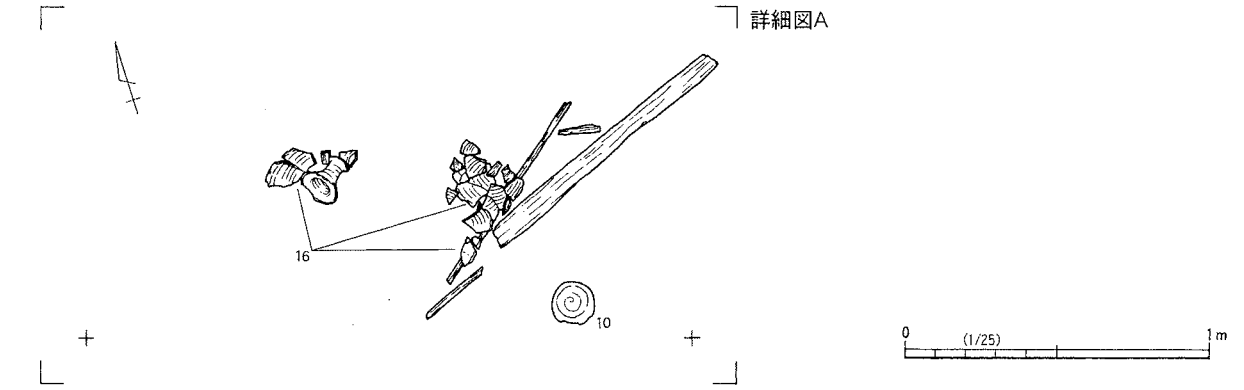
Mq グリッドに位置し，長さ 4.22m，幅 54 cm，深さ８cm，断面形は弧状で，主軸方位は西偏 46° を示す。底面には凹凸が目立つ。1 号掘立柱建物 P7 と切り合っている。土師器甕片が出土したが，図化できるものはなかった。

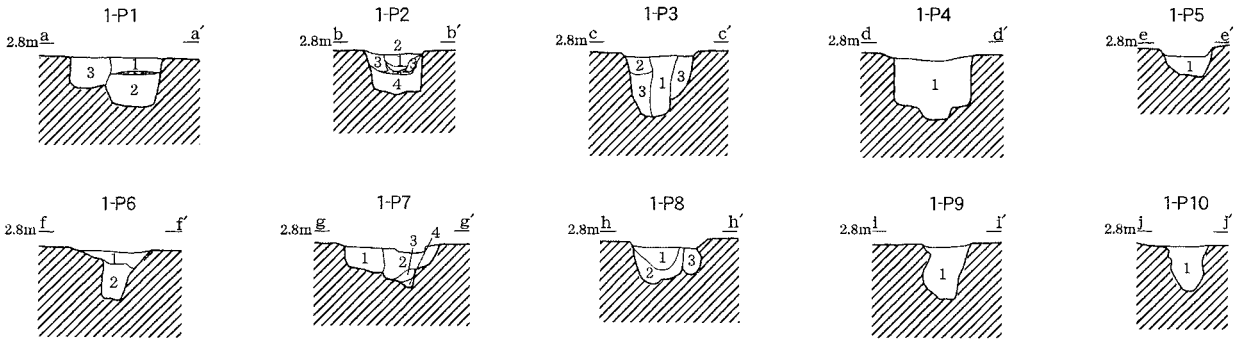
14 号溝（第９～11，図版５）

Nq グリッドに位置する。６号溝と重複しており，残存長は 4.92m，幅 1.46m，深さ 11 cm，断面形は弧状で，



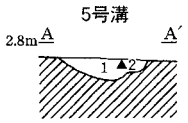
第9図　1号掘立柱建物と周辺の遺構



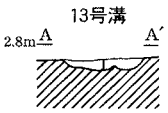


1号掘立柱建物

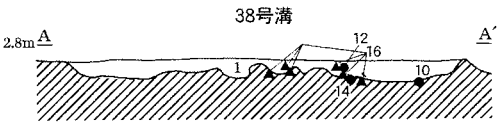
P1　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロック・5mm程の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色粘質土　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量、5mm以下の炭化物を微量含む。
　　3層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロック混じり。
P2　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロック・5mm程の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y5/2灰オリーブ色粗砂　粘性なし、しまりなし、炭化物を微量含む。
　　3層　7.5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり極弱、地山ブロックを多量含む。
　　4層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまりなし、地山ブロックを含み、5mm以下の炭化物を微量含む。
P3　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性やや弱、しまり弱、地山ブロック・5mm程の炭化物を少量含む。
　　2層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり極弱、地山ブロックを多量含む。
　　3層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまりなし、地山ブロックを含み、炭化物を微量含む。
P4　1層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり極弱、地山ブロックを多量含む。
P5　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性弱・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
P6　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　2層　2.5Y3/1黒褐色砂混粘土　粘性強・しまりやや弱、未分解腐植を含む。
P7　1層　5Y2/2オリーブ黒色粗砂混粘質土　粘性・しまりやや強、地山ブロックを含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色砂混粘質土　粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
　　4層　5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
P8　1層　5Y3/2 オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　2層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性なし・しまり極弱、同色の粘質土ブロックを含む。
　　3層　2.5Y3/1黒褐色シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
P9　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
P10　1層　2.5Y3/2黒褐色粘質土　粘性強・しまりやや強、地山ブロック混じり。3mm程の炭化物を微量含む。



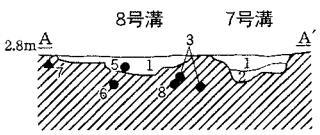
5号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト
粘性・しまり弱、炭化物を含む。



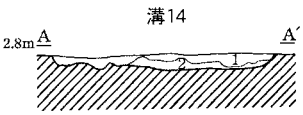
13号溝
1層　2.5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト
粘性・しまりやや強



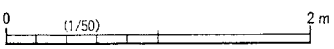
38号溝
1層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、
5mm以下の炭化物を少量含む。



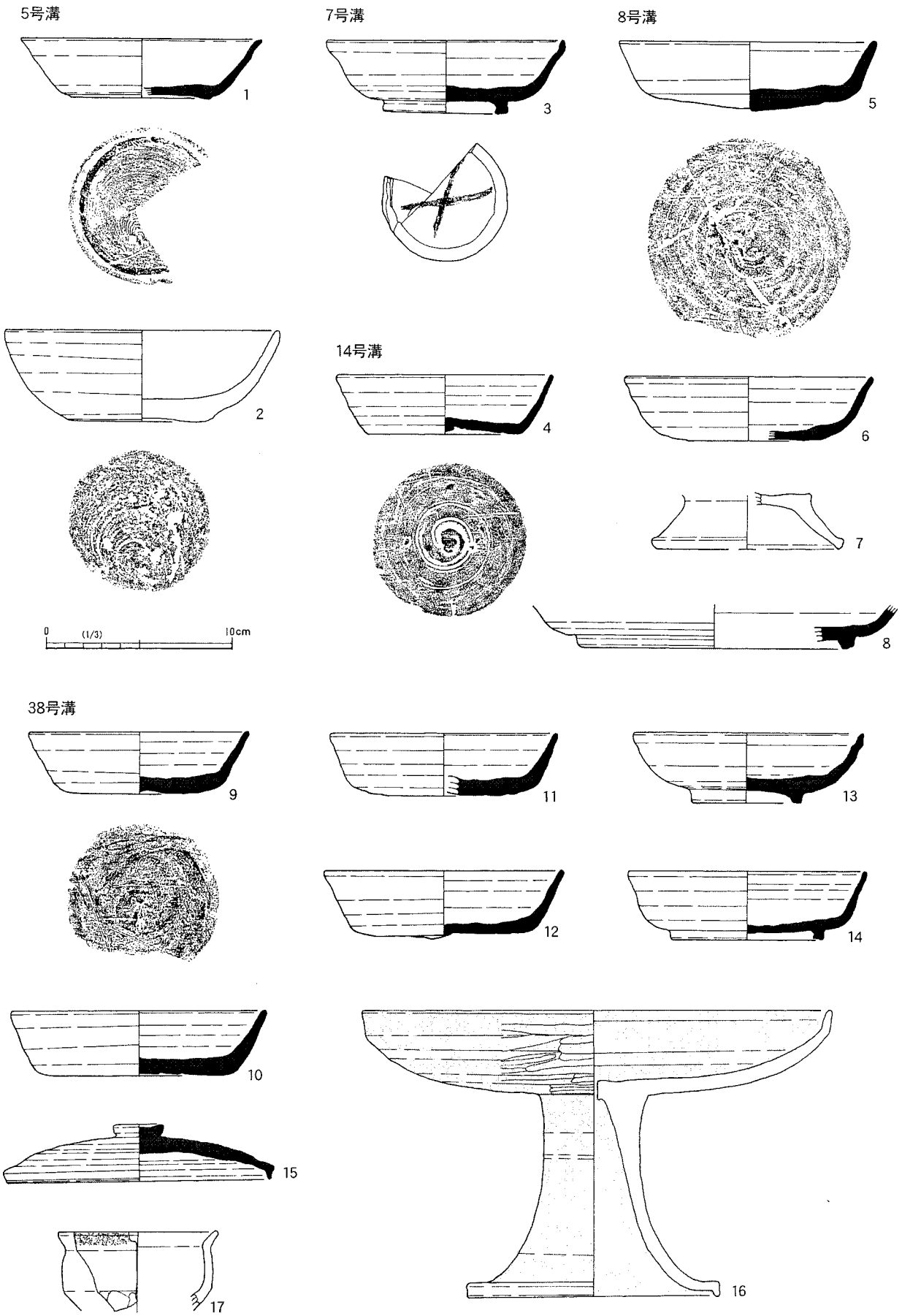
7・8号溝
8号溝　1層　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性弱・しまりやや弱、
炭化物・1cm程の地山ブロックを微量含む。
7号溝　1層　7.5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、
2cm程の地山ブロックを少量含む。
2層　2.5Y3/1黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱、未分解腐植
を多量含み、2cm程の地山ブロックを少量含む。



14号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・
しまりやや強、炭化物を少量含む。
2層　7.5Y3/2灰オリーブ色シルト　粘性強・
しまりやや強、地山ブロック混じり。



第10図　38号溝遺物出土状態・1号掘立柱建物と周辺の遺構の土層



第11図　1号掘立柱建物周辺の遺構出土遺物

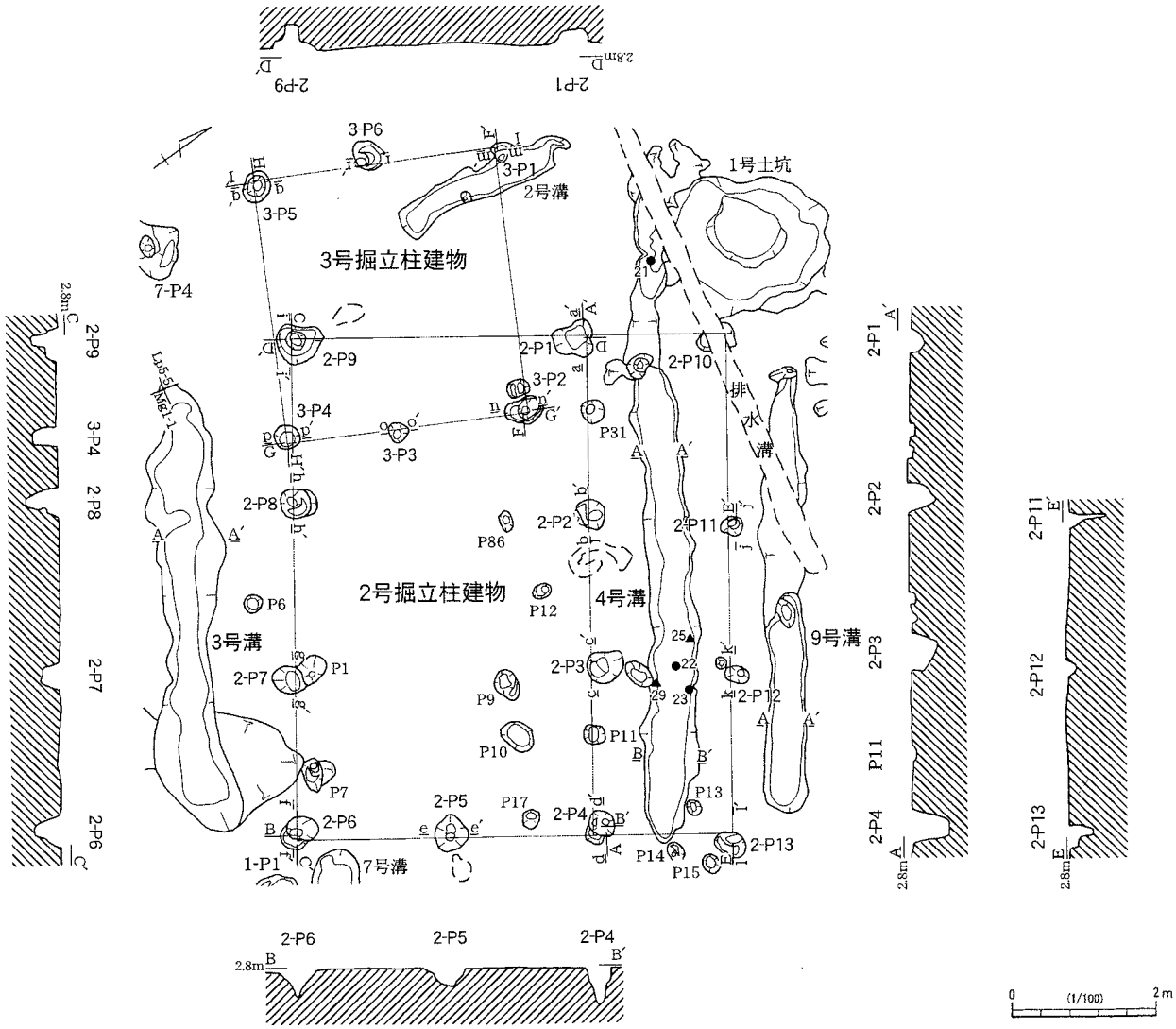
底面の凹凸が著しい。主軸方位は東偏57°である。

遺物は，須恵器無台杯（4）1点のほか，土師器甕片などが出土している。4は，佐渡小泊窯群産で，口径12cm以下と小形であるが，底径指数（底径／口径×100）が70を超え，深身箱形であることから，3段階に比定できる。

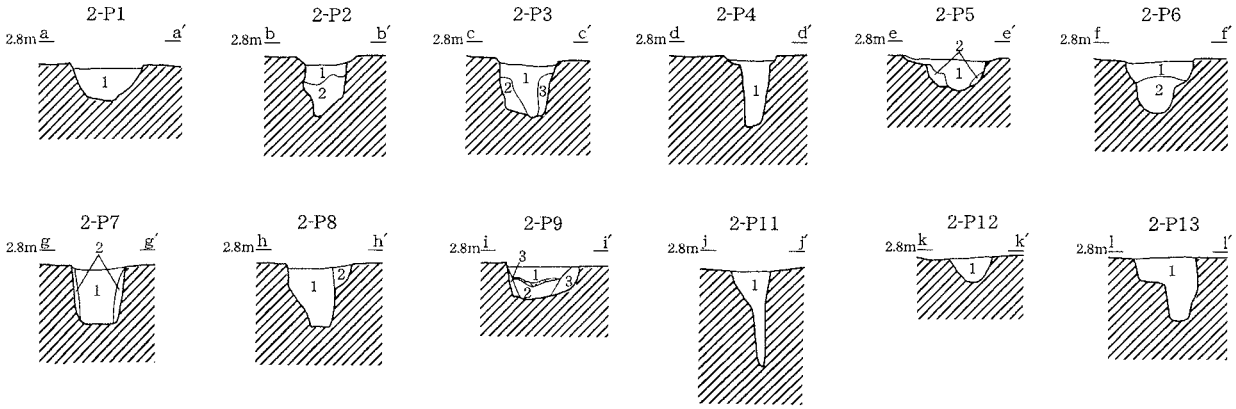
38号溝（第9～11図，図版2・5・17）

Mqグリッドに位置し，長さ7.21m，幅2.62m，深さ15cm，断面形は台形状である。主軸方位は東偏41.5°を示す。1号掘立柱建物の周溝を構成しているが，形状は不整形で底面の凹凸も著しい。2号掘立柱建物の雨落ち溝である3号溝と重複しているが，新旧関係を判断することはできなかった。

遺物の出土状態は疎らであるが，個々の遺物の遺存状態は良好である。須恵器無台杯（9～12），折縁杯（13），有台杯（14），杯蓋（15），土師器高杯（16），土師器鉢（17）が出土している。土器は，須恵器の法量と器形の特徴から，9・11・13と10・12・14・15の2群に分けられ，前者が新しく，後者が古いと考えられる。前者と後者は，10を除き互いに器形的な特徴と胎土が共通することから，それぞれ一括搬入された可能性が高い。16の赤彩土師器高杯は，市内では曽根遺跡(家田1981)で1点（未報告）出土しているが，県内での類例は少ない。なお，杯部中央は，焼成前に穿孔されている。



第12図　2号掘立柱建物と周辺の遺構



2号掘立柱建物

P1　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含み、炭化物を少量含む。

P2　1層　7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土　粘性・しまりやや強、地山ブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含み、炭化物を少量含む。

P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含み、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色粘質土　粘性強・しまりやや強、地山ブロックを含む。
　　3層　5Y2/2オリーブ黒色粘質土　粘性・しまりやや強、地山ブロックを含む。

P4　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含み、炭化物を少量含む。

P5　1層　2.5Y3/2黒褐色粘質土　粘性やや強・しまりやや弱、地山ブロックを多量、5mm以下の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量、5mm以下の炭化物を少量含む。

P6　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロックを含み、1cm以下の炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含む。

P7　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロックを含み、1cm以下の炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含む。

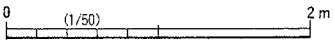
P8　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまりやや弱、地山ブロック・5mm以下の炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロックを多量含む。

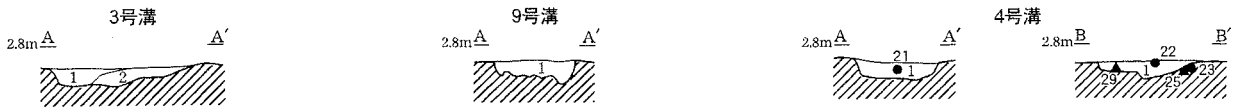
P9　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混粘質土　粘性強・しまりやや弱、5mm以下の炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり弱、地山ブロックを少量含む。

P11　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロック・未分解腐植を多量含む。

P12　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含む。

P13　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを含む。





3号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや弱・しまりやや強、5mm程の炭化物を含む。
2層　2.5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまりやや弱。

9号溝
1層　2.5Y3/1黒褐色粘質土　粘性強・しまりやや弱、3cm程の地山ブロック・5mm程の炭化物を少量含む。

4号溝
1層　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、未分解腐植を多量、炭化物・地山ブロックを少量含む。

第13図　2号掘立柱建物と周辺の遺構の土層

2号掘立柱建物と関連遺構（第12～14図，図版5・6・17）

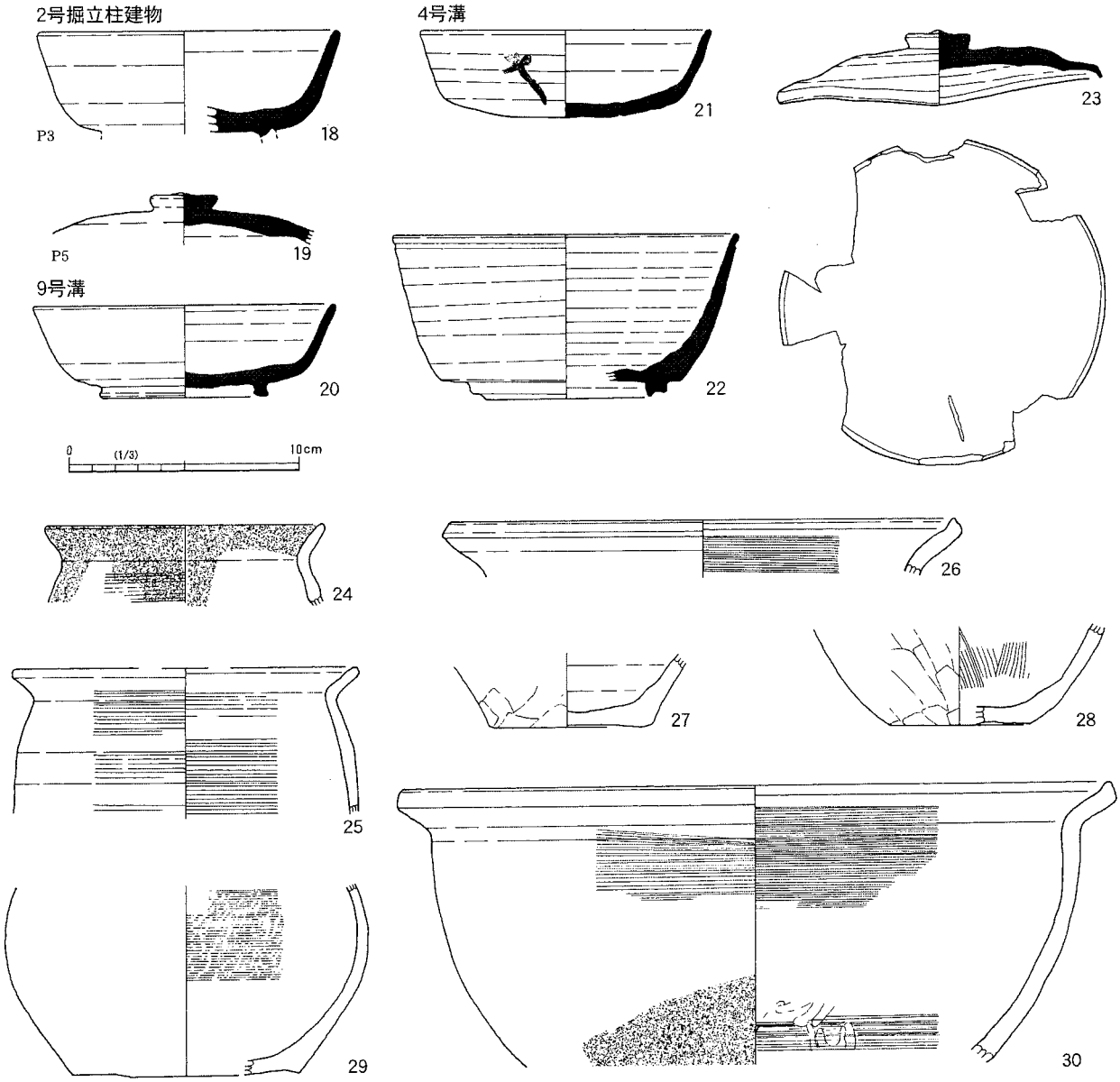
2号掘立柱建物（第12～14図，図版5）

Lp・Mp・Mq グリッドに位置する。3間（6.76m）×2間（4.30m）の北辺の桁行のみに廂が付く片廂の側柱建物で，廂部分を含めると梁行は6.14mある。今回の発掘調査で検出した掘立柱建物のうち，廂付の構造のものはこの1棟だけであった。面積は身舎のみでは29.07㎡，廂部分を含めると41.51㎡であり，主軸方位は西偏58.5°を示す。西辺の中柱は検出できていない。身舎の柱間寸法は，桁行が2.07～2.52mとばらつきが大きく，梁行は東辺のみであるが2.16～2.18mとほぼまとまる。底面標高は2.21～2.42mである。柱穴の平面形は様々であるが，規模は長軸43～65cm，短軸31～50cmと比較的ばらつきは少ない。廂部分の柱穴は身舎の柱穴規模に比べるとやや小振りで，長軸32～45cm，短軸22～32cm，平面形はいずれも楕円形である。なお，廂の西端の柱穴P10は，検出作業前に掘削した排水溝でその大半を壊してしまったため，記録を作成できていない。柱根はいずれの柱穴からも検出されず，柱痕跡も明瞭とはいえない。P9の埋土の中位に，土壌化した木質を検出している。

雨落ち溝と見られる３・９号溝が桁方向の柱穴に並行して掘削されており，４号溝が身舎の柱穴と廂の柱穴の間に，３・９号溝と同様に柱穴と並行する方向に掘削されている。２号掘立柱建物は途中で建替えられていて，身舎のみの時期と廂が付随する時期の２時期があると考え，その痕跡を確認しようと試みたが，調査時には建替えの痕跡を見出すことができなかった。ただ，柱穴掘削後の平面の状態を見ると，P3・4・5・6 に柱穴を掘り直したと見える痕跡が認められる。このことから２号掘立柱建物は途中で建替えられ，建替え後の建物に合わせて雨落ち溝も掘り直されている可能性を指摘しておきたい。

柱穴からはわずかではあるが遺物が出土している。P3 からは須恵器有台杯（18），P5 からは須恵器杯蓋（19）が出土しており，いずれも建物の廃絶時またはその後に埋まった土から出土した。土器は，細片のため特徴をつかみづらい。18 は口径が 13 cmを超えるが，深身器形であることからやや新しいか。19 は，疑宝珠に近い形状で，さほど古くならないであろう。

なお，重複している遺構には３号掘立柱建物がある。柱穴が切り合っていないため両者の新旧関係は不明であるが，建物の位置が重複していることから，両者は異なる時期に存在していた建物であることは確かであり，新



第14図　2号掘立柱建物と周辺の遺構出土遺物

旧関係については後で検討を加えたい。

3号溝（第12・13図，図版6）

Mq グリッドに位置する。2号掘立柱建物の南辺側の雨落ち溝である。長さ6.09m，幅94 cm，深さ12 cm，断面形は台形状で，主軸方位は西偏59.5° を示す。1号掘立柱建物の周溝である38号溝と切り合っているが，新旧関係を明らかにできなかった。

遺物は，須恵器杯類や土師器甕類の小片がわずかに出土しているだけである。

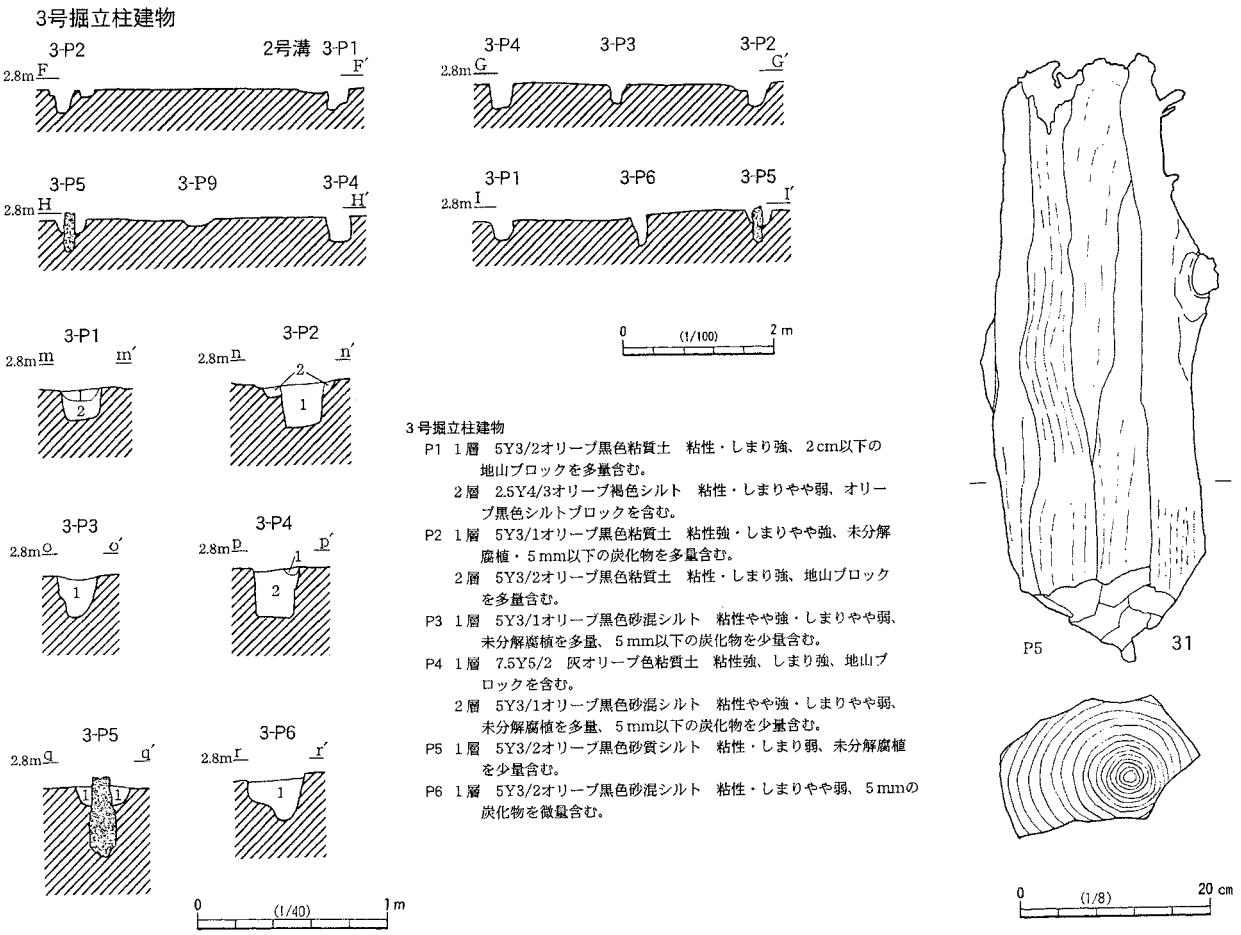
4号溝（第12～14図，図版6・17）

Lp・Mp グリッドに位置する。北西端を排水溝に壊されているが，残存長9.64m，幅74 cm，深さ11 cm，台形状の断面形である。主軸方位は西偏56.5° を示す。埋土には未分解腐植を多く含む。

遺物は，土師器の細片などを多く含み，比較的まとまった量が出土している。須恵器無台杯(21)・有台杯(22)・杯蓋(23)，土師器甕(24～29)・鍋(30)が図化できた。土師器煮炊具がまとまって出土しており，建物内もしくは近辺で炊事が行われたと推測される。土師器煮炊具は，甕B・C類に使用痕が明瞭に認められ，24の内面には帯状の炭化物の付着が見られる。30の鍋は，内面にヨゴレが認められない。湯沸し用か。須恵器は，38号溝で古相と捉えた資料との共通点が多い。また，胎土の特徴もおおむね共通しており，高山寺窯資料に類似する。23の内面には，ヘラ記号がある。

9号溝（第12～14図，図版6・17）

Mp グリッドに位置する。一部を排水溝に壊されているうえに，西半部は遺存状態が悪い。長さが6.18m，幅54 cm，深さ15 cm，断面形は半円状で，主軸方位は西偏54.5° である。2号掘立柱建物の廂の外側に柱穴列と並



第15図　3号掘立柱建物のエレベーション図と土層・柱

行して掘削されており，雨落ち溝であろう。

遺物は，土師器甕の細片が多く出土しているが，図化できたものは須恵器有台杯（20）の１点だけである。20は，高台がやや内側に付されるなど細部は異なるが，口径が13㎝を超え薄手であるなど38号溝14に類似し，おおむね同時期とできよう。

３号掘立柱建物（第12・15図，図版５・６）

Lp・Mpグリッドに位置する２間（3.42m）×１間（3.35m）の側柱建物である。面積は12.14㎡で，主軸方位は東偏28°である。桁行の柱間寸法は1.48～1.96mで，北側の柱間が長くなっている。梁行は3.55mである。柱穴の底面標高は2.26～2.53mで，打込み式柱の柱根が出土したP5を除くと，おおむね標高2.3m程である。柱穴は平面形が円形または楕円形で，規模はおおむね30～50㎝で，他の掘立柱建物の柱穴に比べるとやや小さい。柱根が残っている柱穴はP5だけで，他の柱穴は柱痕跡も不明である。２号掘立柱建物と重複関係にあるが，両者の間には切り合っている遺構がないことから，新旧関係を直接的に示すものはない。なお，P1は２号溝と切り合い関係にあり，２号溝が新しい。

31はP5から出土した柱根である。材質は針葉樹で，丸木取りした材を使用している。残存長64.0㎝，幅21.2㎝，厚さ13.2㎝の柱で，下端部を鉛筆状に尖らせている。下端部の加工の様子から，打込み式の柱として加工されたものと考えられ，実際に柱穴の底から30㎝程沈み込んだ状態で出土した。柱穴からは土器などの遺物は出土していない。

４号掘立柱建物（第16図，図版６）

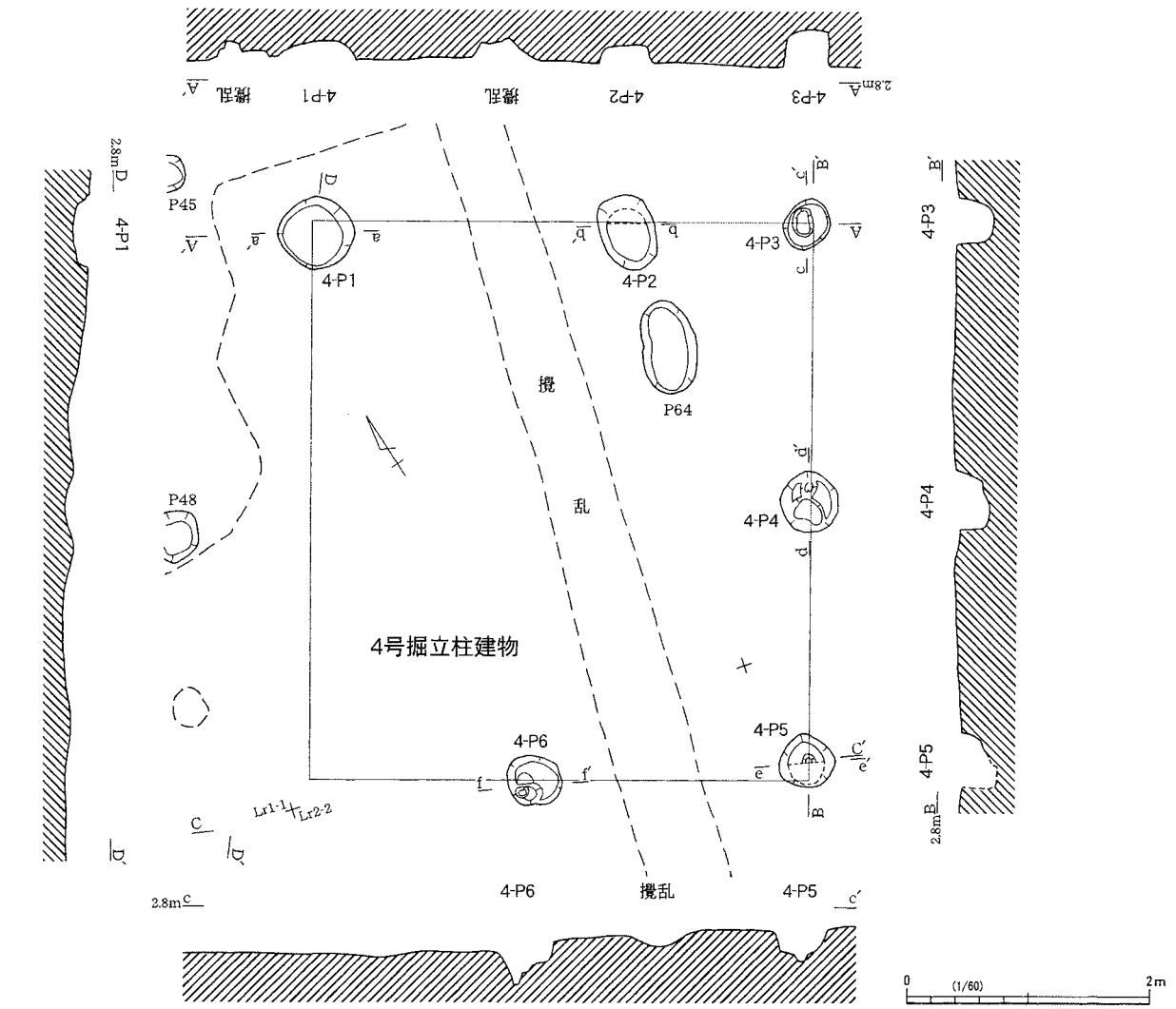
Lq・Lrグリッドに位置する２間または３間（4.52m）×２間（4.13m）の側柱建物である。面積は18.67㎡で，主軸方位は東偏32°である。調査区の中央を縦断していた排水路や建物の西側から続く大規模な攪乱により，柱穴のうち少なくとも西辺の２基については削平されていて，検出することができなかった。柱間寸法は，P2とP3の間は1.47mと狭いが，他の柱間は2.14～2.67mで，建物の規模に比べ長めである。柱穴の底面標高は2.14～2.48mとばらつきが大きく，柱穴の平面形は円形・楕円形・方形である。柱穴規模は長軸43～65㎝，短軸37～60㎝であるが，上部に攪乱を受けて削られている柱穴もあり，他の掘立柱建物と一概に比較することは難しい。柱根及び，柱痕跡が確認できた柱穴はなかった。P4の埋土の上層と下層の間から土壌化した木質が，薄く層状になっている状態で検出されている。なお，いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

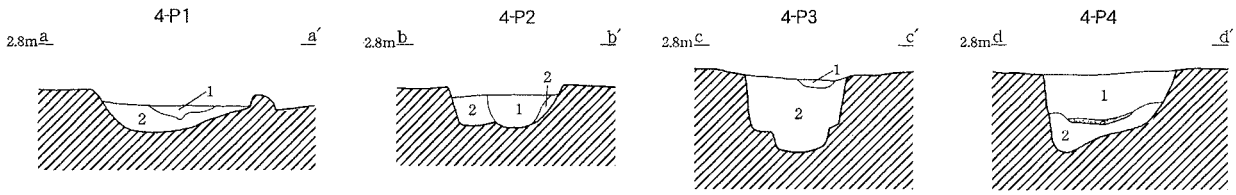
５号掘立柱建物と関連遺構（第17～20図，図版７・17・23・24）

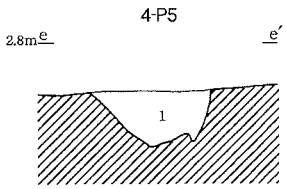
５号掘立柱建物（第17・18・20図，図版７・17・24）

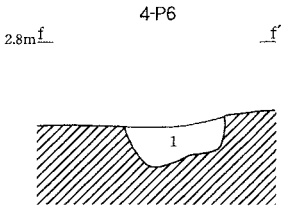
No・Np・Ooグリッドに位置する３間（6.54m）×２間（3.72m）の側柱建物である。面積は24.33㎡で，主軸方位は西偏41.5°を示す。柱穴の並びにやや歪みが見られる。桁行の柱間寸法は1.67～2.79mと大きくばらついているように見えるが，これはP3とP4の間が2.79m，P6とP7の間が2.72mと極端に広くなっており，他の桁行の柱穴の柱間寸法は1.67～2.03mと，ばらつきはあるもののそれ程極端ではないことがわかる。本報告ではこの建物をP3－P11－P7のラインに間仕切りを持つ３間×２間の側柱建物と理解しているが，別構造の建物である可能性も否定できず，この柱間寸法のばらつきにはそのような実情があることも勘案したい。また同様に，P2とP8の間に位置するP27をこの建物に伴う柱穴ではないと判断したが，P27を含めた東柱または総柱の建物の可能性がある点も付しておきたい。柱穴の底面標高は2.40～2.60mで，平面形は円形・楕円形・長方形がある。柱穴規模はP7だけがやや規模が大きいが，そのほかは長軸が約40～60㎝，短軸が約30～50㎝でおおむね収まっている。なお，P1・3・7・10には柱根が残存している。

この建物は18・20号溝と重複関係にある。18・20号溝は並行して掘削されている溝で，同様な規模の溝であ









4号掘立柱建物

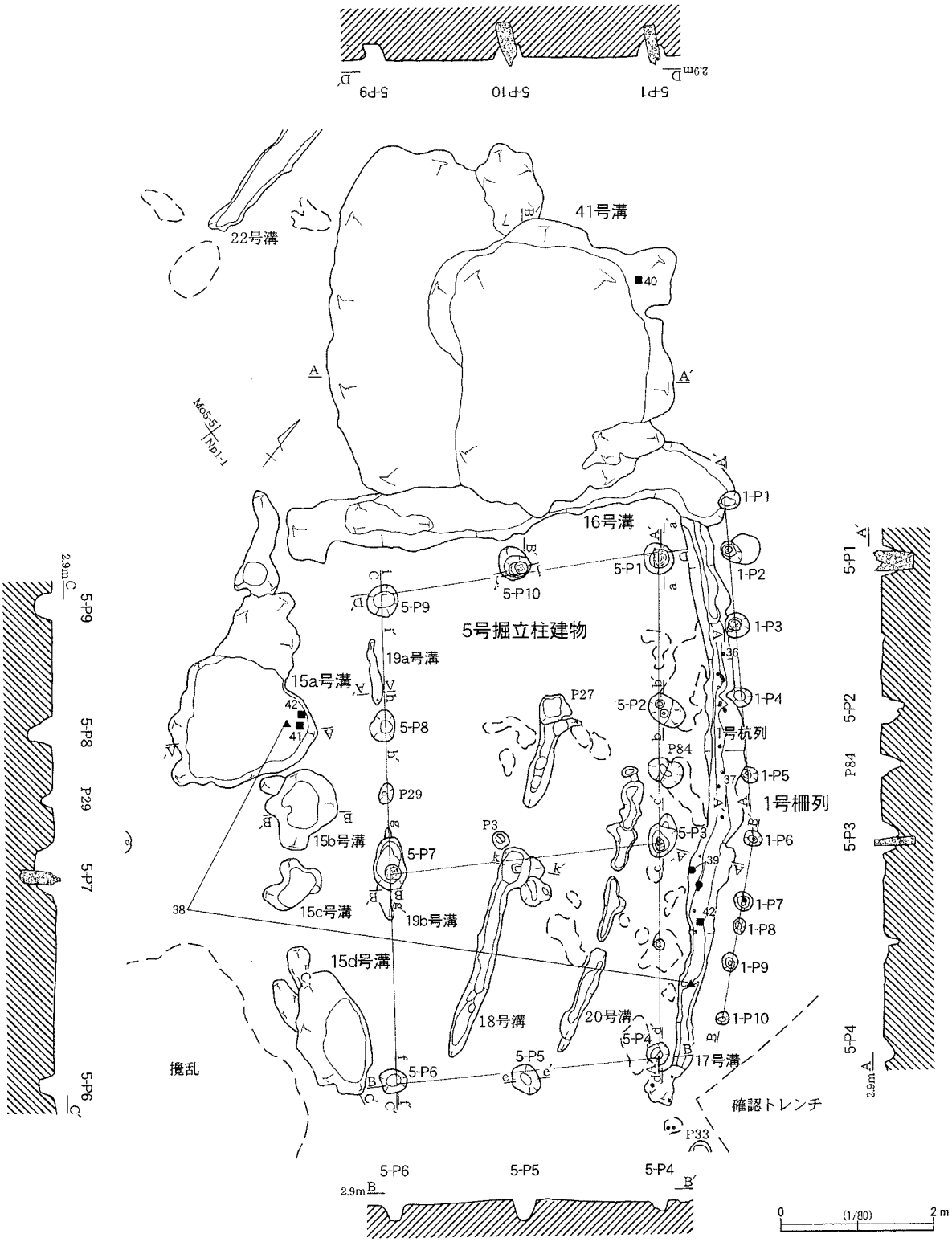
P1　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、5cm以下のオリーブ黒色シルトブロックを少量含む。
P2　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、5mm以下の炭化物を微量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、5cm以下のオリーブ黒色シルトブロックを少量含む。
P3　1層　2.5Y3/1黒褐色シルト　粘性やや弱・しまり弱、5mm程の地山ブロックを含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり極弱、3cm程のオリーブ黒色シルトブロックを含む。
P4　1層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性極弱・しまり弱、3cm程の地山ブロックを少量含む。
　　2層　7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂　粘性無・しまり極弱、2~3cm程の同色シルトブロックを含む。
P5　1層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、5cm以下のオリーブ黒色シルトブロックを少量含む。
P6　1層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、5cm以下のオリーブ黒色シルトブロックを少量含む。

0 (1/40) 1m

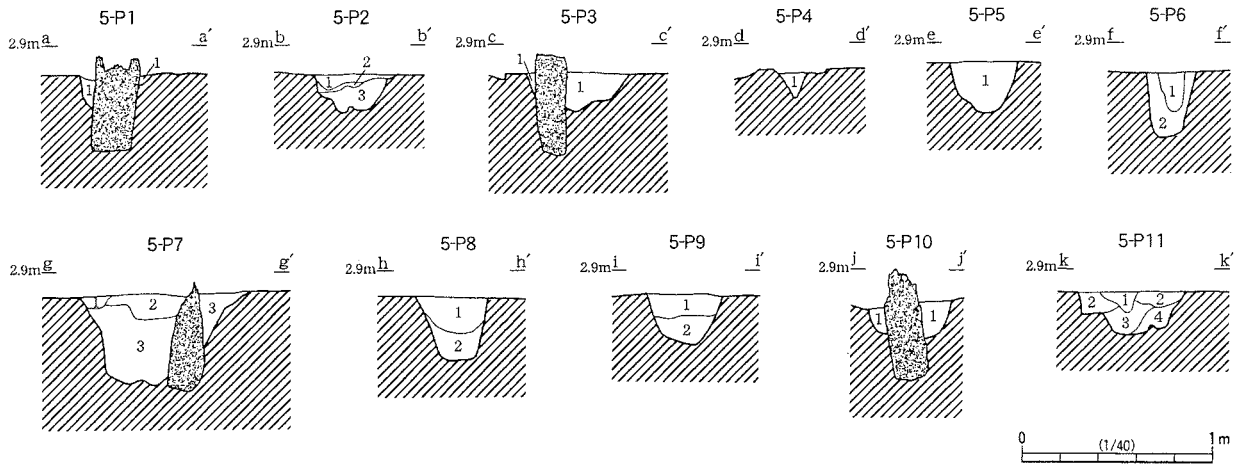
第16図　4号掘立柱建物

ることから一連の遺構と考えられる。5号掘立柱建物と20号溝との間には直接的な切り合い関係はないが，P11が18号溝に切られていることから，18・20号溝はともに，5号掘立柱建物よりも後の時期に掘削された溝であると判断できよう。

32～35は残存していた柱根で，32はP1から，33はP3，34はP7，35はP10からそれぞれ出土している。32は残存長53.6㎝，幅20.4㎝，厚さ14.4㎝の柱材である。針葉樹を丸木取りした材を使用している。下端部は，



第17図　5号掘立柱建物と周辺の遺構



5号掘立柱建物

P1　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり弱、
　未分解腐植を多量含む。

P2　1層　5Y3/1オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、
　2cm程の地山ブロックを少量含む。
　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無。
　3層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性やや強・しまり弱。

P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり弱、
　地山ブロック混じり。

P4　1層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性弱・しまりやや強、
　3cm以下の地山ブロックを少量含む。

P5　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり弱。

P6　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、
　地山ブロック混じり。
　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、
　2cm以下の地山ブロックを少量含む。

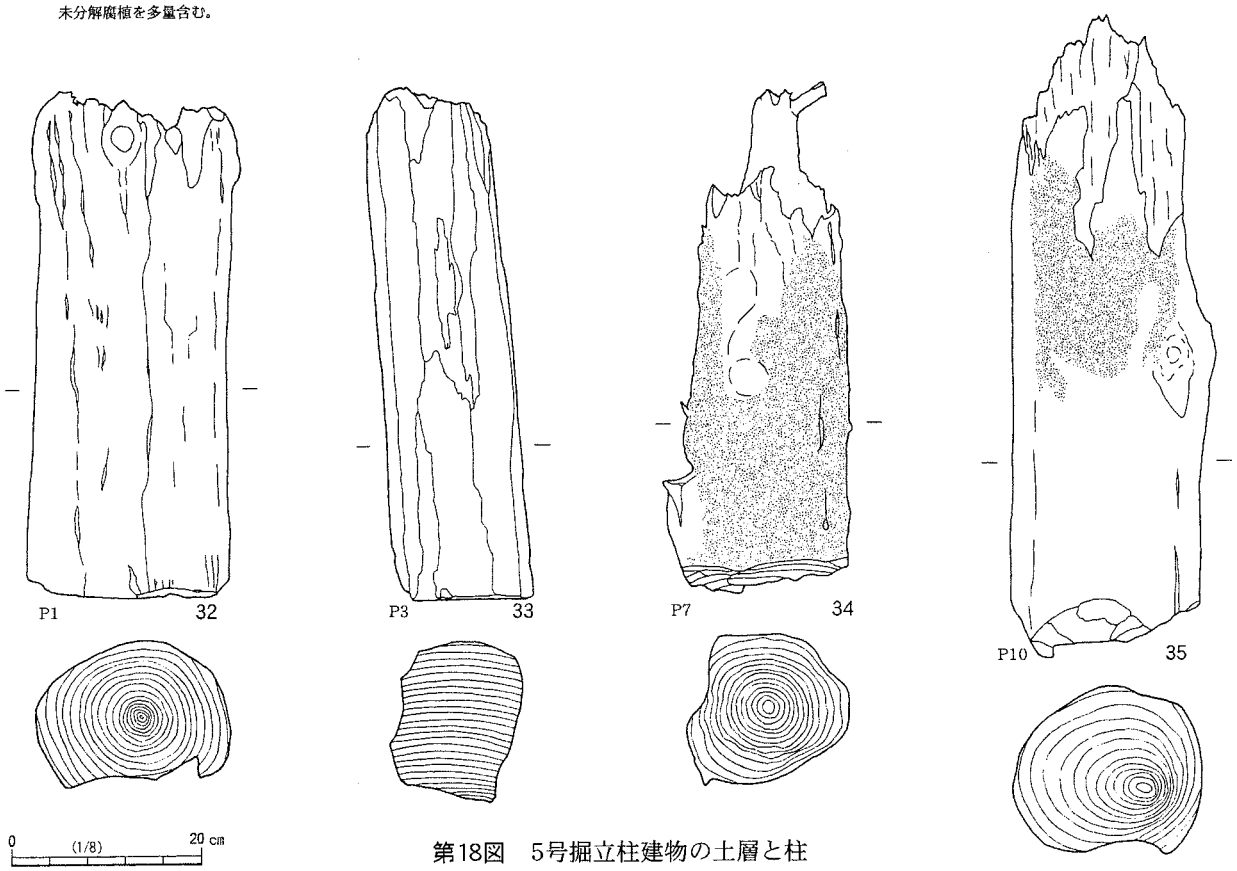
P7　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまり弱。
　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまり弱、
　地山ブロック混じり。
　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや弱、
　未分解腐植を多量含む。

P8　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや弱、
　地山ブロック混じり。
　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや弱、
　未分解腐植を多量含む。

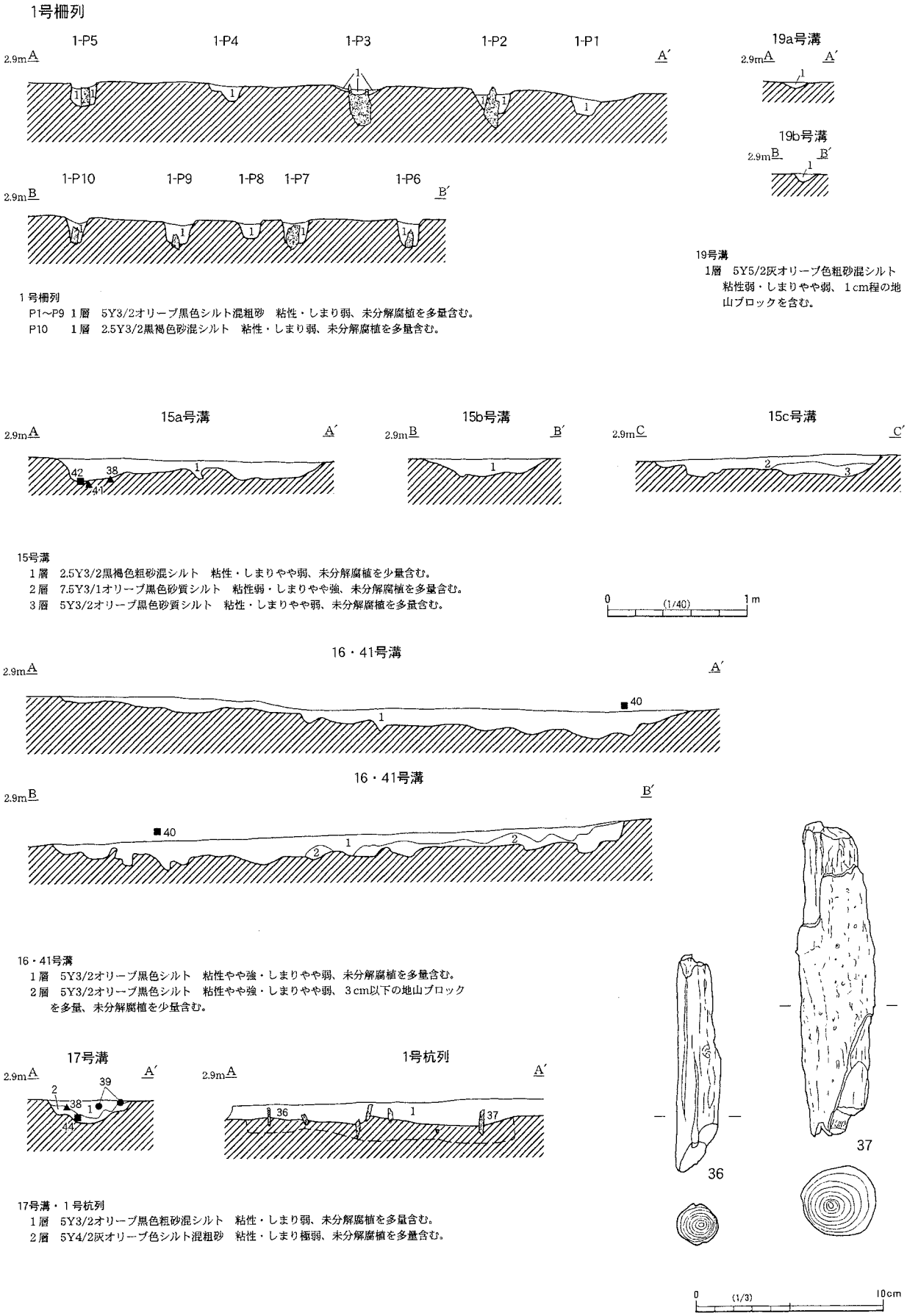
P9　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、
　5mm以下の炭化物を少量含む。
　2層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性極弱・しまり弱、
　未分解腐植を多量含む。

P10　1層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、
　未分解腐植を少量含む。

P11　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや弱、
　地山ブロック混じり。18号溝埋土。
　2層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性やや強・しまりやや弱。
　18号溝埋土。
　3層　2.5Y3/2黒褐色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、
　3cm以下の地山ブロックを多量含む。
　4層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、
　未分解腐植を多量含む。



第18図　5号掘立柱建物の土層と柱



1号柵列
P1～P9 1層 5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂 粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
P10 1層 2.5Y3/2黒褐色砂混シルト 粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。

19号溝
1層 5Y5/2灰オリーブ色粗砂混シルト 粘性弱・しまりやや弱、1cm程の地山ブロックを含む。

15号溝
1層 2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト 粘性・しまりやや弱、未分解腐植を少量含む。
2層 7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト 粘性弱・しまりやや強、未分解腐植を多量含む。
3層 5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト 粘性・しまりやや弱、未分解腐植を多量含む。

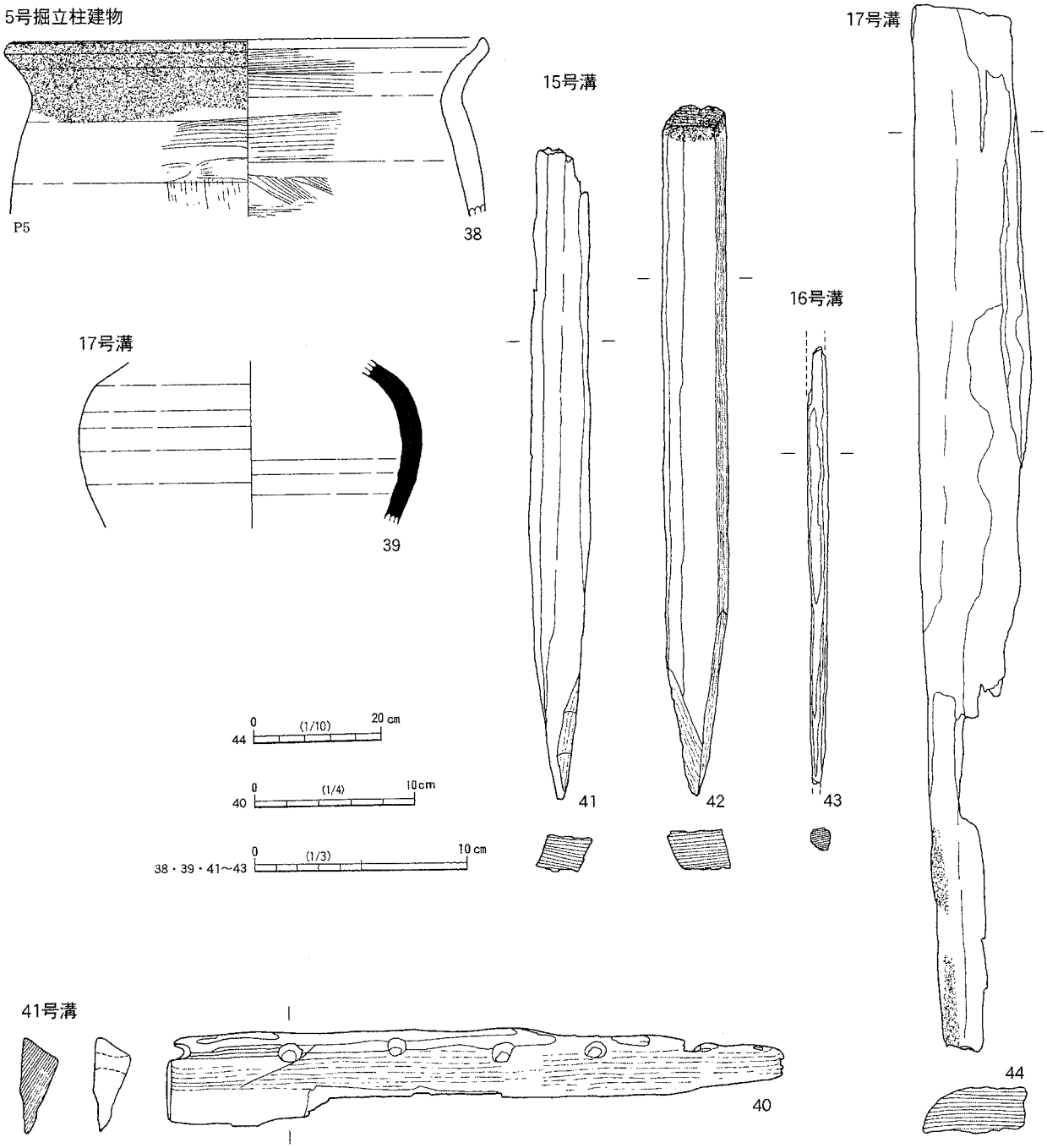
16・41号溝
1層 5Y3/2オリーブ黒色シルト 粘性やや強・しまりやや弱、未分解腐植を多量含む。
2層 5Y3/2オリーブ黒色シルト 粘性やや強・しまりやや弱、3cm以下の地山ブロックを多量、未分解腐植を少量含む。

17号溝・1号杭列
1層 5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト 粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
2層 5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂 粘性・しまり極弱、未分解腐植を多量含む。

第19図 5号掘立柱建物周辺の遺構の土層と1号杭列出土の杭

特に加工が施されず，平坦である。33 は広葉樹の芯去りミカン割材を使用しており，残存長 54.4 cm，幅 14.4 cm，厚さ 16.4 cmである。この柱も下端部は平坦なままで，特に加工は施されていない。34 は針葉樹の丸木材を使用し，外皮部分を残している。残存長 52.0 cm，幅 17.6 cm，厚さ 15.6 cmである。下端部の縁辺部をわずかに削っているが，底面は平坦なままである。35 は残存長 66.3 cm，幅 19.9 cm，厚さ 16.8 cmの柱材である。針葉樹を丸木取りして使用しており，外皮の一部が残存している。下端部は，縁辺部を四方向から少し斜めに削っている。いずれの柱も先端部を尖らせてはいないが，柱穴の底面を突き抜け地山に刺さった状態で出土している。地盤が軟弱であることから，柱が沈み込んでしまった可能性も考えられる。

遺物は，P5 から出土した土師器甕（38）1 点のみ図化できた。38 は，15・17 号溝・1 号流路出土破片と接合関係にある。内面をハケメ，胴部をヘラケズリ調整しており，調整が丁寧な点は，古い要素と見做せる。



第20図　5号掘立柱建物と周辺の遺構出土遺物

15号溝（第17・19・20図，図版7・23）

Jrグリッドに位置する。複数の不整形な土坑状の掘り込みで，5号掘立柱建物の南西辺に沿うものを一連の溝と捉え，アルファベットの小文字でaからdまでの枝番号を付した。5号掘立柱建物の周溝を構成する溝の1条である。aからdまでの総延長が6.52m，幅1.91m，深さ16cm，断面形は弧状で，主軸方位は西偏49.5°を示す。全体的に溝の底面は凹凸が顕著である。埋土は黒褐色またはオリーブ黒色のシルトや砂質シルトで，未分解腐植を多く含む土である。

遺物は，先述した38の土師器甕片と，15a号溝の底面に横たわった状態で角杭2本（41・42）が出土した。41・42はいずれも針葉樹の柾目材を使用し，下端部を四方向から削り，先端部を尖らせている。42の上端部には被熱による焦げが認められる。

16・41号溝（第17・19・20図，図版7・23）

No・Npグリッドに位置する。16・41号ともに5号掘立柱建物の周溝を構成し，建物の梁行に並行する溝部分を16号溝，その北西にある土坑状の不整形な掘り込み部分を41号溝とした。両者の間に新旧関係を判断する切り合いは認められなかった。16号溝は長さ5.91m，幅1.84m，深さ16cm，断面形は弧状，41号溝は長さ4.60m，幅4.58m，深さ19cm，台形状の断面形で，16・41号溝ともに底面の凹凸が顕著であった。主軸方位は，16号溝が東偏43°，41号溝が西偏41°を示す。

遺物は，16号溝から出土した箸状木製品（43）と41号溝から出土した用途不明の木製品（40）が2点，図化できたにすぎない。43の箸状木製品は，針葉樹材を使用している。劣化が進んでおり，加工痕は不明瞭である。40の用途不明品は断面三角形の板状の製品で，枘穴が5ヵ所に並び穿たれている。ムシロやゴザを編む筬かもしれない。広葉樹材を使用している。

17号溝（第17・19・20図，図版7）

Noグリッドに位置する。5号掘立柱建物の北西辺の柱穴列に沿って掘削されている溝で，周溝の一部を構成している。長さ8.24m，幅61cm，深さ17cm，弧状の断面形で，主軸方位は西偏39°である。

遺物は，須恵器長頸瓶A類（39）の破片と土師器甕の細片のほか，板状木製品（44）が出土した。この木製品は溝中に横たわった状態で出土したもので，一部に枘穴の痕跡が認められることから，1号杭列に関係する板材で，建築部材を転用した可能性も考えられる。針葉樹の板目材を使用している。

19号溝（第17・19図，図版7）

No・Npグリッドに位置する溝で，5号掘立柱建物の柱穴のうち南西辺の柱穴P7とP8－P9の間で検出された小溝である。掘立柱建物に関連する溝であろうか。上部が削平を受けているためか途中で途切れている。P8－P9間を19a号溝，P7周辺のものを19b号溝とした。総延長1.37m，幅17cm，深さ5cmで，主軸方位は西偏45°である。遺物は出土していない。

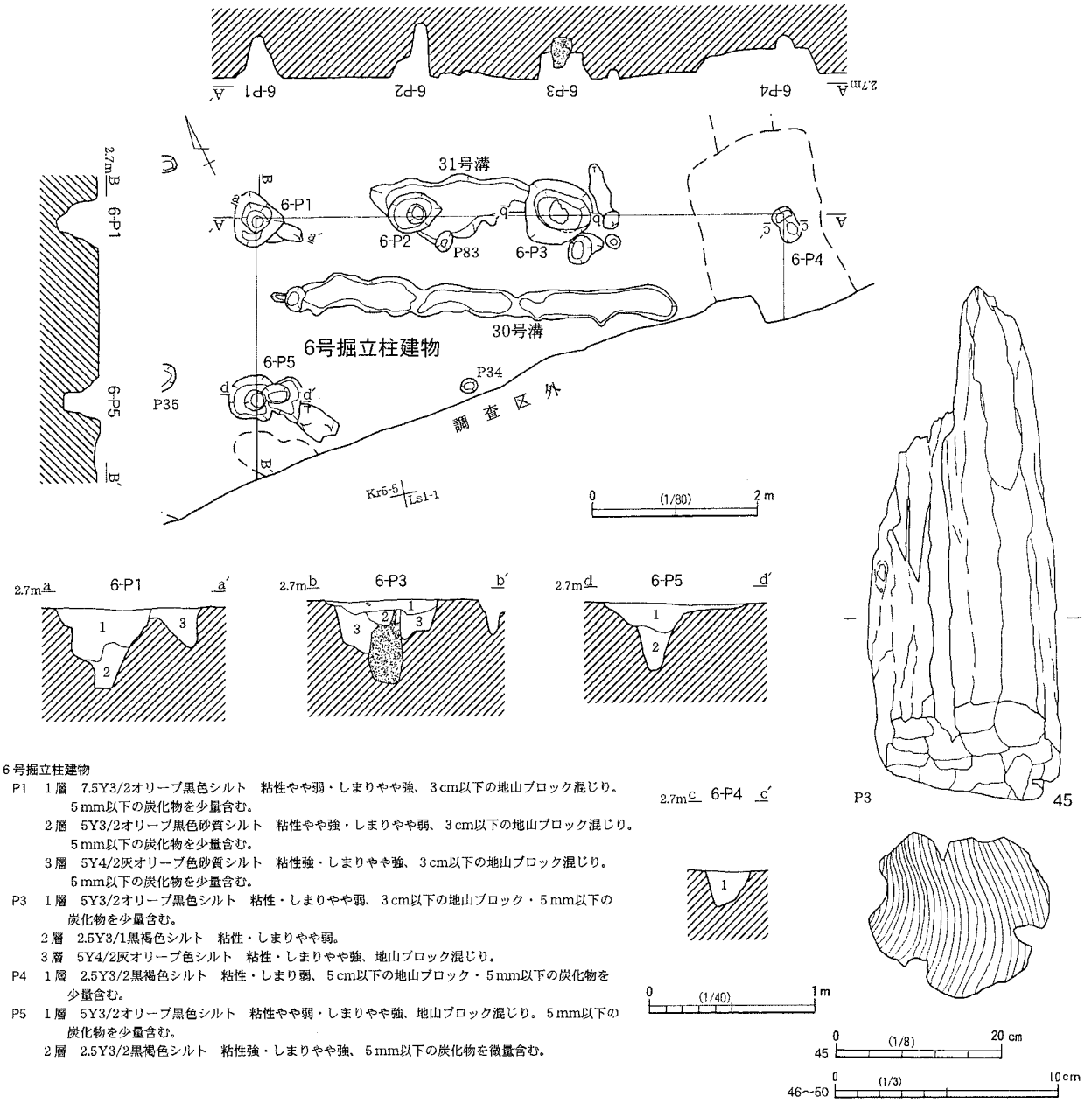
1号柵列（第17・19図，図版7・24）

No・Ooグリッドに位置する。17号溝の外側で検出された柱穴列で，総延長は6.9m，主軸方位は西偏40.5°だが，17号溝の屈曲に合わせて，P6を境に南寄りに屈曲している。柱間寸法は33～104cm，底面標高は2.53～2.76mとばらつきが大きい。柱穴の平面形は円形または楕円形で，不整形のものもみられる。P2・3・5・6・7・9・10に柱根が残存しており，P2・3・9は打込み式の柱であった。柱の太さは6～16cm程とばらつきが見られる。柱の遺存状態はいずれも悪く，図化できるものはなかった。P3出土の柱（309）のみ写真を掲載している。

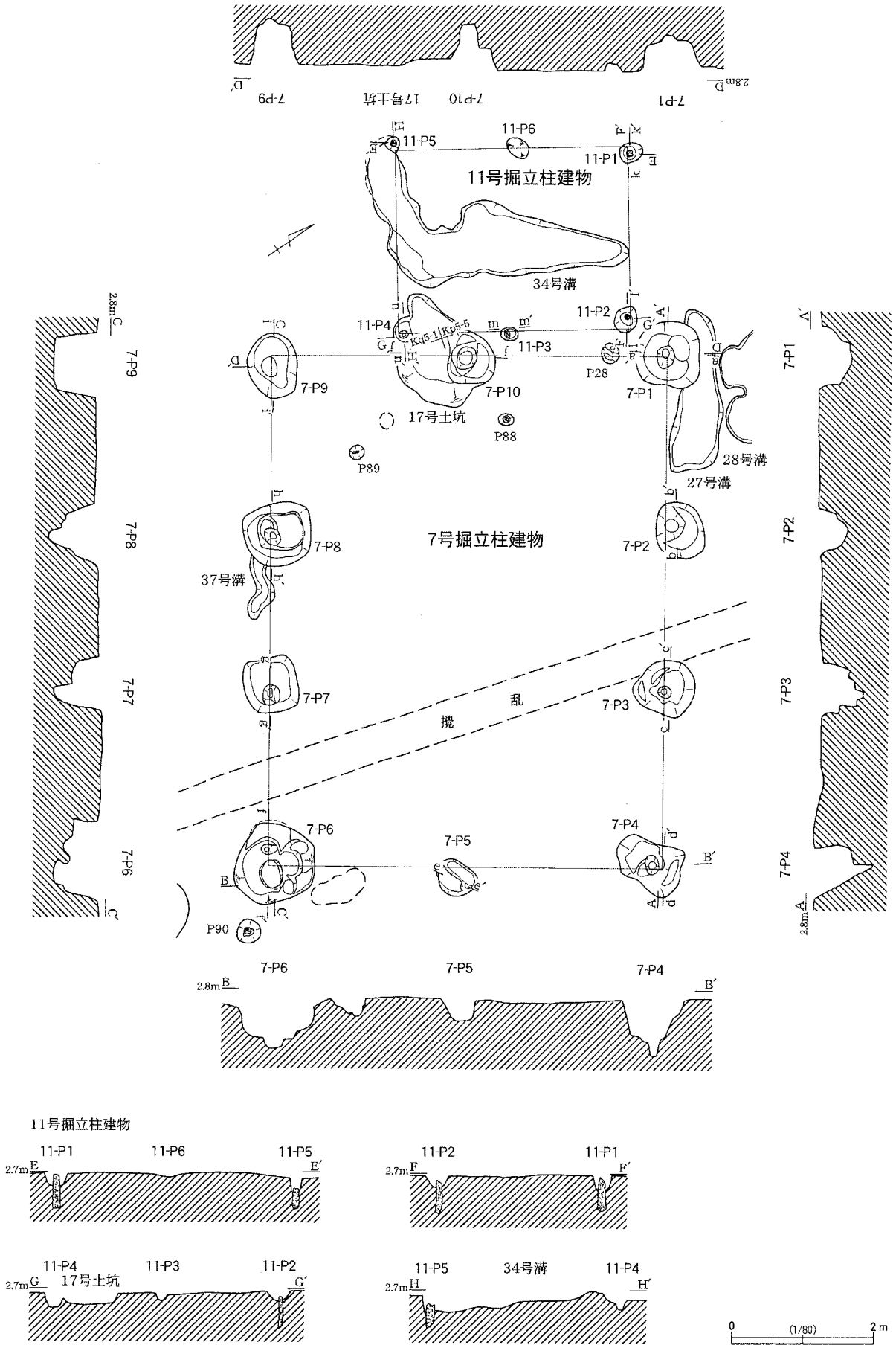
1号杭列（第17・19図，図版7・23）

No・Oo・Opグリッドの17号溝から35号溝の範囲にかけて，直径4cm以下の杭が乱雑に打ち込まれている状態

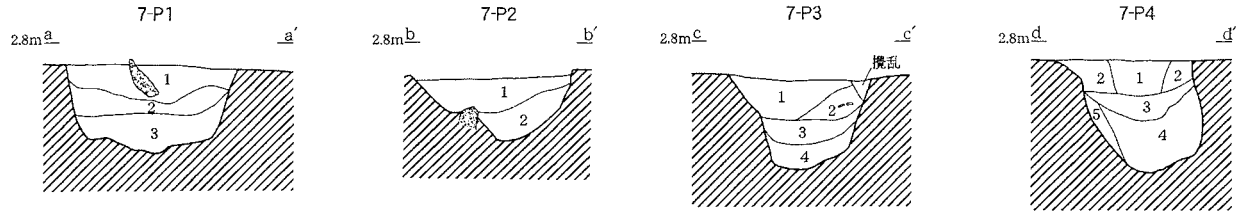
で検出された。杭はいずれも上部が欠損しており，下端部だけが地中に残存していた。５号掘立柱建物関連の遺構としてここに掲載しているが，17 号溝や１号柵列との関連性や先後関係が不明なことから，これらの遺構と異なる時期の遺構である可能性も否定できない。杭の検出範囲は長さ 7.76m，幅 61 cmで，主軸方位は西偏 32.5°である。36・37 は出土した杭である。いずれも広葉樹材であり，細い丸木の下端部を斜めに切り落とした材を使用している。

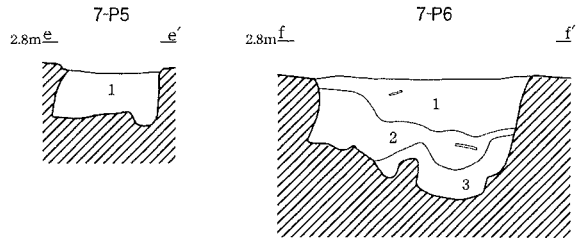


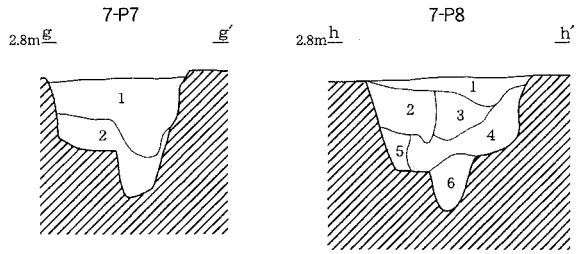
第21図　6号掘立柱建物と出土遺物・柱

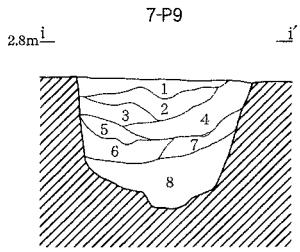


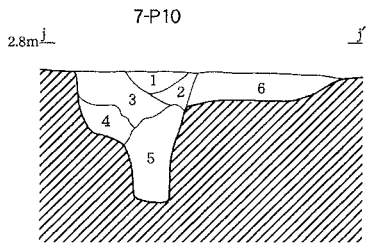
第22図　7・11号掘立柱建物





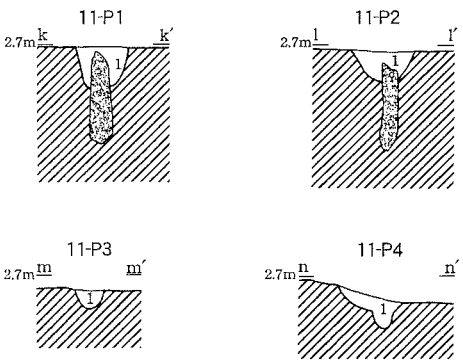






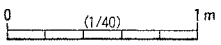
7号掘立柱建物

P1　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまり弱、炭化物を微量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性弱・しまりやや弱、同色シルトブロックを多量含む。
P2　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまり弱、地山ブロック・炭化物を含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、炭化物を少量含む。
P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや強・しまり弱、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂と2.5Y3/2黒褐色シルトの互層　粘性・しまり弱。
　　3層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり弱、オリーブ黒色シルト混じり。
　　4層　5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、炭化物を少量含む。
P4　1層　7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり極弱、地山ブロックを含む。
　　2層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、炭化物・未分解腐植を含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
　　4層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
　　5層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性・しまり強、微細な炭化物を微量含む。
P5　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり弱、地山ブロックを少量含む。
P6　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり弱。炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性無・しまり極弱、オリーブ黒色シルトブロック・地山ブロックを多量含む。
　　3層　2.5GY6/1オリーブ灰色粗砂　粘性無・しまり極弱、オリーブ黒色シルトブロック・地山ブロックを少量含む。
P7　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、黒褐色シルトブロック・炭化物を多量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、炭化物を少量含む。
P8　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、オリーブ黒色シルトブロック混じり。炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロック混じり。
　　3層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや強。
　　4層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロック混じり。
　　5層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無。
　　6層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱。
P9　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを多量、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、炭化物を微量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや強、オリーブ灰色シルトブロック混じり。
　　4層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまり弱、地山ブロックを少量含む。
　　5層　5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、粗砂ブロックを含む。
　　6層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト　粘性強・しまりやや強、オリーブ黒色シルトブロックを微量含む。
　　7層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性やや強・しまりやや弱。
　　8層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
P10　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性弱・しまりやや強。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混砂　粘性極弱・しまり強。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性弱・しまりやや強、地山ブロックを含む。
　　4層　5Y5/2灰オリーブ色粘質土　粘性強・しまりやや強、オリーブ黒色シルト・粗砂ブロックを含む。
　　5層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　6層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性無・しまり強。17号土坑埋土。

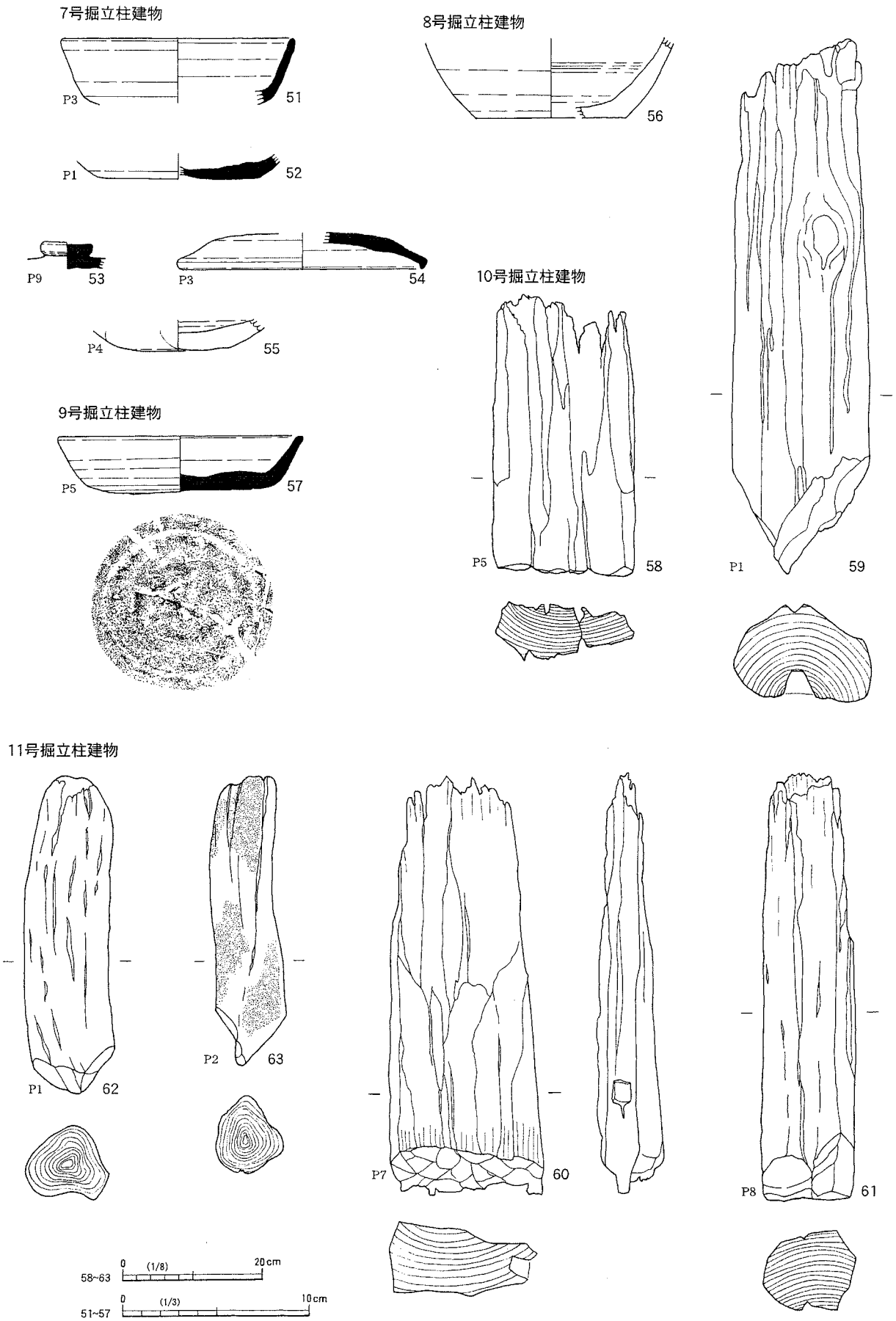


11号掘立柱建物

P1　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、炭化物を微量含む。
P2　1層　5Y3/2オリーブ黒色混砂シルト　粘性弱・しまりやや弱、赤褐色粒を少量含む。
P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、地山ブロックを少量含む。
P4　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性無・しまり強、同色シルトブロックを含む。



第23図　7・11号堀立柱建物の土層



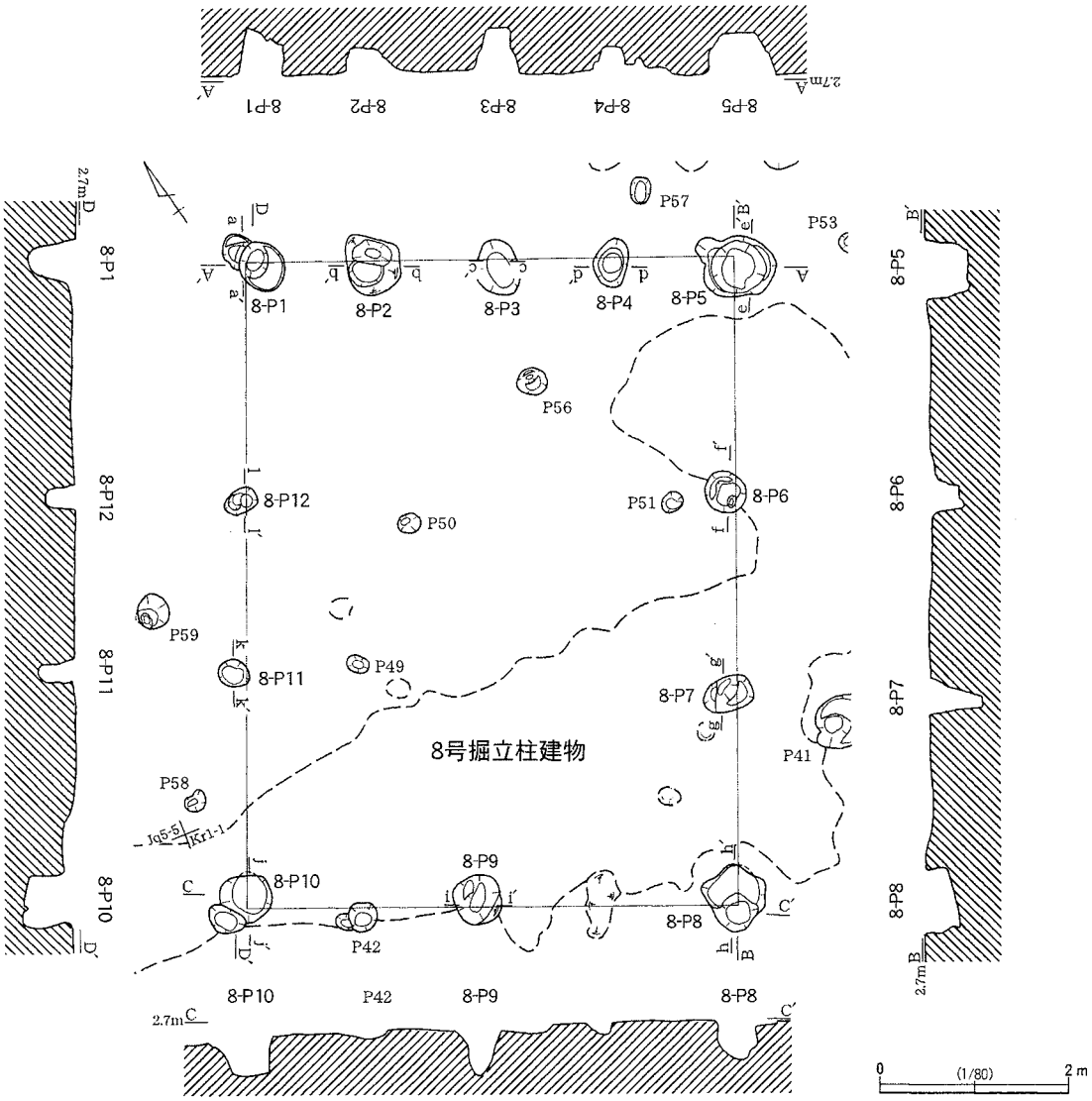
第24図　7～11号掘立柱建物の出土遺物と柱

6号掘立柱建物（第21図，図版8・24）

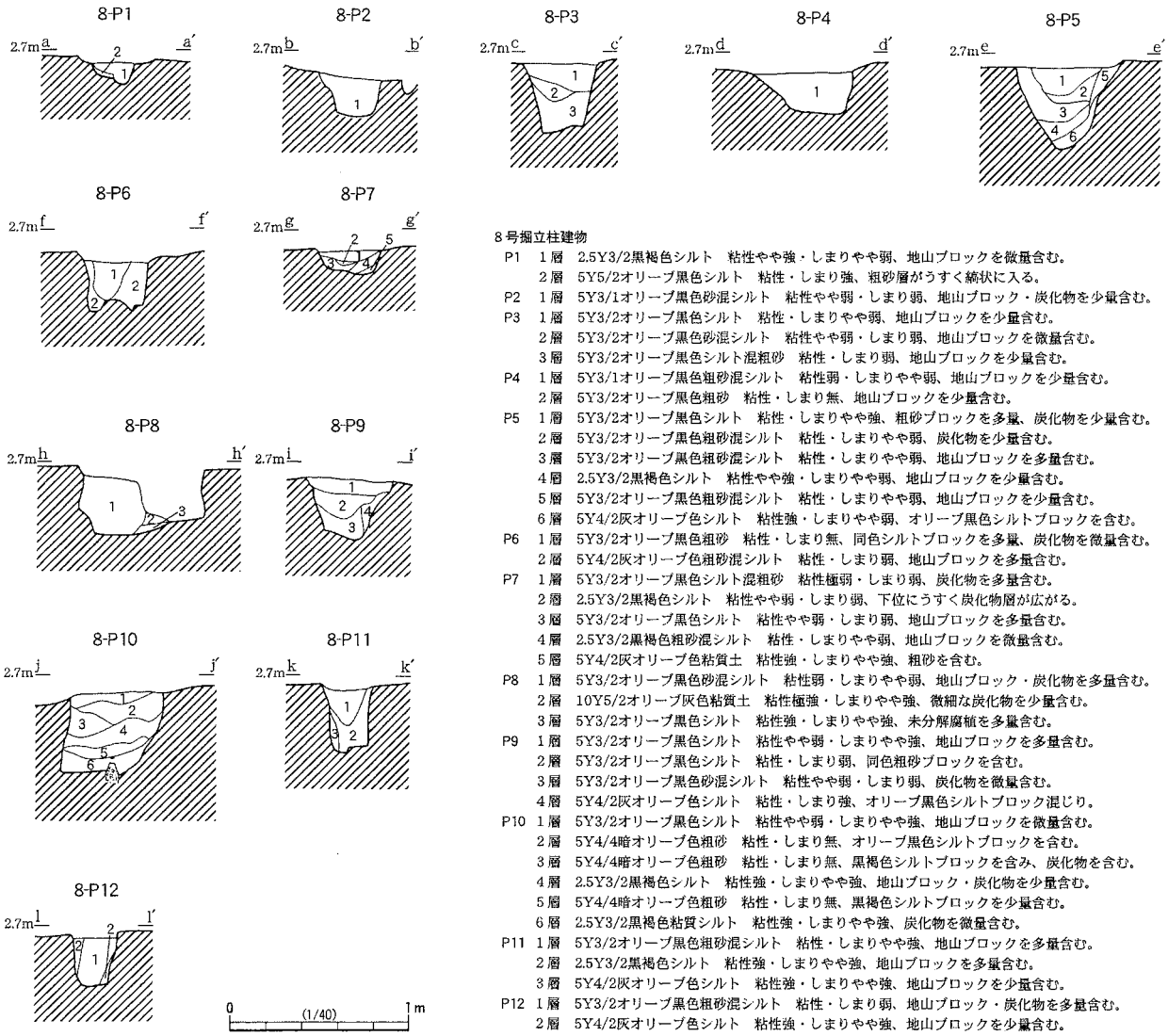
Kr・Lr グリッドに位置し，建物の南側部分が調査区外へと延びている，3間（6.50m）以上×1間（3.10m）以上の規模となる側柱建物である。面積は20.15㎡以上の大きさで，主軸方位は西偏65°である。P4の上部には大きな攪乱があったため，上半部は大きく削平されている。柱間寸法は1.68～2.87mと不揃いで，底面標高も1.95～2.25mとばらつきが大きい。平面形は不整形のものが多いが，柱穴規模は攪乱を受けているP4を除き，長軸62～89cm，短軸47～76cmと比較的大きい。なお，P2については，記録作成前に完掘をしてしまったため記録を欠いている。柱根が出土したのはP3だけであるが，柱穴底面に柱の痕跡が認められることから，柱の太さを20～24cm程度と推測できる。

この建物は30・31号溝と重複関係にあり，31号溝とP2・3の切り合いから，31号溝よりも建物の方が新しい。30号溝とは直接的な切り合い関係がなく，新旧関係を明らかにすることができないが，建物の桁行の軸とほぼ並行して30号溝が掘られていることから，建物内に位置しているものの，この建物に関連する溝の可能性があろう。

45はP3から出土した柱根で，広葉樹の芯去りのミカン割材を使用している。残存長61.2cm，幅22.4cm，厚さ19.2cmの大きさで，下端部を斜めに1方向から削っている。打込み式の柱と考えられ，柱穴の床面から20cm程沈み込んでいる状態で出土した。



第25図　8号掘立柱建物



8号掘立柱建物

P1　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、地山ブロックを微量含む。
　　2層　5Y5/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまり強、粗砂層がうすく縞状に入る。
P2　1層　5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロック・炭化物を少量含む。
P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロックを微量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、地山ブロックを少量含む。
P4　1層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、地山ブロックを少量含む。
P5　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、粗砂ブロックを多量、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、炭化物を少量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを多量含む。
　　4層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
　　5層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
　　6層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性強・しまりやや弱、オリーブ黒色シルトブロックを含む。
P6　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、同色シルトブロックを多量、炭化物を微量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、地山ブロックを多量含む。
P7　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性極弱・しまり弱、炭化物を多量含む。
　　2層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや弱・しまり弱、下位にうすく炭化物層が広がる。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロックを多量含む。
　　4層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを微量含む。
　　5層　5Y4/2灰オリーブ色粘質土　粘性強・しまりやや強、粗砂を含む。
P8　1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、地山ブロック・炭化物を多量含む。
　　2層　10Y5/2オリーブ灰色粘質土　粘性極強・しまりやや強、微細な炭化物を少量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや強、未分解腐植を多量含む。
P9　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまり弱、同色粗砂ブロックを含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、炭化物を微量含む。
　　4層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性・しまり強、オリーブ黒色シルトブロック混じり。
P10　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、地山ブロックを微量含む。
　　2層　5Y4/4暗オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、オリーブ黒色シルトブロックを含む。
　　3層　5Y4/4暗オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、黒褐色シルトブロックを含み、炭化物を含む。
　　4層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロック・炭化物を少量含む。
　　5層　5Y4/4暗オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、黒褐色シルトブロックを少量含む。
　　6層　2.5Y3/2黒褐色粘質シルト　粘性強・しまりやや強、炭化物を微量含む。
P11　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　2層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロックを多量含む。
　　3層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロックを少量含む。
P12　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、地山ブロック・炭化物を多量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロックを少量含む。

第26図　8号掘立柱建物の土層

遺物は，P2から出土した須恵器折縁杯（48）と，P3から出土した須恵器無台杯（46・47）・土師器甕（49）が図化できた。なお，49の土師器甕の底部片は柱の掘方から出土しており，49は建物建立時以前，それ以外は建物廃絶以降となろう。48は，7号溝3と法量・器形の特徴が一致し，同時期とできよう。47は，箱形器形を呈するものの，口径12㎝以下で扁平・薄手なことから，小泊窯群5段階に比定される。50は，内外面に煤・炭化物の付着が著しい。

7号掘立柱建物（第22～24図，図版8・22）

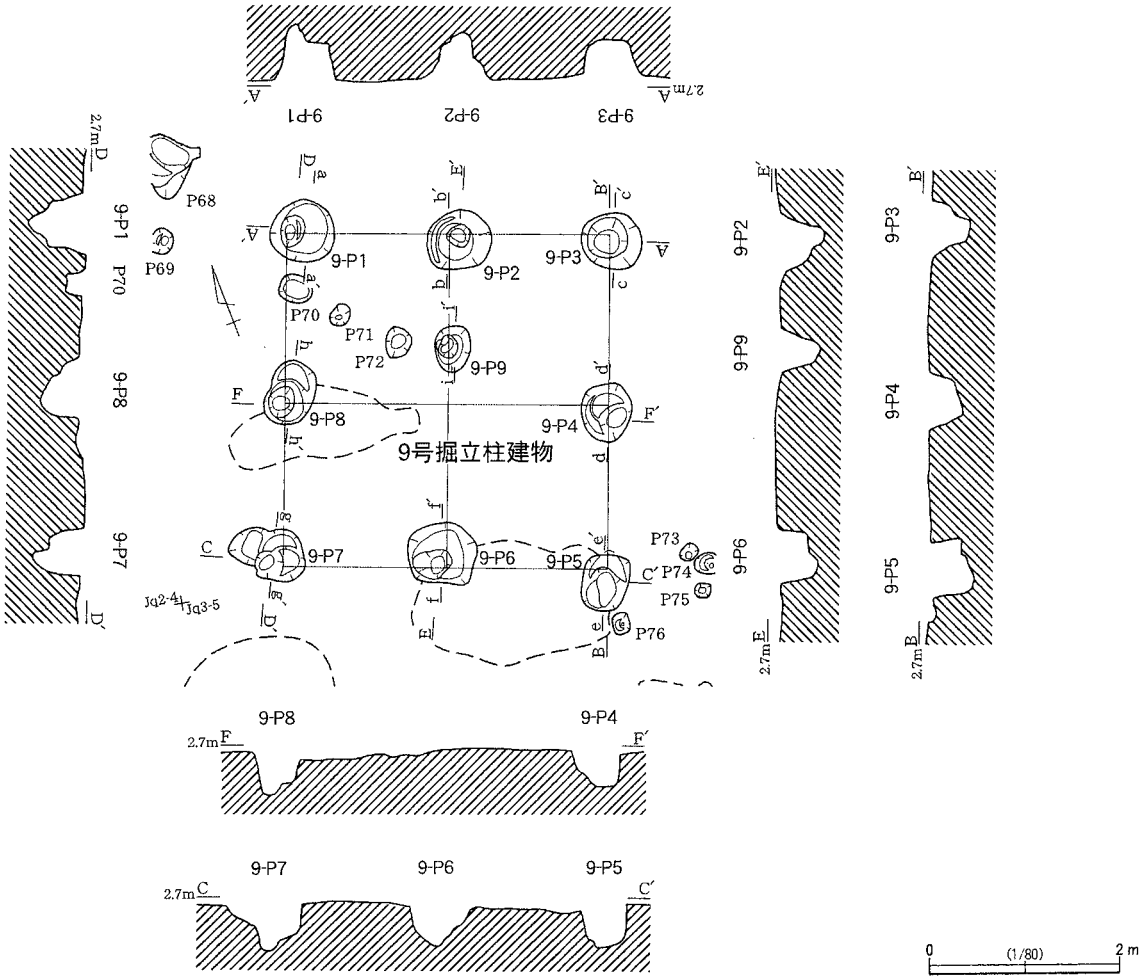
Kp・Kq・Lp・Lqグリッドに位置する3間（7.25m）×2間（5.70m）の側柱建物である。面積は41.33㎡で，主軸方位は西偏58.5°である。桁行の柱間寸法は2.24～2.56m，梁行の柱間寸法は2.74～2.86mで，梁行が長い。柱穴の底面標高は1.90～2.36mである。柱穴の平面形は円形または楕円形が多く，平面規模は梁行の中柱であるP5は長軸・短軸が50～60㎝程の大きさであるが，そのほかは長軸で約70～120㎝，短軸で約60～120㎝の規模である。平面積・柱間寸法・柱穴規模のいずれも今回の調査で検出された掘立柱建物では，最も大きな規模の建物といえる。いずれの柱穴からも柱根は検出されていないが，P6・7・8・9・10には柱痕跡が見られ，その痕跡から推測すると柱の直径はおおむね20～24㎝程度と考えられる。重複関係にある遺構は，17号土坑，27・

37 号溝がある。P1 が 27 号溝と切り合っており，P8 が 37 号溝と，P10 が 17 号土坑とそれぞれ切り合っている。37 号溝との新旧関係は明らかにすることができなかったが，27 号溝および 17 号土坑については，柱穴が両遺構を掘り込んだ状態で検出されたことから，7 号掘立柱建物は 17 号土坑と 27 号溝よりも新しい時期の遺構であるといえる。

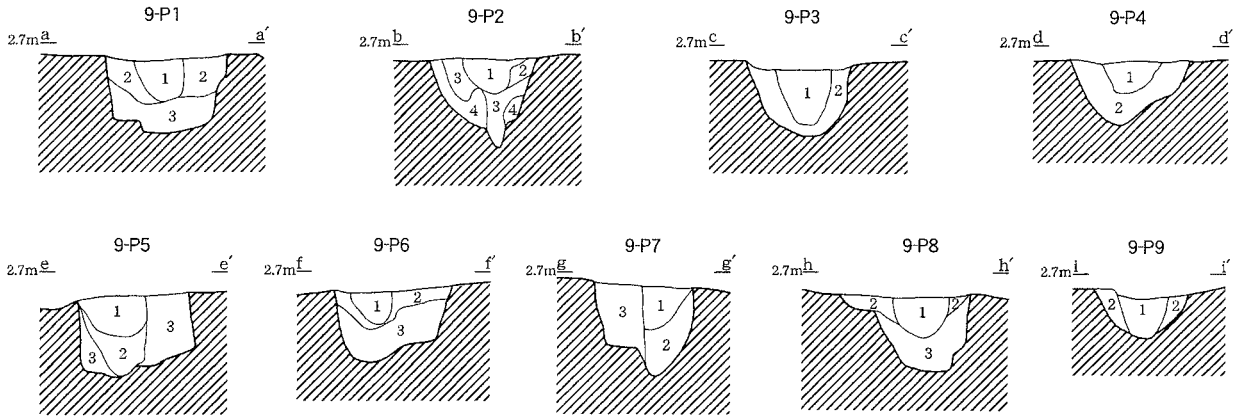
遺物は細片が多く，図化できたものは P1 から出土した須恵器無台杯（52），P3 出土の須恵器有台杯（51）・杯蓋（54），P4 出土の土師器甕（55），P9 から出土した須恵器杯蓋（53）だけである。また，P9 からは焼成粘土塊 1 点（306）が出土している。51・54 は，口径値や 54 の口縁端部の形状から，38 号溝の新相とした土器に近い時期の資料と考えられる。54 は，内面に墨痕があり，使用痕も顕著なことから，転用硯であろう。53 は，小振りのボタン状つまみが付されており，51・54 とおおむね同時期であろう。

8 号掘立柱建物（第 24～26 図，図版 8・9）

Kq・Kr グリッドに位置する 3 間（6.88m）×2 間（5.19m）の側柱建物である。北辺の梁行が 4 間となり，南辺より柱間数が多く設定されている。南辺は，P8－P9 間が攪乱を受けておりピットと判断することができなかったが，北辺と同様の柱穴を有する構造であった可能性もある。面積は 41.33 ㎡で，主軸方位は西偏 58.5° である。桁行の柱間寸法は 1.87～2.56m とややばらつきが大きく，梁行は P2・4 を除いた数値では 2.45～2.81m と，梁行の方が全体に長くなっている。柱穴の底面標高は 2.05～2.33m で，平面形態は円形または楕円形のものが多く，方形のもの見られる。柱穴の規模は，梁行の柱穴はおおむね 50～80 ㎝なのに対し，桁行が隅柱以外は約 20～50 ㎝と小さい。梁行の柱穴に比べ桁行の柱穴が小さい点は，他の掘立柱建物とは異なり，当建物の特徴であろう。



第27図　9号掘立柱建物



9号掘立柱建物

P1　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、灰オリーブ色粗砂がうすく縞状に入る。
　　3層　5Y4/2オリーブ灰色粗砂　粘性・しまり無、細砂がうすく縞状に入る。
P2　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、炭化物を少量含む。
　　2層　5Y5/2灰オリーブ色細砂　粘性極弱・しまり弱、粗砂がうすく縞状に入る。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、同色シルトを含む。
　　4層　2.5Y3/2黒褐色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱。オリーブ灰色細砂混じり。
P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、黒褐色シルトブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、地山ブロックを少量含む。
P4　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまりなし、黒褐色シルトブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2　オリーブ黒色粗砂　粘性・しまりなし、地山細砂ブロックを少量含む。
P5　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや強、炭化物を多量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり弱、同色シルトがうすく縞状に入る。
　　3層　2.5GY5/1オリーブ灰色細砂　粘性やや弱、しまり弱、オリーブ黒色シルト混じり。地山ブロックを少量、炭化物を微量含む。
P6　1層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性やや弱・しまり極弱。
　　2層　2.5Y3/2黒褐色シルト混粗砂　粘性弱・しまり極弱、地山ブロックを微量含む。
　　3層　5Y4/2オリーブ灰色粗砂　粘性・しまり無、地山ブロックを少量含む。
P7　1層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、炭化物を多量含む。
　　2層　5Y5/2灰オリーブ色細砂　粘性・しまり弱、同色粗砂ブロック・地山シルトブロックを多量含む。
　　3層　7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり弱、地山ブロックを少量含む。
P8　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性弱・しまりやや弱、炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。
　　2層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性・しまり極弱、灰オリーブ色粗砂混じり。
　　3層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性無・しまり極弱、地山ブロックを多量含む。
P9　1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、黒褐色シルトブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、地山ブロックを少量含む。

0　(1/40)　1m

第28図　9号掘立柱建物の土層

いずれの柱穴からも柱根は検出されず，柱痕跡もP6・11・12を除いて不明である。P8の底面から礎板とも考えられる土壌化した木質層が検出されている。ピットが建物内に数基みられるほかは，重複関係にある遺構はない。遺物は，P5から出土した土師器甕片（56）1点のみ図化できた。

9号掘立柱建物（第24・27・28図，図版8・9）

Jqグリッドに位置する2間（3.50m）×2間（3.36m）の総柱建物である。面積は11.76㎡で，主軸方位は長軸を主軸として東偏26°である。柱間寸法は，P2−P3間が少し狭くなっているほかは，1.70〜1.85mにほぼまとまっている。中央の柱は東西の並びからずれており，北側に寄っている。柱穴の底面標高は2.08〜2.27mである。平面形は円形・楕円形・長方形・不整形と様々で，柱穴規模は中央の柱が50×39㎝とやや小規模であるほかは，おおむね60〜70㎝前後である。柱穴規模は，比較的大型の建物である7号掘立柱建物を除いて，今回検出されている側柱の掘立柱建物に比べると，10〜20㎝程大きい。柱根は検出されていないが，他の掘立柱建物に比べると柱痕跡が明瞭である。柱の太さは，柱痕跡から直径25〜26㎝前後と推測することができる。

遺物は，P3から土師器甕の小片1点と，P5から須恵器無台杯（57）1点が出土した。57は，口径13㎝を超え，厚手であるなど本遺跡から出土した須恵器無台杯の中では，古い要素を持つ。ただし，扁平で外傾器形であることから，38号溝古相資料とおおむね同時期とできよう。

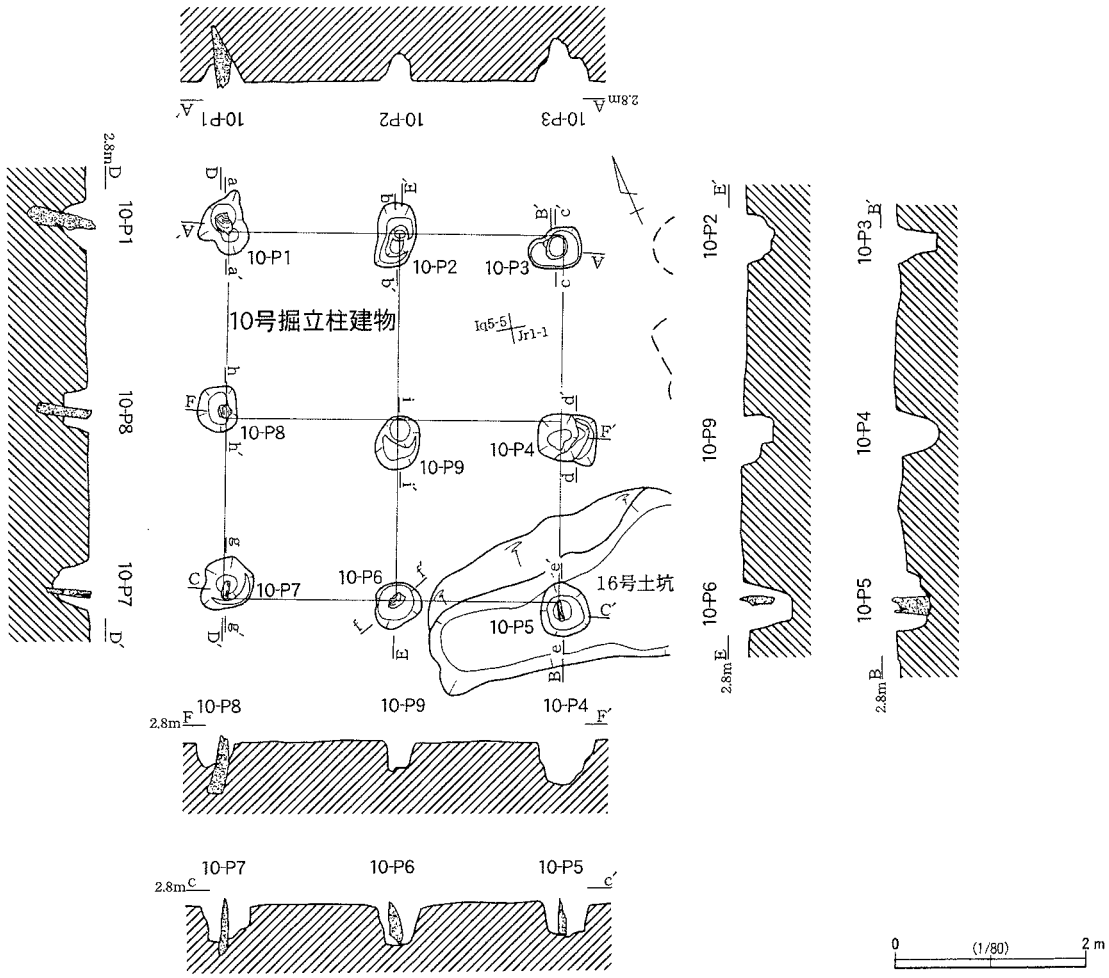
10号掘立柱建物（第24・29・30図，図版8・9・24）

Iq・Ir・Jq・Jrグリッドに位置する2間（3.85m）×2間（3.56m）の総柱建物である。面積は13.71㎡で，

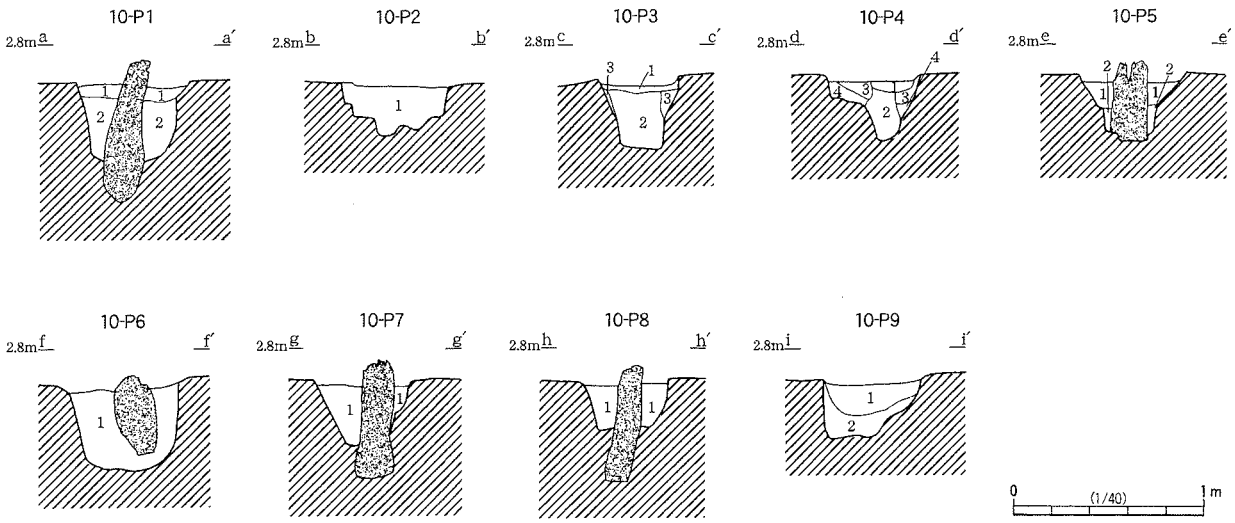
主軸方位は長軸を主軸として東偏22°である。柱間寸法は1.68～2.03mであり，東西方向中央の柱穴列と北辺の柱穴列の間が少し広くなっている。柱穴の底面標高は2.12～2.35mである。柱穴の平面形は，長方形・円形・楕円形・不整形と様々であるが，柱穴規模は長軸48～68 cm，短軸が39～55 cmと比較的まとまっており，ばらつきは少ない。柱根はP1・5・6・7・8に残存していたが，P6の柱根は劣化が著しかったため取上げてくることができなかった。なお，柱根が残存していない柱穴は，P4を除き柱痕跡が不明瞭であった。16号土坑とは重複関係にあり，P5が土坑を切っていたことから，16号土坑が埋まった後に10号掘立柱建物が構築されたことがわかる。

58～61は柱根である。58はP5から，59はP1から，60はP7から，61はP8から出土した。58は，板状の柱である。残存長40.0 cm，幅20.4 cm，厚さ7.2 cmで広葉樹の板目材を使用している。やや劣化が進んだ状態で出土した。下端部は平坦である。59は，針葉樹の芯去りミカン割材を使用している。残存長74.8 cm，幅19.6 cm，厚さ13.2 cmで，下端部をV字状に二方向から削り，打ち込めるように加工した柱である。打ち込まれて地面の中に埋もれている部分に枘穴が穿たれていることから，建築部材を柱として転用したと推測する。60は，広葉樹の板目取りの板材を使用した柱である。残存長60.4 cm，幅21.6 cm，厚さ9.2 cmで，下端部を斜めに一方向から削っている。この柱も，地中に埋められていた部分に枘穴が穿たれていたことから，建築部材を転用した柱と考えられる。58・60はいずれも隅柱の柱であるが，板状の柱材を使用している点には注意したい。61は広葉樹の芯去りミカン割材を使用した柱で，残存長62.0 cm，幅13.2 cm，厚さ10.8 cmである。下端部を一方向から斜めに削っている角材状の柱である。

遺物は，P3の埋土から土師器小甕の口縁部小片が1点出土しているだけである。



第29図　10号掘立柱建物



10号掘立柱建物
P1　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや強、3cm以下の地山ブロックを多量、5mm以下の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性・しまり強、3cm以下の黒褐色シルトブロックを少量含む。
P2　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや弱、5cm以下の地山ブロック・5mm以下の炭化物を少量含む。
P3　1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまり弱、5mm以下の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまり弱、5mm以下の炭化物を微量含む。
　　3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、5cm以下の地山ブロック混じり。
P4　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまり弱、5mm以下の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや強、5mm以下の炭化物を微量含む。
　　3層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまり弱、5cm以下の地山ブロック混じり。
　　4層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまりやや強、5cm以下の地山ブロックを少量含む。
P5　1層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、3cm以下の黒褐色シルトブロックを少量含む。
　　2層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり極弱。
P6　1層　5Y4/2灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無。
P7　1層　5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂　粘性・しまり弱、3cm以下の地山ブロックを多量含む。
P8　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、灰オリーブ色シルト・オリーブ灰色細砂混じり。
P9　1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱、5mm以下の炭化物を少量含む。
　　2層　5Y4/2灰オリーブ色砂混シルト　粘性・しまりやや強、5cm以下の黒褐色シルトブロックを多量含む。

第30図　10号堀立柱建物の土層

11号掘立柱建物（第22～24図）

Kp・Kq・Lp グリッドに位置する2間（3.40m）×1間（2.34m）の側柱建物である。面積は7.96㎡，主軸方位は東偏32.5°である。柱間寸法は桁行1.48～1.77m，梁行は2.73mと2.84mであり，梁行の方が長くなっている。柱穴の底面標高は2.37～2.62mで，柱穴の平面形は楕円形または円形である。柱穴規模は約20～40㎝と全体に小規模である。現地調査終了後の整理作業時に掘立柱建物と判断したため，土層の記録などに不備があるが，検出面からの深さは浅いものが多く，おおむね単層であった。P1・2・5には柱根が残存していたが，P5の柱根は遺存状態が悪く，現地から取上げてくることができなかった。重複関係は，P4が17号土坑と切り合い，P5が34号溝と切り合っていて，17号土坑は11号掘立柱建物よりも古く，34号溝は11号掘立柱建物よりも新しい。

62・63はそれぞれP1・P2から出土した柱根である。62は広葉樹の丸木材を使用した柱で，下端部を鉛筆状に削ってわずかに先端部を尖らせた材を使用している。63も広葉樹の丸木材を使用しており，一部に外皮が残存している。下端部を二方向から削り，V字状に尖らせている。いずれの柱も，柱穴の底面に深く打ち込まれた状態で出土しており，下端部の形状からも打込み式の柱と考えられる。なお，柱穴から遺物は出土していない。

2号柵列（第31図，図版9・24）

Lo・Lp・Mo グリッドに位置する。長さは11.16m以上で，調査区の北側へと延びる可能性もある。主軸方位は東偏36°である。調査区内では19基の柱穴を検出しているが，柱間寸法は15㎝～1.76mと全体にばらつきが大きく不揃いである。なお，P9とP10の間が1.76mと極端に長いことから，一直線上に並んではいるが，P1～9と

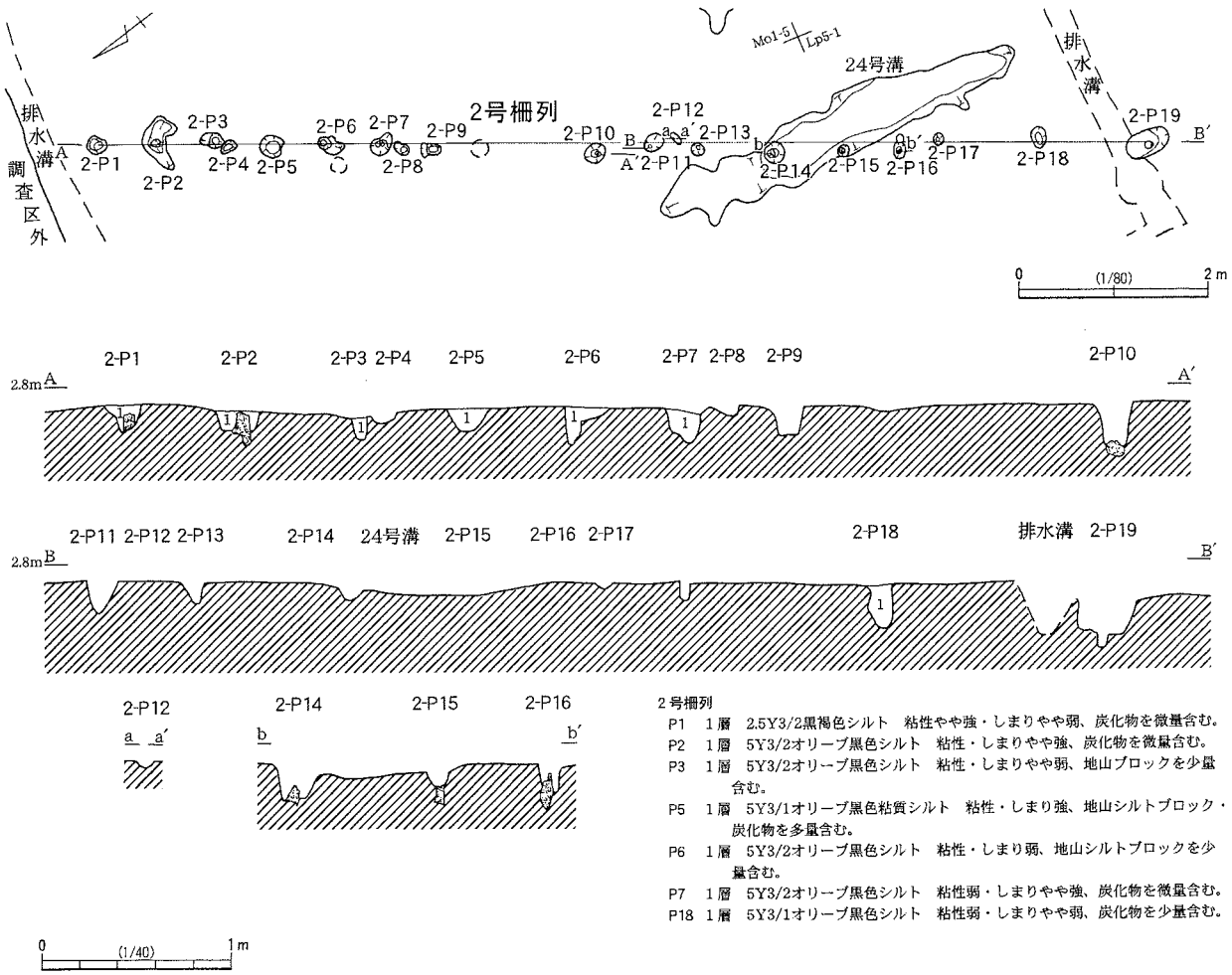
P10～19の２列の柵列があると捉えた方が適切であろうか。底面標高は2.341～2.677mである。柱穴は平面形が楕円形または円形のものが多く，長方形や不整形のものも見られる。柱穴規模は全体に小さく，大形のものでは長軸で30～40 cm程のものも見られるが，おおむね長軸・短軸いずれも10～20 cm程度である。

柱根はP1・2・10・14・15・16に残存しており，直径５～10 cm程と全体に細い。いずれの柱根も遺存状態が非常に悪く，劣化が進んでいたものばかりであった。劣化のため実測図を作成することはできなかったが，比較的遺存状態が良好であったP16出土の柱根（310）のみ，巻末に写真を掲載している。この柱根は直径４cm程の広葉樹の丸木材で，下端部を斜めに削り落した材を使用している。

１号井戸・６号溝（第32図，図版10）

１号井戸はNqグリッドの南西部に位置し，６号溝は１号井戸を取り囲むように掘削された溝である。なお，今回の調査で検出された井戸は，この１号井戸の１基だけである。

１号井戸は，長軸1.66m，短軸1.65mのほぼ正円形に近い平面形の井戸である。検出面からの深さは77 cmで，半円状の断面形をしている。構築材や掘方と考えられる土層の堆積が認められないことから，素掘りの井戸であった可能性が高い。だが，この井戸がオリーブ灰色粘質土とオリーブ色粗砂の地山部分にまたがる箇所に掘削されており，調査中も粗砂の地山部分から崩れやすかった点を考えると，素掘りの井戸と断定するにはやや躊躇する。埋土は水平状に堆積しており，最下層が未分解腐植を多量に含む層であるほかは，直径５～15 cm程度と大



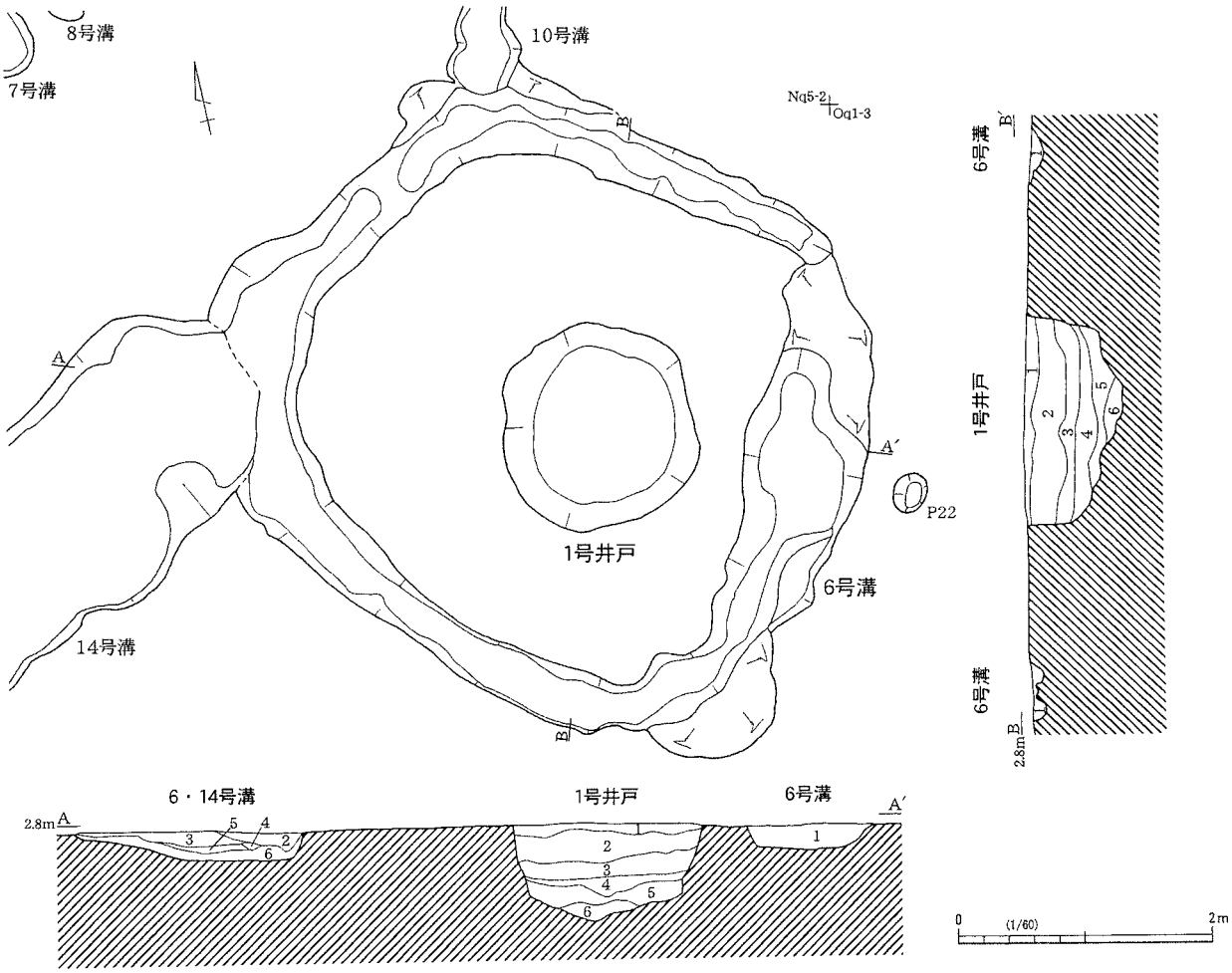
２号柵列
P1　１層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、炭化物を微量含む。
P2　１層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、炭化物を微量含む。
P3　１層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを少量含む。
P5　１層　5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト　粘性・しまり強、地山シルトブロック・炭化物を多量含む。
P6　１層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまり弱、地山シルトブロックを少量含む。
P7　１層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性弱・しまりやや強、炭化物を微量含む。
P18　１層　5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性弱・しまりやや弱、炭化物を少量含む。

第31図　２号柵列

きめな地山粘質土ブロック混じりの土が堆積している。使用後に人為的に埋められたと推察できる。

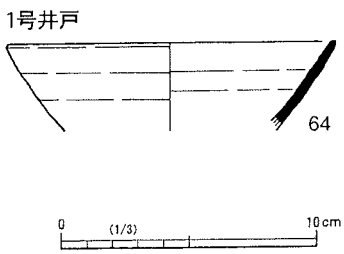
埋土中にはほとんど遺物が含まれておらず，須恵器杯類の破片が数点出土しただけであり，図化できたものは64の須恵器無台杯1点だけであった。64は，小形薄手で椀形なことから，遺跡内の須恵器無台杯の中では，最も新しく位置付けられる。

6号溝は最大幅97㎝，深さ20㎝の溝で，1号井戸の周囲を巡る溝である。半円状の断面形で，底面の凹凸が著しい。埋土は粗砂混じりの黒褐色シルトを主体とする。10号溝及び14号溝と重複関係にあるが，どちらとも新旧関係を判断することはできなかった。調査区中で井戸が1基しか検出されていないことや，後述する10号溝が流路から続く道の側溝であると考えられること，14号溝が1号掘立柱建物の周溝の1条と考えられることなどを合わせて考えると，これらの溝と1号井戸及び6号溝は同時期に併存していた可能性もあろう。



1号井戸
1層　2.5Y3/2黒褐色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、5㎝程の地山ブロック・黒褐色シルトブロックを多量含む。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、5～15cmほどの地山ブロック・黒褐色シルトブロックを多量含む。
3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、5㎝程の地山ブロックを含む。
4層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、5～15cm程の地山ブロック・黒褐色シルトブロックを含む。
5層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無、5㎝程の地山ブロックを多量含む。
6層　2.5Y3/1黒褐色シルト　粘性強・しまり弱、未分解腐植を多量含む。

6号溝・14号溝
1層　2.5Y3/2黒褐色砂質シルト　粘性・しまり弱、3㎝程の地山ブロックを含み、炭化物を少量含む。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極強、オリーブ黒色粗砂がうすく縞状に入る。
3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極強、1㎝程度の地山ブロックを微量含む。
4層　7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂　粘性・しまり無。
5層　5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト　粘性やや弱・しまり弱、炭化物を含む。
6層　7.5Y6/2　灰オリーブ色粗砂　粘性なし、しまりなし、オリーブ黒色シルトブロックを含む。



第32図　1号井戸・6号溝と出土遺物

なお，６号溝からは土師器の小片が出土している。

１号土坑（第 33 図，図版 10・11・17・23・24）

Mp1-1 グリッドを中心に，周辺のグリッドにまたがって位置する。南側の一部を調査時に掘削した排水溝によって壊してしまったため正確な規模は不明であるが，残存している長さは長軸 2.40m，短軸 2.01m である。断面形は弧状であり，深さは 23 cm，主軸方位は東偏 50.5° を示す。埋土は４層に分けられ，黒褐色またはオリーブ黒色のシルトである。底面は常に湿潤な状態であり，最下層には未分解腐植を多量に含む。木製品の遺存状態も比較的良好であり，加工痕のある木片も数点出土している。

遺物は，土師器甕の底部（65），斎串（66・67），杭（68），木製盤（69）や，針葉樹の分割材（311）が出土した。65 は，胴部外面をヘラケズリしており，丁寧な調整がなされる。底部には乾燥時の板目痕が認められる。66・67 は斎串である。66 は広葉樹を，67 は針葉樹をどちらも柾目取りした材を使用している。66 は下端部を鉛筆状に削って尖らせた形態の斎串である。奈良文化財研究所（以下，「奈文研」と記す）の分類（奈文研 1985）ではＤＩ型式に分類されよう。67 は上端部を圭頭状につくり，下端部は茎状に両側面を細く削り出している。奈文研分類ではＣＩ型式もしくはＤＩ型式に属する。68 は細い広葉樹材を，丸木のまま使用している杭である。下端部を斜めに削り落して杭としている。69 は広葉樹の柾目取りの材を使用している木製挽物の無台盤である。土坑の底面から出土したが，やや劣化が進んでいる状態で出土した。内外面には線状痕が認められ，底部外面の外周部にはロクロケズリの痕跡が顕著に認められる。体部が屈曲して立ちあがり，底部との境が明瞭な形態のもので，水澤氏の分類（水澤 2004）のⅡ類に分類される。

２号土坑（第 34・36 図）

Mr4-3 グリッドに位置する。規模は長軸 75 cm，短軸 63 cmで，断面形は弧状，深さは 11 cmである。39 号溝と重複関係にあり，39 号溝を切った状態で検出された。

遺物は，須恵器無台杯（70）や杯蓋（71）のほか，須恵器や土師器の小片が出土した。70 は，厚手であるが，小形扁平で，口縁部の外反度も強く，新しい要素が多い。71 は，４号溝 23 に法量・器形・胎土が類似する。

３号土坑（第 34・36 図，図版 11）

Mr グリッドに位置する。規模は長軸 1.98m，短軸 1.80m，断面形は弧状で深さは 16 cmである。埋土は３層に分けられ，全体的にしまりが弱い。39 号溝と重複関係にあり，３号土坑が 39 号溝を切っている。

遺物は，須恵器無台杯（72）・有台杯（73）が出土している。72 は，口径 12 cm以下で扁平外傾器形であり，腰部が丸みを帯びることから，小泊窯群５段階とできよう。73 は，口径 10 cm以下で，器高指数が 50 を超えるなど小形・深身であり，有台杯Ｃ類の中では新しく位置付けられる。

４号土坑（第 34・36 図，図版 11）

Mr グリッドに位置する。長軸 1.30m，短軸 1.10mの規模で，断面形は弧状，深さは 22 cmである。埋土は４層に分類される。39 号溝と重複関係にあり，４号土坑が 39 号溝を切っている。

遺物は，須恵器有台杯（76）や土師器甕片が出土した。

５号土坑（第 34 図）

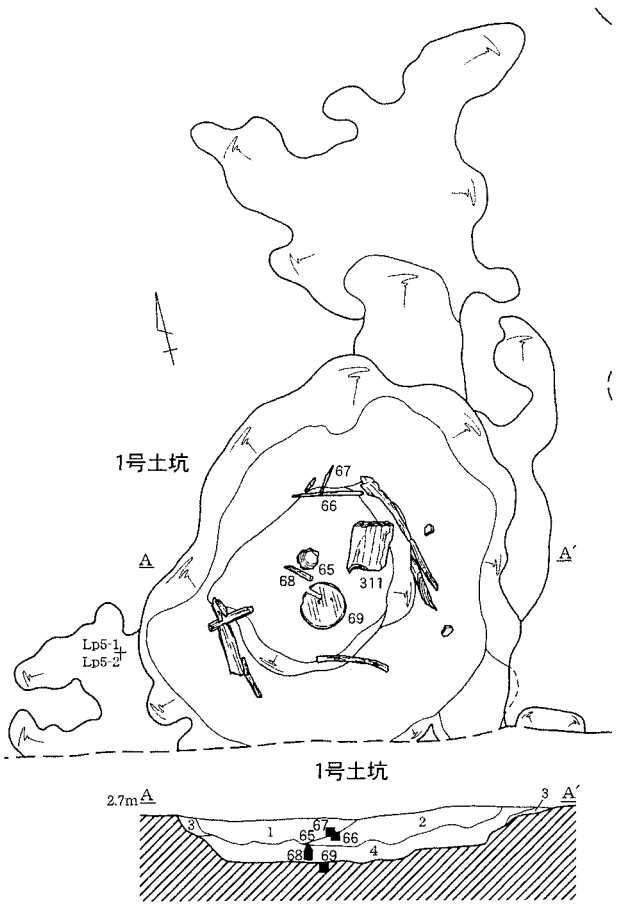
Mr グリッドの北東部に位置する。規模は長軸 1.80m，短軸 1.54mで，断面形は台形状，深さは 14 cmである。39 号溝と重複関係にあり，39 号溝を掘り込んだ状態で検出された。土師器や須恵器の小片が，わずかに出土している。

６号土坑（第 34 図）

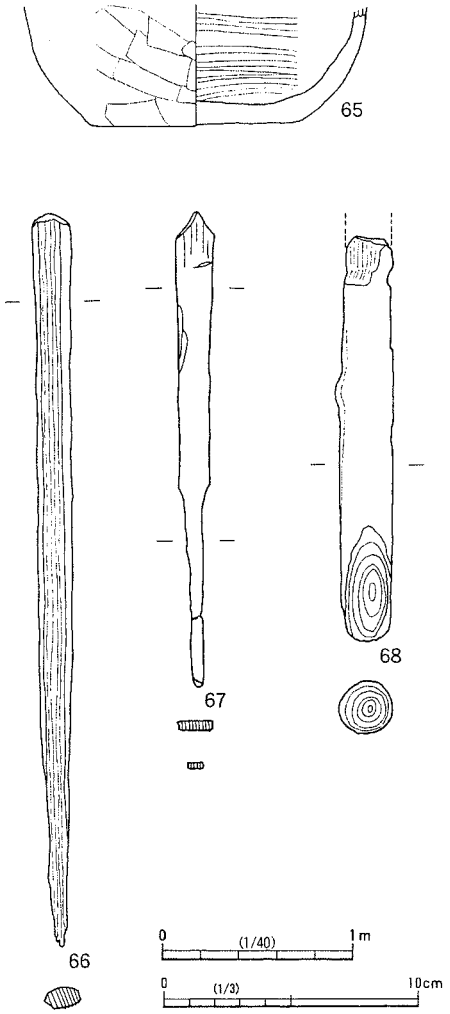
Mr グリッドに位置する。規模は長軸 98 cm，短軸 62 cm，深さ 20 cmで，階段状の断面形である。39 号溝と重複関係にあり，39 号溝を切っている。遺物は出土していない。

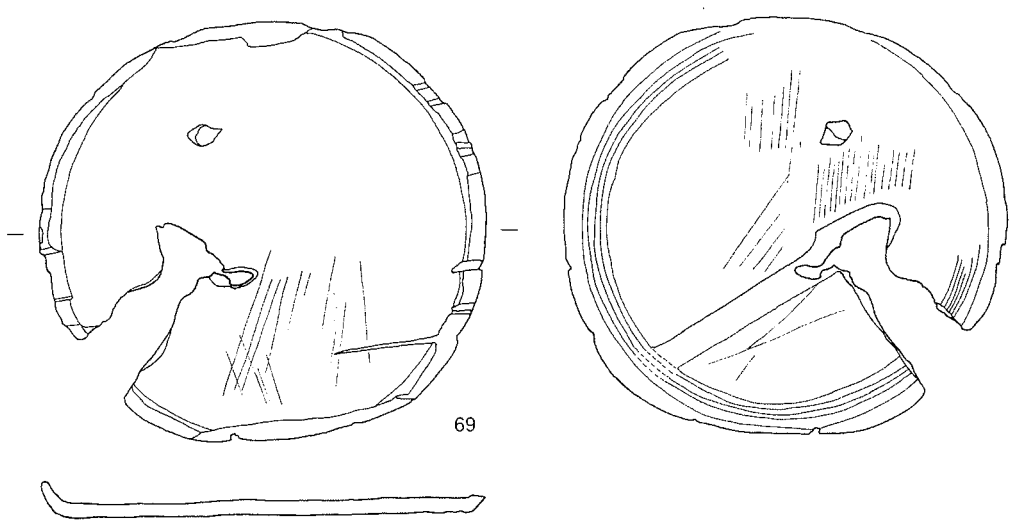
7号土坑（第34・36図，図版11・17・23）

Mp グリッドの北東部に位置する。規模は長軸 1.76m，短軸 1.29mである。断面形は弧状で，底面は凹凸が目立つ。検出した時点で遺存状態が悪く，深さは6cmしか残っていなかった。重複関係にある遺構はない。



1号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性強・しまり弱、未分解腐植を多量含む。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、地山ブロックを少量含む。
3層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロック混じり。
4層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロック混じり。未分解腐植を多量含む。





第33図　1号土坑と出土遺物

遺物は，須恵器折縁杯（74），赤彩土師器蓋（75），斎串（79），曲物底板（80）のほか，須恵器や土師器の小片が出土した。74は，高台形と腰部の形状から，１号掘立柱建物３と同時期とできよう。75の赤彩土師器杯蓋は，高杯同様県内での出土例は少なく，上越市木崎山遺跡(戸根ほか 1992)など官衙関連遺跡での出土が目立つ。79は斎串である。針葉樹材を使用している。棒状の細長く四角い材を使用し，下端部を斜めに削り落して串としている。80は曲物の底板である。広葉樹の柾目材を使用したものであろうか。側面をわずかに斜めに削っている。釘穴が２箇所に認められる。

８号土坑（第34図，図版11）

Nq5-1グリッドに位置する。長軸93㎝，短軸76㎝の規模で，深さ20㎝，断面形は半円状である。底面は凹凸が目立つ。重複関係にある遺構はなく，遺物は出土していない。

９号土坑（第34図，図版11）

Op2-2・3グリッドに位置する。規模は長軸86㎝，短軸61㎝，断面形は台形状で，深さ10㎝である。遺物は出土していない。

10号土坑（第35図）

Krグリッドに位置する。長軸98㎝，短軸68㎝の規模で，深さ12㎝，断面形は階段状である。重複関係にある遺構はなく，遺物は土師器の小片が出土しただけである。

11号土坑（第35図，図版11）

Kp1-4・5グリッドに位置する。規模は長軸1.26m，短軸57㎝，断面形は弧状で，深さは10㎝である。重複関係にある遺構はなく，遺物は出土していない。

12号土坑（第35図）

Kpグリッドに位置し，11号土坑に隣接している。規模は長軸1.20m，短軸83㎝，深さ30㎝で，台形状の断面形である。埋土は３層に分けられ，土壌化した炭化物層の堆積が認められる。重複関係にある遺構はなく，遺物は出土していない。

13号土坑（第35図，図版12）

Iq2-3・4グリッドに位置する。規模は長軸1.11m，短軸92㎝である。断面形は半円状で，深さは９㎝，底面は凹凸が目立つ。重複関係にある遺構はなく，遺物は出土していない。

14号土坑（第35・36図，図版12・18）

Jrグリッドに位置する。周囲を大きな攪乱に囲まれており，土坑も一部に攪乱を受けている。規模は長軸1.72m，短軸は攪乱により削平されているため残存長となるが1.08mである。深さは12㎝，弧状の断面形で，底面の凹凸が顕著である。攪乱を受けているほかは，重複関係にある遺構はない。

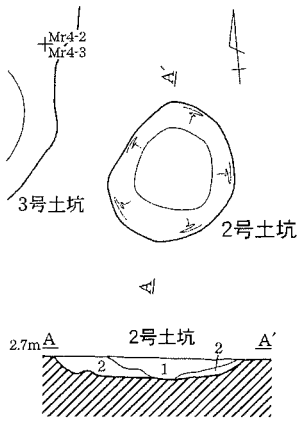
遺物は，須恵器杯蓋（77）と土師器甕（78）が出土している。77の有台杯Ａ類蓋は，摘みが大ぶりで疑宝珠状を呈し，口縁端部を長く下方へ引き出すなど，器形的に古い特徴を持つ。78は，土師器甕Ｃ類の底部で，底部～腰部にかけてヘラケズリ調整をしており，古い調整手法が見られる。よって，14号土坑の土器は，遺構出土資料の中では比較的古い時期に位置付けられると考えられる。

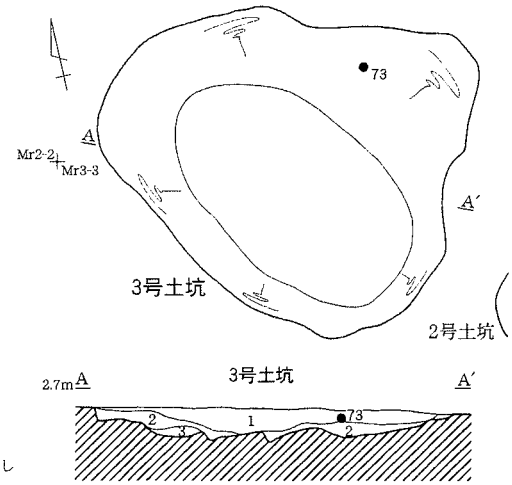
15号土坑（第35図，図版12）

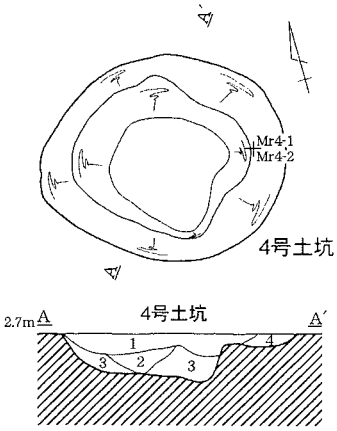
Jrグリッドに位置し，14号土坑に隣接している。長軸2.25m，短軸1.71mの規模で，断面形は弧状，深さ13㎝である。底面の凹凸が著しい。重複関係にある遺構はなく，遺物は出土していない。

16号土坑（第35・36図，図版12）

Ir・Jrグリッドに位置する。東側に攪乱を受けているため長軸の長さは残存長だが3.29m，短軸は1.60mで，





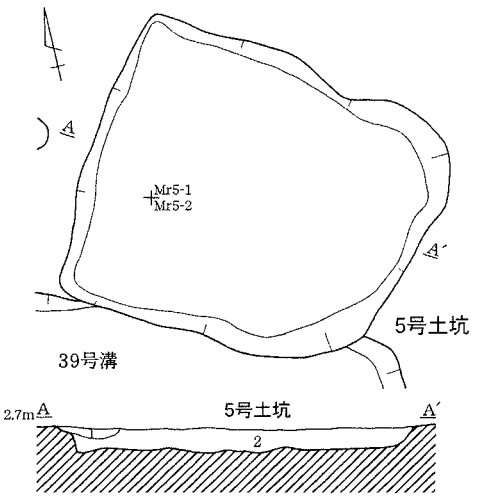


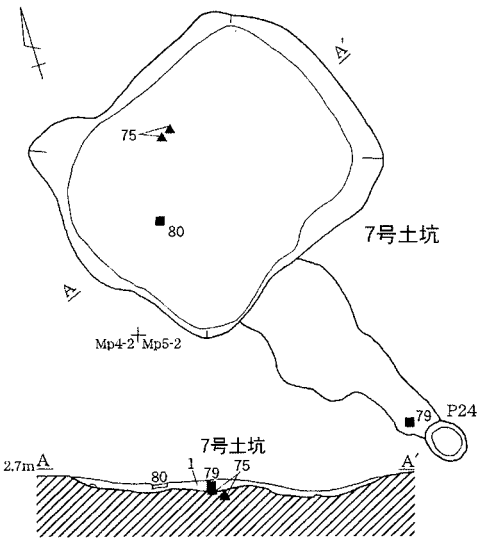
2号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり弱、土質化した炭、炭化物を多量含む。
2層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロック・炭化物を含む。
39号溝覆土。

3号土坑
1層　7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　粘性・しまり極弱、5mm程度の炭化物を多量含む。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、炭化物を微量含む。
3層　7.5Y4/2灰オリーブ色粘質土　粘性強・しまりやや強、地山ブロック混じり。

4号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、砂を多量含む。
2層　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性強、しまりやや弱、砂を含む。
3層　5Y4/2灰オリーブ色粘質土　粘性・しまり強、オリーブ黒色シルトブロック混じり。
4層　2.5Y3/1黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、地山ブロック少量含む。

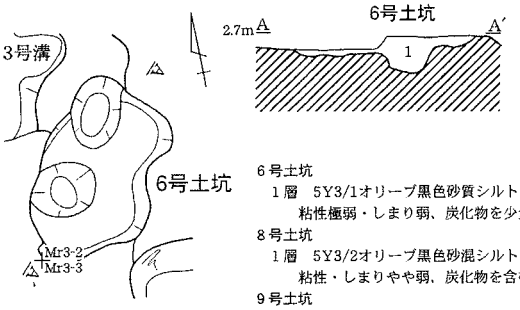
0　(1/40)　1m

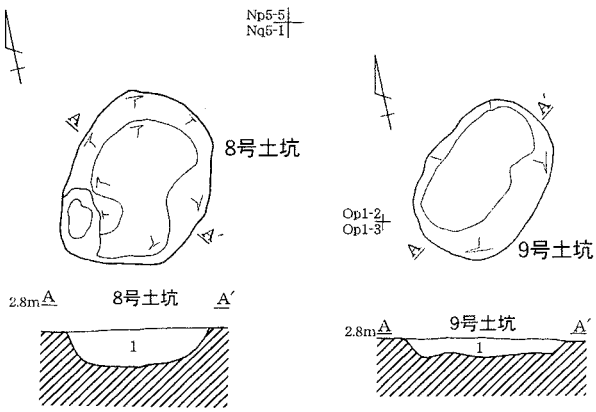




5号土坑
1層　7.5Y5/2灰オリーブ色粘質土　粘性強・しまりやや強、炭化物を含む。
1層　5Y5/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性やや弱・しまり弱、地山ブロックを含む。

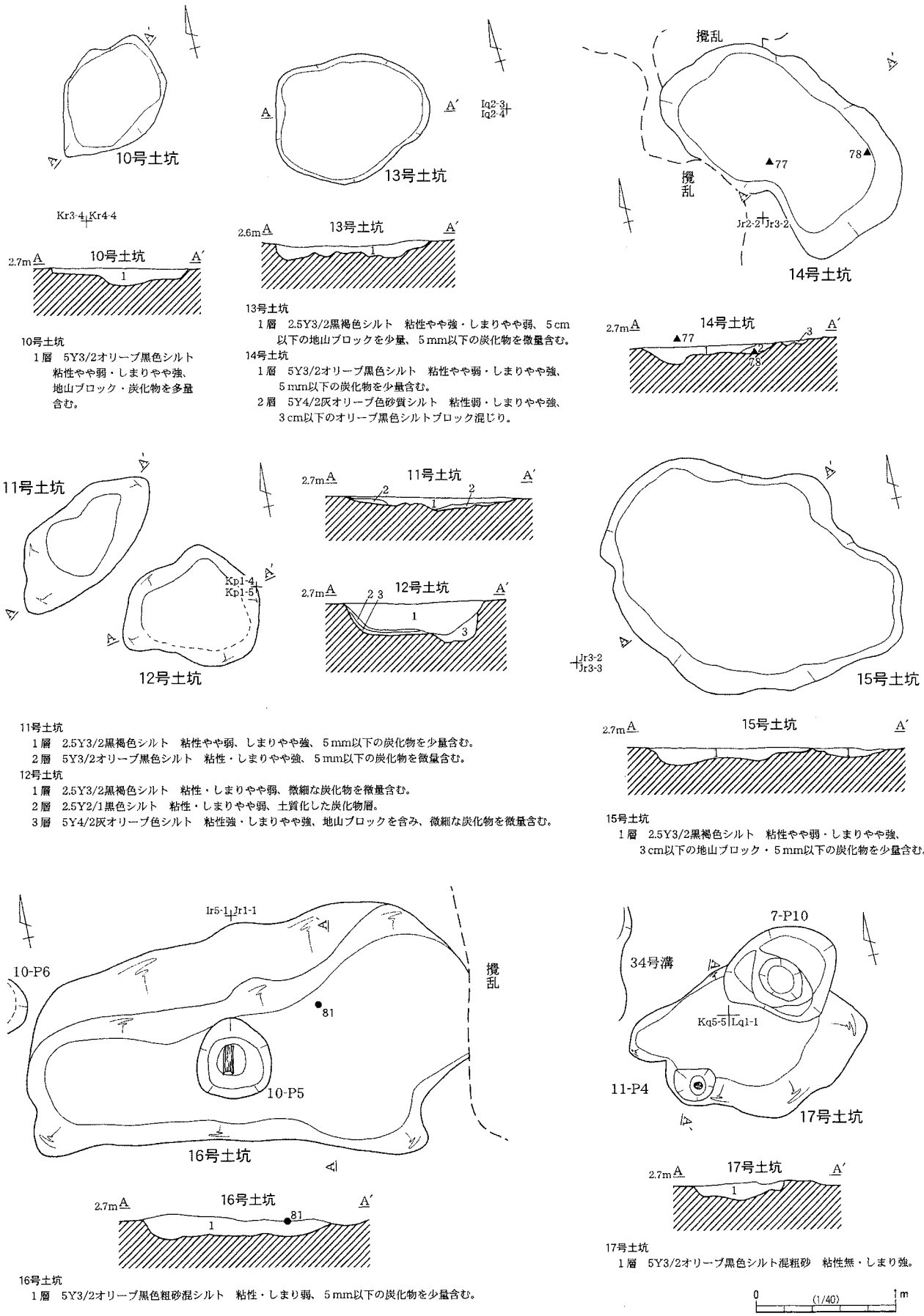
7号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまり弱、炭化物を含む。





6号土坑
1層　5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト
粘性極弱・しまり弱、炭化物を少量含む。
8号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト
粘性・しまりやや弱、炭化物を含む。
9号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや強、地山ブロック・炭化物を少量含む。

第34図　2～9号土坑



10号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、地山ブロック・炭化物を多量含む。

13号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、5cm以下の地山ブロックを少量、5mm以下の炭化物を微量含む。

14号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、5mm以下の炭化物を少量含む。
2層　5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト　粘性弱・しまりやや強、3cm以下のオリーブ黒色シルトブロック混じり。

11号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや弱、しまりやや強、5mm以下の炭化物を少量含む。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや強、5mm以下の炭化物を微量含む。

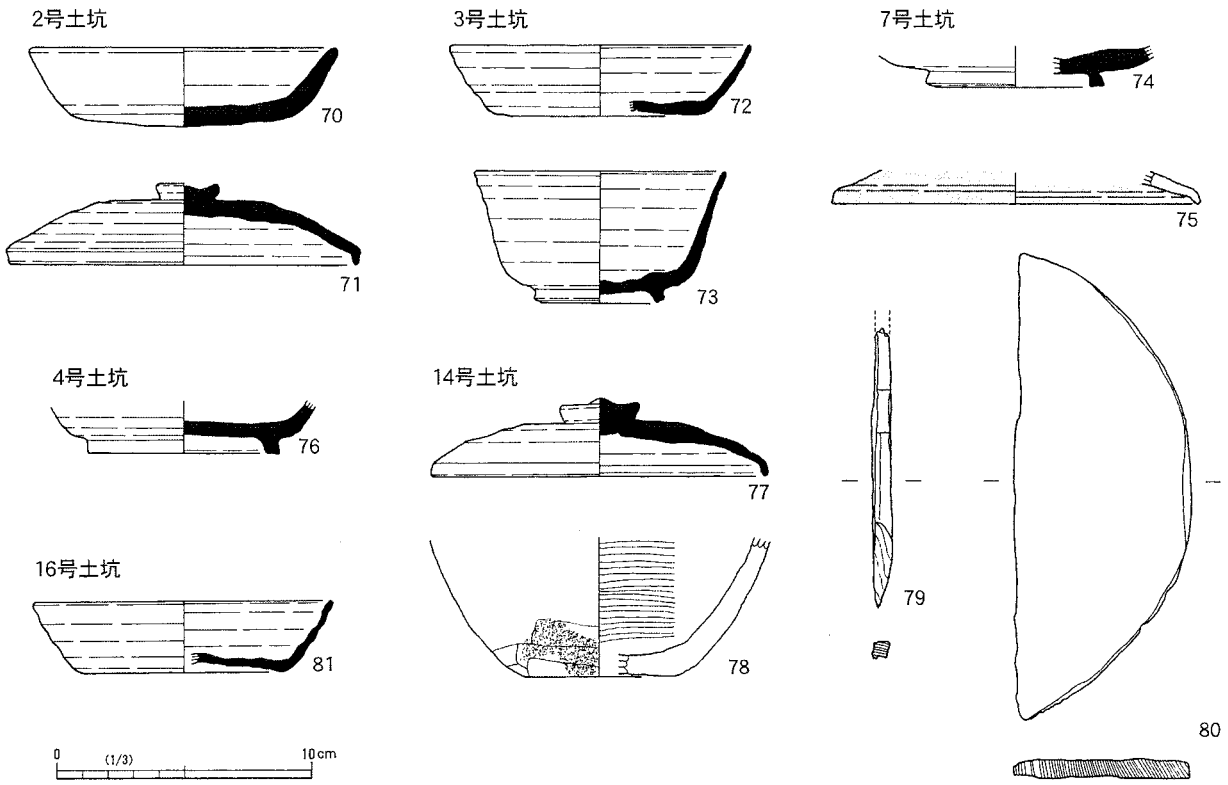
12号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱、微細な炭化物を微量含む。
2層　2.5Y2/1黒色シルト　粘性・しまりやや弱、土質化した炭化物層。
3層　5Y4/2灰オリーブ色シルト　粘性強・しまりやや強、地山ブロックを含み、微細な炭化物を微量含む。

15号土坑
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、3cm以下の地山ブロック・5mm以下の炭化物を少量含む。

16号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、5mm以下の炭化物を少量含む。

17号土坑
1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性無・しまり強。

第35図　10~17号土坑



第36図　2～16号土坑出土遺物

深さ 18 cm，弧状の断面形である。平面形はやや不整形で，主軸は東偏 87.5° を示す。10 号掘立柱建物の P5 とは重複関係にある。土坑が柱穴に切られていることから，16 号土坑は 10 号掘立柱建物が建てられる前に掘削され埋まったことがわかる。

遺物は，土師器や須恵器の破片が出土しているものの，小片が多い。図化することができたのは須恵器無台杯（81）1 点だけである。81 は，佐渡小泊窯群産の無台杯である。口径 12 cm以下で薄手外傾器形であり，小泊窯群 5 段階に比定できよう。

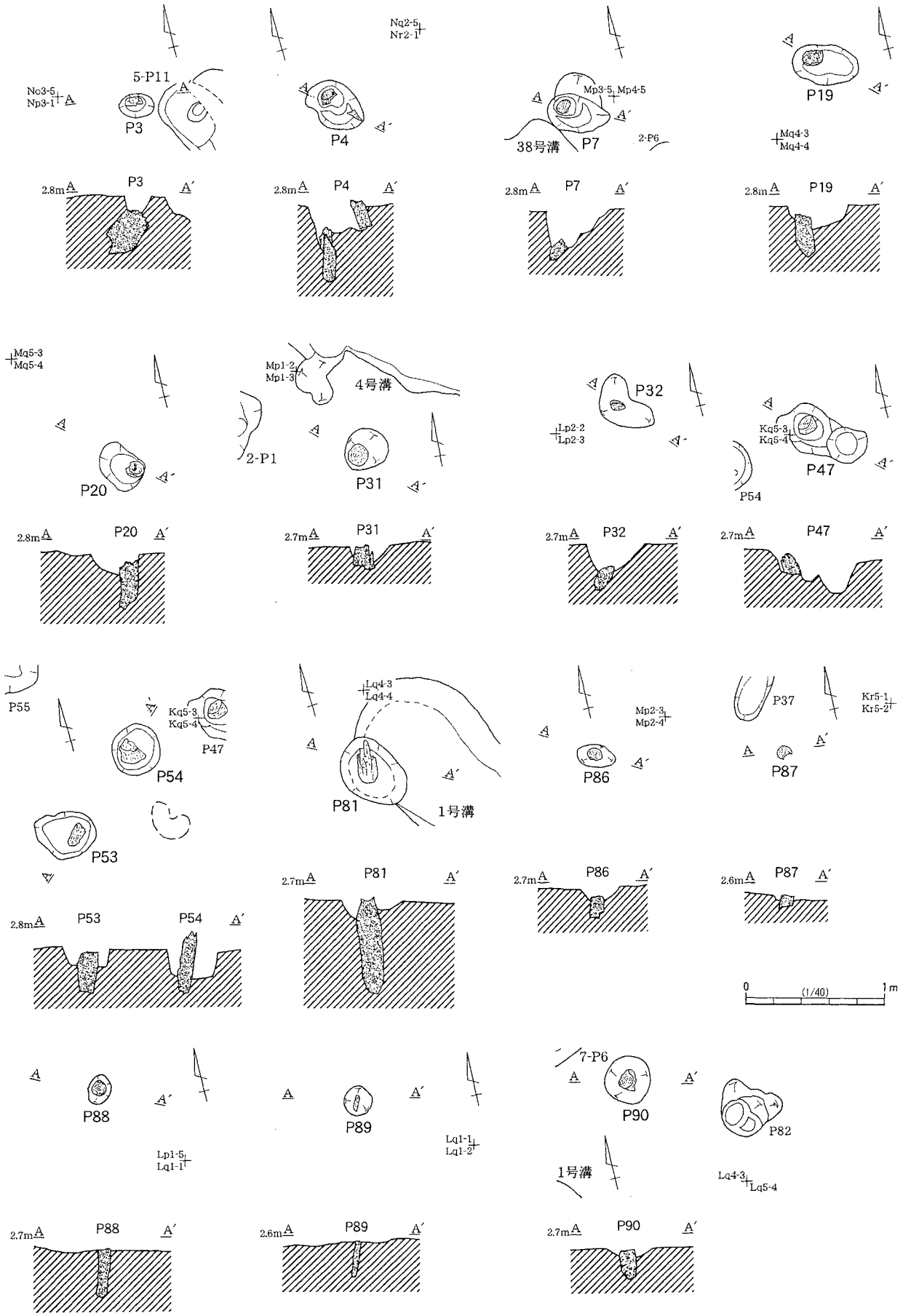
17 号土坑（第 35 図，図版 12）

Kp・Kq・Lp・Lq の各グリッドにまたがる場所に位置する。規模は長軸が 1.71m，短軸は 7 号掘立柱建物の P10 に切られていることから残存長となるが 1.06m である。断面形は台形状で，深さ 12 cmである。先述した 7 号掘立柱建物の P10 のほか，11 号掘立柱建物の P4 とも重複関係にある。いずれの柱穴も 17 号土坑を切った状態で検出されていることから，土坑が埋まった後にこれらの建物が建てられたことがわかる。遺物は出土していない。

ピット（第 37・38 図，図版 12・18・24）

今回の調査では，ピットが 90 基検出されている。中には柵列などとして捉えられるものを見落としている可能性も否定できないが，ここでは建物跡や柱穴列として認識できなかった小穴をピットとした。なお，柱根が残存するものについてのみ図面を掲載した。各ピットの詳細については一覧表を参照されたい。

遺物は，土師器や須恵器の小片が出土したが，図化できるものは少なく，P25 出土の曲物の側板（82），P44・45 出土の須恵器無台杯（83・84）と遺存状態の良かった柱根 3 点（85～87）だけであった。82 は曲物の側板で，針葉樹材を柾目取りした材を使用している。縫い閉じるための穴が開けられており，そこに桜の樹皮が残った状態で出土した。83 は，口径値と器形から，9 号掘立柱建物 57 よりは古くならないと考えられる。84 は，胎土から佐渡小泊窯群産の須恵器無台杯と判断した。口径 13.6 cmを超える大形品で，箱形となり底部～腰部にかけてロ



第37図　ピット平面・エレベーション図

クロケズリ調整するなど，K－402 号窯資料(川村 2005)の特徴に一致する。越後に流通した小泊窯群産須恵器としては，最も古い段階のものであり，これまで確認されていた越後への流通の初源が遡ることを示す資料として重要である。85 はP53 の柱根である。広葉樹の芯去りミカン割材を使用している。下端部は平坦なままであったが，柱穴の底から 20 cm程沈み込んだ状態で出土した。86 はP54 の柱根である。針葉樹の芯持ちミカン割材である。下端部は二方向からV字状に削って尖らせている。87 はP81 の柱根である。広葉樹の芯去りのミカン割材を使用している。下端部に砂がこびり付いており加工の様子を明瞭に観察することができないが，多方向から削ってはいるものの，先端はあまり尖らせていないようである。２箇所に枘穴が穿たれているが，その部分は地中に埋まった状態で出土した。建築部材を柱として再利用したと推測する。

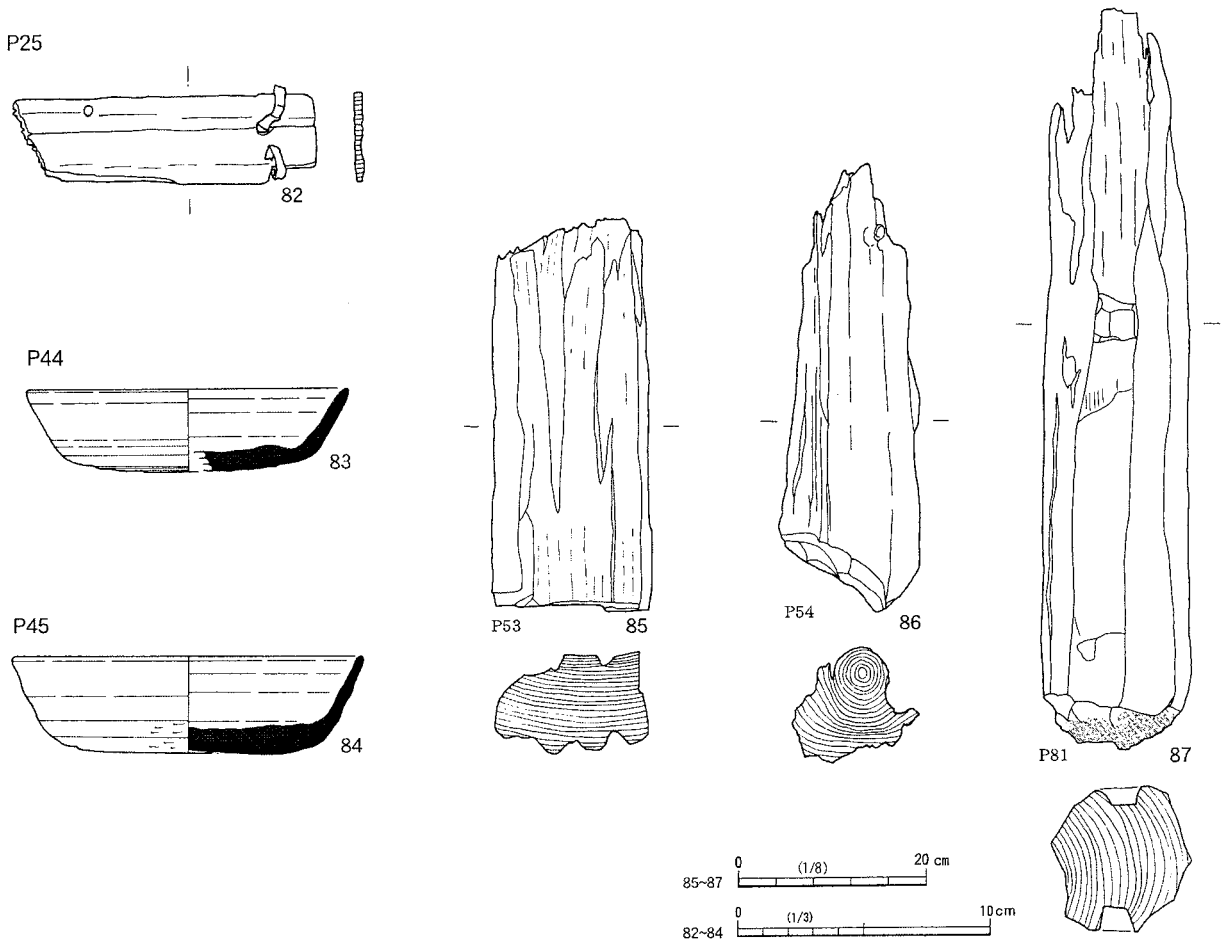
１号溝（第 39・46 図，図版 13・18）

Lq グリッドに位置する。長さ 3.54m，幅 84 cm，深さ 10 cmで，断面形は弧状である。主軸方位は西偏 49.5°を示す。埋土は上下の二層に分けられ，下層の上位には土壌化した炭化物層が広がっている。P81 と重複関係にあり，溝がP81 に切られた状態で検出された。

遺物は，須恵器の杯蓋（88）・長頸壺（89）のほか土師器の小片が出土している。88 は，有台杯A類の蓋と判断した。口径 14.6 cmと大形であり，古相の有台杯とセットとなるものであろう

２号溝（第 39 図）

Mp・Lp・Lq グリッドに位置する。長さ 1.29m，幅 48 cm，深さ 6 cm，断面形は弧状である。主軸方位は東偏 8.5°を示す。北側に位置する 24 号溝と一連の溝の可能性もある。３号掘立柱建物 P1 と切り合い関係にあり，掘立柱



第38図　ピット出土遺物

建物の後に溝は掘削されている。遺物は，須恵器や土師器の小片が出土しているだけである。

10・11号溝（第40・46図，図版13・18）

どちらの溝もNp・Nq・Opグリッドに位置する。これら2条の溝は同一の道の側溝と考えられることから，併せて記述する。10号溝は長さ12.68m，幅80cm，深さ15cmで，階段状の断面形である。主軸方位は東偏46°を示す。11号溝は所々に攪乱を受けていて遺存状態が良くないうえに，36号溝に壊されているため推定の残存長となるが，長さ11.09m，幅32cm，深さ14cmで，台形状の断面形である。主軸方位は東偏45°を示す。2条の溝は平行に掘削されていて，その溝に挟まれた部分は，1号流路と1号掘立柱建物をはじめとする建物群とを繋ぐ道と考えられる。1号杭列の端が11号溝の延長線上に当たり，2号杭列の端が10号溝の端までとなっており，丁度，道と考えられる部分で杭列が途切れている点も，2条の溝を道の側溝と考える傍証になり得るのではないだろうか。なお，2条の溝を道の側溝と考えると，道幅は残存値で1.62～2.04mとなる。道普請や基礎地業，溝さらいなどの痕跡は認められなかった。

10号溝は6号溝と，11号溝は36号溝とそれぞれ重複関係にある。10号溝と6号溝の新旧関係を判断することはできなかった。両者は同時期に併存していたであろう。11号溝と36号溝の新旧関係は，先に記したとおり36号溝が新しい。

遺物は，10・11号溝から須恵器片や土師器片が出土したが，小片のみであり，図化できたのは10号溝から出土した須恵器無台杯（90）1点だけであった。90は，口径12.4cm，器高指数33，底径指数52の深身椀形であり，1号井戸64同様に遺跡内で最も新しい須恵器無台杯である。胎土・器形の特徴から，道婦窯から搬入された可能性が高い。

12号溝（第41図，図版13）

Op・Oqグリッドに位置する。後述する25号溝と同じように，もともとは方形に巡る溝と考えられるが，遺存状態が悪く，途切れ途切れでコの字状に巡る溝となっている。それぞれにa～cの枝番号を付した。残存している部分で推定される長さは6.34m，幅は47cm，深さは8cmで，断面形は弧状である。主軸方位は最も遺存状態の良い12a号溝の長辺を主軸として西偏38°を示す。建物跡と考えられるが，溝に囲まれた範囲内に柱穴などは検出されなかった。土師器の小片がわずかに出土しているが，図化できるものはない。

18・20号溝（第40図，図版13）

ともにNo・Npグリッドに位置する。2条の溝は平行して掘削されており，ほぼ同規模の溝であることから，同一の遺構を形成する溝と考えられる。なお，どちらの溝も途中で切れていることから，それぞれにアルファベットの小文字で枝番号を付している。18号溝の残存長は3.50m，幅31cm，深さ15cmで，台形状の断面形である。主軸方位は西偏25°を示す。20号溝の残存長は3.55m，幅23cm，深さ8cmで，台形状の断面形である。主軸方位は西偏24°を示す。先述したように，18号溝は5号掘立柱建物P11と重複関係にある。また，18号溝はP27とも切り合い関係にあり，溝が柱穴とピットを切っている。どちらの溝からも遺物は出土していない。

21号溝（第39・46図，図版14）

Np・Opグリッドに位置する。長さ2.43m，幅28cm，深さ10cm，半円状の断面形である。主軸方位は東偏41°を示す。36号溝と重複関係にあるが，新旧関係は不明である。

遺物は，須恵器無台杯の底部片（91）1点が出土している。

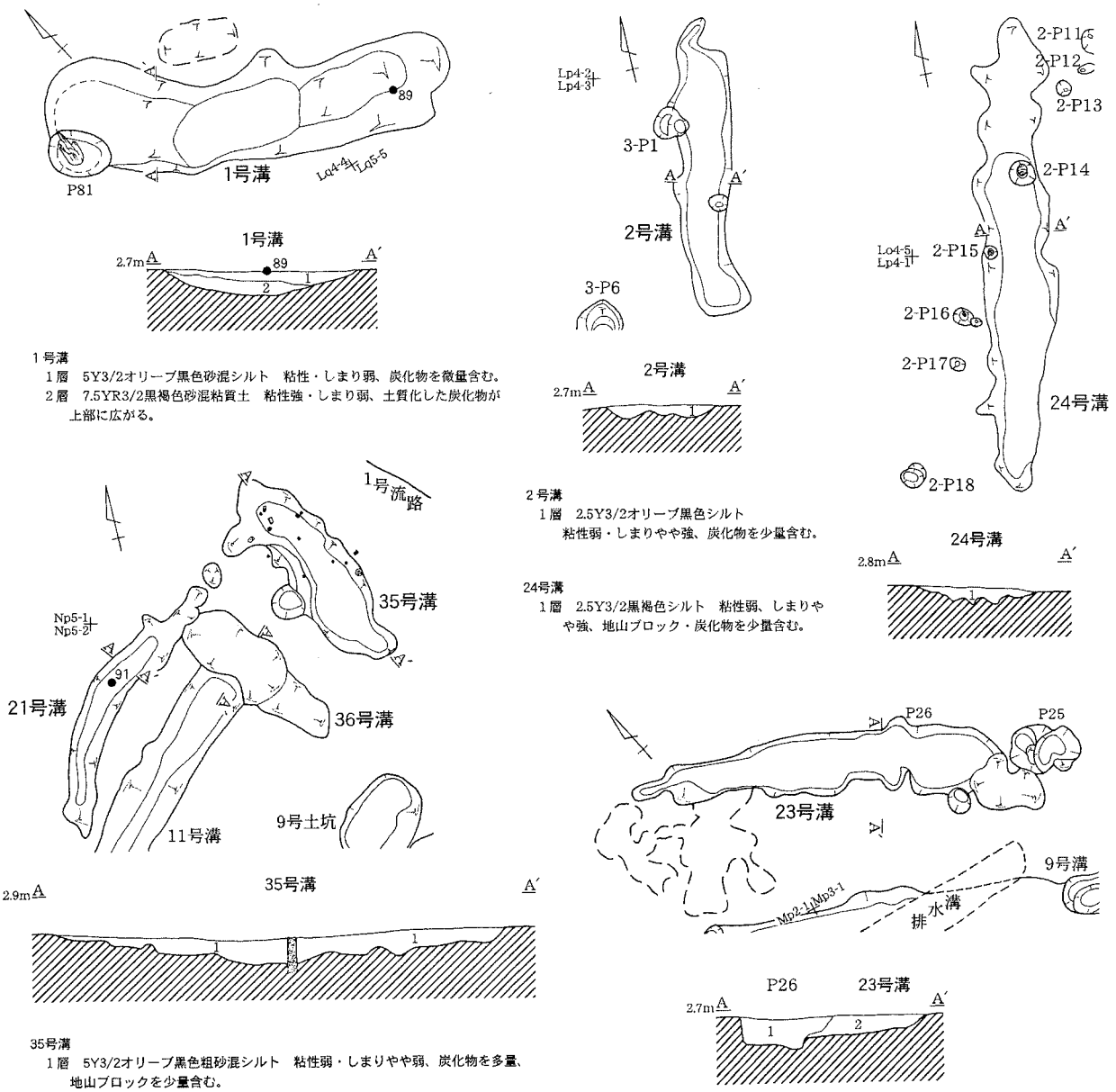
22号溝（第41図，図版14）

Moグリッドに位置し，調査区外へと延びている。調査区内の長さ6.38m，幅37cm，深さ11cm，台形状の断面形である。主軸方位は西偏2°を示す。溝の底面に板状の木製品が横たわった状態で出土したが，劣化が著しく，

図化できなかった。他に遺物は出土していない。

23号溝（第39図，図版14）

Mpグリッドに位置する。長さ3.26m，幅はP26に切られているため残存値で52㎝，深さ8㎝，断面形は弧状で，底面の凹凸が顕著である。主軸方位は西偏55°を示す。P25・26と重複関係にあり，両ピットが溝を切っている。土器などの遺物は出土していない。



1号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色砂混シルト　粘性・しまり弱、炭化物を微量含む。
2層　7.5YR3/2黒褐色砂混粘質土　粘性強・しまり弱、土質化した炭化物が上部に広がる。

2号溝
1層　2.5Y3/2オリーブ黒色シルト
粘性弱・しまりやや強、炭化物を少量含む。

24号溝
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性弱、しまりやや強、地山ブロック・炭化物を少量含む。

35号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性弱・しまりやや弱、炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。

23号溝
1層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや強・しまり弱、地山ブロックを少量含む。P26埋土。
2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや強・しまりやや弱、未分解腐植を微量含む。

21号溝
1層　5Y3/1オリーブ黒色シルト混粗砂
粘性・しまり極弱。
2層　5Y4/2灰オリーブ色シルト混粗砂
粘性・しまり極弱、地山ブロックを含む。

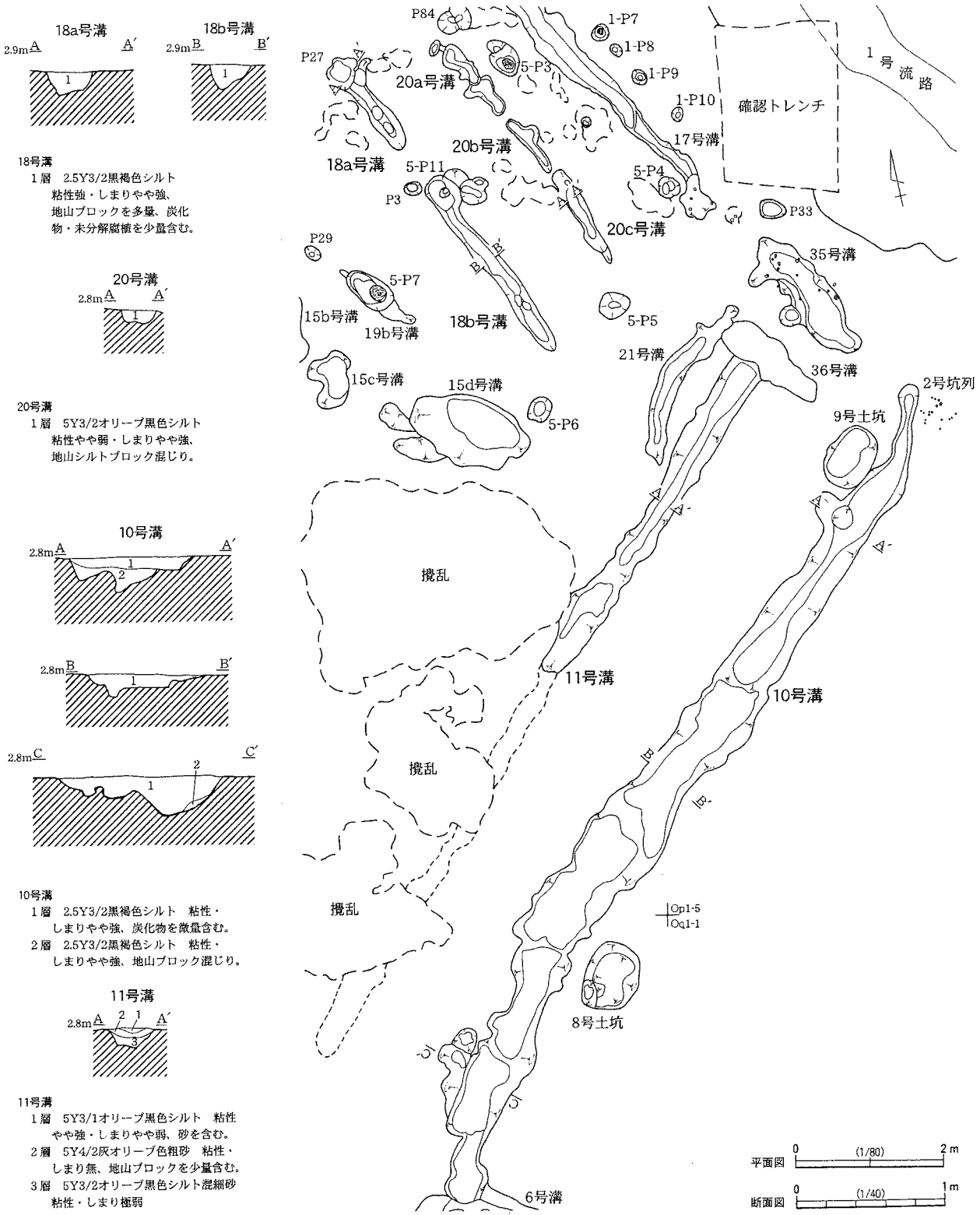
36号溝
1層　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまりやや弱、地山ブロックを微量含む。11号溝埋土。
2層　2.5Y3/1黒褐色砂混シルト　粘性強・しまりやや弱。

平面図　0　(1/60)　2m
断面図　0　(1/30)　1m

第39図　1・2・21・23・24・35・36号溝

24 号溝（第 39 図）

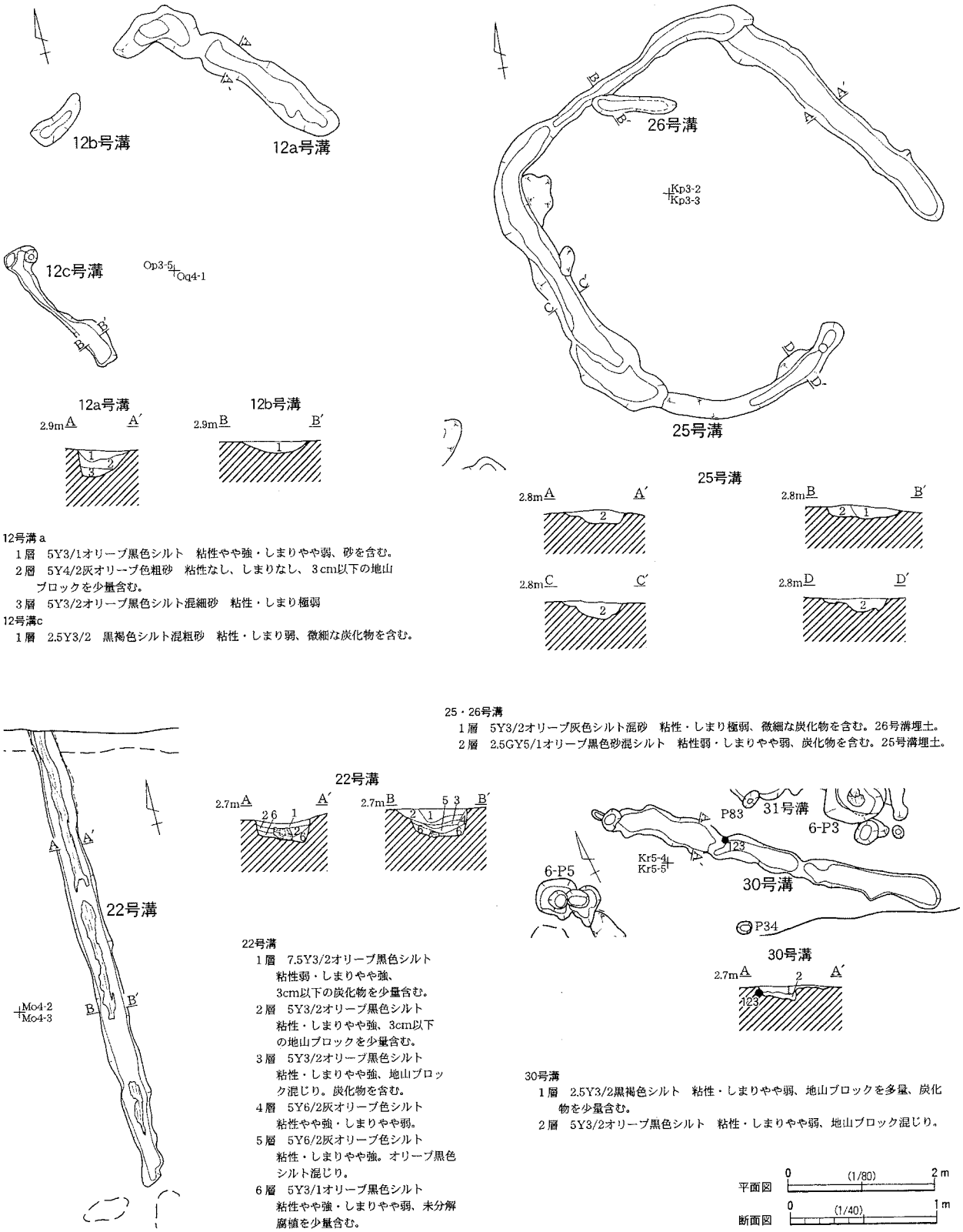
Lo・Lp グリッドに位置する。長さ 4.11m，幅 53 cm，深さ 7 cmで，断面形は弧状である。主軸方位は東偏 12°を示す。先述したとおり，２号溝と一連の溝の可能性がある。２号柵列の P14・15 と重複関係にあり，溝の方が新しい。遺物は出土していない。



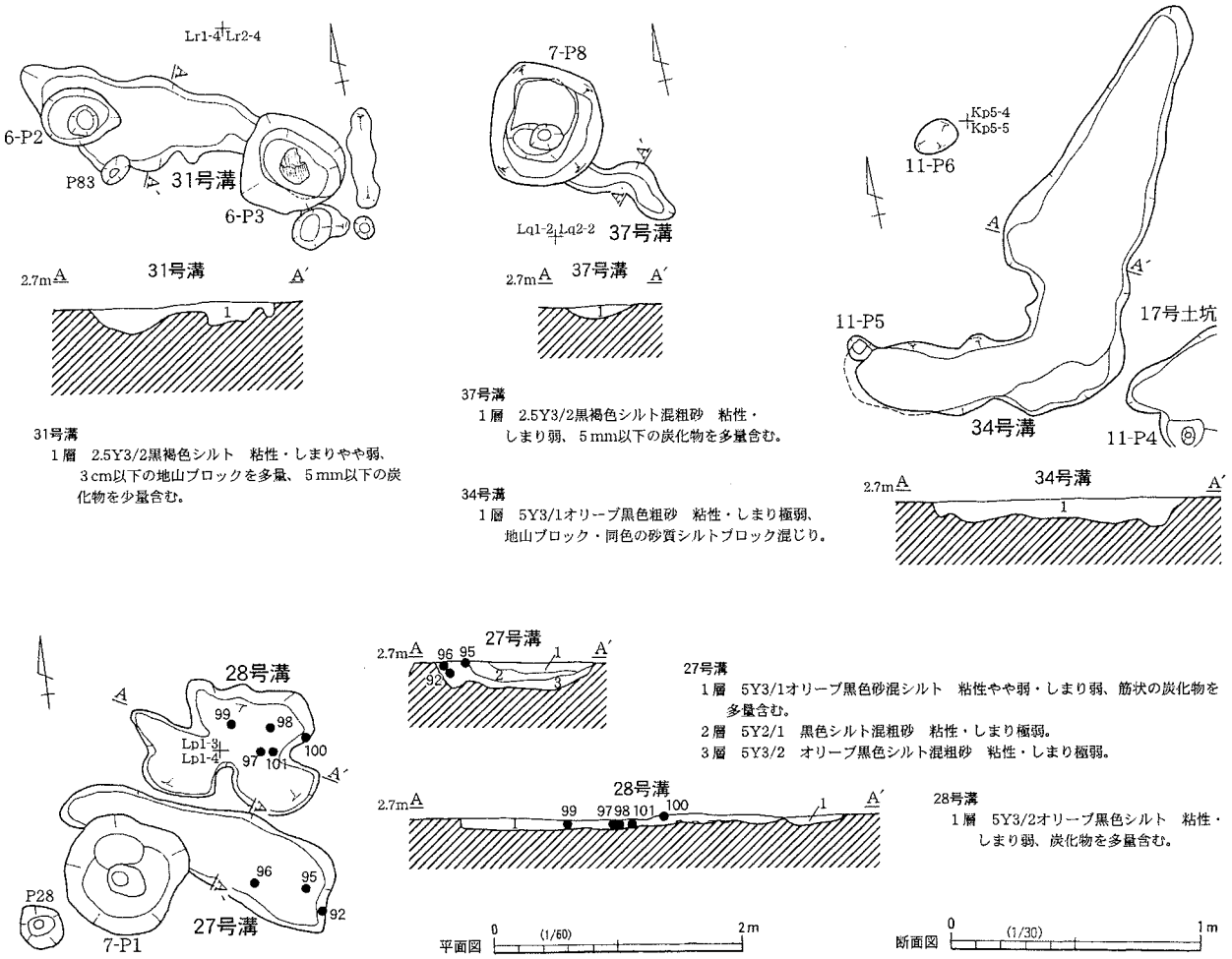
第40図　10・11・18・20号溝

25・26号溝（第41図，図版14）

どちらの溝もKpグリッドに位置する。25号溝は先述した12号溝と同様の形に巡る溝で，26号溝は25号溝の一部を切っている小さな溝である。25号溝の規模は溝の全周長が14.51mで，一辺の長さは4.1m程度である。幅41cm，深さ9cm，断面形は弧状で，主軸方位は西偏30.5°を示す。南東辺の溝と南西辺の溝の間は，1.8m程



第41図　12・22・25・26・30号溝



第42図 27・28・31・34・37号溝

の幅で切れている。なお，方形に区画された内部には柱穴などの遺構は見られない。26 号溝は長さ 1.17m，幅 64 cm，深さ 11 cm，断面形は半円状で，主軸方位は西偏 78° を示す。26 号溝が 25 号溝を切っているほかは，重複関係にある遺構はない。遺物は，25 号溝から土師器の小片が出土している。

27 号溝（第 42・46 図，図版 18・21）

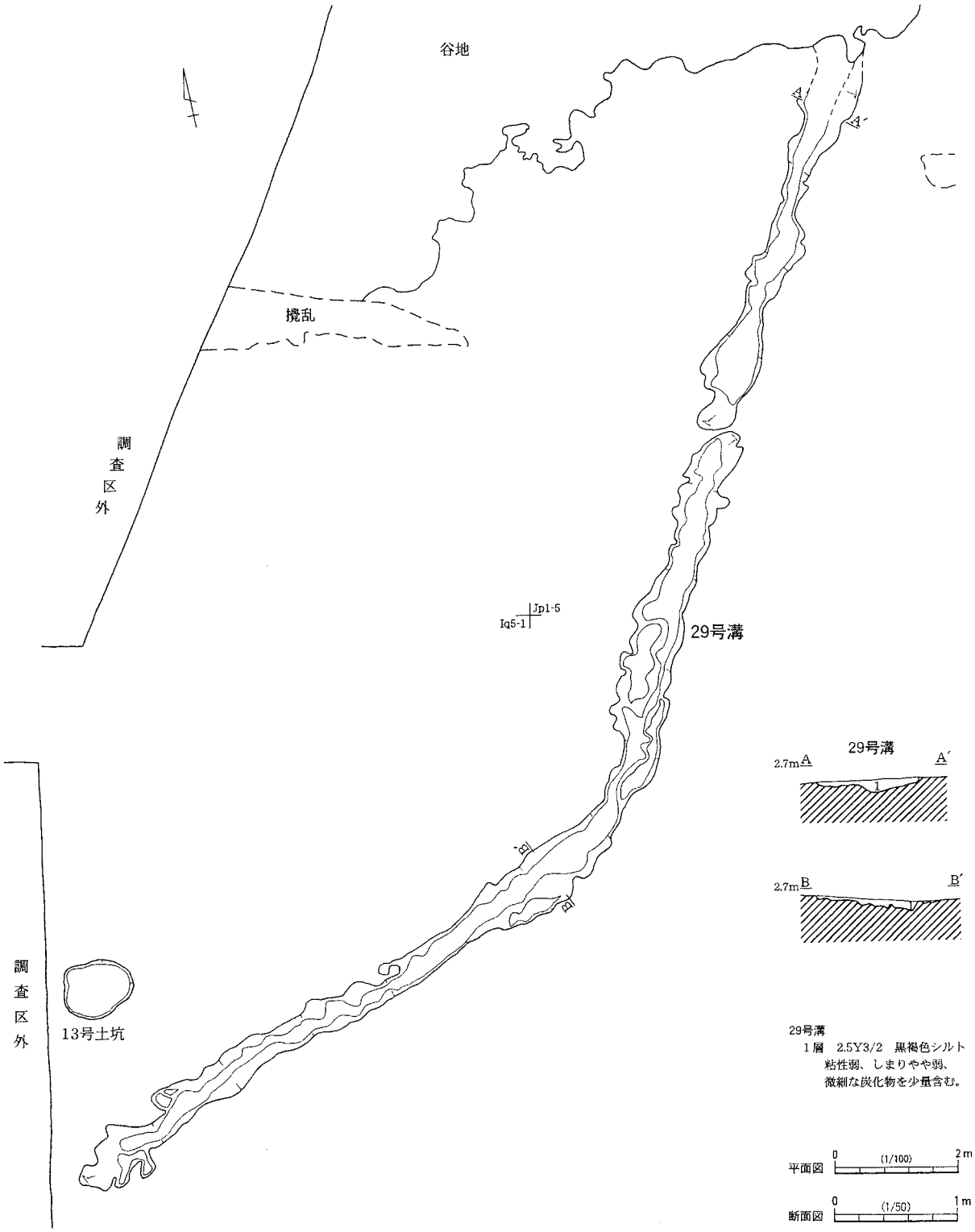
Lp1-4・2-4 グリッドに位置する。長さ 2.23m，幅 64 cm，深さ 11 cmで，断面形は弧状である。主軸方位は西偏 58.5° を示す。埋土は 3 層に分けられ，1 層には筋状の炭化物を多量に含む。7 号掘立柱建物 P1 と重複関係にあり，柱穴が溝を切っている状態で検出された。

遺物は，須恵器無台杯（92）・有台杯（93～96）のほか，土師器の小片が出土している。27 号溝出土土器は，須恵器食膳具 5 点中有台杯Ａ類が 4 点を占め，そのうち 3 点の口径が 13 cmを超え，組成と法量から遺跡内では最も古い時期に位置付けられる。有台杯の中では，95 が扁平箱形でより古相を示すが，ほかは外反器形で，94・96 が器高指数 30 を超えるなど新しい要素も認められる。

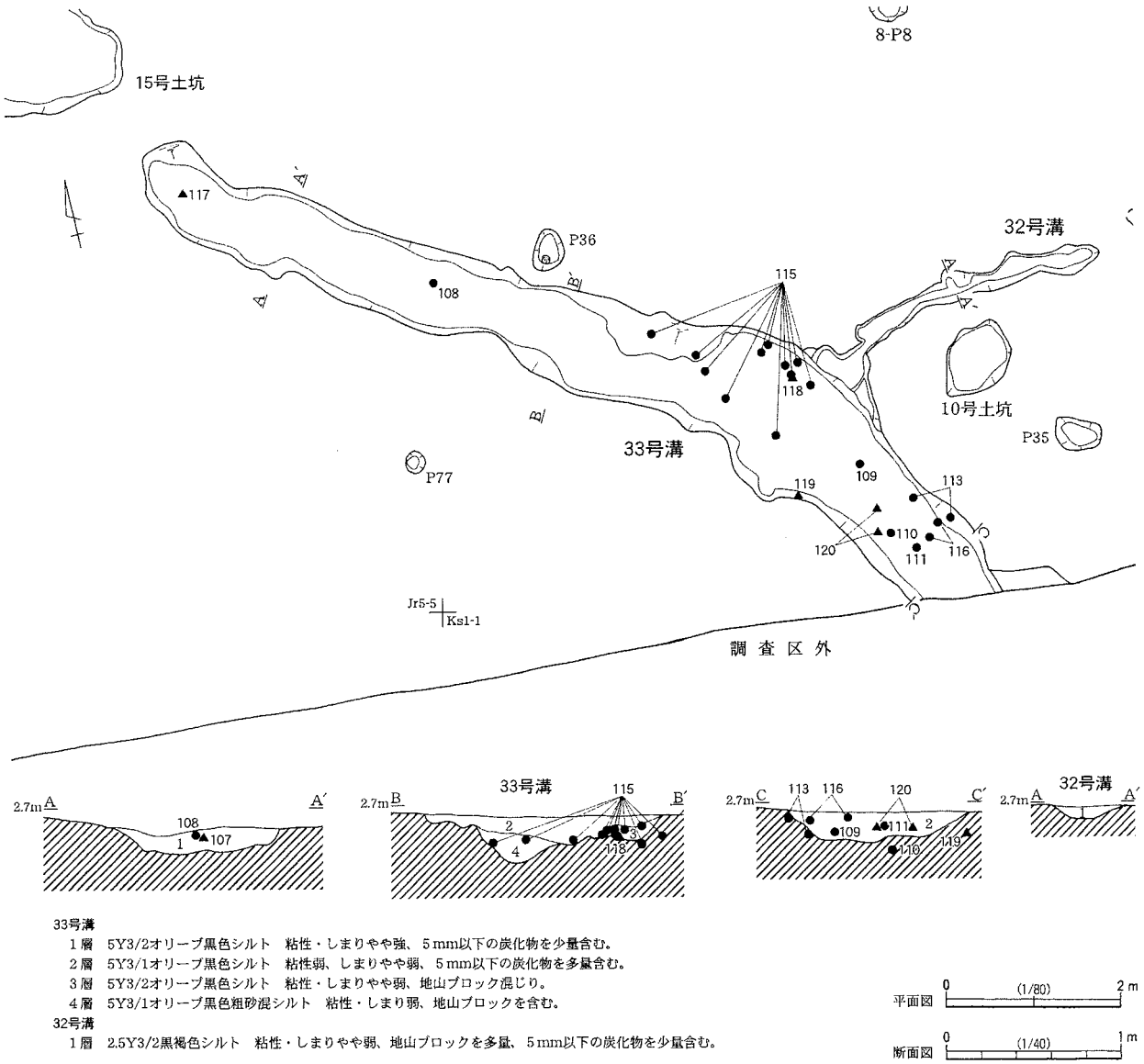
28 号溝（第 42・46 図，図版 14・18）

Lp グリッドに位置する。不整形な平面形で，遺存状態が悪く掘り込みが浅いことから溝とすることに逡巡したが，今回検出した溝の中にも平面形が不整形なものも多いため，溝として取り扱うこととした。長さ 1.61m，幅 95 cm，深さ 4 cmで，断面形は弧状である。主軸方位は西偏 55.5° を示す。埋土への炭化物の混入が顕著である。重複関係にある遺構はない。

遺物は須恵器無台杯（97～100）・有台杯（101），土師器長胴甕（102）のほか，土器の小片が出土している。須恵器は，無台杯４点と有台杯Ｄ類がある。無台杯は，口径が 13 cmを超えるものがなく，すべて外傾器形となる。99 と 100 は，胎土が共通し，法量・器形も類似することから，同時に搬入された可能性があろう。無台杯の法量と器形，食膳具の組成から，遺跡内では新しい様相を示し，38 号溝の新相資料と同時期となろう。



第43図　29号溝



第44図 32・33号溝

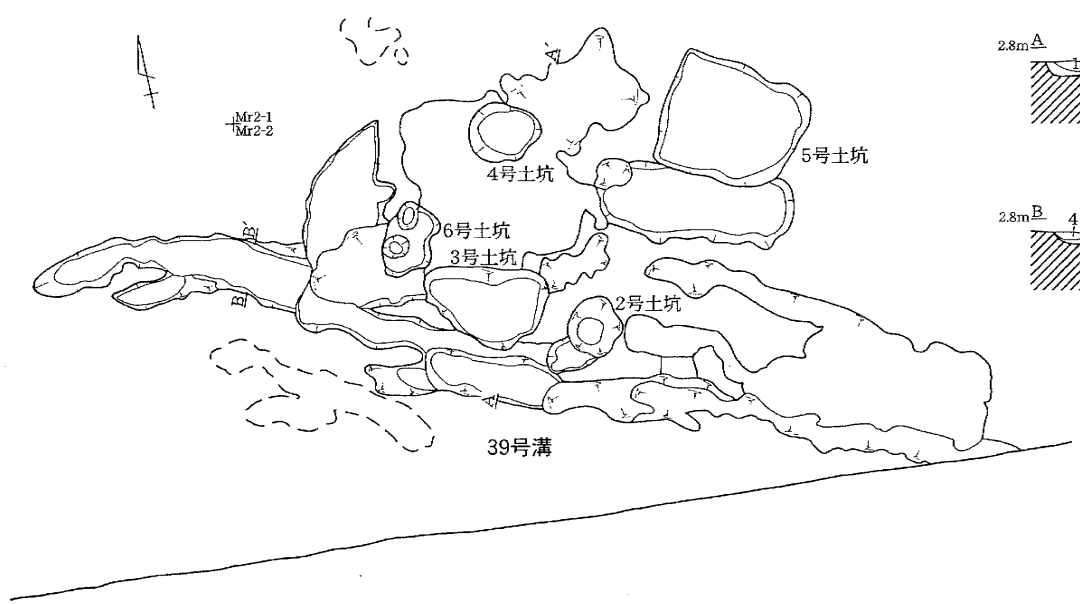
29号溝（第43・47図，図版14・22）

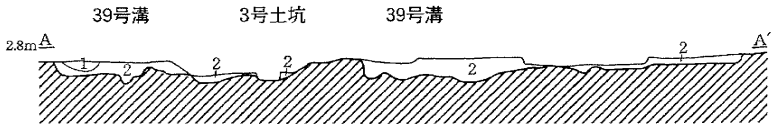
Iq・Jp グリッドに位置する。調査区北西部に検出された谷地へと延びる溝で，長さ 23.18m，幅 84 cm，深さ 10 cm，断面形は弧状で，底面に凹凸が見られる。Jq1-2 グリッドで屈曲しており，そこで主軸方位が変わるが，Jq1-2 グリッド以北の主軸方位は東偏 30° で，以南の主軸方位は 67.5° である。29 号溝より西側には 13 号土坑以外の遺構は検出されていないことから，集落の居住域の内外を区画する溝と考えられる。重複関係にある遺構はない。

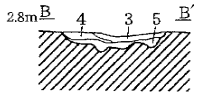
遺物は，須恵器無台杯（121）や土師器甕の底部（122）のほか，須恵器や土師器の小片が出土している。121 は，佐渡小泊窯群産須恵器無台杯で，やや箱形を呈するが，小形薄手であり，小泊窯群 4 段階を遡ることはないと考えられる。底は，墨書されるが，字体は不明である。

30号溝（第41・47図，図版15）

Kr・Lr グリッドに位置する。長さ 4.94m，幅 49 cm，深さ 10 cm，断面形は弧状で，底面は凹凸が顕著である。



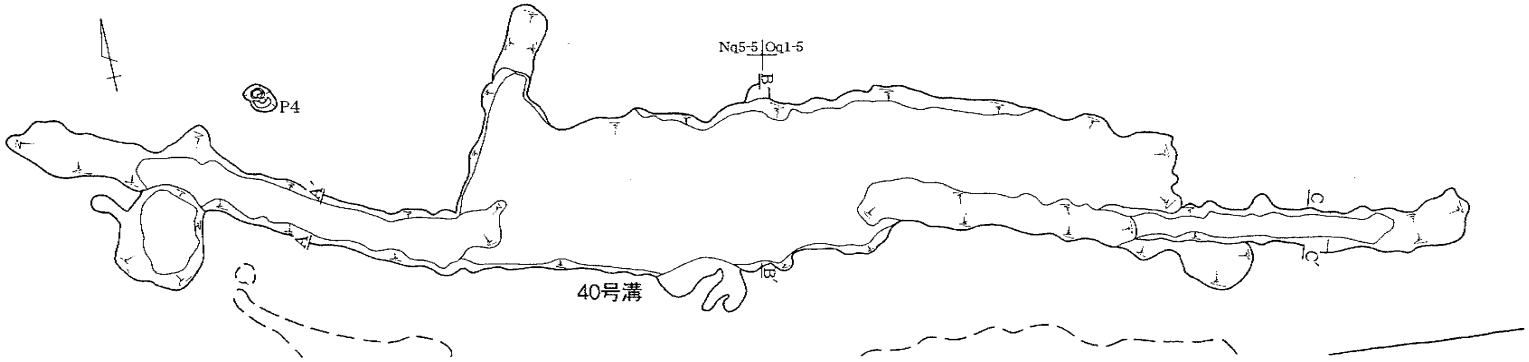




39号溝
1層　5Y3/1オリーブ黒色砂混シルト
粘性強・しまりやや強、炭化物を多量含む。
2層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、
地山ブロックを多量含み、炭化物を含む。
3層　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト　粘性弱・しまりやや弱、
1cm程の地山ブロックを含む。
4層　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性弱・しまりやや弱、
1cm程の地山ブロックを微量含む。
5層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性やや弱・しまりやや強、
砂を含む。

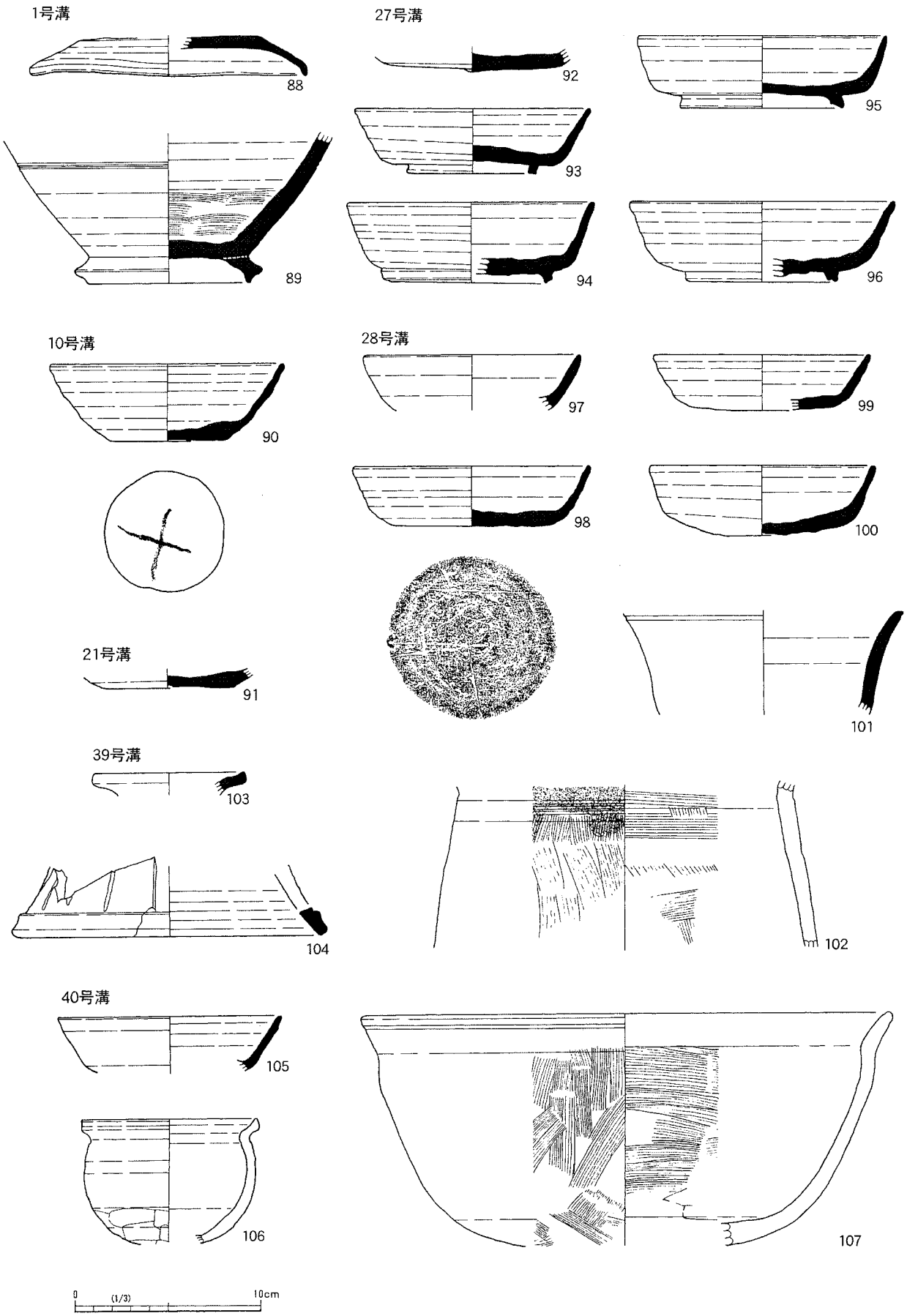
平面図 0 (1/100) 2m

断面図 0 (1/50) 1m

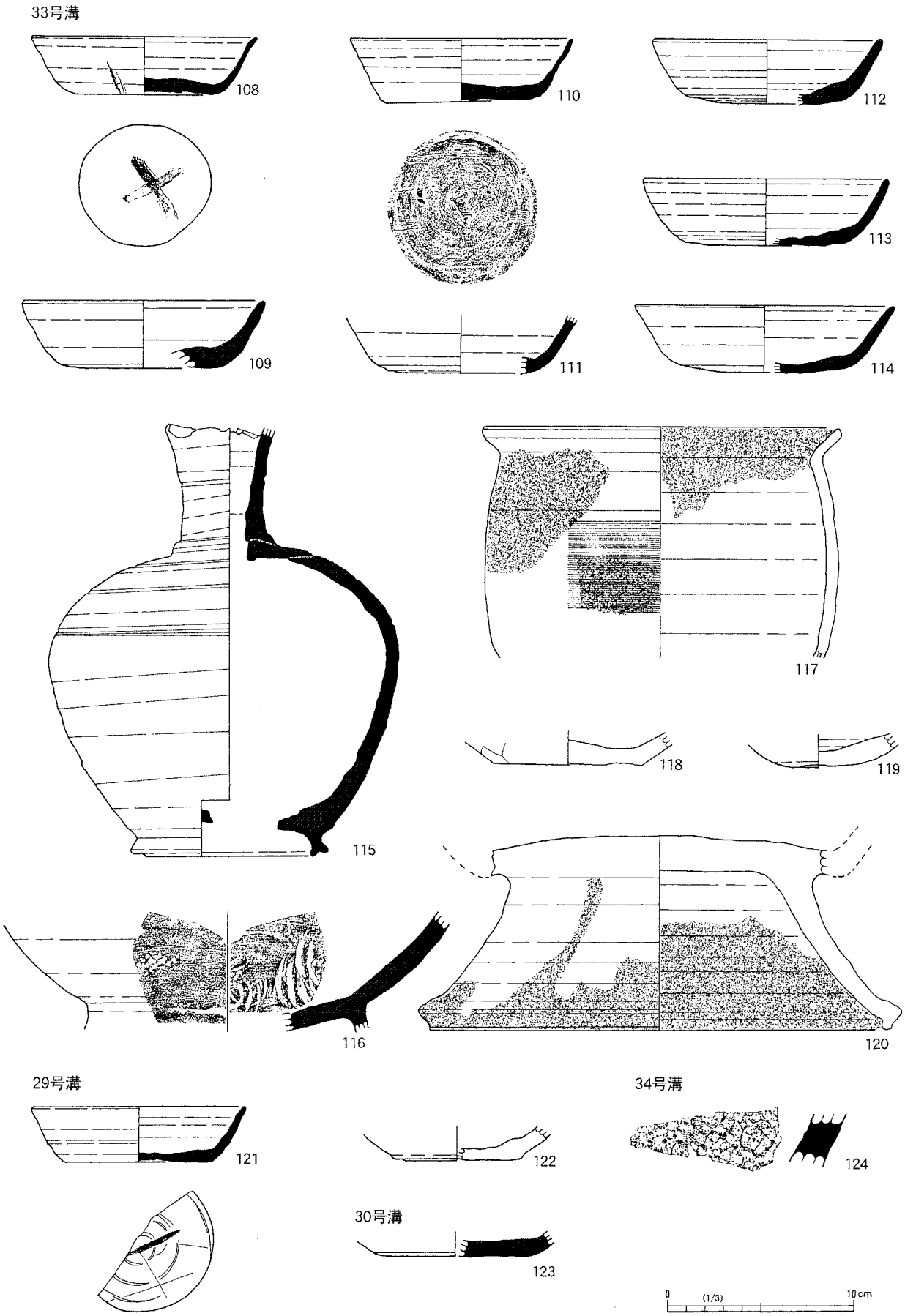


40号溝
1層　5Y3/2オリーブ黒色粘質土　粘性強・しまりやや強、2cm以上の地山ブロックを多量に含み、炭化物を含む。
2層　2.5Y3/2黒褐色シルト　粘性・しまりやや弱、炭化物を多量に含み、3cm以上の地山ブロックを含む。

第45図　39・40号溝


1号溝
88
89
10号溝
90
21号溝
91
39号溝
103
104
40号溝
105
106
27号溝
92
93
94
95
96
28号溝
97
98
99
100
101
102
107
0 (1/3) 10cm

第46図　溝出土遺物（1）


33号溝
108
110
112
113
109
111
114
117
118
119
115
116
120
29号溝
121
122
34号溝
124
30号溝
123
0
(1/3)
10cm

第47図　溝出土遺物（2）

主軸方位は西偏62.5°を示す。6号掘立柱建物の内部に位置するが，柱穴と直接的な重複関係にはなく，建物との新旧関係は不明である。30号溝が北辺の柱穴列に平行して掘削されていることから，建物と何らかの関連性を持つ溝の可能性も否定できない。

遺物は，須恵器無台杯の底部片（123）が1点出土しているだけである。123は，堤上窯資料に胎土が類似する。腰部の立ち上がりから，椀形に近くなるか。

31号溝（第21・42図，図版15）

Lr1-4・2-4グリッドに位置する。長さ1.93m，幅74cm，深さ10cmで，断面形は弧状，底面は凹凸が顕著である。主軸方位は西偏63°を示す。6号掘立柱建物P2・3，P83と重複関係にあり，いずれの遺構も31号溝より新しい。

遺物は，土師器甕（50）のほかは，土師器の小片が出土しているだけである。

32・33号溝（第44・47図，図版15・18・22）

32号溝は，33号溝から分岐している細い溝で，両者の間には新旧関係は認められない。32号溝はKrグリッドに位置し，長さ3.46m，幅40cm，深さ7cmで，断面形は台形状である。主軸方位は東偏78°を示す。33号溝はJr・Krグリッドに位置し，南側の調査区外へと延びている。調査区内の長さは10.97mで，幅1.04m，深さ18cmである。断面形は台形状で，主軸方位は西偏49.5°を示す。33号溝と10号掘立柱建物とをつないだ線より南西側には遺構が広がっていないことから，集落の居住域の内外を区画する溝と考えられる。重複関係にある遺構はない。

遺物は，32号溝からは土師器の小片が出土しているだけであり，図化できるものはなかった。33号溝からは比較的多くの遺物が出土しており，須恵器無台杯（108～114）・長頸壺（115）・横瓶（116），土師器長胴甕（117），土師器甕（118・119）・有台盤（120）がある。33号溝出土土器は，須恵器食膳具が無台杯のみであり，有台杯A類が組成しない点は，5号溝や38号溝新相資料，28号溝資料と共通する。114が法量的に古くなると考えられるが，佐渡小泊窯群産108・110を除いた資料は，上記の遺構と法量・器形が共通し，同時期となろう。胎土もおおむね一致する。108・110は，110が3段階，108が4段階と考えられる。時期差が認められるのは，区画溝という遺構の性格によるものであろう。115は，頸部に環状の凸帯が付される長頸瓶で，胴部には3条の沈線を巡らせている。金属器模倣器種であろう。なお，底部は，焼成後に穿孔されている。120の土師器有台盤などとともに，県内では一般的な器種ではなく，1号掘立柱建物の赤彩土師器高杯も含めて，特別な用途に使用されたものであろう。

34号溝（第42・47図，図版15）

Kp・Kqグリッドに位置する。長さ4.51m，幅1.01m，深さ11cmで，断面形は台形状である。主軸方位は西偏54°を示す。先述のとおり，7号掘立柱建物P5と切り合い関係にあり，34号溝が柱穴を切っていることから，建物よりも溝の方が新しい。

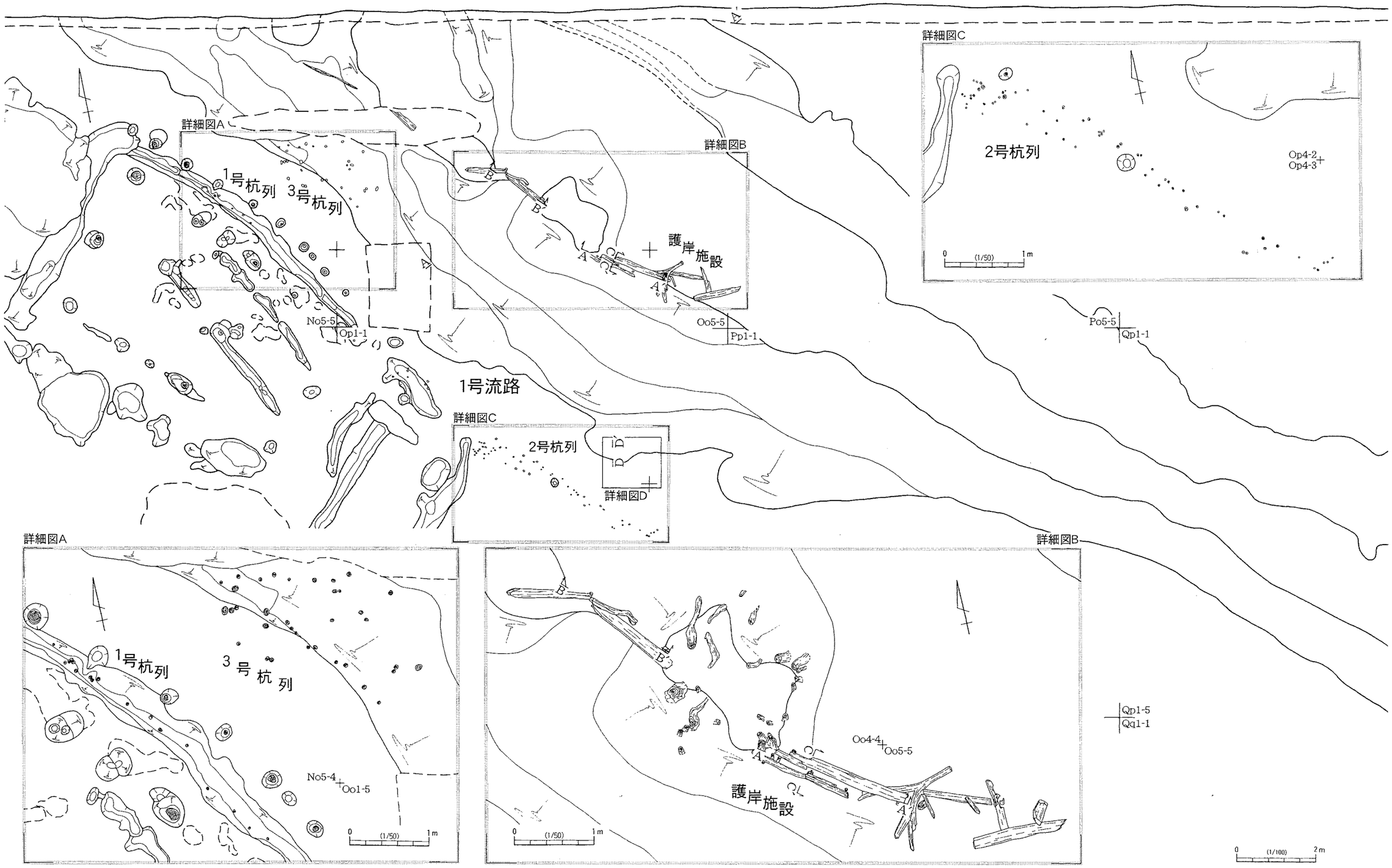
遺物は，須恵器甕の胴部片（124）のほかは，土師器の小片が出土している。124の甕片は，灰白色の胎土で淡いオリーブ釉が掛り，優品と考えられる。

35号溝（第39図，図版15）

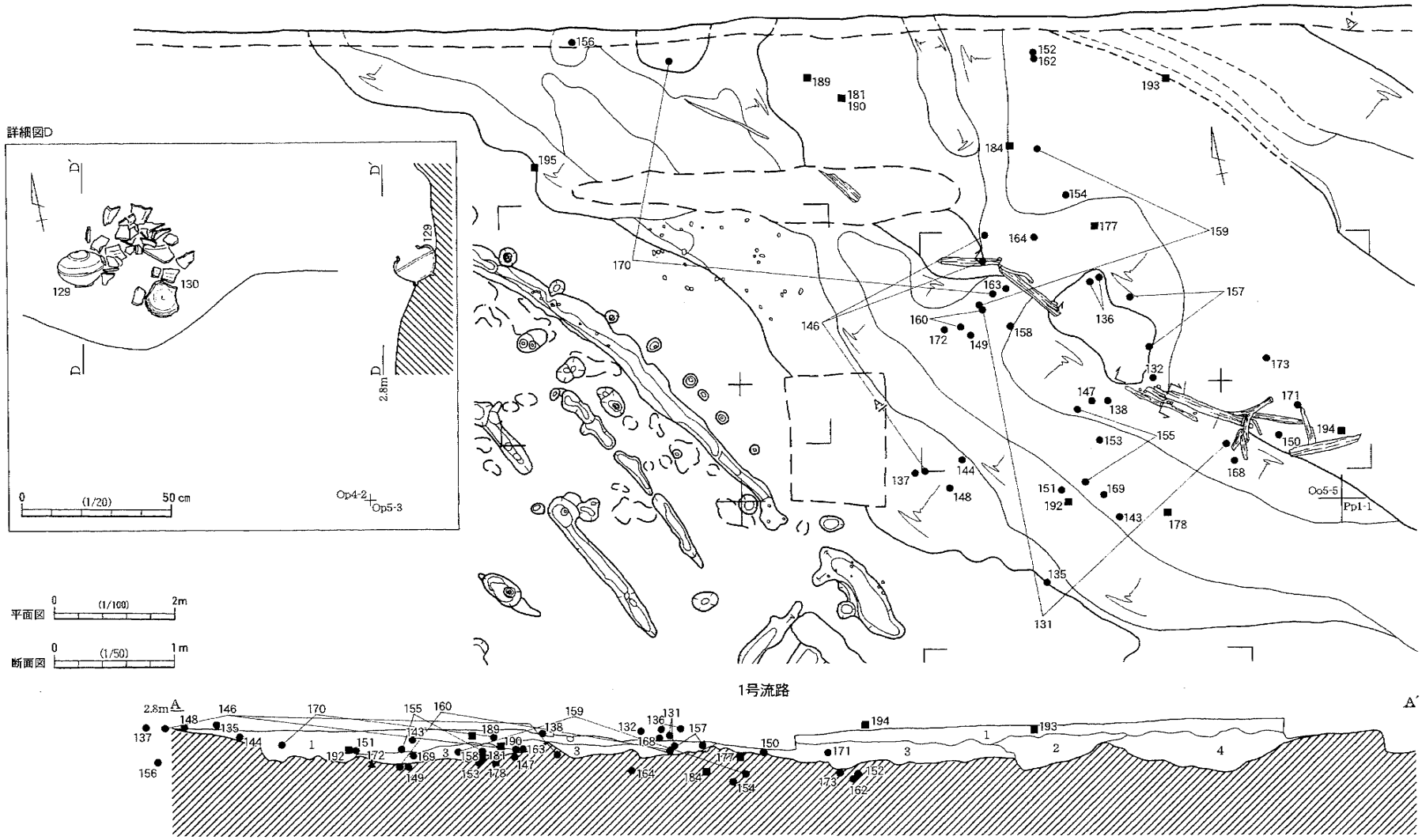
Opグリッドに位置し，長さは1.99m，幅59cm，深さ11cmで，弧状の断面形である。底面は凹凸が著しい。主軸方位は西偏27.5°を示す。1号杭列と切り合い関係にあるが，新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

36号溝（第39図，図版15）

Opグリッドに位置する。11・21号溝と切り合い関係にあるうえに，遺存状態もあまり良くないことから長さ，


詳細図A
1号杭列
3号杭列
No5-5
Op1-1
詳細図B
護岸施設
Oo5-5
Pp1-1
詳細図C
2号杭列
Op4-2
Op4-3
Po5-5
Qp1-1
1号流路
詳細図C
2号杭列
詳細図D
詳細図A
1号杭列
3号杭列
No5-4
Oo1-5
詳細図B
護岸施設
Oo4-4
Oo5-5
Qp1-5
Qq1-1

第48図　1号流路



1号流路

1層　5Y3/2オリーブ黒色シルト　粘性・しまりやや弱、未分解腐植を多量に含む。1a号流路。

2層　5Y3/2オリーブ黒色シルト混粗砂　粘性・しまり極弱、同色砂質シルト・灰オリーブ色粗砂がうすく縞状に入る。3cm以下の地山ブロック・未分解腐植を多量に含む。1a号流路。

3層　5Y3/2オリーブ黒色粗砂混シルト　粘性・しまり弱、灰オリーブ色粗砂がうすく縞状に入る。5mm以下の炭化物を少量含む。1a号流路。

4層　5Y4/2　灰オリーブ色粗砂　粘性・しまり無、未分解腐植を多量に含む。1b号流路。

第49図　1号流路遺物出土状態・土層

幅ともに残存長となるが，長さ 1.58m，幅 50 cmで，深さは 13 cmである。断面形は半円状で，主軸方位は西偏 33.5°を示す。新旧関係は，11 号溝よりも新しく，21 号溝よりも古い。遺物は出土していない。

37 号溝（第 42 図）

Lq グリッドに位置する。長さ 86 cm，幅 28 cm，深さ 5 cmと小規模な溝である。断面形は弧状で，主軸方位は西偏 54.5°を示す。7 号掘立柱建物 P8 に切られているが，P8 に向かって延びているようにも見え，5 号掘立柱建物にある 19 号溝と同様の性格を有する溝の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

39 号溝（第 45・46 図，図版 16・18）

Lr・Mr・Nr グリッドに位置する。Nr グリッド内で調査区外へと延びていくようである。平面形が不整形なため規模の計測が難しいが，調査区内の長さ 12.78m，幅 45.3 cm，深さ 15 cmである。断面形は台形状で，主軸方位は西偏 64°を示す。底面の凹凸も顕著である。2～6 号土坑と切り合っており，どの土坑も 39 号溝より新しい。

遺物は，須恵器長頸壺（103）・円面硯（104）のほか須恵器や土師器の小片が出土している。円面硯は，脚部の透かしを沈線で表現している。胎土は，堤上窯に類似しており，包含層から出土した 200 同様，同じ場所の窯から搬入されたのであろう。円面硯が同一遺跡から 2 点以上出土したのは，市内では曽根遺跡に限られ，赤彩土師器等とともに，使用者の身分などに関わるものであろう。

40 号溝（第 45・46 図，図版 16・18）

Nq・Nr・Or グリッドに位置する。長さ 19.39m，幅 2.42m，深さ 10 cmで，弧状の断面形であり，底面の凹凸が著しい。主軸方位は西偏 74°を示す。重複関係にある遺構はない。

遺物は，須恵器無台杯（105），土師器鉢（106）・鍋（107）のほか，土師器・須恵器の小片に混じって，土師器煮炊具の胴部片を小さく円形に打ち欠いた土器片(308)が 1 点出土している。煮炊具がまとまって出土しており，周辺に炊事場の存在が示唆される。105 は，小泊窯群産である。106 は，鍋に類似した器形であるが，口径 10 cm以下と小形であるため，鉢として扱った。底付近に煤が付着しており，火にかけて使用したと考えられるが，どのような調理に使われたかは不明である。107 は，輪積み成形による鍋と考えられ，内外面ハケメ調整されるなど，遺跡内の鍋の中では古相を示す。40 号溝出土土器は，全体に古手のものが多い。

2 号杭列（第 48 図）

Op グリッドに位置する。直径 2～5 cm程の細い杭の下端部が，長さ 7.76m，幅 61 cmの長方形状の範囲に，やや疎らで乱雑に打ち込まれた状態を検出した。杭の打ち込まれた範囲の主軸方位は，西偏 32.5°を示す。杭は，1 号流路に面して乱雑に打ち込まれていることから，杭を打ち込み基礎地業を行った小規模な土手が造成されていたと考えられ，後世の開発により盛土部分と杭の上半部が削平を受けたと推測する。杭は先端を斜めに削り落したもので，いずれの杭も遺存状態が悪く，取上げることができなかった。

3 号杭列（第 48 図）

No・Oo グリッドに位置する。直径 3～11 cm程の杭の下端部が，長さ 2.76m，幅 1.41mの不整な楕円形状の範囲に，乱雑に打ち込まれている状態を検出した。杭を検出した範囲の主軸方位は，西偏 57°を示す。乱雑に杭を打ち込んで基礎地業を行い，盛土を施した土手状の構造物を造成していたと考えられる。杭は下端部を斜めに削り落したものを使用している。どの杭も遺存状態が悪く，取上げることができなかった。

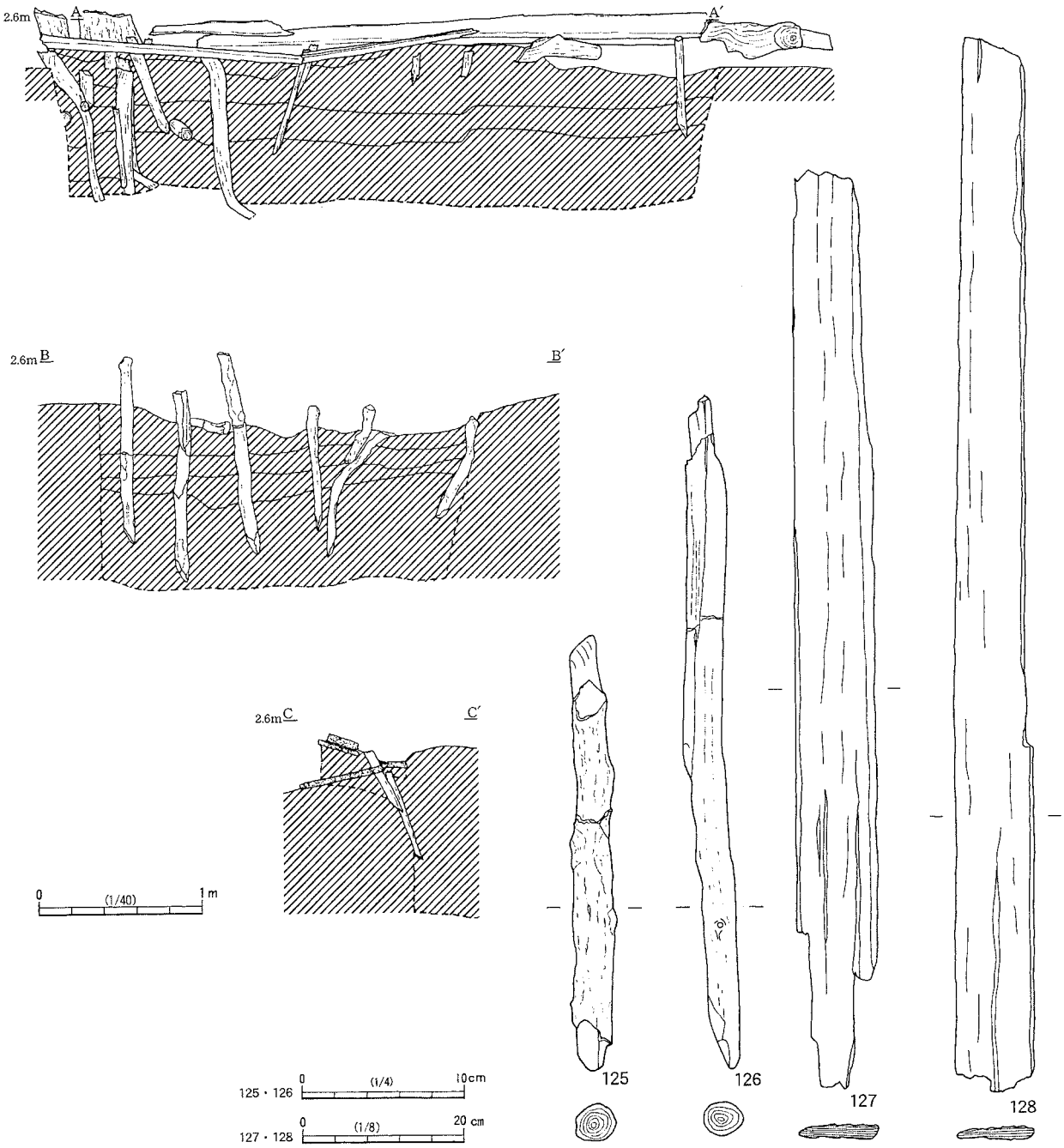
護岸施設（第 48・50 図，図版 16・24）

Oo・Po グリッドに位置する。集落の居住域の対岸にある，1 号流路の中洲状の高まりに構築されている。護岸施設としたものの，板材に杭をあてて固定しただけの簡易な造りの施設である。構築材として使用されていたと考えられる板は，No グリッドから Oo グリッドの長さ約 12mの範囲で検出されたが，その多くは原位置を保って

いる状態ではなく，良好な状態のものは Oo グリッドの南西部で検出された範囲に留まる。125・126 は護岸施設の杭材で，127・128 は板材である。125・126 はどちらも，直径 3.6 cmの広葉樹の丸木材を使用している。下端部の加工は一方向から斜めに削り落しただけである。図化したこの２点以外の杭材もほぼ同じ太さで，同様な加工を施したものである。127・128 は針葉樹の板材である。127 は長さ 1.004m，幅 8.4 cm，厚さ 1.6 cmで，128 は長さ 1.156m，幅 7.2 cm，厚さ 1.2 cmである。いずれも板目取りした材を使用している。

１号流路（第 48～56 図，図版 16・18～20・22～24）

調査区の北東部，No・Oo・Op・Po・Pp・Qp・Qq グリッドに位置する。調査区内で検出されている規模は，長さ 33.1m，幅 10.9m，深さ 38 cmである。地形の傾斜などから，南東から北西方向に向かって流れていたであろう。



第50図　護岸施設断面図と構築材

土層の堆積状況の観察結果から，先後関係のある２筋の流路が存在していたことがわかり，新しい流路を１ａ号流路とし，古い流路を１ｂ号流路とした。

１ａ号流路は集落の居住域寄りを流れる流路である。途中，中洲状の高まりを挟んで二股に分かれる。土層は大きくは上下の２層に分けられ，上層は未分解腐植を多量に含むオリーブ黒色シルト層で，下層はオリーブ黒色のシルトと粗砂の混ざった層で，所々に灰オリーブ色の粗砂の層が薄く縞状に堆積する。おそらくは下層の段階では比較的水量もあり，流れのある状態であったが，その後何らかの理由で水があまり流れなくなり，湿地状になったのではないかと推測する。遺物は上下どちらの層からも出土するが，土器はどちらも定量見られるのに対し，木製品は下層からの出土は少ない。

１ｂ号流路は集落の居住域から離れて流れる流路である。埋土は未分解腐植を多量に含む粗砂である。埋土から遺物が出土していないため，１ｂ号流路が流れていた時期と集落の関連性については不明である。

遺物は，多量出土したにもかかわらず，須恵器有台杯Ａ類が１点しかなく，須恵器食膳具に有台器種が占める割合も２割に過ぎない。また，小泊窯群産須恵器が無台杯に占める割合も６割に及ぶ。上記の組成から，川への土器の投棄が，遺跡の新しい段階から始まったと推定される。

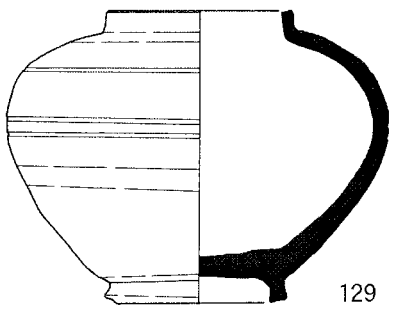
129 と 130 は，流路肩から並んで出土したもので，川岸に置かれたものと考えられる。河川での祭祀に関わるものであろうか。129 は，肩部にオリーブ釉がきれいに掛っており，優品と言えよう。

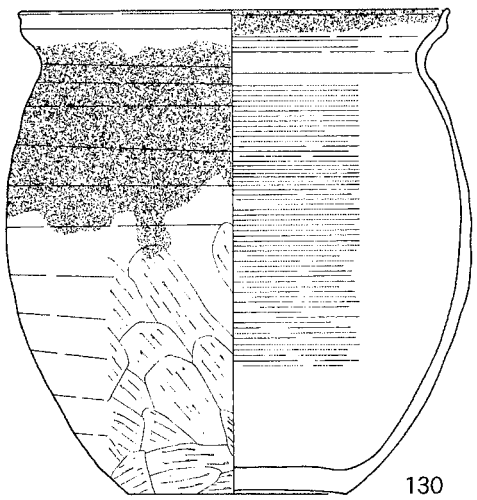
131～135・139・141・144・145・148・151～155・157～160・165・166・170・171 は，小泊窯群産須恵器で，133，139，148，160，171 が小泊窯群３段階以前，ほかが４～５段階に比定できると考えられ，新しい段階のものが多い。

在地産須恵器は，147・156・167 以外は，新しい特徴を示す。特に，無台杯Ｃ類とした 138，149，164 は，法量と器形から，無台杯の中でも 10 号溝 90 同様に遺跡内では最も新しい時期に位置付けられよう。なお，138・163・164 は，胎土と法量，器形から，道婦窯から搬入された可能性が高い。

１号流路からは，墨書土器も多く出土している。人名と考えられる「成ヵ女」(134)や「道」(147) のように文字と認識できるものもあるが，多くは，記号と考えられる。131 のように，胴部に数箇所記号を記すものは，曽根遺跡で多く確認されている。

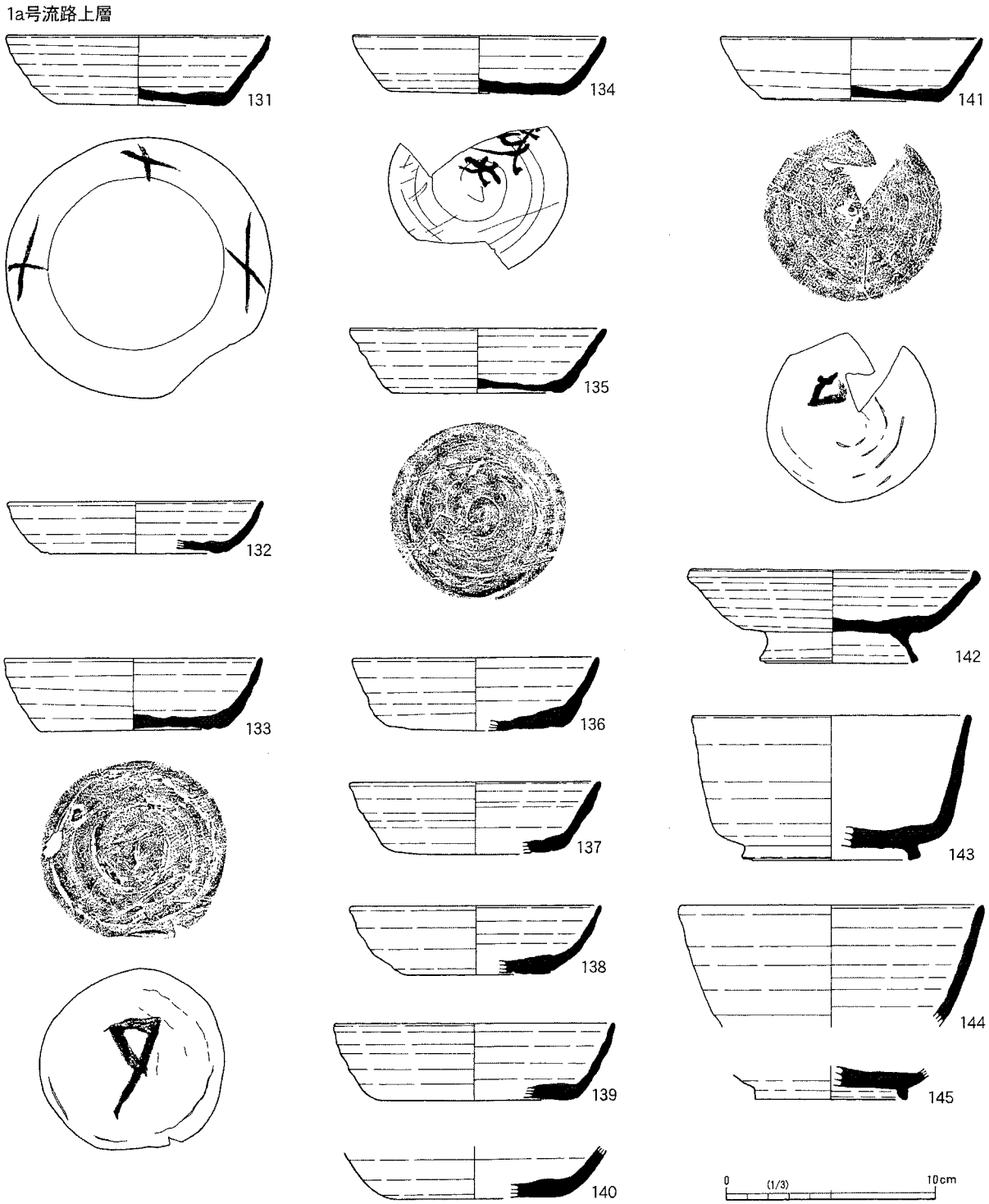
木製品では，漆器椀 (175)・曲物底板 (176・178～180)・盤 (177)・箸状木製品 (181～192)・田下駄 (193・194)・斎串 (195・196)・刀形木製品 (197)・板状木製品 (198・199) が出土している。





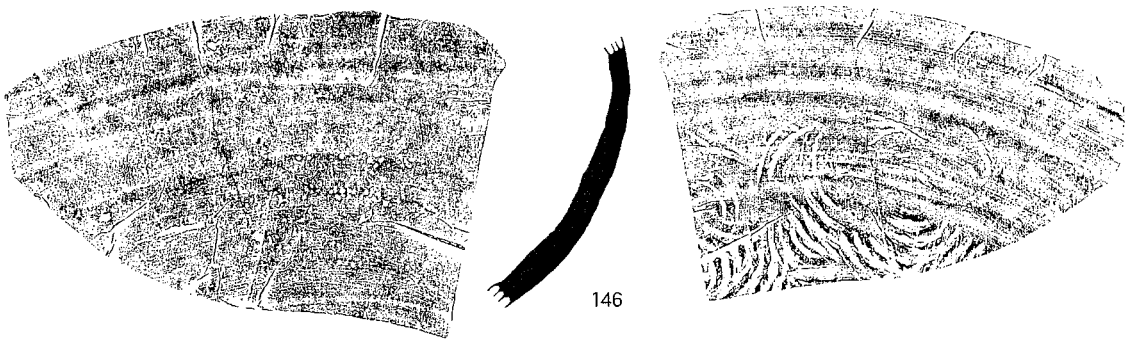
第51図　1号流路出土遺物（1）

漆器椀（175）は口縁部の小片である。薄く削られた木胎の内外面に黒漆が塗られている。176・178～180は曲物の底板である。178以外は広葉樹を柾目取りした材を使用している。直径が16㎝以上のもの（176・179・180）と直径13㎝程のやや小振りのものに分けられる。178を除いては劣化が進んでおり，加工痕が不明瞭である。178・180は側面をやや斜めに削り，176・179は垂直に削っている。178は3か所に釘穴が見られ，180は釘穴に木釘が残存する。177は木製挽物の無台盤である。広葉樹を柾目取りした材を加工しており，底部内面には線状痕が見られる。体部の立ち上がりは少ないが，底部との境は明瞭である。水澤氏の分類のⅡ類に分類されるものであろ

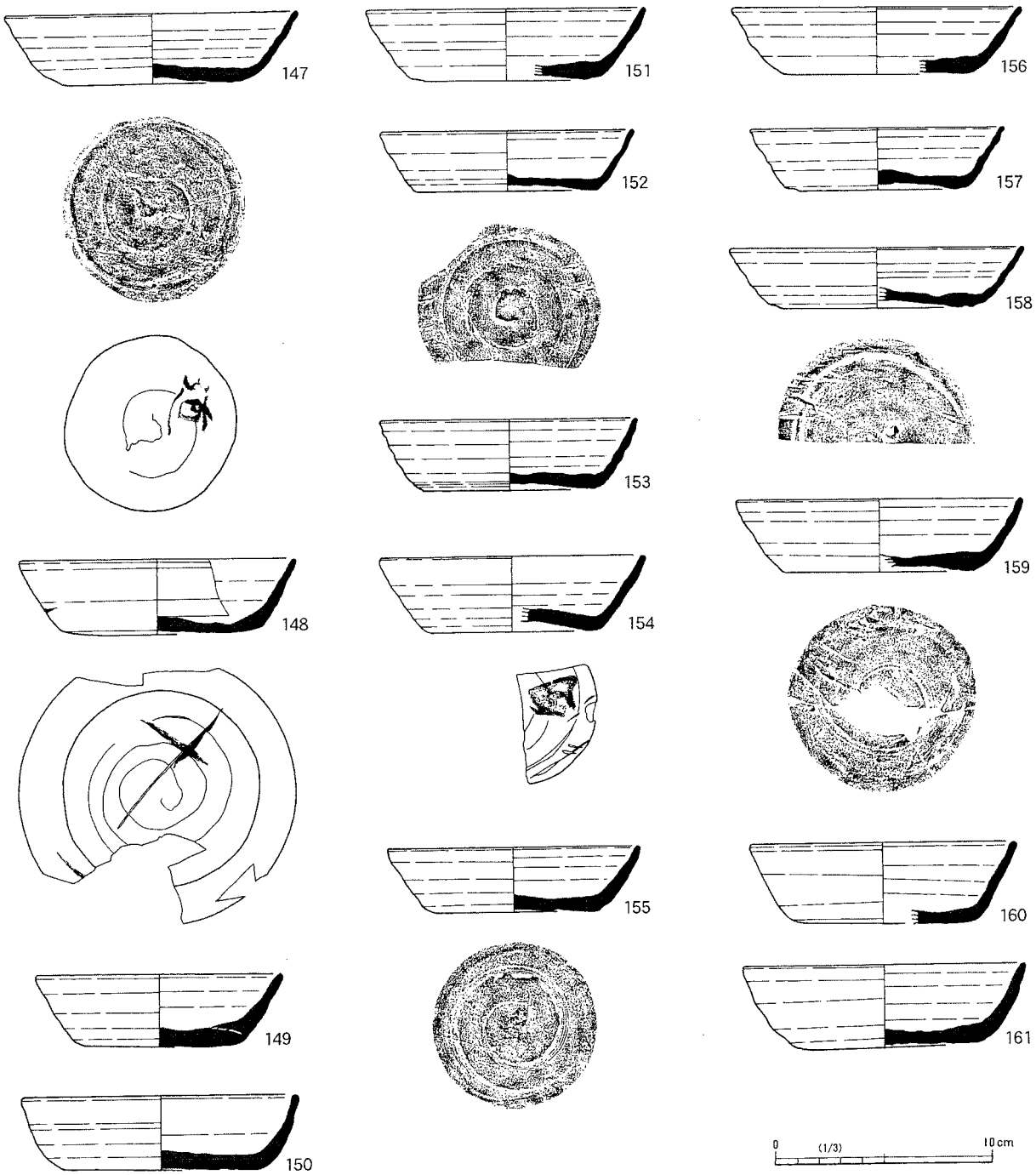


第52図　1号流路出土遺物（2）

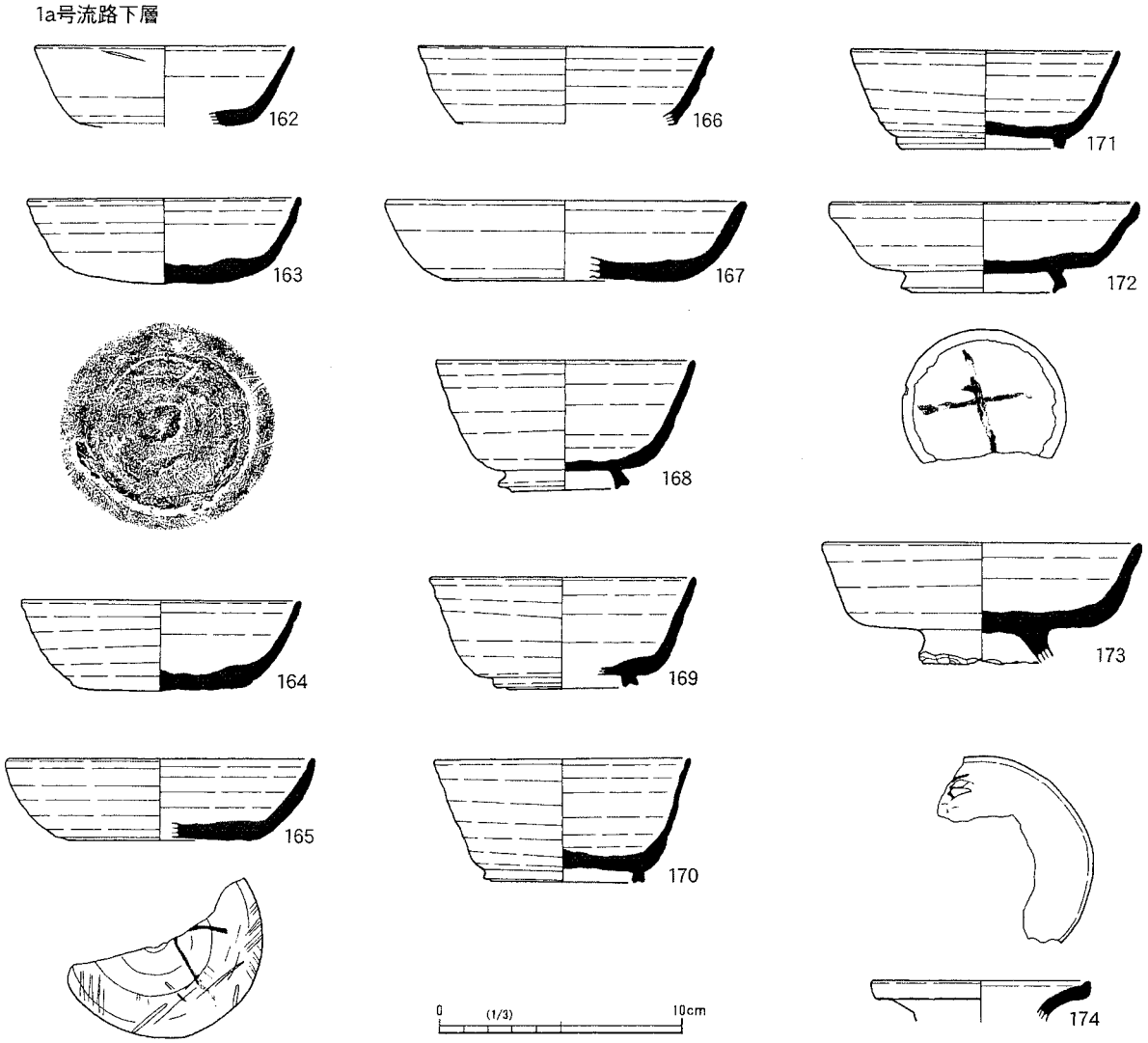
1a号流路上層



1a号流路下層



第53図　1号流路出土遺物（3）

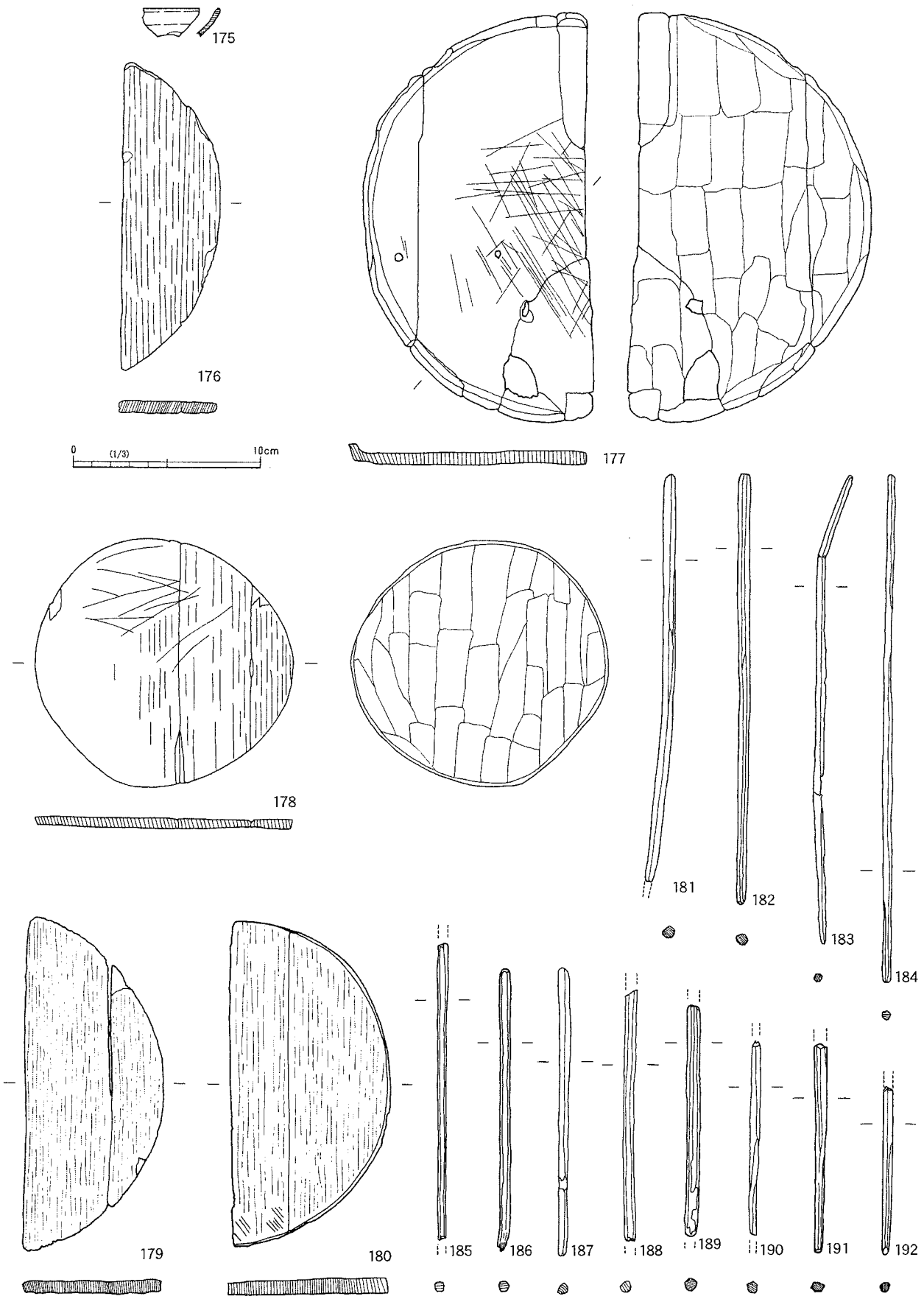


第54図　1号流路出土遺物（4）

うか。181～192 は箸状木製品である。この他にも断面形が四角い棒状の木製品も見られるが，面取り加工が施されているもののみを箸状木製品とした。いずれも針葉樹材を加工したものである。

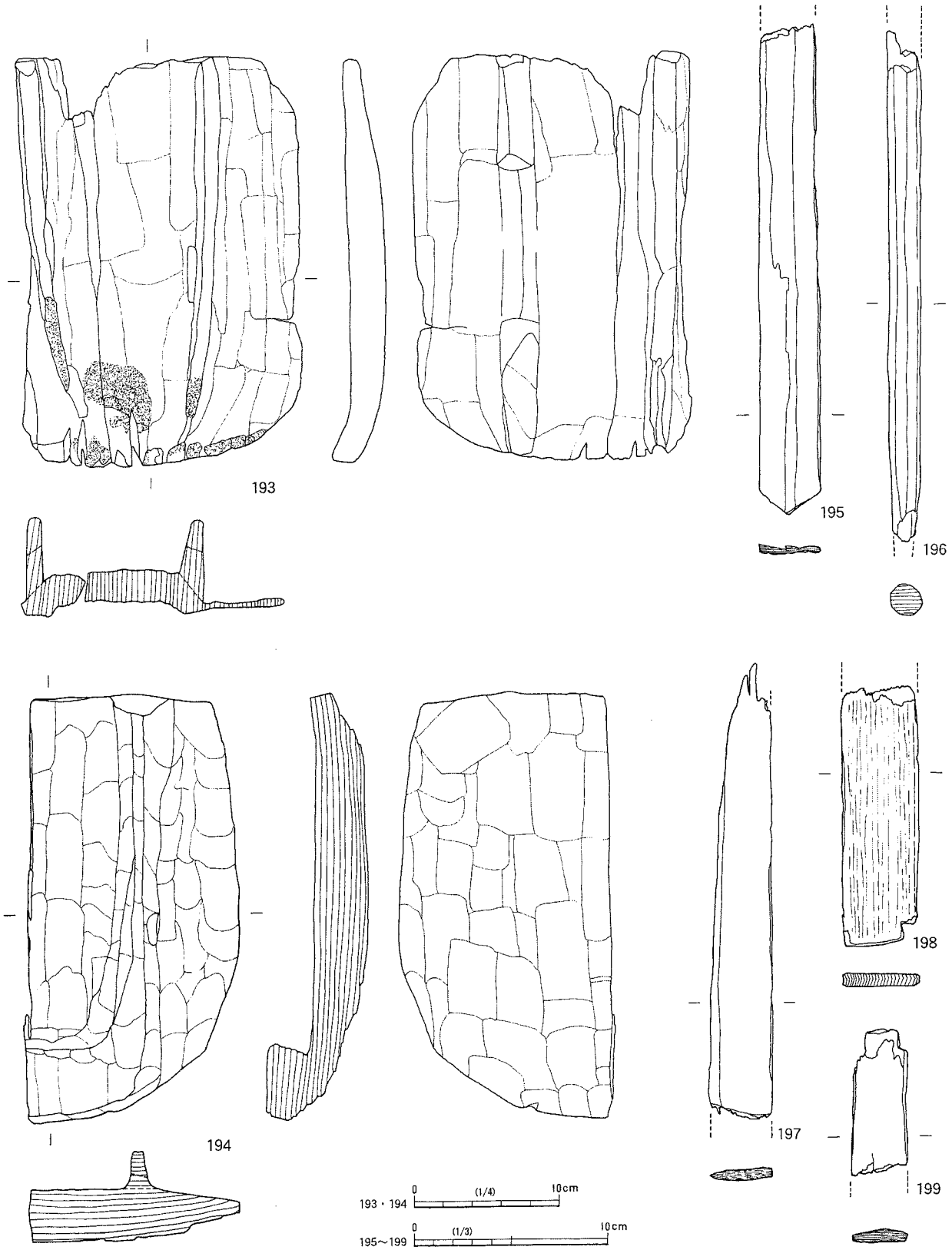
193・194 は足枠付きの田下駄である。両者は形状がやや異なるが，ナンバとも呼ばれる形態のものである。いずれも広葉樹の単一部材を削って加工しているが，193 は柾目材，194 は板目材を使用している。足枠を削り残し，その両側面に横方向に紐穴を穿つ形状は共通している。193 は足台部分をやや隆起させるように厚く残し，足枠の外側は板状に薄く削っている。また，足枠の裏側となる底の部分は，縦方向に歯を削り残している。踵部分が被熱し，焦げている。194 は足台の中央部を厚く削り残し，足枠の外側と前側，後ろ側を，底面が舟底形になるように削っている。同様な形態の田下駄が，阿賀野市腰廻遺跡でも出土している（川上 2002）。

195・196 は斎串と考えられる。195 は針葉樹の板目材を使用している。全体に削りが粗く雑である。上部を欠損しており，下端部は圭頭状に削られている。196 は針葉樹の柾目材を使用した棒状の木製品であるが，多面体に削り，下端部に向かって先細りしていく形状である。1 号土坑出土の斎串（66）と同種のものであろうか。197 は刀形木製品である。針葉樹の板目材を使用している。下部を欠損しており，上部も切先部分を欠いている。刃部に向かい，尖るように削られていて，全体に丁寧な削りを施している点などから刀形木製品と判断した。198・



第55図　1号流路出土遺物（5）

199 は板状の木製品である。198 は広葉樹の板目材，199 は針葉樹の柾目材を使用している。ともに加工痕は不明瞭である。いずれも肉眼観察では，墨痕は認められない。



第56図　1号流路出土遺物（6）

3　遺構外出土遺物

遺物包含層から土器が多量出土している。おおむね遺構出土遺物の時期内に収まり，出土地点によっては遺構資料を補完するものとしての扱いも可能である。以下，遺構上の包含層などから出土した土器とそれ以外の土器，木製品の順に記述する。

（1）遺構上及び遺構周辺出土遺物

1号掘立柱建物関連　建物検出面上と雨落ち溝上のⅢa層から出土しており，1号掘立柱建物検出面上から248が，3号溝または38号溝から253，5号溝から254・259・298，8号溝から241，14号溝から272・280が出土している。241・298は古相，248・253・254が新相を示す。272・280は，口径値と底径指数から小泊窯群2段階に比定される。胎土は，241が堤上窯，272・280が小泊窯群，ほかが高山寺窯または馬上3号窯の資料に類似する。1号建物雨落ち溝出土遺物(第10図)が古相と新相2時期の遺物で構成され時期的に一致することから，遺存度の高い資料は遺構に伴うと考えられ，254，272，280が該当する。254の底部には，「×」が墨書される。

3号掘立柱建物脇　遺構上から出土したものではないが，3号建物東辺脇のLp4－3・4グリッドから，遺存度の高い遺物213・222・224が出土している。いずれも遺跡内では古相を示す。

1号土坑上　有台杯B蓋242が出土している。1号土坑に直接比較する資料はないが，頂部をロクロケズリし，口縁端部が外側に引き出される点は遺跡内でも古相を示す。

5号土坑上　有台杯A2類293があるが，出土位置から39号溝上の可能性もある。口径13㎝以下で薄手であり，器高指数33とやや深身となる。

6号土坑上　口径12～13㎝，底径指数73以上と，小泊窯群2段階に比定できる無台杯が2点(261・288)出土している。この2点は生産地と時期が一致しており，6号土坑に伴う可能性が高い。

16号土坑上　16号土坑には，小泊窯群5段階に比定できる無台杯(81)が1点ある。16号土坑上からは，やや古手の有台杯B類蓋(207)，小泊窯群2～3段階の有台杯B類蓋(202)，甕B1類(203)が出土しているが，いずれも土坑出土のものより古く破片であることから遺構に伴わないと考えられる。

27号溝上　27号溝からは，遺構出土資料中最も古い資料が出土している。27号溝上から出土した土師器甕230も，口縁端部を面取りし，胴部をタテハケメ調整するなど古い特徴が見られ，27号溝に伴うものとしても違和感がない資料である。

Kq3－2グリッド　遺構に絡むものではないが，須恵器杯類(214～217・219)がまとまって出土している。216・219は，口径値と重厚な作りから，遺跡内では最も古く位置付けられる。214・215は，胎土が共通し，口径値と浅身で外傾する器形から28号溝資料とおおむね同時期であろう。217は，口径12㎝以下で薄手深身の器形であり，有台杯A類の中では新しく位置付けられる。新しい時期の土器は，器形の特徴が共通しており，一括廃棄された可能性があろう。

（2）包含層出土土器　出土地点ごとに記述を進める。

Iqグリッド　円面硯(200)が出土している。脚部に2条の沈線を巡らせた後，方形の透かしを入れたもので，陸に使用痕が認められる。胎土の特徴から，堤上窯周辺で生産されたものと考えられる。

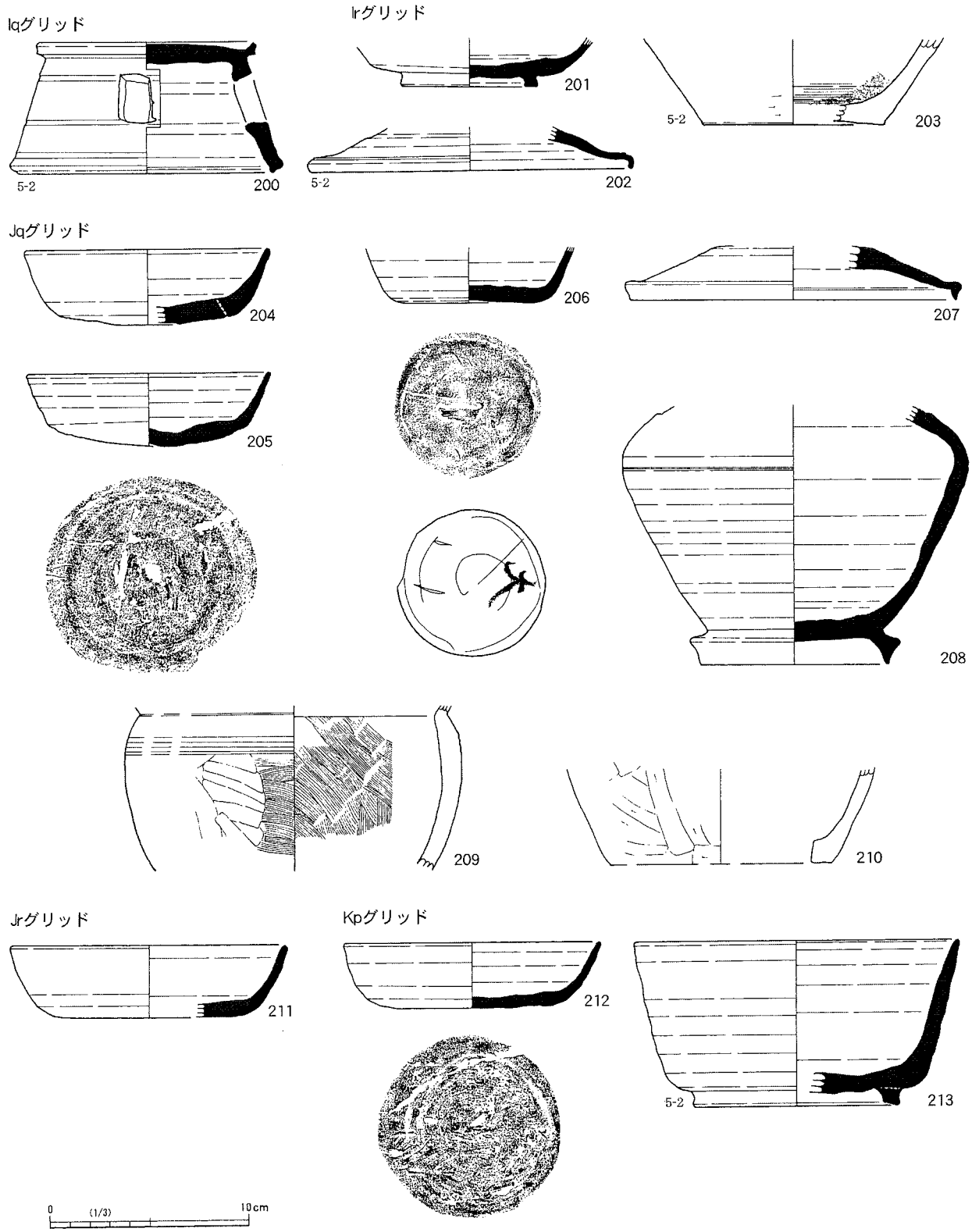
Irグリッド　201は折縁杯A類で，法量と器形の特徴から新しいと考えられる。

Jqグリッド　204・205は，胎土が堤上窯資料に類似し，法量・器形も共通することから，同一産地の製品と考えられる。口径値からやや古手とできようか。206は，小泊窯群産で，器形の特徴が3段階の大木戸窯(坂井・鶴間・春日1992)に類似する。209の小形の鍋は，周辺地域での類例は少ない。210は，底部が中空となることから，甑

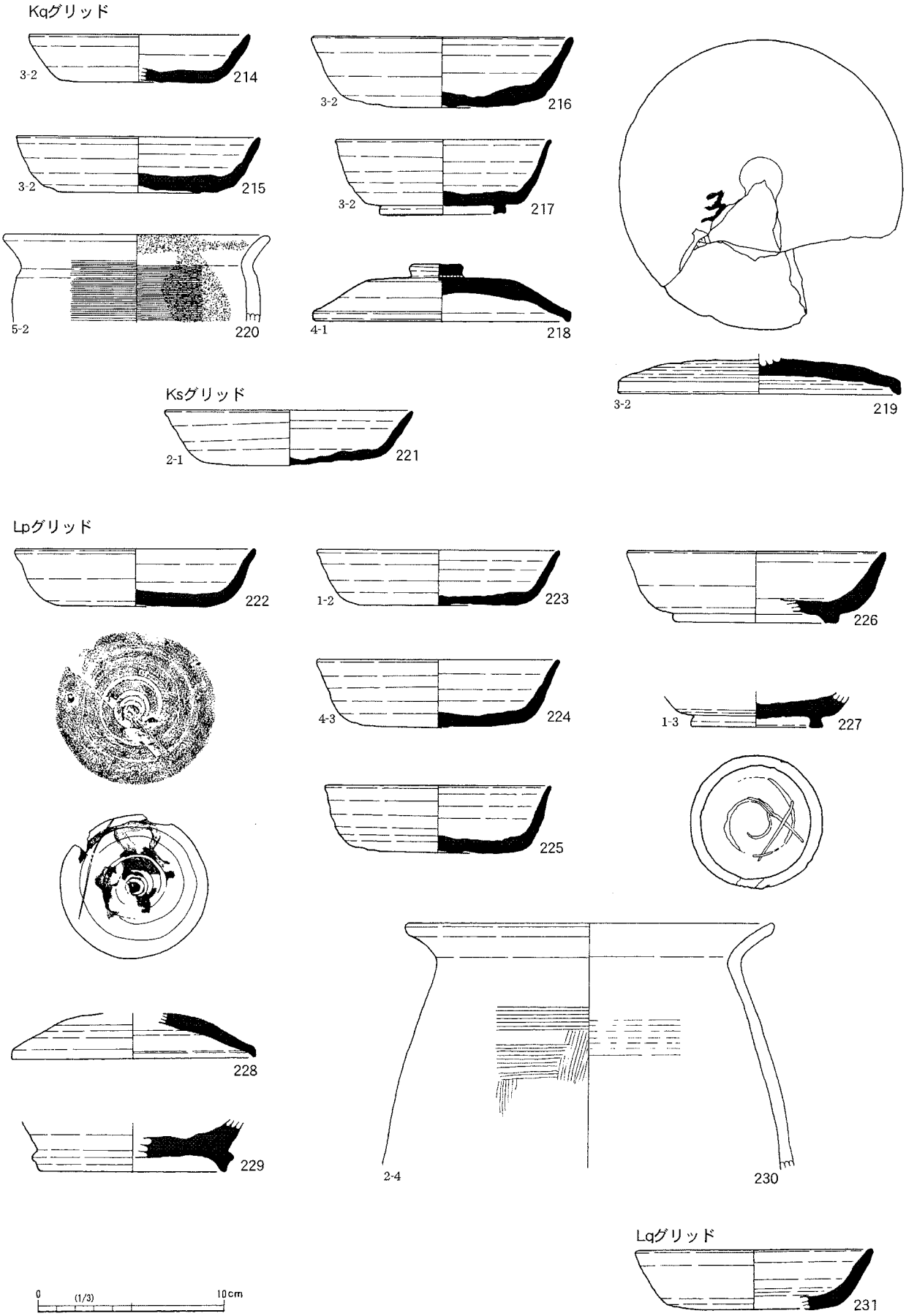
と考えられるが，８世紀後半以降の土師器の甑は珍しい。

Jr グリッド　211 は，口径が 14 cm近くあり法量的には古いが，器壁が薄く腰部が張らないこととと口縁部が外反しやや深身であることから，新しい要素が見られる。

Kp グリッド　212 は，211 と法量が類似するが，薄手であることから，時期的にやや後出しよう。胎土は，高山寺窯資料と比較した場合，違和感がないほど似ている。



第57図　遺構外出土遺物（1）



第58図　遺構外出土遺物（2）

Kq グリッド　220 は甕Ｃ１類に分類され，口縁部内面に帯状の炭化物が付着している。218 は有台杯Ａ類の蓋で，頂部をロクロケズリする点は古相を示すが，ボタン状摘みで口縁端部の引き出しが弱いことと，口径値からさほど古くはならないであろう。

Ks グリッド　221 は，212 と法量及び器形的な特徴が類似しており，同時期とできよう。

Lp グリッド　遺物量は多い。223～225 は，225 がやや小ぶりだが，法量・器形の特徴が類似しており，おおむね同時期の遺物と考えられる。224 と 225 は，堤上窯資料に類似する胎土であり，一括搬入された可能性があろう。223 は，山三賀Ｃ類胎土に分類されるもので，高山寺窯～馬上窯資料の一部に似る。227 は，暗青灰色で長石・石英をあまり含まない粘性の強い胎土であり，笹神丘陵の窯製品よりもホーロク沢窯群(鶴巻 2001)の製品に近い。底部には「×」のヘラ書きがされる。

Lq グリッド　231 は，口径 12 cm前後と小形で腰部が張らず口縁部が外反することから，新しく位置付けられる。

Lr グリッド　232 は，小泊窯群産の無台杯である。小形で非常に薄手であることから，５段階以降であろう。233 は，薄手で口径 12 cm，器高指数 33 と小形深身だが，腰部の張り具合からやや古くなるか。

Mp グリッド　土器量が多く，遺跡内で古相を示すものが多い。ほぼ２号掘立柱建物の範囲に含まれ，土器の特徴も共通するものが多いことから，一部は建物に伴う可能性がある。234 は，口径 13 cmを超るやや大ぶりな無台杯で，重厚な作りである。口縁部の外傾度が弱いことからも古手とできよう。底部には，「称□」の墨書がある。235 は，小泊窯群産の無台杯で，小形，薄手，外反器形であることから５段階であろう。236・237 は，法量はやや異なるものの，腰部が丸味を帯び薄手で外傾する点で共通し，おおむね同時期とできる。 238 は，薄手であるが口径が 14 cm近くあり，器高指数 26 と扁平で腰部をロクロケズリ調整することから，27 号溝資料と同時期とできよう。239 も法量から 238 と同時期と考えられ，胎土の特徴から 242 とセットなる可能性がある。243～245 は，土師器甕Ｃ１類で，口縁端部の摘み上げが顕著でない点は古相を示し，古手の須恵器に伴うと考えられる。

Mq グリッド　Mp グリッド同様土器量は多い。グリッド内には１号掘立柱建物が存在し，建物出土土器と同様の法量と器形的特徴を持つ土器が多いことから，かなりの土器が１号堀立柱建物に伴う可能性が高い。246・251 は，小泊窯群産で，器高指数は異なるが法量，器形は共通しており，３段階に比定できる。251 は，「＊」の墨書が認められる。247 は，１号堀立柱建物検出面上出土の 248 と法量･器形･胎土が共通する。249 は，法量から古く位置付けられる。253～255 の折縁杯は，すべてＡ類で法量・器形も一致し，同時期のものとして扱える。法量と器形の特徴からＡ類の中では，新しく位置付けられる。

Mr グリッド　グリッド内には，土坑，溝が重複して多く存在する。土器は，小泊窯群産の須恵器(261～264)が多く，２～３段階に比定でき時期的にまとまりがある。土師器甕 265，鍋 266 は，いずれもロクロ成形され，薄手で口縁端部が摘み上げられない点は，古相を示す

Np グリッド　破片資料が少量出土したに過ぎない。建物群に囲まれた空閑地にあたり，遺物量の少なさは，グリッド内の土地利用と絡む可能性があろう。図化した遺物は，267 が小泊窯群５段階に比定されるなど，時期的に新しく位置付けられる。

Nq グリッド　273，274 は折縁杯で，ともに椀形のＢ類となる。法量の大きい 274 が古く，小さい 273 が新しいと判断できる。

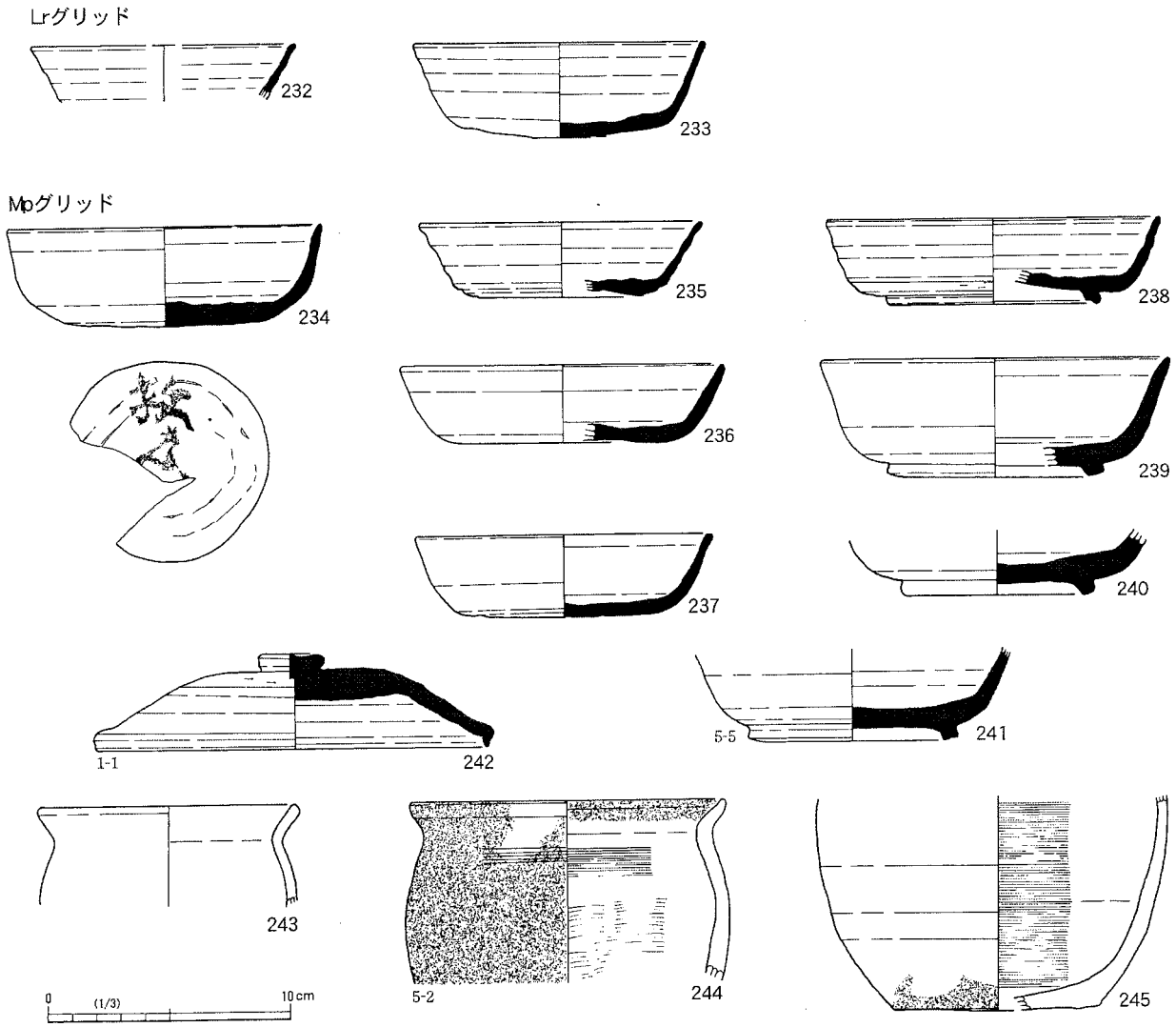
Op グリッド　277 は，小泊窯群産で有台杯Ａ類である。法量及び扁平器形から，２段階以前に位置付けられる。底部には，「×」が墨書される。

（３）その他の出土土器

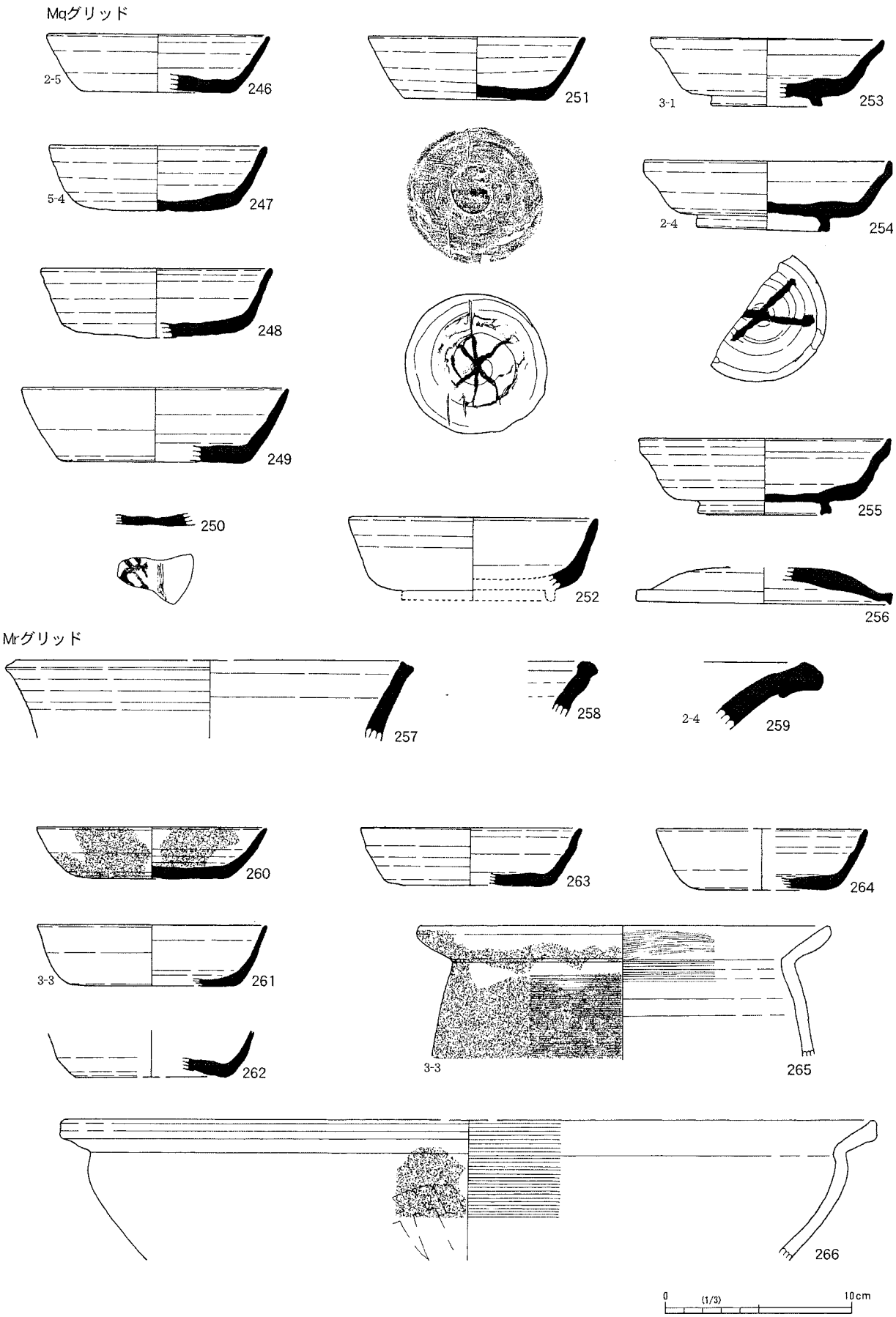
攪乱　278・279 は，出土地点が異なるが，いずれも小泊窯群産である。278 は，深身の椀形でＢ１類としたが，

C類とすべきか。厚手で外傾度が弱いことから，小泊窯群３段階に比定できる。279 は，外傾度が強いことを評価すれば，４段階となろうか。

表土　須恵器は，小泊窯群産と笹神丘陵窯群産がある。280，282，283，287～290，292 は小泊窯群産で，器形が明らかなものは，280･288 が２段階，289 が４段階，283 が５段階となろう。289 は側面と底部に，282，287，290～292 は底部に墨書または墨痕があり，287，289，290 は「×」，291 は「大」と墨書されている。289 のように側面と底部に同種の墨書をする例は，遺跡の南約２kmに位置する曽根遺跡(家田ほか 1982)にある。字体も「十」と似通っており，地蔵潟Ａ遺跡との何らかの関係が推測できる。笹神丘陵窯群産は，胎土の特徴から 281，284，285，291，297，298，299，301 が高山寺窯または馬上３号窯，286，293，294，296，300 が堤上窯，302 が道婦窯に対応し，各窯の周辺で生産されたと推測される。堤上窯周辺で生産されたと考えられる須恵器は，286 や 294，296 のように同時期のほかの窯に比べ器壁が厚く重量があるものが多い。281 は，口径が 13 cmを超え，重厚な作りから古相を示す。底部には，「壙口」と墨書される。286 の底部にも墨痕があるが，墨書ではない。285 は，無台杯としたが，「椀」とすべきであろうか。296 の有台杯は，口縁端部下端と胴部に沈線が巡らされており，金属器模倣杯であろう。303 は，口縁端部が強く摘み上げられる土師器甕で，９世紀前半の甕の特徴がみられる。304 は，赤彩土師器高杯で，砂粒をほとんど含まない精製された胎土を用いており，ミガキ調整される。赤彩土師器は，県内では長岡市下ノ西遺跡(田中 2003)や上越市木崎山遺跡(戸根ほか 1992)など官衙関連遺跡などに限られ，



第59図　遺構外出土遺物（３）



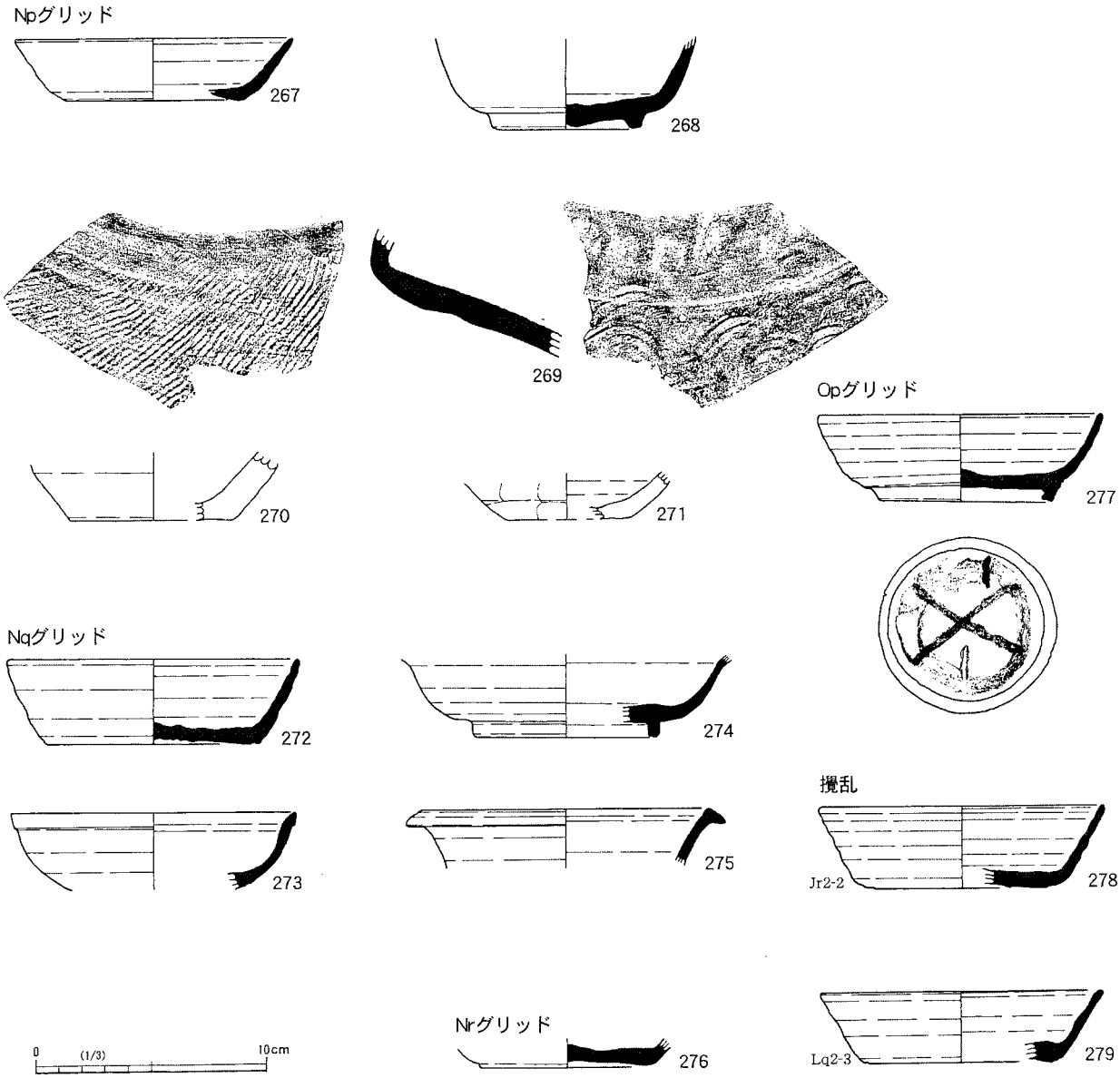
第60図　遺構外出土遺物（4）

れ，県内での出土例は少ない。

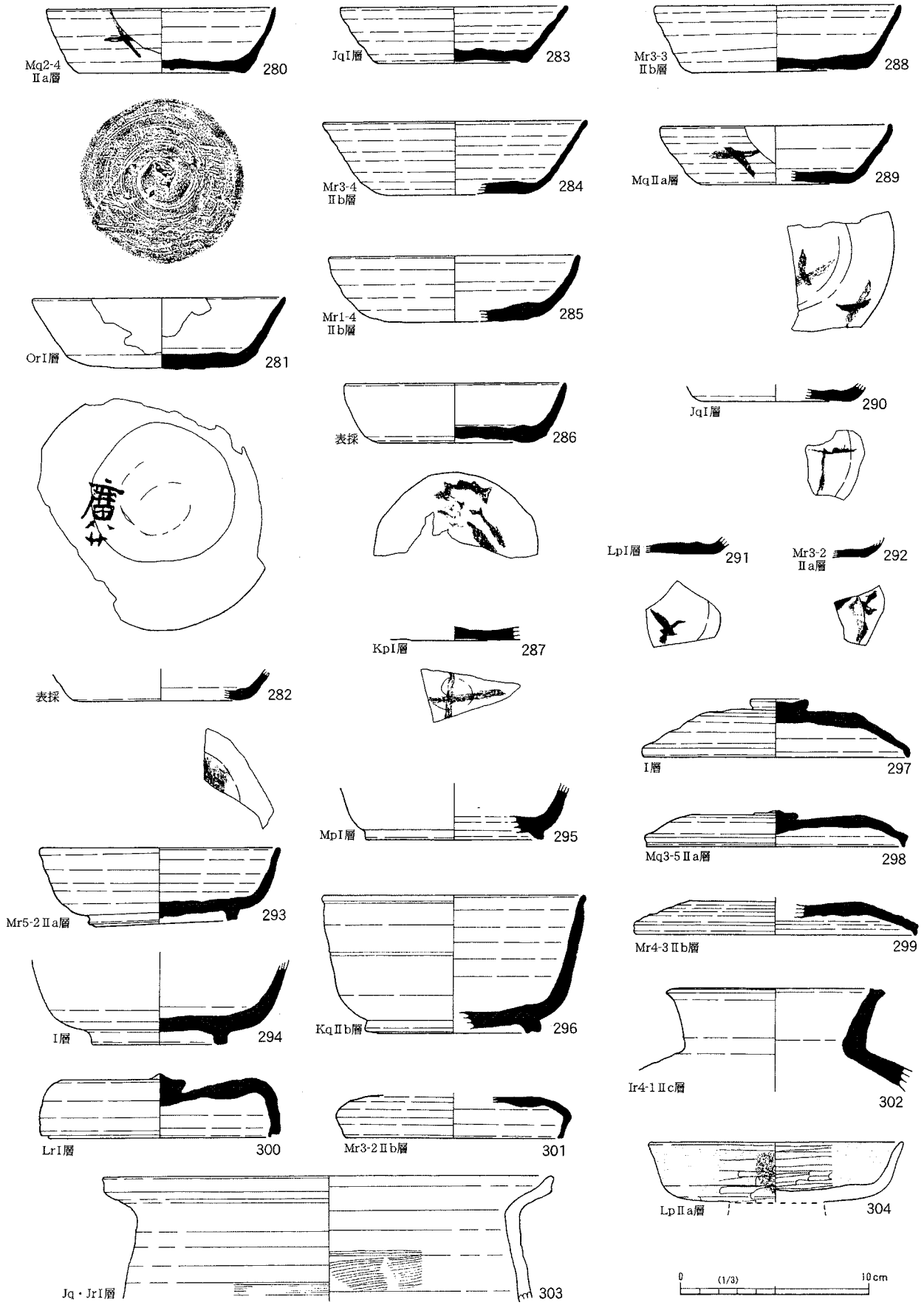
（4）小結

遺構外出土遺物は，遺物の特徴や時期が遺構出土遺物と同様の傾向を示す。また，地点ごとに出土量と時期に違いが見られ，建物が存在するMpグリッドとMqグリッドでほかのグリッドとの違いが明瞭に認められる。

1号建物があるMqグリッドでは，38号溝新相に並行する遺物が，2号建物があるMpグリッドでは，27号溝または38号溝古相に並行する遺物がまとまって出土している。それぞれ，建物出土遺物と時期的に一致することから，建物の居住者に使用されたものが残されたと考えられ，敷地内での生活痕跡を反映したものであろう。なお，肉眼での須恵器の胎土識別の結果によれば，高山寺窯及び馬上窯周辺と堤上窯周辺の窯で生産された須恵器が，遺跡の存続期間を通じて一定量搬入され続けたと推測される。在地での須恵器生産の最終段階のあたる道婦窯周辺で生産されたと考えられる製品はわずかであり，搬入状況と遺跡の消長とが一致している。また，佐渡小泊窯群の須恵器は，2・3段階のものが多く，在地の須恵器生産が活発な時期から多量搬入された状況が伺える。



第61図　遺構外出土遺物（5）



第62図　遺構外出土遺物（6）

4　墨書土器

新潟県立歴史博物館　浅井 勝利

本遺跡から出土した墨書土器については，破片であるもの，墨痕の不鮮明であるものが多く判読不能のものが多いが，いくつか興味深いものがある。

「廣□」(281) は墨書土器の文字としては比較的珍しいものであるが，人名などには一般的な文字である。二文字目は何を書こうとしたのか読み取ることは難しいが，一文字目も含めてかなり稚拙な筆運びであり，十分な識字能力を持った人物の手になるとは考え難い。

「道」(148) としたものも，人名としての道君などのウジナ，あるいは道麻呂などの名とも考えられるが，単に道路としての道の可能性も否定できない。

「成女」(134) と読んだものも，人名（女性）と解せられる。県内出土の墨書土器で女性名の見られるものは，「秋庭女」「□久女」「□古女」(新潟市的場遺跡)，「飯女」「石女」(阿賀野市腰廻遺跡)，「秦女」(加茂市鬼倉遺跡)，「留女」(南魚沼市金屋遺跡)，「富女」(十日町市柳木田遺跡)，「□刀目（自ヵ)」(上越市一ノ口遺跡）などが知られている。官衙的な様相を呈するとされる的場遺跡を除けば，他は一般の集落遺跡である。

このように，女性名の記された墨書土器は必ずしも珍しいものではないが，墨書土器の用法や遺跡の性格を解明する手掛かりとなるかもしれない。

また，当遺跡では坏底部に幅広く墨痕のある土器が多数見られる。通常であれば，転用硯とみなされるところであろうが，文字・記号を記した土器の点数から比べると，その点数がやや多いのが気になるところである。近隣に未発見の墨書遺物が存在するのか，文字の墨書以外の用途に墨を用いた痕跡なのかは不明である。

表２　墨書土器一覧表

掲載番号	出土位置	種別・器種	時期	種類	墨書部位	釈文	備考
3	7・38号溝	須恵器折縁杯A	馬上3号	墨書	底部外面	「×」	
21	4溝	須恵器無台杯A2	高山寺	墨書	体部外面	「×」	
90	10溝	須恵器無台杯C2	道婦	墨書	底部外面	「×」	
108	33溝	須恵器無台杯B2	小泊４段階	墨書	底部外面	「×」	
121	29溝	須恵器無台杯B2	小泊４～５段階	墨書	底部外面	「一」	
131	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊５段階	墨書	体部外面（3か所）	「×」	
133	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊３段階	墨書	底部外面	□（不明）	
134	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊５段階	墨書	底部外面	「成女」	
141	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊５段階	墨書	底部外面	□（不明）	
147	1a流路	須恵器無台杯B2	高山寺	墨書	底部外面	「道」	
148	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊３段階	墨書	底部外面・体部外面	底部：「×」、体部：「×カ」	
165	1a流路	須恵器無台杯B1	小泊４～５段階	墨書	底部外面	「×」	
172	1a流路	須恵器折縁杯A	馬上3号	墨書	底部外面	「×」	
174	1a流路	須恵器長頸瓶B		墨書	口縁部内面	□（不明）	
206	包含層	須恵器無台杯C	小泊３段階	墨書	底部外面	「大」	
219	包含層	須恵器有台杯B蓋	貝屋か	墨書	天井部外面	「子」	
234	包含層	須恵器無台杯B2	貝屋	墨書	底部外面	□□（不明）	
245	包含層	土師器甕C1		墨書	体部外面	□（不明）	
250	包含層	須恵器無台杯B		墨書	底部外面	□（不明）	
251	包含層	須恵器無台杯C2	小泊３段階	墨書	底部外面	「＊」	
254	包含層	須恵器折縁杯A	馬上3号	墨書	底部外面	「×」	
277	包含層	須恵器有台杯A2	小泊２段階	墨書	底部外面	「×」	
281	表土	須恵器無台杯A2	元山４号～貝屋	墨書	底部外面	「廣□」	
287	表土	須恵器無台杯B		墨書	底部外面	「×」	
289	旧耕土	須恵器無台杯B1	小泊４段階	墨書	底部外面・体部外面	底部：「×」、体部：「×」	
290	表土	須恵器無台杯B		墨書	底部外面	□（不明）	
291	表土	須恵器無台杯B		墨書	底部外面	「大」	

表３　遺構一覧表

・梁行×桁行及び面積：（）外の数値は身舎部分のみ，（）内の数値は廂部分を含めた数値。
・重複遺構・新旧関係：＝は同時併存，≠は重複関係にあるが新旧関係は不明，＞は新旧関係（（新）＞（旧））を示す。
　※ピット一覧表の重複関係・新旧関係は，直接的に切り合い関係にあるもののみを記載。
・遺構の略称：土＝土坑，掘立＝掘立柱建物。
・柱根・出土遺物：（）内の数字は掲載番号。
・長軸×短軸：（）内の数値は，推定値または残存値を示す。

掘立柱建物

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行(m)	面積(㎡)	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
1号掘立柱建物	側柱	3×2	6.00×5.16	30.96	N-43°-W	5・7・8・13・14・38溝	≠13溝か					9	10	4・5
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	柱間寸法(cm)				
		P1	Mq4-1	無	楕円形	72×57	半円状	36	2.36	P1-P2	210	9	10	4
		P2	Mq5-2	無	楕円形	56×41	台形状	28	2.38	P2-P3	194			
		P3	Nq1-2	無	円形	50×47	台形状	46	2.23	P3-P4	199			
		P4	Nq1-3,2-3	無	円形	58×52	階段状	38	2.24	P4-P5	247			
		P5	Nq1-4	無	円形	34×32	漏斗状	16	2.57	P5-P6	255			
		P6	Mq5-5	無	円形	54×47	漏斗状	36	2.31	P6-P7	173			
		P7	Mq4-4・5,5-4	無	楕円形	(69)×65	階段状	29	2.39	P7-P8	219			
		P8	Mq3-4,4-4	無	不整形	62×46	台形状	26	2.42	P8-P9	202			
		P9	Mq2-3,3-3	無	楕円形	47×32	漏斗状	35	2.34	P9-P10	257			
		P10	Mq3-2	無	不整形	39×30	漏斗状	28	2.32	P10-P1	263			
遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
2号掘立柱建物	側柱	3×2片廂	6.76×4.30（6.14）	29.07 (41.51)	N-58.5°-W	3・4・9溝	≠3掘立，P1＞		P3:須恵器有台杯（18），P5:須恵器杯蓋（19）			12	13	5
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
	身舎	P1	Mp1-3	無	不整形	53×40	半円状	20	2.42	P1-P2	252	12	13	
		P2	Mp2-3・3-3	無	楕円形	44×35	半円状	39	2.32	P2-P3	207			
		P3	Mp3-3・4,4-3	無	楕円形	56×42	台形状	36	2.26	P3-P4	223			
		P4	Mp4-4,5-4	無	不整形	47×35	漏斗状	52	2.21	P4-P5	218			
		P5	Mp4-5	無	円形	50×47	半円状	25	2.36	P5-P6	216			
		P6	Mq4-1	無	長方形	43×31	台形状	37	2.31	P6-P7	213			
		P7	Mp3-5,Mq3-1	無	楕円形	(50)×36	台形状	23	2.30	P7-P8	246			
		P8	Mp1-5,2-5	無	円形	44×40	台形状	45	2.25	P8-P9	226			
		P9	Lp5-4・5,Mp1-4・5	無	方形	65×50	階段状	37	2.33	P9-P1	394			6
	廂	P10	Mp2-2	無	不明	(16)×24	不明	(6)	2.56	P10-P11	257			
		P11	Mp3-2	無	楕円形	32×25	漏斗状	51	2.45	P11-P12	208			
		P12	Mp4-2・3	無	楕円形	35×22	半円状	18	2.51	P12-P13	232			
		P13	Mp5-3	無	楕円形	45×32	階段状	34	2.43					
遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
3号掘立柱建物	側柱	2×1	3.42×3.55	12.14	N-28°-E		2溝＞，≠2掘立					12	15	5・6
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Lp5-3	無	円形	30×28	半円状	26	2.34	P1-P2	355	12	15	
		P2	Mp2-3	無	楕円形	52×36	台形状	30	2.33	P2-P3	185			
		P3	Mp1-4	無	円形	29×26	U字状	26	2.38	P3-P4	154			
		P4	Mp1-5	無	円形	35×34	箱状	33	2.35	P4-P5	355			
		P5	Lp4-4,5-4	有（31）	円形	41×36	台形状	20	2.53	P5-P6	148			6
		P6	Lp4-3・4,5-3・4	無	楕円形	42×35	U字状	38	2.26	P6-P1	196			

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
4号掘立柱建物	側柱	3×2	4.52×4.13	18.67	N-32°-E							16	16	6
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Lq2-4	無	円形	65×60	台形状	12	2.47	P1-P2	267	16	16	
		P2	Lq3-4・5, 4-4・5	無	楕円形	63×46	台形状	15	2.48	P2-P3	147			
		P3	Lq4-5	無	円形	43×37	台形状	31	2.41	P3-P4	242			
		P4	Lr4-1	無	円形	51×51	台形状	26	2.35	P4-P5	214			6
		P5	Lr4-2	無	方形	43×43	階段状	23	2.35	P5-P6	244			
		P6	Lr2-2, 3-2	無	楕円形	48×41	階段状	30	2.14					

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
5号掘立柱建物	側柱	3×2	6.54×3.72	24.33	N-41.5°-W	15・16・17・41溝 1柵列，1杭列	18・20溝＞		P5:土師器小甕（38）			17	18	7
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	N03-2・3	有（32）	円形	44×41	台形状	20	2.49	P1-P2	203	17	18	
		P2	No4-4	無	楕円形	52×35	半円状	29	2.43	P2-P3	172			
		P3	No4-5, 5-5	有（33）	楕円形	58×36	台形状	22	2.52	P3-P4	279			
		P4	No5-5, Np5-1, Oo1-5, Op1-1	無	円形	31×27	半円状	13	2.60	P4-P5	178			
		P5	Np5-1	無	楕円形	43×35	半円状	28	2.46	P5-P6	175			
		P6	Np5-2	無	長方形	34×28	台形状	20	2.47	P6-P7	272			
		P7	Np3-1, 4-1	有（34）	楕円形	71×40	台形状	28	2.48	P7-P8	190			7
		P8	Np3-1	無	楕円形	40×32	台形状	32	2.40	P8-P9	167			
		P9	No2-5	無	円形	42×38	半円状	24	2.53	P9-P10	187			
		P10	No2-4・5, 3-4	有（35）	円形	50×42	台形状	17	2.54	P10-P1	186			
		P11	No4-5, Np4-1	無	長方形	52×（40）	階段状	23	2.41					

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
6号掘立柱建物	側柱	3×2以上	6.50×3.10以上	20.15以上	N-65°-W		≠30溝，＞31溝		P2:須恵器折縁杯（48），P3:須恵器無台杯（46・47），P5:土師器甕（49）			21	21	8
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Kr5-4	無	不整形	62×60	漏斗状	51	2.10	P1-P2	196	21	21	
		P2	Lr1-4	無	楕円形	64×47	漏斗状	63	1.95	P2-P3	168			
		P3	Lr2-4	有（45）	方形	81×76	箱状	33	2.25	P3-P4	287			8
		P4	Lr3-4・5	無	不整形	42×26	半円状	16	1.98					
		P5	Kr5-5	無	不整形	89×50	漏斗状	44	2.18	P5-P1	216			

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
7号掘立柱建物	側柱	3×2	7.25×5.70	41.33	N-58.5°-W		＞17土，＞27溝， ＞37溝		P1:須恵器無台杯（52），P3:須恵器無台杯（51）・須恵器杯蓋（54），P4:土師器甕（55），P9:須恵器杯蓋（53）			22	23	8
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Lp1-4	無	方形	92×90	階段状	49	2.15	P1-P2	244	22	23	
		P2	Lp2-4, 3-4	無	楕円形	84×70	半円状	40	2.16	P2-P3	234			
		P3	Lp3-5, 4-5	無	円形	89×80	階段状	58	1.98	P3-P4	248			
		P4	Lp4-5, 5-5	無	長方形	99×62	階段状	79	1.86	P4-P5	276			
		P5	Lq4-1・2	無	楕円形	59×49	台形状	30	2.36	P5-P6	274			
		P6	Lq3-3, 4-2・3	無	円形	116×112	階段状	66	1.95	P6-P7	256			
		P7	Lq2-2・3, 3-2・3	無	方形	76×75	階段状	67	1.96	P7-P8	224			
		P8	Lq1-2, 2-2	無	方形	97×90	階段状	69	1.90	P8-P9	240			
		P9	Kq5-2, Lq1-2	無	楕円形	92×70	台形状	60	1.94	P9-P10	284			8
		P10	Kp5-5, Lp1-5, Lq1-1	無	楕円形	85×72	階段状	65	1.99	P10-P1	286			

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
8号掘立柱建物	側柱	3×2	6.88×5.19	35.71	N-33.5°-E				P5:土師器小甕（56）			25	26	8・9
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Kq2-3	無	楕円形	75×47	台形状	45	2.15	P1-P2	126	25	26	
		P2	Kq2-3,3-3	無	円形	70×64	台形状	30	2.31	P2-P3	138			
		P3	Kq3-3	無	楕円形	61×48	漏斗状	47	2.10	P3-P4	122			
		P4	Kq4-3・4	無	楕円形	53×38	台形状	25	2.31	P4-P5	138			
		P5	Kq4-4,5-4	無	楕円形	78×64	台形状	52	2.20	P5-P6	250			
		P6	Kq4-5	無	円形	47×43	台形状	34	2.27	P6-P7	198			
		P7	Kr3-1,4-1	無	楕円形	55×36	漏斗状	55	2.05	P7-P8	243			
		P8	Kr3-2	無	方形	60×58	箱状	37	2.29	P8-P9	281			8
		P9	Kr2-1,2-2	無	円形	56×56	漏斗状	47	2.12	P9-P10	245			
		P10	Kr1-1	無	円形	57×52	箱状	47	2.10	P10-P11	238			
		P11	Kq1-5	無	楕円形	37×27	U字状	37	2.26	P11-P12	187			
		P12	Kq1-4,2-4	無	楕円形	36×25	U字状	32	2.33	P12-P1	256			

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
9号掘立柱建物	総柱	2×2	3.50×3.36	11.76	N-26°-E				P5:須恵器無台杯（57）			27	28	8・9
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Jq3-3,4-3	無	円形	69×66	階段状	61	2.08	P1-P2	178	27	28	
		P2	Jq4-3	無	円形	70×65	階段状	50	2.14	P2-P3	158			
		P3	Jq5-3	無	円形	66×61	台形状	37	2.20	P3-P4	185			
		P4	Jq5-4	無	円形	62×55	台形状	36	2.27	P4-P5	183			
		P5	Jq5-5	無	長方形	60×49	台形状	42	2.13	P5-P6	183			
		P6	Jq4-4・5	無	円形	74×64	階段状	42	2.19	P6-P7	183			
		P7	Jq3-4	無	不整形	83×54	階段状	49	2.08	P7-P8	170			
		P8	Jq3-3・4	無	楕円形	71×50	階段状	40	2.20	P8-P1	181			
		P9	Jq4-3・4	無	楕円形	50×39	台形状	42	2.17					

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
10号掘立柱建物	総柱	2×2	3.85×3.56	13.71	N-22°-E		＞16土					29	30	8・9
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Iq4-5	有（59）	不整形	57×39	半円状	26	2.35	P1-P2	188	29	30	9
		P2	Iq5-5	無	長方形	68×40	半円状	29	2.30	P2-P3	168			
		P3	Jq1-5	無	長方形	56×42	階段状	42	2.20	P3-P4	203			
		P4	Jr1-1	無	長方形	63×51	台形状	43	2.20	P4-P5	182			
		P5	Ir5-2,Jr1-2	有（58）	円形	59×53	台形状	36	2.32	P5-P6	177			
		P6	Ir5-2	有	円形	52×49	台形状	42	2.12	P6-P7	179			
		P7	Ir4-1・2	有（60）	円形	59×55	階段状	37	2.25	P7-P8	178			
		P8	Ir4-1	有（61）	長方形	48×40	台形状	25	2.35	P8-P1	200			9
		P9	Ir5-1	無	楕円形	59×46	台形状	32	2.33					

遺構名	構造	平面形態	桁行×梁行（m）	面積（㎡）	主軸方位	関連遺構	重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
11号掘立柱建物	側柱	2×1	3.40×2.34	7.96	N-32.5°-E							22	23	
	柱穴		グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
		P1	Kp5-4	有（62）	楕円形	34×27	台形状	19	2.49	P1-P2	284	22	23	9
		P2	Lp1-4	有（63）	楕円形	39×32	U字状	20	2.53	P2-P3	174			
		P3	Lp1-5	無	楕円形	25×19	半円状	10	2.37	P3-P4	148			
		P4	Kq5-1	無	楕円形	(36)×(25)	台形状	20	2.43	P4-P5	273			
		P5	Kp4-5	有	円形	(25)×19	U字状	31	2.41	P5-P6	177			
		P6	Kp4-4・5	無	楕円形	36×26	弧状	4	2.62	P6-P1	168			

柵列

遺構名	長さ（m）	主軸方位	関連遺構			重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
1号柵列	6.9	N-40.5°-W	5掘立，15・16・17・41溝，1号杭列								17	19	7
	柱穴	グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
	P1	No3-3	無	楕円形	29×22	台形状	12	2.55	P1-P2	62	17	19	
	P2	No3-3	有	楕円形	31×24	台形状	17	2.53	P2-P3	100			
	P3	No4-3・4	有	円形	(31)×31	弧状	7	2.76	P3-P4	92			
	P4	No4-4	無	不整形	(35)×25	階段状	12	2.61	P4-P5	104			
	P5	No4-4	有	楕円形	23×19	箱状	17	2.58	P5-P6	88			
	P6	No5-4	有	楕円形	22×18	台形状	19	2.59	P6-P7	82			
	P7	No5-4・5	有	円形	25×22	台形状	17	2.59	P7-P8	33			7
	P8	No5-5	無	楕円形	20×15	台形状	13	2.64	P8-P9	51			
	P9	No5-5	有	円形	23×20	台形状	17	2.58	P9-P10	73			
	P10	Oo1-5	有	円形	18×15	台形状	18	2.58					

遺構名	長さ（m）	主軸方位	関連遺構			重複遺構・新旧関係		出土遺物			挿図 平面	挿図 断面	写真図版
2号柵列	(11.16)	N-36°-E				24溝＞					31	31	9
	柱穴	グリッド	柱根	平面形	長軸×短軸（cm）	断面形	深さ（cm）	底面標高（m）	柱間寸法（cm）				
	P1	Mo1-2,2-2	有	楕円形	20×16	V字状	15	2.56	P1-P2	58	31	31	9
	P2	Mo1-2	有	不整形	39×27	台形状	11	2.56	P2-P3	64			
	P3	Mo1-2	無	楕円形	16×14	U字状	12	2.53	P3-P4	15			
	P4	Mo1-2・3	無	楕円形	16×11	弧状	5	2.61	P4-P5	45			
	P5	Mo1-3	無	円形	25×23	台形状	12	2.55	P5-P6	55			
	P6	Mo1-3	無	楕円形	16×12	階段状	20	2.50	P6-P7	63			
	P7	Mo1-3	無	円形	20×17	半円状	16	2.52	P7-P8	24			
	P8	Mo1-3	無	楕円形	17×13	台形状	5	2.63	P8-P9	31			
	P9	Mo1-3・4	無	楕円形	15×11	台形状	15	2.53	P9-P10	176			
	P10	Lo5-4	有	円形	22×19	漏斗状	23	2.49	P10-P11	57			
	P11	Lo5-5	無	楕円形	21×17	V字状	18	2.55	P11-P12	29			
	P12	Lo5-5	無	楕円形	16×8	弧状	4	2.68	P12-P13	26			
	P13	Lo5-5	無	円形	14×12	台形状	12	2.60	P13-P14	80			
	P14	Lo5-5	有	円形	22×22	台形状	17	2.52	P14-P15	77			
	P15	Lo5-5,Lp5-1	有	円形	13×11	半円状	9	2.55	P15-P16	58			
	P16	Lp5-1	有	楕円形	(17)×13	台形状	14	2.55	P16-P17	44			
	P17	Lp5-1	無	円形	12×11	U字状	9	2.60	P17-P18	107			
	P18	Lp4-1・2,5-1・2	無	楕円形	21×15	U字状	23	2.43	P18-P19	107			
	P19	Lp4-2	無	長方形	47×27	階段状	26	2.34					

井戸・土坑

遺構名	グリッド	平面形	規模（cm）			断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
1号井戸	Nq4-3・4, 5-3・4	円形	166	165	77	半円状	N-30° -E	須恵器無台杯（64）		32	32	10
1号土坑	Lp5-1・2, Mo1-5, 2-5, Mp1-1・2, 2-1・2	不整形	(240)	(201)	23	弧状	N-50.5° -E	土師器鉢（65），斎串（66・67），丸木杭（68），木製盤（69）	≠9溝	33	33	10・11
2号土坑	Mr4-3	楕円形	75	63	11	弧状	N-23° -E	須恵器無台杯（70），須恵器杯蓋（71）	＞39溝	34	34	
3号土坑	Mr3-2・3, 4-2・3	不整形	198	180	16	弧状	N-34° -W	須恵器無台杯（72），須恵器有台杯（73）	＞39溝			11
4号土坑	Mr3-1・2, 4-1・2	楕円形	130	110	22	弧状	N-87° -W	須恵器有台杯（76）	＞39溝			
5号土坑	Mr4-1・2, 5-1, 2	長方形	180	154	14	台形状	N-59.5° -W		＞39溝			
6号土坑	Mr2-2, 3-2	楕円形	98	62	20	階段状	N-32° -E		＞39溝			
7号土坑	Mp4-1, 5-1・2	長方形	167	129	6	弧状	N-60° -E	須恵器有台杯（74），土師器高杯（75），斎串（79），曲物底板（80）				11
8号土坑	Nq5-1	楕円形	93	76	20	半円状	N-34° -E					
9号土坑	Op2-2・3	楕円形	86	61	10	台形状	N-50° -E		≠10溝			
10号土坑	Kr3-4, 4-4	楕円形	98	68	12	階段状	N-50° -E			35	35	
11号土坑	Kp1-4・5	楕円形	126	57	10	弧状	N-54° -E					11
12号土坑	Kp1-4・5, 2-5	不整形	120	83	30	台形状	N-79° -E					
13号土坑	Iq2-3・4	楕円形	111	92	9	半円状	N-80° -W					
14号土坑	Jr2-1, 3-1・2	長方形	172	(108)	12	弧状	N-30.5° -W	須恵器杯蓋（77），土師器甕（78）				
15号土坑	Jr3-2・3, 4-2・3	楕円形	225	171	13	弧状	N-52° -W					12
16号土坑	Ir5-2, Jr1-1・2	不整形	(329)	160	18	弧状	N-87.5° -E	須恵器無台杯（81）	10掘立＞			
17号土坑	Kp5-5, Kq5-1, Lp1-5, Lq1-1	楕円形	171	(106)	12	台形状	N-83° -W		7掘立＞, 11掘立＞			

ピット

遺構名	グリッド	平面形	規模（cm）			底面標高	柱根	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真図版
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	
P1	Mp3-5	楕円形	(37)	35	33	2.38	無		2掘立-P7＞			
P2	Mq4-3	楕円形	48	25	28	2.45	無					
P3	No4-5, Np4-1	楕円形	24	18	17	2.61	有			37	37	
P4	Nr2-1	楕円形	45	31	29	2.41	有					
P5	Mq1-1	楕円形	27	19	19	2.48	無					
P6	Mp2-5, Mq2-1	円形	25	23	10	2.53	無					
P7	Mp3-5, Mq3-1	楕円形	46	28	29	2.40	有			37	37	
P8	Mp5-5	方形	26	24	21	2.47	無					
P9	Mp3-4	楕円形	42	29	33	2.44	無					
P10	Mp4-4	楕円形	47	35	23	2.45	無					
P11	Mp4-4	不整形	30	27	20	2.49	無					
P12	Mp3-4	楕円形	25	21	15	2.53	無					
P13	Mp5-3	円形	22	20	15	2.53	無					
P14	Mp5-3	楕円形	29	23	16	2.53	無					
P15	Mp5-3	楕円形	26	21	12	2.57	無					
P16	Mp5-3	不整形	39	26	26	2.42	無					
P17	Mp4-4	円形	23	22	12	2.54	無					
P18	Np2-2・3	楕円形	30	21	22	2.49	無					
P19	Mq4-3	楕円形	48	29	16	2.55	有			37	37	
P20	Mq5-4	楕円形	36	25	13	2.56	有					
P21	Mq4-3	円形	18	16	14	2.58	無					
P22	Oq1-4	楕円形	33	26	22	2.49	無					
P23	Op3-2・3	円形	23	21	20	2.55	無		≠2杭列			
P24	Mp5-2	楕円形	23	18	8	2.58	無					
P25	Mp4-1	不整形	60	40	23	2.44	無	曲物側板（82）	＞23溝			
P26	Mp1-3	楕円形	(22)	(16)	16	2.57	無		＞23溝			
P27	No3-5	不整形	45	39	12	2.64	無		＞18溝			
P28	Lp1-4	円形	28	25	15	2.56	無					
P29	Np3-1	楕円形	25	18	16	2.58	無					
P30	Lp1-1	楕円形	32	25	20	2.43	無					
P31	Mp2-3	円形	32	28	8	2.59	有			37	37	
P32	Lp2-2	不整形	45	23	17	2.49	有					
P33	Op1-1	楕円形	35	25	16	2.58	無					
P34	Lr1-5	円形	19	17	13	2.51	無					
P35	Kr4-4・5	楕円形	53	37	16	2.48	無					
P36	Kr1-3・4	楕円形	47	44	19	2.47	無					
P37	Kr5-1・2	楕円形	46	23	19	2.34	無					
P38	Kr4-1, 5-1・2	円形	26	22	10	2.47	無					
P39	Kr5-1	円形	36	35	27	2.29	無					
P40	Kr4-1	円形	27	26	29	2.34	無					
P41	Kr4-1	不整形	85	57	38	2.24	無					
P42	Kr1-1	不整形	44	33	39	2.27	無					

遺構名	グリッド	平面形	規模（cm）			底面標高	柱根	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真
			長軸	短軸	深さ					平面	断面	図版
P43	Lq1-5	楕円形	32	19	25	2.38	無					
P44	Lq1-4	楕円形	50	32	48	2.10	無	須恵器無台杯（83）				
P45	Lq1-4	楕円形	31	22	25	2.36	無	須恵器無台杯（84）				
P46	Lq2-4	楕円形	59	40	34	2.33	無					
P47	Kq5-3・4, Lq1-3・4	楕円形	68	36	32	2.28	有			37	37	
P48	Lq1-5	円形	43	39	16	2.42	無					
P49	Kq2-5	楕円形	24	17	15	2.49	無					
P50	Kq2-4	円形	25	21	15	2.51	無					
P51	Kq4-5	楕円形	24	20	20	2.42	無					
P52	Kq5-5, Kr1-5	楕円形	24	20	17	2.49	無					
P53	Kq5-4	楕円形	46	35	13	2.50	有（85）			37	37	
P54	Kq5-4	円形	37	35	22	2.41	有（86）					
P55	Kq5-3	円形	45	45	44	2.36	無					
P56	Kq3-4	円形	32	28	33	2.35	無					
P57	Kq4-3	長方形	28	20	18	2.48	無					
P58	Kq1-5	不整形	25	21	29	2.37	無					
P59	Kq1-4	円形	37	33	47	2.19	無					
P60	Kq1-4	楕円形	24	19	26	2.38	無					
P61	Kq1-3	円形	19	18	20	2.42	無					
P62	Kq1-3	楕円形	28	17	18	2.50	無					
P63	Kq2-2, 3-2	楕円形	21	16	11	2.49	無					
P64	Lq3-5, 4-5	楕円形	77	46	15	2.46	無					
P65	Jq5-4, Kq1-4	不整形	21	15	25	2.38	無					
P66	Jq5-1	楕円形	24	17	23	2.40	無					
P67	Jq5-2	長方形	23	20	34	2.31	無					
P68	Jq3-2	不整形	70	54	19	2.29	無					
P69	Jq3-3	楕円形	28	23	32	2.34	無					
P70	Jq3-3	楕円形	35	29	24	2.42	無					
P71	Jq4-3	円形	22	20	25	2.40	無					
P72	Jq4-3	楕円形	32	27	21	2.38	無					
P73	Jq5-5	長方形	20	16	29	2.35	無					
P74	Jq5-5	楕円形	29	23	25	2.43	無					
P75	Jq5-5	方形	17	16	21	2.44	無					
P76	Jq5-5	長方形	23	18	24	2.39	無					
P77	Jr5-5	円形	26	23	27	2.35	無					
P78	Lp3-2	楕円形	32	25	23	2.42	無					
P79	Lp2-3, 3-3	円形	24	24	12	2.44	有					
P80	Lp3-2	円形	35	34	5	2.57	無					
P81	Lq3-4, 4-4	楕円形	54	39	13	2.45	有（87）		＞1溝	37	37	12
P82	Lq4-3, 5-3	不整形	44	35	47	2.17	無					
P83	Lr1-4	楕円形	26	17	13	2.48	無		＞31溝			
P84	No4-4	不整形	47	30	26	2.47	無					
P85	Nq1-3	円形	22	21	29	2.44	無					
P86	Mp2-4	楕円形	29	16	9	2.67	有					
P87	Kr5-2	—	10	7	—	—	有					
P88	Lp1-5	楕円形	20	16	—	2.62	有			37	37	
P89	Lq1-1	円形	22	21	4	2.55	有					
P90	Lq4-3	円形	36	35	5	2.54	有					

溝

遺構名	グリッド	規模（cm）			断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真
		長さ	幅	深さ					平面	断面	図版
1号溝	Lq4-4, 5-4・5	354	84	10	弧状	N-49.5° -W	須恵器杯蓋（85），須恵器長頸壺（89）	P81＞	39	39	13
2号溝	Mp5-2～4	129	48	6	弧状	N-8.5° -E		＞3掘立			
3号溝	Lp5-5, Lq5-1, Mp1-5, 2-5, Mq1-1, 2-1, 3-1・2	609	94	12	台形状	N-59.5° -W			12	13	6
4号溝	Lp5-2, Mp1-2・3, 2-2・3, 3-2・3, 4-3, 5-3	(964)	74	11	台形状	N-56.5° -W	須恵器無台杯（21），須恵器有台杯（22）、須恵器杯蓋（23），土師器甕（24～26・28），土師器鉢（27），土師器小甕（29），土師器鍋（30）	＝2掘立，＞1土			
5号溝	Mq1-3・4, 2-3・4, 3-4・5, 4-5, 5-5Mr4-1, 5-1	826	58	14	半円状	N-44° -W	須恵器無台杯（1），土師器椀（2）	＝38溝	9	10	4・5
6号溝	Nq3-3・4, 4-2～5, 5-2～5, Oq1-3・4	1452	46	11	半円状			＝10溝・14溝	32	32	10
7号溝	Mp4-5, Mq4-1, 5-1Nq1-1・2, 2-1・2	754	53	18	台形状	N-50.5° -W	須恵器折縁杯（3）	＝8溝	9	10	5
8号溝	Mp4-5, 5-5、Mq4-1, 5-1、Nq1-1・2, 2-1・2, 3-2	704	88	13	弧状	N-44° -W	須恵器無台杯（5・6），須恵器皿（8），土師器台付鉢（7）	＝7溝			
9号溝	Mp2-1・2, 3-1・2, 4-2・3, 5-2・3	618	54	15	半円状	N-54.5° -W	須恵器有台杯（23）		12	13	6
10号溝	Np5-5, Nq4-1・2, 5-1・2, Op1-3～5, 2-2～4	1268	80	15	階段状	N-46° -E	須恵器有台杯（90）	＝6溝	40	40	13
11号溝	Np4-4・5, 5-3・4, Nq3-1, 4-1, Op1-2・3	(1109)	32	14	台形状	N-45° -E		21溝＞36溝＞			
12号溝	Op2-5, 3-4・5, 4-4・5, 5-4・5, Oq2-1, 3-1	(634)	47	8	弧状	N-38° -W			41	41	
13号溝	Mq2-4, 3-3・4, 4-3・4, 5-5	422	54	8	弧状	N-46° -W		＝1掘立	9	10	5
14号溝	Nq1-4・5, 2-3～5, 3-3～5	(492)	146	11	弧状	N-57° -E		＝6溝			
15号溝	No1-5, Np1-1, 2-1・2, 3-1・2, 4-2, 5-2	(652)	191	16	弧状	N-49.5° -W	角杭（41・42）		17	19	7

遺構名	グリッド	規模（cm）			断面形	主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真図版
		長さ	幅	深さ					平面	断面	
16号溝	No1-5, 2-4・5, 3-3・4, Np1-1, 2-1	591	(184)	16	弧状	N-43° -E	箸状木製品（43）	＝17・41溝・1柵列	17	19	7
17号溝	No3-3・4, 4-3・4, 5-4・5, Oo1-5, Op1-1	824	61	17	弧状	N-39° -W	須恵器長頸壺（39），板（44）	＝5掘立・1柵列・1杭列			
18号溝	No3-5, 4-5, Np4-1, 5-1・2	(350)	31	15	台形状	N-25° -W		＞5掘立	40	40	13
19号溝	No2-5, Np2-1, 3-1, 4-1	(137)	17	5	弧状	N-45° -W		＝5掘立	17	19	
20号溝	No4-5, 5-5, Np5-1	(355)	23	8	台形状	N-24° -W		＞5掘立	40	40	13
21号溝	Np5-2, Op1-1・2	243	28	10	半円状	N-41° -E	須恵器無台杯（91）	＞36溝＞11溝	39	39	14
22号溝	Mo4-2～5, 5-4・5	638	37	11	台形状	N-2° -W			41	41	
23号溝	Mp2-1, 3-1・2, 4-1・2	326	(52)	8	弧状	N-55° -W		P25＞, P26＞	39	39	
24号溝	Lo5-4・5, Lp5-1・2	411	53	7	弧状	N-12° -E		＞2柵列			
25号溝	Kp1-2・3, 2-1～4, 3-1～4, 4-2～4	1451	41	9	弧状	N-30.5° -W		26溝＞	41	41	14
26号溝	Kp2-2, 3-2	117	19	8	半円状	N-78° -W		＞25溝			
27号溝	Lp1-4, 2-4	223	64	11	弧状	N-58.5° -W	須恵器無台杯（92），須恵器有台杯（93～96）	7掘立＞	42	42	14
28号溝	Lp1-3・4, 2-3・4	161	95	4	弧状	N-55.5° -W	須恵器無台杯（97～100），須恵器有台杯（101），土師器甕（102）				
29号溝	Iq2-4・5, 3-4・5, 4-3・4, 5-2～4, Jp1-5, 2-2～5, 3-1～3, Jq1-1～3, 2-1・2	2318	84	10	弧状	N-47° -E	須恵器無台杯（121）		43	43	
30号溝	Kr5-4, Lr1-4・5, 2-4・5	494	49	10	弧状	N-62.5° -W		＝6掘立	41	41	15
31号溝	Lr1-4, 2-4	193	74	10	弧状	N-63° -W	土師器壺（50）	6掘立＞	42	42	
32号溝	Kr3-4, 4-3・4	346	40	7	台形状	N-78° -E		＝33溝	44	44	15
33号溝	Jr4-3・4, 5-3・4, Kr1-3・4, 2-4・5, 3-4・5, 4-5	1097	104	18	台形状	N-49.5° -W	須恵器無台杯（108～114），須恵器長頸壺（115），須恵器横瓶（116），土師器甕（117～119），土師器台付鉢（120）	＝32溝			
34号溝	Kp4-5, 5-4・5, Kq4-1, 5-1	451	101	11	台形状	N-54° -E	須恵器甕（124）	＞11掘立	42	42	
35号溝	Op1-1・2, 2-1・2	199	59	11	弧状	N-27.5° -W		＞1杭列	39	39	
36号溝	Op1-1・2, 2-2	(158)	(50)	13	半円状	N-33.5° -W		21溝＞, ＞11溝			
37号溝	Lq2-2	86	28	5	弧状	N-54.5° -W		7掘立＞	42	42	
38号溝	Mq1-1～3, 2-1～3, 3-1・2	721	262	15	台形状	N-41.5° -E	須恵器無台杯（9～12），須恵器折縁杯（13），須恵器有台杯（14），須恵器杯蓋（15），土師器高杯（16），土師器小甕（17）	≠3溝, ＝5溝	9	10	2・5
39号溝	Lr5-2・3, Mr1-2・3, 2-1～3, 3-1～3, 4-1～3, 5-2～4, Nr1-3・4, 2-4	(1278)	453	15	台形状	N-64° -W	須恵器長頸壺（103），須恵器円面硯（104）	2～6土＞	45	45	16
40号溝	Mq5-1, Nq4-5, Nq1-1・2, 2-1・2, 3-1・2, 4-1・2, 5-1・2, Or1-1・2, 2-1・2, 3-1・2, 4-1・2, 5-1・2	1939	242	10	弧状	N-74° -W	須恵器無台杯（105），土師器小甕（106），土師器鉢（107）				
41号溝	Mo5-3・4, No1-2～5, 2-2～5	460	458	19	台形状	N-41° -W	不明木製品（40）	＝16溝	17	19	7

杭列

遺構名	グリッド	規模（cm）		主軸方位	出土遺物	重複遺構・新旧関係	挿図		写真図版
		長さ	幅				平面	断面	
1号杭列	No4-4, 5-4・5, Oo1-5, Op1-1, 2-1	776	61	N-32.5° -W		35溝＞, ＝17溝	17	19	7
2号杭列	Op2-2, 3-2・3, 4-3, 5-3	507	64	N-49.5° -W		＝10溝	48		
3号杭列	No5-3・4, Oo1-3・4	276	141	N-57° -W		＝1流路			

表４　遺物観察表

・遺構の略称：井＝井戸，土＝土坑，掘立＝掘立柱建物
・計測値：（）内の数値は，推定値または残存値を示す。
・遺存度：特に部位を特定していないものは，全体の中の遺存度を示す。
・整形・調整：ロクロ＝ロクロナデ。ロクロに続く（）はロクロの回転方向を示す。→は調整の順序（（先）→（後））。
・重焼き：分類は（春日1989）に準ずる。
・胎土の略称：雲＝雲母，骨＝海面骨針，褐＝褐色粒子，金雲＝金雲母，石＝石英，炭＝炭化物，長＝長石，白＝白色粒子

土器・土製品

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
1	5溝・2土	Mr3-3	1	須恵器	無台杯B2	(12.9)	3.2	7.5	1/2	ロクロ（右），糸きり	C	N5/0 灰	道婦窯周辺。3mm以下の長多	狼沢２号か	焼成良好，内外面火だすき	11	17
2	5溝	83トレンチ	2	土師器	無台椀A1	14.6	4.9	7.6	9/10	ロクロ，糸きり		10YR7/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石少	坂ノ沢C２－１期	焼成不良，内外面擦れ顕著		
3	7・38溝	Mq2-2・Nq1-1		須恵器	折縁杯A	(12.8)	4.0	6.8	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	C	10Y7/1 灰白	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上３号	焼成良好，高台内「×」墨書		
4	14溝	Nq		須恵器	無台杯B2	(11.6)	3.2	8.2	1/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5BG5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長多	小泊３段階	焼成硬質，内外面擦れ		
5	8溝	Mp5-5 Np5-5		須恵器	無台杯A2	13.7	3.7	11.0	2/5	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺か	焼成不良		
6	8溝	Mp5-5		須恵器	無台杯B2	(13.2)	3.5	8.0	1/4強	ロクロ	C	N8/0 灰白	高山寺窯周辺。精選，2～3mmの長微量	高山寺	焼成良好，内面擦れ顕著		
7	8溝	Np5-5		土師器	有台盤B	(9.8)	－	－	脚部の1/6	ロクロ		10YR7/2 にぶい黄橙	6mm以下の長・石多		焼成良好		17
8	8溝	Nq2-1		須恵器	有台盤	－	－	(14.9)	底部の1/4	ロクロ（左）		7.56/1 灰	小泊窯群。微小な長少	小泊３段階以前	焼成やや硬質		
9	38溝	Mq1-1	1	須恵器	無台杯B2	11.6	3.4	7.6	2/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	堤上窯周辺。2mm以下の長・石大量，炭	馬上３号	焼成硬質，口縁部擦れ		
10	38溝	Mq2-3	1	須恵器	無台杯B2	13.6	3.5	9.9	ほぼ完存	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N7/0 灰白	堤上窯周辺。3mm以下の長・石大量，炭多	高山寺～馬上３号	焼成良好，内外面擦れ		
11	38溝	Mq2-3		須恵器	無台杯B2	(12.2)	3.4	8.0	1/2弱	ロクロ（右か）	C	N6/0 灰	堤上窯周辺。5mm以下の長・2mm以下の石大量	馬上３号	焼成硬質，内外面擦れ		
12	38溝	Mq2-3		須恵器	無台杯B2	12.8	3.7	8.3	ほぼ完存	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5GY7/1 明オリーブ灰	岡屋敷～馬上窯周辺。3mm以下の長・石・炭多	高山寺	焼成良好，口縁部・底部内面擦れ		
13	38溝	Mq3-2	1	須恵器	折縁杯B	(12.1)	(4.1)	(6.2)	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上３号	焼成良好		17
14	38溝	Mq3-1	1	須恵器	有台杯A1	(12.8)	3.7	8.0	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	B2	10BG6/1 青灰	高山寺～馬上窯周辺。2mm以下の長・石多	高山寺	焼成堅緻，内面擦れ		
15	38溝	Mq2-3		須恵器	有台杯A蓋	14.0	3.1	2.7	4/5	ロクロ（右），ヘラキリ	A	N8/0 灰白	高山寺～馬上窯周辺。5mm以下の長・石多	高山寺	焼成堅緻		17
16	38溝	Mq2-2	1	赤彩土器	高杯A	25.3	15.5	13.5	口縁部の1/2を欠く	外：ロクロ→ヘラミガキ，内：ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	微小な長・石微量。搬入か		焼成軟質，内外面赤彩，底部焼成前穿孔		2
17	38溝	Mq3-2		土師器	鉢1a	(8.6)	－	－	1/6	ナデ，体部下半ヘラケズリ		10YR7/4 にぶい黄橙	3mm以下の長・石多		焼成良好		17
18	2掘立P3	Mp3-3		須恵器	有台杯A2	(13.0)	－	－	1/5	ロクロ（右），ヘラキリ		7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺か	焼成軟質	14	
19	2掘立P5	Mp4-5	1	須恵器	有台杯A蓋	－	－	2.9	3/5	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y7/3 浅黄	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺以前	焼成不良		
20	9・41溝	Mp4-2・No2-4・2-5	1	須恵器	有台杯A2	13.1	4.0	7.2	1/2強	ロクロ（左），ヘラキリ	B2	N6/0 灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石少	高山寺	焼成硬質		17
21	4溝	Mp1-2	1	須恵器	無台杯A2	12.6	3.9	8.5	ほぼ完存	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	高山寺窯周辺。精良，2mm以下の長・褐	高山寺	焼成硬質，内面擦れ顕著，体部外面に「×」墨書		
22	4溝	Mp4-3・5-2		須恵器	有台杯B2	(15.0)	7.2	8.4	1/3	ロクロ，ヘラキリ	Aか	2.5GY6/1 オリーブ灰	堤上周辺。5mm以下の長・石大量	高山寺以前	焼成硬質，内面擦れ		
23	4・9溝	Mp4-2・4-3	1	須恵器	有台杯A蓋	14.2	3.1	2.8	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	A	N7/0 灰白	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成堅緻，内面ヘラ記号		17
24	4溝	Mp	1	土師器	甕C1a	(12.0)	－	－	口縁部の1/4	カキメ→ロクロ		10YR6/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成良好，内外面スス付着		
25	4溝	Mp3-3		土師器	甕B1a	(15.0)	－	－	口縁の1/8	口：ロクロ，外・内：カキメ		2.5Y7/2 灰黄	2mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成不良		
26	4溝	Mp2-2		土師器	甕A1b	(22.0)	－	－	口縁部の1/4弱	外：ロクロ，内：カキメ		2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石多		焼成軟質		
27	4溝	Mp4-3		土師器	甕C1	－	－	(7.2)	底部の1/4	外：ヘラケズリ，糸きり，内：ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	6mm以下の長・石多		焼成軟質		
28	4溝	Mp3-3	1	土師器	甕C2か	－	－	(6.2)	底部の1/2	外：ヘラケズリ，内：ハケメ		10YR8/3 浅黄橙	3mm以下の長・石多		焼成不良。ロクロ不使用か		
29	4溝	Mp3-3・4-3		土師器	甕B1	－	－	(7.8)	底部の1/2弱	外：ナデ，内：ナデ→カキメ		2.5Y8/3 浅黄	3mm以下の長・石少		焼成不良，内面スス付着		
30	4溝・7土	Mp4-1・4-3		土師器	鍋A1b	(31.0)	－	－	口縁部の1/2	タタキ→カキメ→ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石少		焼成軟質		17

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）			遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
						口径	器高	底径（摘径）									
38	5掘立P5・15a・17溝・1a流路	No5-1・5-5・Np2-1・Oo3-4・Op1-1		土師器	甕B1b	21.8	—	—	口縁部の1/2	外：ハケメ→カキメ→ロクロ，内：ハケメ→カキメ→ロクロ		2.5Y6/2 灰黄	3mm以下の長・石多		焼成良好，口縁部外面スス付着	20	17
39	17溝	No5-5		須恵器	長頸瓶A	—	—	—	体部の1/6	ロクロ（右）		5Y5/2 灰オリーブ	高山寺窯周辺。微小な長少		焼成堅緻	20	
46	6掘立P3	Lr2-4	1	須恵器	有台杯A1か	11.8	—	—	口縁部の1/4	ロクロ（左）	B	10Y6/1 灰	小泊窯群。微小な長少	小泊3段階以前	焼成硬質	21	
47	6掘立P3	Lr2-4	1	須恵器	無台杯B2	(11.6)	3.1	(8.0)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	N7/0 灰白	小泊窯群。精良，微小な白多	小泊5段階	焼成やや軟質，内外面擦れ		
48	6掘立P2	Lr1-4		須恵器	折縁杯A	(13.6)	4.1	(6.6)	1/3	ロクロ，ヘラキリ	C	N6/0 灰	馬上3号窯周辺。2mm以下の長・石多，1mm程の褐	馬上3号	焼成良好，全面擦れ顕著，高台内墨痕か		
49	6掘立P5		3	土師器	甕C1	—	—	(9.0)	底部の1/5	外：ヘラケズリ，内：ナデ		10YR8/4 浅黄橙	2mm以下の長・石多		焼成軟質		
50	31溝・P83	Lr1-4		土師器	甕B1b	18.8	—	—	口縁部の1/8	口：ロクロ，外・内：カキメ		10YR7/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成軟質，外面擦れ顕著，口縁部内面スス付着		
51	7掘立P3	Lp3-5	3	須恵器	有台杯A1	12.3	—	—	口縁部・体部の1/3	ロクロ（右）	B	2.5GY7/1 明オリーブ灰	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好	24	
52	7掘立P1	Lp1-4	2	須恵器	無台杯B	—	—	(8.6)	底部1/4	ロクロ（右），ヘラキリ		7.5Y7/1 灰白	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号～狼沢2号	焼成良好		
53	7掘立P9	Kq5-1	1	須恵器	有台杯蓋	—	—	2.8	摘部のみ	ロクロ（左）		N7/0 灰白	堤上窯周辺。				
54	7掘立P3 8掘立P5	Lp3-5 Kq4-4		須恵器	有台杯A蓋	13.0	—	—	1/5	ロクロ（左），ヘラキリ	A	N6/0 灰	高山寺窯周辺。微小な長少	馬上3号	焼成堅緻，内面擦れ顕著，墨痕あり転用硯か		22
55	7掘立P4	Lp5-5		土師器	甕C1	—	—	5.2	底部の2/3	外：ヘラケズリ，内：ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	3mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成良好		
56	8掘立P5	Kq4-4		土師器	甕C1	—	—	(8.2)	底部の3/4	外：ロクロ，内：カキメ→ロクロ		2.5Y8/3 浅黄	6mm以下の長・石多		焼成不良		
57	9掘立P5	Jq5-5 Kr1-3		須恵器	無台杯B2	(13.0)	3.1	10.0	3/5	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成良好		
64	1井	Nq4-3	2	須恵器	無台杯C1	12.8	—	—	口縁部の1/5	ロクロ（左）		2.5Y7/2 灰黄	道婦窯周辺。3mm以下の長・石多	道婦	焼成不良	32	
65	1土	Mp1-1		土師器	甕C1	—	—	8.2	底部の3/4	外：ケズリ，内：カキメ，底：板痕		7.5YR7/6 橙	2mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成良好，外面に被熱痕	33	17
70	2土	Mr3-3	1	須恵器	無台杯A2	12.0	3.2	(9.0)	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y6/1 黄灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号か	焼成硬質	36	
71	2土	Mr4-3		須恵器	有台杯A蓋	(13.6)	(3.2)	2.5	1/8	ロクロ		5GY6/1 オリーブ灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺	焼成硬質		
72	3土	Mr2-2		須恵器	無台杯B1	(11.8)	2.8	(8.0)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な白多，5mm程の石英または流紋岩	小泊5段階	焼成硬質，内外面擦れ		
73	3土	Mr2-2	1	須恵器	有台杯C2	(9.8)	5.2	5.0	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N5/0 灰	馬上窯周辺。1～2mmの長・石多	馬上3号	焼成硬質，口縁部擦れ		
74	7土	Mp5-1	1	須恵器	折縁杯A	—	—	7.0	底部の3/4弱	ロクロ（右），ヘラキリ		7.5Y6/1 灰	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成硬質		
75	7土	Mp5-1		赤彩土器	杯蓋	—	—	(14.5)	裾部の1/4	ロクロ		10YR7/2 にぶい黄橙	微小な長・石少。搬入か		焼成軟質，内外面赤彩		17
76	4土・40溝	Mr2-2・3-2		須恵器	有台杯B	—	—	7.5	底部の7/8	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y7/3 浅黄	小泊窯群。微小な長多	小泊4段階	焼成堅緻		
77	14土	Jr3-1		須恵器	有台杯A蓋	13.2	(3.1)	3.2	1/4	ロクロ(右)	A	7.5Y6/1 灰	高山寺窯周辺。胎土精良，6mm以下の長・石多	高山寺	小泊窯群産類似。焼成堅緻		18
78	14土	Jr3-1		土師器	甕C1	—	—	(6.0)		ロクロ，腰部ケズリ		10YR8/2 灰白	3mm以下の長・石多				
81	16土	Jr1-2	1	須恵器	無台杯B2	11.6	2.8	7.8	1/2弱	ロクロ，ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	小泊窯群。精良，3mm以下の長多	小泊5段階	焼成良好，内外面擦れ顕著		
83	P44	Lq1-4		須恵器	無台杯A1	(12.6)	(3.2)	(10.0)	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ		5GY6/1 オリーブ灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好	38	
84	P45	Lq1-4		須恵器	無台杯B1	13.6	3.9	8.5	2/3	ロクロ（左），ヘラキリ後底部～腰部ロクロケズリ	C	7.5Y7/1 灰白	小泊窯群。微小な白多，骨	小泊1段階	焼成瓦質		18
88	1溝	Lq4-4	2	須恵器	有台杯A蓋	14.6	—	—	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	A	7.5Y6/1 灰	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多	元山4号～貝屋	焼成良好，内面擦れ	46	
89	1・40溝	Lq5-4 Mr3-2	1	須恵器	短頸壺	—	—	8.7	底部の1/2	タタキ→ロクロ（左）		5Y8/1 灰白	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成堅緻		
90	10溝	Op2-2		須恵器	無台杯C2	(12.4)	4.1	6.4	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	道婦窯周辺。2～3mmの長多，石・骨	道婦	焼成硬質，内面擦れ，底部外面に「×」墨書		18

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
91	21溝	Op1-2		須恵器	無台杯C	－	－	7.0	底部のみ	ヘラキリ		2.5Y6/2 灰黄	道婦窯周辺。6mm以下の長・石少	道婦	焼成不良	46	
92	27溝	Lp2-4		須恵器	無台杯B	－	－	(9.6)	口縁部欠損 7/8	ヘラキリ		10Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	元山4号～貝屋	焼成硬質		
93	27溝	Lp1-4		須恵器	有台杯A2	12.6	3.5	6.9	ほぼ完存	ロクロ（右），ヘラキリ	ふせ焼きか	N6/0 灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	元山4号	焼成堅緻，歪み顕著		
94	27溝	Lp2-4		須恵器	有台杯A2	13.2	4.4	9.0	2/3	ロクロ，ヘラキリ	AまたはB	2.5GY7/1 明オリーブ灰	岡屋敷～堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	元山4号	焼成硬質，内面擦れ		
95	27溝	Lp1-4		須恵器	有台杯A1	(13.2)	3.9	8.5	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	A	5B6/1 青灰	堤上窯周辺。5mm以下の長・石大量	元山4号	焼成硬質，内面擦れ，高台内墨痕		18
96	27溝	Lp2-4		須恵器	有台杯A1	(14.0)	4.4	(7.8)	1/2弱	ロクロ（右），ヘラキリ	A	5B6/1 青灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石大量，頁岩または流紋岩	元山4号	焼成硬質，内面擦れ		21
97	28溝	Lp2-4		須恵器	無台杯B1	11.7	－	－	口縁部・体部の1/3	ロクロ（左）		2.5Y7/2 灰黄	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石少		焼成不良		
98	28溝	Lp2-3		須恵器	無台杯B1	12.6	3.2	8.2	2/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y7/1 灰白	高山寺窯周辺。2mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，内外面擦れ		18
99	28溝	Lp2-3		須恵器	無台杯A1	(11.4)	3.0	(7.8)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	N6/0 灰	堤上窯周辺。2mm以下の長・石大量	馬上3号	焼成硬質，内面擦れ		
100	28溝	Lp2-3		須恵器	無台杯A1	11.8	3.8	9.2	2/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	%BG6/1 青灰	堤上窯周辺。2mm以下の長・石・炭多	馬上3号	焼成硬質，内面擦れ		
101	28溝	Lp2-4		須恵器	有台杯D	－	－	－	体部の1/4	ロクロ（右）		5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成堅緻	46	
102	28溝	Lp2-4		土師器	甕A1	－	－	－	胴部の1/8	外：ハケメ→カキメ→ナデ，内：ハケメ→ナデ→カキメ		2.5Y6/2 灰黄	3mm以下の長・石・微小な雲多		焼成良好		
103	39溝	Nr4-2	1	須恵器	長頸壺B	8.0	－	－	口縁部の1/3	ロクロ（右）		N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成良好		
104	39溝	Nr5-2		須恵器	円面硯	－	－	(17.0)	脚部の1/4弱	ロクロ（右）		N6/0 灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成硬質，4方向に方形の透かし孔		18
105	40溝	Mr3-3		須恵器	無台杯B2	(11.9)	－	－	1/5	ロクロ（右）	C	5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な長少	小泊4段階	焼成硬質		
106	40溝	Mr4-3	1	土師器	鉢1b	9.4	－	－	口縁部・体部の1/2	ロクロ→体部下半ヘラケズリ		2.5Y7/2 灰黄	3mm以下の長・石多，微小な雲少		焼成良好		18
107	40溝	Mr5-3	1	土師器	鍋A2a	(28.0)	－	－	口縁部・体部の1/4	外：ハケメ→ロクロ，内：カキメ→ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石少		焼成軟質		
108	33溝	Jr5-4		須恵器	無台杯B2	12.0	3.1	7.2	4/5	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	小泊窯群。微小な長多	小泊4段階	焼成良好，やや歪み有，内外面擦れ，腰部外面筆痕，底部外面に「×」墨書		22
109	33溝	Kr3-5		須恵器	無台杯B2	(12.9)	(3.6)	9.0	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成不良		
110	33溝	Kr3-5		須恵器	無台杯B1	12.0	3.5	7.9	完存	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	小泊窯群。微小な長多	小泊3段階	焼成良好，内面擦れ		
111	33溝	Kr2-4		須恵器	無台杯B	－	－	(9.0)	1/8以下	ロクロ（右），ヘラキリ		N7/0 灰白	高山寺窯周辺。微小な長少		焼成硬質		
112	33溝 7掘立	Kr3-5 Lq1-2	2	須恵器	無台杯A2	12.2	(3.4)	8.8	1/5	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成軟質		
113	33溝	Kr3-5		須恵器	無台杯A1	(13.0)	5.6	(8.4)	1/4	ロクロ	C	2.5Y8/1 灰白	馬上窯周辺。精良，1mm程の長・石微量，6mm以下の花崗岩	馬上3号	焼成瓦質，内外面擦れ，底部外面板目痕		
114	33溝	Kr3-5	1	須恵器	無台杯A2	(13.9)	(3.6)	(9.1)	1/6	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N7/0 灰白	高山寺～馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺～馬上3号	焼成良好	47	
115	33溝	Kr2-4・3-4		須恵器	長頸壺A	－	(22.9)	10.4	4/5 口縁欠損	ロクロ，沈線頸部1・肩部3		N5/0 灰	馬上窯周辺。4mm以下の長・石大量	馬上3号	焼成堅緻，頸部環状凸帯，底部焼成後穿孔		18
116	33溝	Kr3-5		須恵器	横瓶	－	－	－	底部の1/6	タタキ→ロクロ（左）		N6/0 灰	高山寺窯周辺。6mm以下の長少		146と同一個体。焼成堅緻，底部外面に墨痕		
117	33溝	Jr4-3		土師器	甕B1a	19.0	－	－	口縁部・体部の1/6	外：カキメ→ロクロ，内：ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石少		焼成軟質，内外面スス付着，口縁部内面炭化物付着		18
118	33溝	Kr2-4		土師器	甕B1	－	－	(8.0)	底部の1/4	外：ヘラケズリ，内：ナデ		10YR8/3 浅黄橙	3mm以下の長・石多		焼成不良		
119	33溝	Kr3-5		土師器	甕C1	－	－	5.4	底部のみ	ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	6mm以下の長・石多		焼成不良		
120	33溝・14土	Jr3-2・5-3・		土師器	有台盤A	－	－	(24.1)	脚部の1/2	ナデ，ユビオサエ		2.5Y7/2 灰黄	2mm以下の長・石多		焼成良好，二次的に被熱		18

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
121	29溝	Iq2-5	1	須恵器	無台杯B2	(11.4)	3.0	8.0	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10BG5/1 青灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊4～5段階	焼成堅緻，底部外面「一」墨書	47	22
122	29溝	Lp2-4		土師器	甕C1	—	—	(7.0)	底部の1/4	ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多		焼成不良，外面スス付着		
123	30溝	Lr1-4		須恵器	無台杯B	-	-	(8.8)	1/4	ヘラキリ		5Y7/2 灰白	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量		焼成やや軟質，底部内面スス付着		
124	34溝	Kp5-5		須恵器	甕	—	—	—	小片			2.5Y7/1 灰白	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成硬質		
129	1a流路	Oo4-2	1	須恵器	短頸壺	7.0	11.6	6.9	完存	ロクロ（右）		10Y7/1 灰白	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成硬質，外面自然釉	51	18
130	1a流路	Op4-2	1	土師器	甕B1b	16.8	19.1	8.6	4/5	口：ロクロ，外：ロクロ→下半ナナメタテケズリ，内：ロクロ→頸部・胴部カキメ，底：板ナデか		10YR7/2 にぶい黄橙	3mm以下の長・石・雲大量		焼成良好，外面スス顕著		
131	1a流路	Oo5-5	1	須恵器	無台杯B1	12.5	3.4	7.7	ほぼ完存	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な長多，骨	小泊5段階	焼成やや軟質，内外面擦れ，体部外面3か所に「×」墨書	52	19
132	1a流路	Oo4-4	1	須恵器	無台杯B2	(12.0)	2.5	8.2	1/6	ロクロ，ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長・石・骨多	小泊4段階以降	焼成硬質，内外面擦れ		
133	1a流路	Oo3-5・4-5	1	須恵器	無台杯B1	12.3	3.5	8.4	4/5	ロクロ	C		小泊窯群。精良，微小な長少	小泊3段階	全体擦れ顕著，底部外面不明墨書		22
134	1a流路	Op2-1	1	須恵器	無台杯B1	12.2	2.8	8.7	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10Y6/1 灰	小泊窯群。微小な長多	小泊5段階	焼成良好，内外面擦れ，底部外面「成女」墨書		
135	1a流路	Op3-1	1	須恵器	無台杯B2	(12.2)	3.0	8.0	1/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長，骨多	小泊5段階	焼成良好，内外面擦れ		19
136	1a流路	Oo3-4	1	須恵器	無台杯B1	11.8	3.5	8.3	4/5	ロクロ	C	7.5Y8/1 灰白	堤上窯周辺。4mm以下の長・石多	馬上3号	焼成硬質，外面擦れ		
137	1a流路	Oo2-5	1	須恵器	無台杯B2	(12.0)	3.5	8.1	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	N8/0 灰白	堤上窯周辺。4mm程の長・石多	馬上3号	焼成堅緻，口縁部擦れ		
138	1a流路	Oo4-5	1	須恵器	無台杯Cか	12.0	3.3	7.0	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	堤上窯周辺。微小な長多・石	道婦	焼成硬質，内外面擦れ		
139	1a流路	Oo4-3	1	須恵器	無台杯B1	13.4	3.7	9.0	1/4	ロクロ	C	7.5Y6/2 灰オリーブ	小泊窯群。微小な長多，3mm以下の長・石	小泊2段階	焼成やや軟質		
140	1a流路	Oo3-5	1	須恵器	無台杯B	—	—	(8.1)	底部の1/2弱	ロクロ（右），ヘラキリ		5Y7/2 灰白	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成不良		
141	1a流路	Oo2-4・2-5・3-4・3-5・Op2-1・3-1	1・3	須恵器	無台杯B1	12.5	3.1	8.8	3/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長多	小泊5段階	焼成良好，底部外面不明墨書		22
142	1a流路	Oo1-4 Oo4-3	1	須恵器	折縁杯C	13.6	4.5	7.5	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	堤上窯周辺。4mm以下の長・石大量	狼沢2号	焼成硬質，内面擦れ		19
143	1a流路	Oo3-5・4-5 Op4-1	1・3	須恵器	有台杯B2	(13.2)	(7.0)	8.6	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ		N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	馬上3号～狼沢2号	焼成堅緻		
144	1a流路	Oo2-5	1	須恵器	有台杯B1	14.5	(5.9)	-	1/4	ロクロ（左）		N5/0 灰	小泊窯群。胎土精良，微小な長少	小泊5～6段階	焼成硬質		
145	1a流路	Op2-1	1	須恵器	有台杯B	—	—	7.2	底部の1/4	ロクロ	B	N7/0 灰白	小泊窯群。微小な長多	小泊5～6段階	焼成堅緻，高台内擦れ，墨痕		19
146	1a流路	Oo2-5・3-3・3-4	1・3	須恵器	短頸壺	-	-	-	体部の1/10以下	ロクロ		N6/0 灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長少		116と同一個体。焼成堅緻	53	
147	1a流路	Oo3-5	3	須恵器	無台杯B2	13.4	3.3	7.4	2/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5Y7/2 灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石・炭多	高山寺	焼成良好，内外面擦れ，底部外面に「道」墨書		22
148	1a流路	Oo2-4・3-4 3-4・3-5	1	須恵器	無台杯B1	12.6	3.4	9.0	3/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10Y7/1 灰白	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊3段階	焼成良好，底部外面「×」墨書		19
149	1a流路	Oo2-4	3	須恵器	無台杯C2	11.2	3.4	6.8	1/2	ロクロ，ヘラキリ	C	5Y7/1 灰白	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	狼沢2号～道婦	焼成やや軟質，内外面擦れ顕著		
150	1a流路	Oo5-5	3	須恵器	無台杯B1	12.6	3.5	9.0	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。2mm以下の長・石多	馬上3号～狼沢2号	焼成良好，内外面擦れ		
151	1a流路	Oo3-5	3	須恵器	無台杯B1	12.8	3.3	7.4	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な白多	小泊4段階	焼成硬質，内面擦れ		
152	1a流路	Oo3-2	3	須恵器	無台杯B2	11.6	2.8	8.2	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5GY5/1 オリーブ灰	小泊窯群。精良，微小な長多	小泊5段階	焼成良好，口縁部擦れ		22
153	1a流路	Oo3-5	3	須恵器	無台杯B1	(11.8)	3.3	7.8	1/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長多	小泊4段階	焼成硬質，全面擦れ顕著		

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
154	1a流路	Oo3-3	3	須恵器	無台杯B1	12.2	3.5	7.9	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	10Y6/1 灰	小泊窯群。6mm以下の長石少	小泊3～4段階	焼成良好，内外面擦れ，底部外面墨痕	53	22
155	1a流路	Oo3-5	3	須恵器	無台杯B1	11.6	3.0	6.8	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5BG6/1 青灰	小泊窯群。微小な長多	小泊4段階	焼成硬質，内外面擦れ，底部外面墨痕		
156	1a流路	No4-2	3	須恵器	無台杯B2	(13.2)	3.1	(8.4)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	高山寺窯周辺。精良，微小な長・石多	高山寺	焼成良好		
157	1a流路	Oo3-3・4-4	3	須恵器	無台杯B2	11.6	2.9	7.2	2/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な白多	小泊4～5段階	焼成硬質，内外面擦れ		
158	1a流路	Oo3-4	3	須恵器	無台杯B2	(13.4)	2.8	8.6	1/2弱	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10GY6/1 緑灰	小泊窯群。精良，微小な長・石多	小泊4～5段階	焼成やや軟質		19
159	1a流路	Oo2-4 Oo3-3	3	須恵器	無台杯B1	13.0	3.4	8.6	4/5	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5y6/2 黄灰	小泊窯群。精良，微小な長多	小泊4段階	焼成やや軟質，内外面擦れ		
160	1a流路	Oo2-4 表採	3	須恵器	無台杯C	12.9	3.9	7.7	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	小泊窯群。精良，3mm以下の長・石・褐多	小泊3段階	焼成軟質，内面スス付着，内外面擦れ		
161	1a流路	Oo5-4・5-5	3	須恵器	無台杯B2	12.2	3.8	8.5	3/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	馬上窯周辺。3mm以下の長多	馬上3号	焼成軟質		
162	1a流路	Oo3-2	3	須恵器	有台杯A2	10.5	(3.3)	7.0	1/4弱	ロクロ（左），ロクロケズリ	C	7.5Y5/2 灰オリーブ	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成硬質	54	
163	1a流路	Oo3-4	3	須恵器	無台杯A1	11.0	3.5	6.6	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	道婦窯。3mm以下の長・石多	道婦	焼成硬質，内外面擦れ顕著		19
164	1a流路	Oo3-3	3	須恵器	無台杯C1	11.2	3.7	6.7	口縁一部欠損	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5BG5/1 青灰	道婦窯。3mm以下の長・石多	道婦	焼成堅緻，外面擦れ		
165	1a流路	Oo3-4	3	須恵器	無台杯B1	12.5	3.3	8.4	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊4～5段階	焼成硬質，底部外面「×」墨書		
166	1a流路	Oo3-4	3	須恵器	無台杯B2	12.1	—	—	底部欠損1/4弱	ロクロ（左）	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊4段階以降	焼成軟質		
167	1a流路	No5-2	3	須恵器	無台杯B2	(14.8)	3.3	(10.0)	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N6/0 灰	岡屋敷窯周辺。3mm以下の長・石・炭多	元山4号	焼成堅緻		
168	1a流路	Oo5-5	3	須恵器	有台杯C1	10.5	5.4	5.2	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	10BG6/1 青灰	馬上窯周辺。精良，4mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，内面擦れ		19
169	1a流路	Oo4-5	3	須恵器	有台杯C1	10.6	4.6	5.8	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石大量	高山寺	焼成硬質，内面擦れ，腰部・高台内に墨痕		
170	1a流路	No5-2 Oo3-5	3	須恵器	有台杯C1	10.4	5.1	6.5	4/5	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10GB5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長多，骨	小泊3～4段階	焼成硬質，内面擦れ		19
171	1a流路	Oo5-5	3	須恵器	有台杯A2	10.8	4.1	6.6	1/2	ロクロ（左），ヘラキリ腰部ロクロケズリ	不明	5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長大量，炭多	小泊2段階	焼成やや軟質，内面擦れ		
172	1a流路	Oo2-4・3-4	3	須恵器	折縁杯A	12.4	3.7	6.7	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ後		7.5Y6/1 灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，高台内「×」墨書		19
173	1a流路	Oo5-4	3	須恵器	高杯	12.4	(4.7)	-	脚部欠損	ロクロ（右），ヘラキリ		5B5/1 青灰	堤上窯周辺。4mm以下の長・石多		焼成硬質，内面擦れ		20
174	1a流路	Oo2-4・3-4	3	須恵器	長頸瓶B	(8.8)	—	—	口縁部の1/2	ロクロ（左）		10Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成良好，口縁部内面不明墨書		22
200		Iq5-3	Ⅲa	須恵器	円面硯	10.8	6.6	13.8	1/2	ロクロ（右）		N7/0 灰白	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成硬質，4方向に方形の透かし孔	57	20
201		I r	Ⅲb	須恵器	折縁杯A	—	—	6.9	底部のみ	ロクロ，ヘラキリ	Cか	10Y6/1 灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，高台内墨痕		
202		Ir5-2	Ⅲa	須恵器	有台杯B蓋	16.4	2.2	—	1/4弱	ロクロ（左），ヘラキリ		5Y7/1 灰白	小泊窯群。微小な長微量	小泊2～3段階	焼成良好		
203		Ir5-2	Ⅲc	土師器	甕B1	—	—	(9.0)	底部の1/4	外：ロクロ，内：カキメ→ロクロ		7.5YR7/6 橙	6mm以下の長・石多		焼成軟質，外面剥落顕著		
204		Jq	Ⅲa	須恵器	無台杯A1	3.8	12.2	9.0	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ		10Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成良好		
205		Jq3-3	Ⅲa	須恵器	無台杯A1	(12.2)	3.7	8.2	2/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石大量	高山寺	焼成硬質		20
206		Jq3-1	Ⅲa	須恵器	無台杯C	—	—	7.6	1/3	ロクロ（左），ヘラキリ		10Y6/1 灰	小泊窯群。微小な長少	小泊3段階	焼成硬質，内外面擦れ，底部外面「大」墨書		22
207		Jr1-2	Ⅲa	須恵器	有台杯B蓋	16.4	2.7	—	1/2弱	ロクロ（右），ヘラキリ		N6/0 灰	岡屋敷窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺か	焼成硬質		
208		Mq1-5	Ⅱa	須恵器	長頸瓶A	—	—	9.4	口縁部欠損1/3	ロクロ（左）		N7/0 灰白	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成良好		20

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
209		Jq	Ⅲa	土師器	鍋B	—	—	—	体部の1/8	外：ハケメ→ヘラケズリ→カキメ→ロクロ，内：ハケメ→ロクロ		10YR7/3 にぶい黄橙	6mm以下の長・石多		焼成良好	57	20
210		Jq	Ⅲa	土師器	甑	—	—	(11.2)	底部の1/8	外：ヘラケズリ，内：ナデ		2.5Y7/3 浅黄	6mm以下の長・石多		焼成不良		
211		Jr	Ⅲb	須恵器	無台杯B2	13.8	3.6	9.4	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5Y8/1 灰白	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成軟質		
212		Kp5-2	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	13.0	3.3	7.2	2/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	高山寺窯周辺。3～5mmの石・長多	高山寺	焼成良好，外面擦れ		
213		Kp5-2 Lp4-4	Ⅲa	須恵器	有台杯B2	(16.2)	8.4	(10.0)	1/5～1/6	ロクロ	A	2.5Y7/2 灰黄	岡屋敷窯周辺。精良，1～3mmの長・石多	高山寺か	焼成瓦質（生焼け）		20
214		Kq3-2	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(12.8)	(2.6)	(10.2)	1/4			5GY6/1 オリーブ灰	馬上窯周辺。6mm以下の長微量	馬上3号～狼沢2号	焼成硬質	58	
215		Kq3-2・Lp	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	13.0	3.0	8.4	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	馬上窯周辺。2mm以下の長多・石少	馬上3号	焼成硬質，内外面擦れ，底部内面墨痕，転用硯		
216		Kq3-2	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	14.0	3.8	9.4	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N6/0 灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石大量	貝屋	焼成硬質，内外面擦れ顕著		
217		Kq3-2	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	11.6	4.1	6.7	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5GY5/1 オリーブ灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石大量	馬上3号	焼成硬質，内面擦れ，高台内墨痕		
218		Kq4-1	Ⅲa	須恵器	有台杯A蓋	13.7	3.1	2.9	1/4	ロクロ(右)，頂部ロクロケズリ		2.5Y7/2 灰黄	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺	焼成軟質		
219		Kq3-2	Ⅲa	須恵器	有台杯B蓋	15.0	(1.9)	—	3/4 つまみ欠損	ロクロ，天：ヘラキリ→ロクロ	Aか	5BG6/1青灰～5YR6/2褐灰	貝屋窯周辺か。精選，微小な長・褐多	貝屋か	焼成良好，天井部外面墨書「子」		20
220		Kq5-2		土師器	甕C1a	14.0	—	—	口縁部の1/4	カキメ→ロクロ		10YR7/4 にぶい黄橙	3mm以下の長・石多		焼成良好，内面スス付着		
221		Ks2-1・Lr	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	13.3	3.0	9.1	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5BG7/1 明青灰	高山寺窯周辺。4mm以下の長・石多	貝屋～高山寺	焼成硬質，内外面擦れ顕著		
222		Lp4-3	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	12.9	3.1	7.9	1/2	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10Y6/1 灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長少	高山寺	焼成良好，底部外面墨痕		20
223		Lp1-2・Lp	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	13.0	3.0	8.6	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B7/1 明青灰	高山寺窯周辺。2～3mmの長微量	貝屋～高山寺	焼成硬質，内外面擦れ		
224		Lp4-1	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	13.0	3.6	9.2	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	堤上窯周辺。3mm以下の長多・石少	高山寺	焼成良好，内外面擦れ顕著，煮炊具に転用か		
225		Lp	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	12.2	3.7	7.9	4/5	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5GY6/1 オリーブ灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石大量	貝屋～高山寺	焼成硬質		
226		Lp	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	(13.8)	3.9	(8.9)	1/2	ロクロ（左），ヘラキリ	B	N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	元山4号～貝屋	焼成硬質		
227		Lp1-3	Ⅲa	須恵器	有台杯C	—	—	7.1	底部のみ	ロクロ（右），ヘラキリ		7.5Y5/1 灰	ホーロク沢窯周辺か。3mm以下の長少，金雲微量	高山寺	焼成堅緻，高台内「×」ヘラ記号		21
228		Lp	Ⅲa	須恵器	有台杯A蓋	(13.0)	—	—	1/6	ロクロ（右），頂部ロクロケズリ	B2	N6/0 灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊3段階か	焼成硬質，内面墨痕，転用硯		22
229		Lp	Ⅲa	須恵器	長頸瓶か	—	—	(10.0)	底部の1/2	ロクロ（右）		10Y7/1 灰白	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成硬質		
230		Lp2-4		土師器	甕A1a	20.0	—	—	口縁部の1/6	外：ハケメ→カキメ→ロクロ，内：カキメ→ロクロ		2.5Y8/3 浅黄	3mm以下の長・石少		焼成不良		20
231		Lq	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(12.5)	(3.2)	(9.4)	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	10Y7/1 灰白	高山寺窯周辺。3mm以下の長少	馬上3号	焼成良好		
232		Lr	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(10.8)	—	—	口縁部の1/8	ロクロ（左）	C	5GY5/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊5段階	焼成硬質	59	
233		Lr	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	12.0	4.0	9.5	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B5/1 青灰	堤上窯周辺。4mm以下の長・石多	高山寺	焼成堅緻，口縁部擦れ		
234		Mp・Np	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	12.9	4.1	8.4	3/5	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y7/1 灰白	高山寺窯周辺。3mm以下の長少	貝屋	焼成良好，底部外面不明墨書		
235		Mp・Nq1-5	Ⅲa・Ⅱa	須恵器	無台杯B2	(11.6)	3.1	6.8	1/5	ロクロ	C	5B5/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な白大量，骨・ガラス質粒	小泊5段階	焼成硬質，内外面擦れ，底部内面墨痕		
236		Mp	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(13.2)	(3.2)	(9.6)	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成硬質		
237		Mp	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	12.3	3.4	9.2	3/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5Y7/1 灰白	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺	焼成不良		
238		Mp	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	(13.6)	3.6	(8.4)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	A	N6/0 灰	高山寺窯周辺。2mm以下の長多	元山4号	焼成硬質，内面擦れ顕著，歪み顕著		
239		Mp	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	(14.2)	5.0	(9.0)	1/6	ロクロ（右），ヘラキリ	B1	7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	元山4号	焼成軟質		
240		Mp	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	—	—	7.6	底部の1/2	ロクロ（右）		2.5Y8/2 灰白	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺～馬上3号	焼成不良		
241		Mo1-2・Mp5-5	Ⅲa	須恵器	有台杯B	—	—	8.7	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	Cか	7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	高山寺以前	焼成良好，高台内墨痕		

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
242		Mp1-1	Ⅲa	須恵器	有台杯B蓋	16.1	3.9	2.8	1/2	ロクロ（右）→天：ロクロケズリ	A	N6/1 灰	堤上窯周辺。4mm以下の長・石大量	元山4号	焼成堅緻	59	20
243		Mp	Ⅲa	土師器	甕C1a	(10.5)	—	—	口縁部の1/4	ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	2mm以下の長・石少		焼成良好，内外面スス付着		
244		Mp5-2	Ⅲa	土師器	甕C1b	(13.2)	—	—	口縁部の1/6	カキメ・ハケメ→ロクロ		5Y8/2 灰白	3mm以下の長・石多		焼成軟質，口縁部内外面スス付着		20
245		Mp	Ⅲa	土師器	甕C1	—	—	8.5	底部の3/4	外：ロクロ，内：カキメ		2.5Y7/3 浅黄	6mm以下の長・石少		焼成軟質，体部外面に不明墨書		
246		Mq・Mr	Ⅲa	須恵器	無台杯B1	11.8	3.1	8.4	1/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	小泊窯群。微小な長多	小泊3段階	焼成硬質	60	
247		Mq2-5	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	11.5	3.5	7.8	9/10	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。精良，2mm以下の長・石多	馬上3号	焼成やや軟質	60	
248		Mp5-4	Ⅲa	須恵器	無台杯A2	(12.2)	3.8	(9.0)	1/3	ロクロ	C	5B5/1 青灰	馬上窯周辺。精良，微小な長・石多	馬上3号	焼成堅緻，内外面擦れ		
249		Mq	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	14.2	4.0	10.0	1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5Y7/1 灰白	岡屋敷窯周辺。3mm以下の長・石多	元山4号	焼成軟質		
250		Mq	Ⅲa	須恵器	無台杯B	—	—	—	底部片	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y8/2 灰白	馬上窯周辺。微小な長少		焼成不良，底部外面不明墨書		22
251		Mq	Ⅲa	須恵器	無台杯C2	11.8	3.4	7.6	2/3	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10Y6/1 灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊3段階	焼成硬質，内外面擦れ，底部外面「＊」墨書		20
252		Mq	Ⅲa	須恵器	有台杯A2	(13.4)	—	—	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ	C	2.5GY7/1 明オリーブ灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	貝屋	焼成軟質		
253		Mq3-1	Ⅲa	須恵器	折縁杯A	(12.4)	3.6	(5.9)	1/6	ロクロ（右），ヘラキリ	B	2.5GY6/1 オリーブ灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，高台内墨痕		
254		Mq2-4	Ⅲa	須恵器	折縁杯A	13.2	3.7	7.1	1/2	ロクロ（左），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好，高台内「×」墨書		
255		Mq	Ⅲa	須恵器	折縁杯A	(13.4)	4.1	6.8	1/3	ロクロ，ヘラキリ	C	N8/0 灰白	馬上窯周辺。精良，2mm以下の長・石	馬上3号	焼成硬質，内外面擦れ		
256		Mq	Ⅲa	須恵器	有台杯A蓋	13.6	—	—	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ	B2	5Y6/1 灰	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成良好		
257		Mq	Ⅲa	須恵器	甕	(20.8)	—	—	口縁部の1/8	ロクロ（右）		5Y7/1 灰白	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多		焼成硬質		
258		Mq	Ⅲa	須恵器	甕	—	—	—	破片	ロクロ		10YR8/1 灰白	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成堅緻		
259		Mq2-4	Ⅲa	須恵器	甕	—	—	—	口縁部片			N6/0 灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成硬質		21
260		Mr	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	12.4	2.7	8.4	1/2	ロクロ（左），ヘラキリ	C	10Y7/1 灰白	馬上窯周辺。6mm以下の長・石多	狼沢2号	焼成軟質，内外面スス顕著，二次的に被熱		
261		Mr3-3	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(12.4)	(3.3)	(9.2)	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊2段階	焼成良好		
262		Mr	Ⅲa	須恵器	無台杯B	—	—	(8.0)	底部の1/6	ロクロ（左），ヘラキリ		2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長多	小泊3段階	焼成良好，内外面擦れ顕著，底部外面墨痕		22
263		Mr	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	(11.8)	3.1	(8.4)	1/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	N6/0 灰	小泊窯群。微小な長少	小泊4段階	焼成硬質		
264		Mr	Ⅲa	須恵器	無台杯B1	(11.2)	3.3	(7.8)	1/8	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な長多	小泊3～4段階	焼成良好		
265		Mr3-3	Ⅲa	土師器	甕A1a	(22.2)	—	—	口縁部の1/5	外：カキメ→ロクロ，内：ロクロ→カキメ		2.5Y7/2 灰黄	2mm以下の長・石少		焼成良好，外面スス付着		21
266		Mr	Ⅲa	土師器	鍋A1b	(44.0)	—	—	口縁部の1/8	外：ヘラケズリ→ロクロ，内：カキメ		2.5Y7/3 浅黄	6mm以下の長・石少		焼成軟質，外面スス付着		
267		Np	Ⅲa	須恵器	無台杯B2	12.0	2.7	8.0	1/6	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y6/2 灰オリーブ	小泊窯群。3mm以下の長・石少	小泊5段階	焼成軟質	61	
268		Np	Ⅲa	須恵器	有台杯C	—	—	(6.6)	底部の1/4	ヘラキリ		7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	馬上3号	焼成堅緻		
269		Np4-5	Ⅲa	須恵器	甕	—	—	—	肩部片	タタキ		2.5Y7/2 灰黄	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多		焼成軟質		
270		Np	Ⅲa	土師器	甕C1	—	—	(6.8)	底部の1/4	ロクロ		2.5Y7/3 浅黄	6mm以下の長・石多		焼成不良		
271		Np	Ⅲa	土師器	甕C1	—	—	(5.4)	底部の1/4	外：ヘラナデ，内：ナデ		2.5Y7/3 浅黄	3mm以下の長・石多		焼成不良		
272		Nq1-4・2-4	Ⅲa・Ⅱa	須恵器	無台杯B1	(12.4)	3.7	(9.0)	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	5Y7/2 灰	小泊窯群。精良，微小な白大量，骨・褐	小泊2段階	焼成瓦質		
273		Nq	Ⅲa	須恵器	折縁杯B	(12.4)	—	—	口縁部の1/2	ロクロ（右）	C	10Y6/1 灰	道婦窯。3mm以下の長少	道婦	焼成良好		
274		Nq	Ⅲa	須恵器	折縁杯B	—	—	(8.0)	底部の1/4	ロクロ（右），ヘラキリ	C	7.5Y6/1 灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	狼沢2号	焼成硬質		

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 口径	器高	底径（摘径）	遺存度	成形・調整	重焼き	色調	胎土	時期	備考	挿図	写真図版
275		Nq3-1	Ⅲa	須恵器	長頸瓶か	12.4	—	—	口縁部の1/4			N6/0 灰	小泊窯群。微小な長少		焼成堅緻		21
276		Nr	Ⅲa	須恵器	無台杯B	—	—	7.6	底部のみ	ロクロ（右），ヘラキリ		10Y7/1 灰白	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊3～4段階	焼成堅緻		
277		Op3-1	Ⅲb	須恵器	有台杯A2	12.2	3.8	7.2	3/4	ロクロ（左），ヘラキリ	Bか	N7/0 灰白	小泊窯群。微小な長多	小泊2段階	焼成硬質，口縁部擦れ顕著，高台内に「×」墨書	61	21
278	攪乱	Jr2-2		須恵器	無台杯B1	(12.2)	3.6	(8.2)	1/3	ロクロ，ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。精良，微小な長多	小泊3段階	焼成良好，内外面擦れ		
279	攪乱	Lq2-3		須恵器	無台杯B2	(12.2)	(3.1)	(9.3)	1/6	ロクロ（左），ヘラキリ	C	N6/0 灰	小泊窯群。微小な長少	小泊4段階	焼成良好，底部墨痕か		
280		Nq2-4	Ⅱa	須恵器	無台杯B1	12.0	3.4	8.7	9/10	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5B6/1 青灰	小泊窯群。精良，微小な長多，骨	小泊2段階	焼成良好，底部外面墨痕	62	21
281		Or	Ⅰ	須恵器	無台杯A2	13.3	3.8	9.2	3/5	ロクロ（右），ヘラキリ	C	5Y8/2 灰白	高山寺窯周辺。6mm以下の長・石多	元山4号～貝屋	焼成不良，内外面油煙痕，二次的に被熱か，底部外面「廣口」墨書		22
282			表採	須恵器	無台杯B	—	—	(9.4)	底部の1/8	ロクロ（左），ヘラキリ		N6/0 灰	小泊窯群。微小な長少		焼成良好，底部外面墨痕		
283		Jq	Ⅰ	須恵器	無台杯B2	12.0	2.9	8.0	1/2弱	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。精良，微小な長大量	小泊5段階	焼成硬質，全面擦れ顕著		
284		Mr3-4	Ⅱb	須恵器	無台杯C2	14.0	3.9	7.6	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。4mm以下の長・石多	馬上3号～狼沢2号	焼成やや軟質，東海系		
285		Nr1-4	Ⅱb	須恵器	無台杯A2	13.2	3.5	7.8	1/4	ロクロ，ヘラキリ	C	2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号～狼沢2号	焼成やや軟質，内外面擦れ，体部外面墨痕		21
286			表採	須恵器	無台杯B1	(11.8)	3.2	(8.9)	1/6	ロクロ（右），ヘラキリ	C	10Y6/1 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石多	馬上3号	焼成軟質，底部墨痕		
287		Kp	Ⅰ	須恵器	無台杯B	—	—	—	底部の1/8	ロクロ（左），ヘラキリ		2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な長少		焼成良好，底部外面「×」墨書		22
288		Mr3-3	Ⅱb	須恵器	無台杯B1	13.0	3.6	9.6	3/4	ロクロ（左），ヘラキリ	C	5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。微小な長多	小泊2段階	焼成やや軟質		21
289		Mq	Ⅱa	須恵器	無台杯B1	12.2	3.2	8.0	1/6	ロクロ（左），ヘラキリ	C	2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長少	小泊4段階	焼成良好，底部・体部外面「×」墨書		
290		Jq	Ⅰ	須恵器	無台杯B	—	—	8.0	1/8	ロクロ（右），ヘラキリ		10Y6/1 灰	小泊窯群。3mm以下の長多		焼成軟質，底部外面不明墨書		22
291		Lp	Ⅰ	須恵器	無台杯B	—	—	—	底部片	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y7/2 灰黄	馬上窯周辺。3mm以下の長少		焼成不良，底部外面「大」墨書		
292		Mr3-2	Ⅱa	須恵器	無台杯B	—	—	—	底部片	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5GY6/1 オリーブ灰	小泊窯群。3mm以下の長少		焼成堅緻，底部外面墨痕	62	
293		Mr5-2	Ⅱa	須恵器	有台杯A2	12.6	4.2	7.8	5/6	ロクロ（右），ヘラキリ	A	5PB5/1 青灰	堤上窯周辺。5mm以下の長・石多	高山寺	焼成堅緻		
294			Ⅰ	須恵器	有台杯B	—	—	(7.2)	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ		2.5Y7/3 浅黄	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	馬上3号	焼成不良		22
295		Mp	Ⅰ	須恵器	有台杯B	—	—	(9.4)	底部の1/6	ロクロ（右）		N4/0 灰	ホーロク沢窯か微小な長少		焼成堅緻		
296		Kq	Ⅱb	須恵器	有台杯D	(14.0)	7.3	9.2	1/2	ロクロ（右か），ヘラキリ		N6/0 灰	堤上窯周辺。6mm以下の長・石大量	高山寺	焼成硬質，内面擦れ		21
297			Ⅰ	須恵器	有台杯A蓋	14.0	3.1	3.1	1/2	ロクロ（右），ヘラキリ→ロクロケズリ	A	5B5/1 青灰	高山寺窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺	焼成硬質，内面墨痕，転用硯		22
298		Mq3-5	Ⅱa	須恵器	有台杯A蓋	(13.6)	1.9	2.4	1/2弱	ロクロ（右），ヘラキリ		N7/0 灰白	高山寺窯周辺。精選，2～5mmの長・石微量	貝屋	焼成堅緻		21
299		Mr4-3	Ⅱa	須恵器	有台杯B蓋	(12.8)	(1.8)	—	1/3 つまみ欠損	ロクロ，ヘラキリ	Aか	10BG6/1 青灰	高山寺窯周辺。2mm以下の長多，1mm以下の石・炭	高山寺～馬上3号	焼成硬質，内面墨付着，転用硯か		
300		Lr	Ⅰ	須恵器	短頸壺蓋	(11.8)	3.4	2.8	1/3	ロクロ（右），ヘラキリ		5B6/1 青灰	堤上窯周辺。3mm以下の長・石多	高山寺	焼成硬質，天井部重ね焼き痕		21
301		Mr3-2	Ⅱb	須恵器	短頸壺蓋	(11.6)	(2.3)	—	1/2 摘み欠損	ロクロ，ヘラキリ		5PB6/1 青灰	馬上窯周辺。2mm程の長・石多	馬上3号	焼成硬質，口縁部擦れ		
302		Ir4-1	Ⅱc	須恵器	横瓶	(11.6)	—	—	口縁部の1/4			N6/0 灰	道婦窯周辺。3mm以下の長・石大量		焼成良好		
303		Jq・Jr	Ⅰ	土師器	甕A1B	(23.0)	—	—	口縁部の1/8	外：ロクロ，内：ハケメ→ロクロ		10YR7/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石多		焼成軟質		21
304		Lp	Ⅱa	赤彩土器	高杯B	15.5	—	—	口縁部の1/2と脚部を欠損	ロクロ→ヘラミガキ		2.5Y7/3 浅黄	微小な長・石微量。搬入か		焼成軟質，内外面赤彩		
305	1a流路	Op1-1	1	土製品	焼成粘土塊	4.0	2.2	3.2	完存か			10YR7/4 にぶい黄橙	2mm以下の長・石少		藁痕		22
306	7掘立P9		8			4.1	2.7	3.2									
307			Ⅰ			3.4	2.6	3.1									
308	40溝	Nr5-1	1	土製品		2.3	—	—		タタキ		2.5Y6/2 灰黄	2mm以下の長・石多		土師器鍋・甕片の加工品		

木製品

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 長さ（口径）	幅（高さ）	厚さ（底径）	遺存度	木取り	材質	加工	備考	挿図	写真図版
31	3掘立P5			木製品	柱	(64.0)	21.2	13.2	柱根部残存	丸木取り	スギ	下端部鉛筆状ケズリ		15	
32	5掘立P1	No3-4		木製品	柱	(53.6)	20.4	14.4	柱根部残存	丸木取り	針葉樹	下端部平坦	一部被熱	18	
33	5掘立P3	No4-5		木製品	柱	(54.4)	14.4	16.4	柱根部残存	芯去りミカン割	広葉樹	下端部平坦			
34	5掘立P7	Np3-1		木製品	柱	(52.0)	17.6	15.6	柱根部残存	丸木取り	スギ	下端部平坦	外皮一部残存		24
35	5掘立P10	No2-4		木製品	柱	(66.3)	19.9	16.8	柱根部残存	丸木取り	針葉樹	下端部4方向ケズリ	外皮一部残存		
36	1号杭列	No4-4		木製品	杭	(11.8)	2.2	2.2	下端部のみ	丸木取り	広葉樹	下端部ナナメケズリ		19	23
37	1号杭列	No4-4		木製品	杭	(16.9)	4.0	3.6	下端部のみ	丸木取り	広葉樹	下端部ナナメケズリ	樹皮残存		
40	41溝	No1-3		木製品	不明	(38.6)	5.9	2.3	不明	柾目	広葉樹	加工痕不明瞭	枘穴5，箆か	20	
41	15溝	Mp2-1		木製品	角杭	30.4	2.7	1.6	完存	柾目	針葉樹	先端部四方向のケズリ			
42	15溝	Np2-1		木製品	角杭	32.2	3.0	1.8	完存	柾目	針葉樹	先端部四方向のケズリ	頂部被熱		
43	16溝	No4-4		木製品	箸状木製品	(20.4)	1.0	1.1	上下欠損		針葉樹	加工痕不明瞭			
44	17溝	No5-5		木製品	板	(116.4)	10.8	5.2	不明	板目	針葉樹		建築部材か		
45	6掘立P3			木製品	柱	(61.2)	22.4	19.2	柱根部残存	芯去りミカン割	クリ	下端部ナナメケズリ		21	24
58	10掘立P5	Ir5-2		木製品	柱	(40.0)	20.4	7.2	柱根部残存	板目	広葉樹	下端部平坦	板状	24	
59	10掘立P1	Iq4-5		木製品	柱	(74.8)	19.6	13.2	柱根部残存	芯去りミカン割	スギ	下端部V字状ケズリ	枘穴1		24
60	10掘立P7	Ir4-2		木製品	柱	(60.4)	21.6	9.2	柱根部残存	板目	クリ	下端部ナナメケズリ	板状，転用材か，枘穴1		
61	10掘立P8	Ir4-1		木製品	柱	(62.0)	13.2	10.8	柱根部残存	芯去りミカン割	広葉樹	下端部ナナメケズリ	角材状		
62	11掘立P1	No4-3		木製品	杭	(7.1)	3.0	3.0	上部欠損	丸木取り	エゴノキ	加工痕不明瞭	劣化顕著		
63	11掘立P2	Lp		木製品	柱	(42.0)	9.6	11.2	柱根部残存	丸木取り	広葉樹	下端部V字状ケズリ	樹皮残存		
66	1土	Mp1-1		木製品	斎串	38.8	2.0	1.1	完存	柾目	広葉樹	下端部鉛筆状ケズリ		33	23
67	1土	Mp1-1		木製品	斎串	18.7	1.3	0.4	ほぼ完存	柾目	針葉樹	全体に丁寧なケズリ			
68	1土	Mp1-1		木製品	丸木杭	(16.0)	2.1	2.1	上部欠損	丸木取り	広葉樹	先端部斜めケズリ			
69	1土	Mp1-1		木製品	盤	23.5	1.6	21.5	9/10	柾目	広葉樹	ロクロ挽き			
79	7土	Mp5-2		木製品	斎串	(11.1)	0.7	0.6	上部欠損	柾目	針葉樹	先端部斜めケズリ		36	
80	7土	Mp5-1		木製品	曲物底板	18.4	(6.9)	0.7	1/2	柾目	広葉樹	外周ケズリ	側面釘穴2		
82	P25	Mp4-1		木製品	曲物側板	(11.9)	(3.5)	0.4	破片	柾目	針葉樹	桜樹皮による綴じ		38	
85	P53	Kq5-4		木製品	柱	(41.4)	16.4	10.1	柱根部残存	芯去りミカン割	広葉樹	下端部平坦			
86	P54	Kq		木製品	柱	(47.2)	13.2	10.4	柱根部残存	ミカン割	針葉樹	下端部V字状ケズリ			
87	P81	Lq		木製品	柱	(78.5)	14.8	15.3	柱根部残存	芯去りミカン割	広葉樹	下端部ケズリ	枘穴2，下端部砂付着，転用材か		24
125	1a流路	Oo4-5		木製品	杭	40.0	3.6	3.6	ほぼ完存	丸木取り	コナラ	上端ナナメ切落とし，下端三方向ケズリ	護岸施設構築材	50	
126	1a流路	Oo3-4		木製品	杭	62.0	3.6	3.2	ほぼ完存	丸木取り	広葉樹	下端ナナメケズリ	護岸施設構築材		
127	1a流路	Oo4-5		木製品	板	115.6	7.2	1.2	ほぼ完存	板目	針葉樹		護岸施設構築材		
128	1a流路	Oo4-5		木製品	板	100.4	8.4	1.6	ほぼ完存	板目	スギ		護岸施設構築材	55	24
175	1a流路	Op		漆器	椀	—	(1.5)	0.2	口縁部片		広葉樹	ロクロ挽き			23
176	1a流路	Oo3-4		木製品	曲物底板	(16.6)	(5.2)	0.7	1/3	柾目	広葉樹	外周ケズリ			
177	1a流路	Oo3-3		木製品	盤	(21.9)	1.1	(21.4)	1/2	柾目	広葉樹	内面ロクロ挽き，外面ケズリ	内面線状痕		
178	1a流路	Op4-1		木製品	曲物底板	12.8	13.5	0.5	完存	柾目	針葉樹	内面ケズリ，外周面取り	側面釘穴3		
179	1a流路			木製品	曲物底板	17.8	(7.4)	0.6	1/2	柾目	広葉樹	外周ケズリ			
180	1a流路	Oo5-3		木製品	曲物底板	17.4	(8.6)	0.7	1/2	柾目	広葉樹	外周ケズリ	木釘残存		

掲載番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm） 長さ（口径）	幅（高さ）	厚さ（底径）	遺存度	木取り	材質	加工	備考	挿図	写真図版
181	1a流路	Oo1-3		木製品	箸状木製品	(21.9)	0.6	0.6	下部欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ		55	23
182	1a流路	Oo3-4		木製品	箸状木製品	23.2	0.5	0.5	完存		針葉樹	多面体ケズリ			
183	1a流路	No4-2		木製品	箸状木製品	25.3	0.4	0.4	完存		針葉樹	多面体ケズリ			
184	1a流路	Oo3-3		木製品	箸状木製品	27.3	0.5	0.5	ほぼ完存		針葉樹	多面体ケズリ			
185	1a流路	Oo3-5		木製品	箸状木製品	(15.9)	0.5	0.5	上下欠損		針葉樹	多面体ケズリ			
186	1a流路	No4-2		木製品	箸状木製品	(15.0)	0.5	0.5	下部欠損		針葉樹	多面体ケズリ			
187	1a流路	Oo1-3		木製品	箸状木製品	15.4	0.5	0.5	完存	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
188	1a流路	Oo3-5		木製品	箸状木製品	(13.5)	0.6	0.6	上下欠損		針葉樹	多面体ケズリ			
189	1a流路	No1-2		木製品	箸状木製品	(12.4)	0.6	0.6	上下欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
190	1a流路	Oo1-3		木製品	箸状木製品	(10.5)	0.5	0.6	上下欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
191	1a流路	Oo3-4		木製品	箸状木製品	(11.3)	0.6	0.4	上部欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
192	1a流路	Op3-1		木製品	箸状木製品	(9.0)	0.5	0.5	上部欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
193	1a流路	Oo4-2		木製品	田下駄	14.0	(9.2)	1.2	2/3	柾目	広葉樹	ケズリ	踵部にコゲ	56	24
194	1a流路	Oo5-5		木製品	田下駄	14.6	(7.2)	1.9	1/2	板目	広葉樹	ケズリ			
195	1a流路	No4-3		木製品	斎串	(25.2)	3.0	0.3	上部欠損	板目	針葉樹	先端部V字状ケズリ			23
196	1a流路	Oo3-5		木製品	斎串か	(26.2)	1.6	1.5	上下欠損	柾目	針葉樹	多面体ケズリ			
197	1a流路	Oo5-3		木製品	刀形木製品	(23.5)	3.3	0.5	上下欠損	板目	針葉樹	丁寧なケズリ			
198	1a流路	Oo3-5		木製品	板状木製品	17.8	(7.4)	0.6	上部欠損	柾目	広葉樹	加工痕不明瞭	木簡状，転用材か		
199	1a流路	Oo5-3		木製品	板状木製品	(7.4)	2.7	0.6	上部欠損	板目	針葉樹	加工痕不明瞭	木簡状		
309	1柵列P3	No4-3・4		木製品	柱	(27.4)	9.2	9.5	上部欠損	丸木取り	広葉樹	加工痕不明瞭	劣化顕著		24
310	2柵列P16	Lp5-1		木製品	柱	(14.9)	4.2	4.2	上部欠損	丸木取り	広葉樹	加工痕不明瞭	劣化顕著		
311	1土	Mp1-1		木製品	分割材	26.2	21.2	3.8		板目	針葉樹		外皮残存		

第Ⅳ章　自然科学分析

1　地蔵潟Ａ遺跡出土須恵器の胎土分析

㈱第四紀 地質研究所　井上　巖

Ｘ線回折試験及び化学分析試験

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第１表胎土性状表に示す通りである。

Ｘ線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1－2　Ｘ線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回折試験によった。測定には日本電子製ＪＤＸ－８０２０Ｘ線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度：０．０２°　計数時間：０．５秒。

1－3　化学分析

元素分析は日本電子製５３００ＬＶ型電子顕微鏡に２００１型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：１５ｋＶ、分析法：スプリント法、分析倍率：２００倍、分析有効時間：１００秒、分析指定元素１０元素で行った。

2　Ｘ線回折試験結果の取扱い

実験結果は第１表胎土性状表に示す通りである。第１表右側にはＸ線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には各胎土に対する分類を行った結果を示している。Ｘ線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2－1　組成分類

1）　Ｍｏｎｔ-Ｍｉｃａ-Ｈｂ三角ダイヤグラム

第１図に示すように三角ダイヤグラムを１～１３に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont、Mica、Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として１４にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のＸ線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100 でパーセントとして求め、同様にMica,Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の１～４はMont,Mica,Hb の３成分を含み、各辺は２成分、各頂点は１成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第１図に示す通りである。

2）　Ｍｏｎｔ－Ｃｈ，Ｍｉｃａ－Ｈｂ菱形ダイヤグラム

第２図に示すように菱形ダイヤグラムを１～１９に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は２０として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a）３成分以上含まれない、b）Mont, Chの２成分が含まれない、c）Mica, Hbの２成分が含まれない、の３例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのＸ線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100 と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある１～７はMont, Mica, Hb, Chの４成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち３成分、各頂点は２成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第２図に示すとおりである。

３）化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（１０元素全体で１００％になる）で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてＳｉＯ２ーＡｌ２Ｏ３図、Ｆｅ２Ｏ３ーＴｉＯ２図、Ｋ２ＯーＣａＯ図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

３　Ｘ線回折試験結果

３ー１　タイプ分類

第１表胎土性状表には地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器が記載してある。

第１表胎土性状表に示すように土器と原土は総べてＢタイプであった。

Ｂタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの４成分にかける。高～中温領域で焼成されているため鉱物が分解してガラスに変質している。

地蔵潟Ａ遺跡から出土した須恵器は高温で焼成されているために総べてはＢタイプである。

３ー２　石英（Ｑｔ）ー斜長石（ＰＩ）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第３図Ｑｔ－ＰＩ図に示すように新潟市周辺の古窯跡の分類で、Ｑｔの強度が小の領域から大の領域にかけて５グループに分類された。地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器はQt-1, Qt-2, Qt-3に集中し、３タイプに分類される。

Ｑｔ－１：Ｑｔが700～1700、ＰＩが40～85の領域に分布する。
S-17無台杯が１個で組成が異なる。

Ｑｔ－２：Ｑｔが1700～2900、ＰＩが40～150の領域に分布する。
無台杯・杯蓋が集中する。

Ｑｔ－３：Ｑｔが740～2300、ＰＩが50～280の領域に分布する。
S-19は焼成が甘く、高温で焼成されればＱｔ-1の領域に入る可能性がある。S-13も同様で、高温で焼成されればＱｔ-2の領域に入る可能性がある。

４　化学分析結果

第２表化学分析表には地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器が記載してある。分析結果に基づいて新潟市周辺の古窯跡の分類の第４図ＳｉＯ２ーＡｌ２Ｏ３図、第５図Ｆｅ２Ｏ３ーＴｉＯ２図、第６図Ｋ２ＯーＣａＯ図と対比させるために記載し、図を作成した。

４ー１　ＳｉＯ２ーＡｌ２Ｏ３の相関について

第４図ＳｉＯ２ーＡｌ２Ｏ３図に示すように地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器はＩ～Ｖの５タイプとその他に分類した。

Ｉタイプ：ＳｉＯ２が57～66%、Ａｌ２Ｏ３が22～30%の領域に分布する。
S-12の無台杯が１個で組成が異なる。

Ⅱタイプ：ＳｉＯ２が62～68%、Ａｌ２Ｏ３が17～23%の領域に分布する。

Ⅲタイプ：ＳｉＯ２が66～74%、Ａｌ２Ｏ３が17～24%の領域に分布する。
無台杯・坏蓋が集中する。

Ⅳタイプ：ＳｉＯ２が72～77%、Ａｌ２Ｏ３が14～19%の領域に分布する。
S-13の無台杯が１個で組成が異なる。

Ⅴタイプ：ＳｉＯ２が56～63%、Ａｌ２Ｏ３が17～24%の領域に分布する。

４ー２　Ｆｅ２Ｏ３ーＴｉＯ２の相関について

第５図Ｆｅ２Ｏ３ーＴｉＯ２図には地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器が記載してある。Ｆｅ２Ｏ３の領域によって３グループに分類された。

Ｆｅ２Ｏ３-1：Ｆｅ２Ｏ３が2.5～8.5%、ＴｉＯ２が0.6～1.8%の領域に分布する。
無台杯・杯蓋が集中する。

Ｆｅ２Ｏ３-2：Ｆｅ２Ｏ３が4.8～10%、ＴｉＯ２が0.4～1.3%の領域に分布する。
S-17無台杯が１個で組成が異なる。

Ｆｅ２Ｏ３-3：Ｆｅ２Ｏ３が7～12%、ＴｉＯ２が0.8～1.8%の領域に分布する。

４ー３　Ｋ２ＯーＣａＯの相関について

第６図Ｋ２ＯーＣａＯ図に示すようにＫ２Ｏの値によって２グループに分類した。

Ｋ２Ｏ：１ーＫ２Ｏが1.2～3.7%、ＣａＯが0.1～0.8%の領域に分布する。

Ｋ２Ｏ：２ーＫ２Ｏが2.0～5.3%、ＣａＯが0～0.7%の領域に分布する。

新潟市周辺の古窯跡の分類の第８図Ｋ２ＯーＣａＯ図を細分するとＫ２Ｏの値が小さい領域に貝屋窯跡、中間領域には元山窯跡、大きい領域にはホウロク沢窯跡・堤上窯跡と大まかに領域が分かれる。中間領域の中には真木山丘陵と笹神丘陵の土器の共存し、類似性が高いように見受けられる。

５　まとめ

Ｘ線回折試験と蛍光Ｘ線分析の分析結果に基づいて分類した結果が第３表組成分類表である。左側のQt, Si, Feは第３図、第４図、第５図の領域の番号で所属領域を示す。所属領域の番号が同じものを同じ組成をするものとして分類した。Ｘ線回折試験と蛍光Ｘ線分析の結果に基づいて、地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器は第３表組成分類表に示すように分類した。

1）　地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器の土器胎土はＢタイプである。Ｂタイプは高温で焼成されているために鉱物が分解してガラスに変質したものである。

2）　第３図Ｑｔ－Ｐｌ図に示すように、地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器はＱｔの強度が小さい領域～大きい領域にかけてQt-1～Qt—3の３グループに分類される。

3）　Qt-1とQt-3の関係は第３図にある焼成温度と関連する。Qt-1は高温で焼成されQt-3は中温で焼成されており、焼成環境が異なる。胎土の関連からすると中温で焼成されたものはさらに温度を上げるとＰl（斜長石）がガラス化して分析強度が低くなりQt-1の領域に入ってくる。このことからすると胎土に調整した土は同じと考えられる。Qt-2とQt-3も同様の関係にあると考えられる。

4） 第３表組成分類表に示すように、土器胎土のＸ線回折試験と化学分析の結果に基づいて第３図Ｑｔ－Ｐｌ図、第４図ＳｉＯ２－Ａｌ２Ｏ３図、第５図Ｆｅ２Ｏ３－ＴｉＯ２図、第６図Ｋ２Ｏ－ＣａＯ図を作成し，各相関により分類したもので組成分類をおこなった。分類の結果、地蔵潟Ａ遺跡より出土した須恵器は５タイプに分類された。

5） 組成分類の１タイプに１個というものは異質なもので、他の地域からもたらされたものと考えられるものはＳ－13 の佐渡市の小泊窯跡がある。Ｓ－12 は原産地不明。Ｓ－19 は五頭山麓系―２の焼成不良で焼成が甘いために分類が異なったものと推察される。

6） 「Qt-1, Ⅲタイプ, Fe203」は五頭山麓系―４の真木山丘陵系

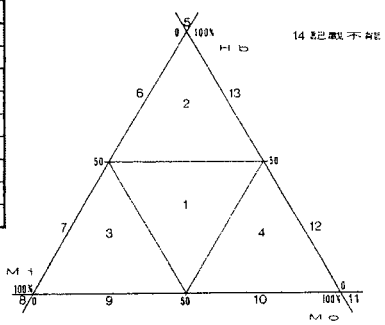
7） 「Qt-2, Ⅲタイプ, Fe203」は五頭山麓系―２の元山窯跡系で、特に地蔵潟Ａ遺跡の無台杯・杯蓋で構成される。

参考文献：井上巌（2010）中部・北陸地方の古窯跡データ集

第１表　胎土性状表

試料	タイプ	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物											
No	分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull	K-fels	Hal	Kaol	Au
S-1(225)	B	14	20						2427	49	69	82				
S-2(84)	B	14	20						2188	200	139	46				
S-3(221)	B	14	20						2041	59	104	61				
S-4(216)	B	14	20						1928	58	84	87				
S-5(298)	B	14	20						957	75	406	137				
S-6(283)	B	14	20						1640	51	420	54				
S-7(278)	B	14	20						2367	81	158	63				
S-8(255)	B	14	20						1582	108	600	100				
S-9(6)	B	14	20						2047	75	103	62				

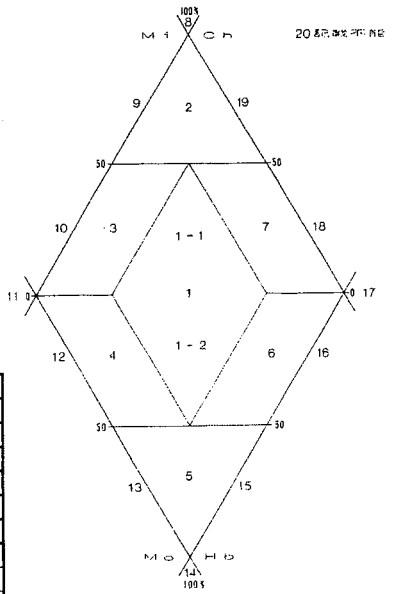
Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb ：角閃石 Ch：緑泥石（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）
Qt ：石英 Pl：斜長石　Crist：クリストバライト Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石
Halloy ：ハロイサイト Kaol：カオリナイト　Pyrite:黄鉄鉱 Au：普通輝石 Py:紫蘇輝石



第１図　三角ダイヤグラム位置分類図

第２表　化学分析表

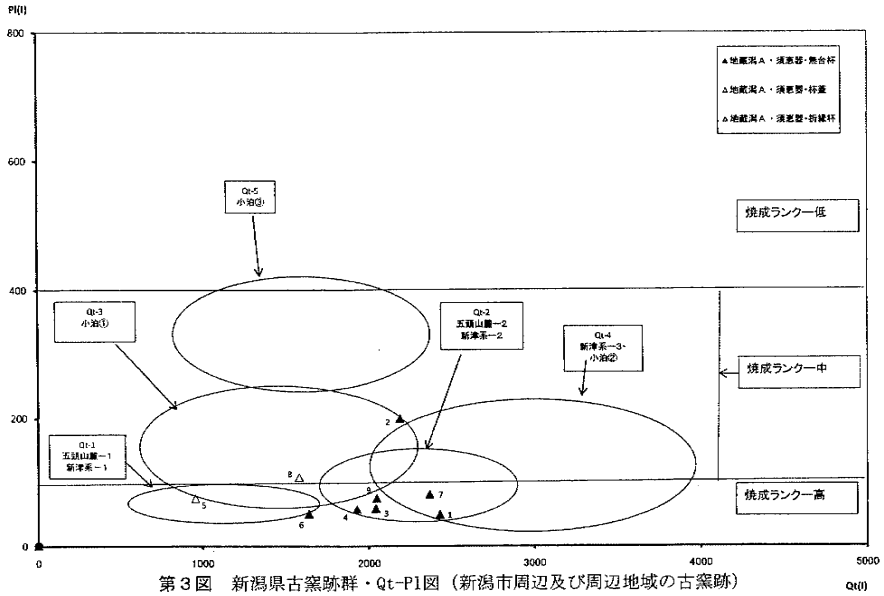
試料名	Na20	MgO	Al203	SiO2	K20	CaO	TiO2	MnO	Fe203	NiO	Total
S-1(225)	0.35	0.00	26.03	61.05	3.30	0.25	1.10	0.29	6.99	0.65	100.01
S-2(84)	1.21	0.00	16.49	72.79	3.32	0.67	0.94	0.32	4.27	0.00	100.01
S-3(221)	0.64	0.00	19.11	70.41	2.85	0.17	1.16	0.41	4.48	0.78	100.01
S-4(216)	0.57	0.00	22.69	66.62	3.50	0.11	0.96	0.14	5.41	0.00	100.00
S-5(298)	0.96	0.00	20.23	69.12	5.51	0.34	0.66	0.00	3.18	0.00	100.00
S-6(283)	0.18	0.00	20.23	67.82	1.94	0.04	0.71	0.00	9.06	0.02	100.00
S-7(278)	0.53	0.00	21.01	66.85	2.53	0.32	1.31	0.24	7.22	0.00	100.01
S-8(255)	0.53	0.00	20.76	69.86	3.19	0.26	1.32	0.40	3.69	0.00	100.01
S-9(6)	0.85	0.28	18.68	70.76	3.48	0.24	0.72	0.40	4.53	0.06	100.00



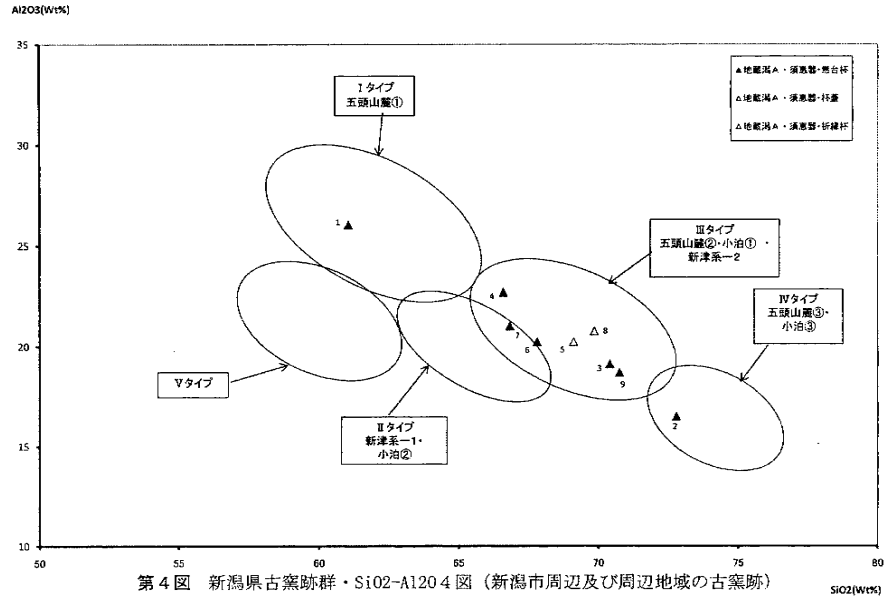
第２図　菱形ダイヤグラム位置分類図

第３表　組成分類表

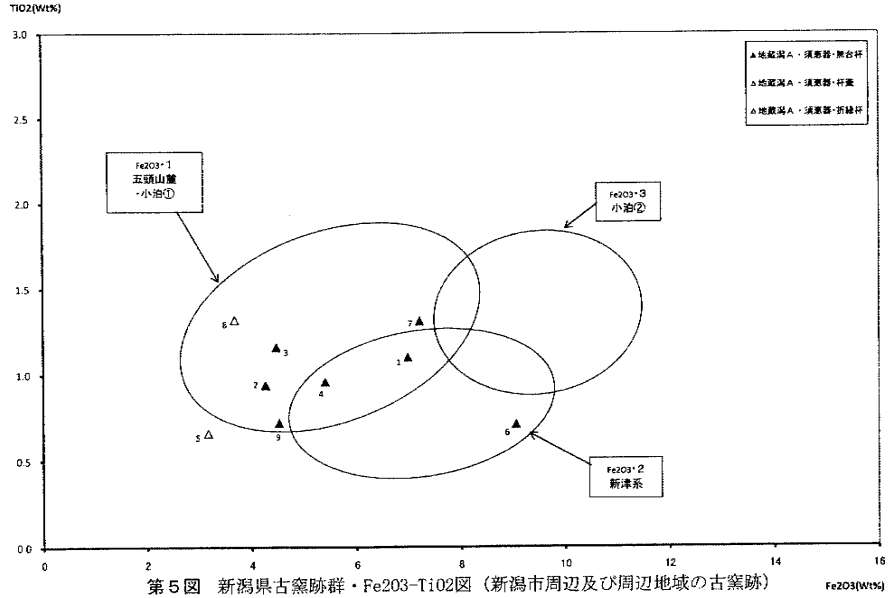
Fe	Si	Qt	試料 No	タイプ 分類	備考 種類	器種名	時期	遺跡名	肉眼観察所見
			Ｑｔ－１・Ⅲタイプ・Ｆｅ２Ｏ３						
2	3	1	S-6(283)	B	須恵器	無台杯	９世紀第２四半期頃	地蔵潟Ａ	小泊（大木戸窯併行）
			Ｑｔ－２・Ⅰタイプ・Ｆｅ２Ｏ３						
1	1	2	S-1(225)	B	須恵器	無台杯	９世紀第２四半期頃	地蔵潟Ａ	阿賀北
			Ｑｔ－２・Ⅲタイプ・Ｆｅ２Ｏ３						
1	3	2	S-3(221)	B	須恵器	無台杯	８世紀末～９世紀前半	地蔵潟Ａ	阿賀北
1	3	2	S-4(216)	B	須恵器	無台杯	８世紀後半	地蔵潟Ａ	阿賀北
1	3	2	S-5(298)	B	須恵器	杯蓋	９世紀前半	地蔵潟Ａ	阿賀北
1	3	2	S-7(278)	B	須恵器	無台杯	９世紀第２四半期頃	地蔵潟Ａ	小泊（カメ畑３号窯併行）
1	3	2	S-9(6)	B	須恵器	無台杯	９世紀前半	地蔵潟Ａ	阿賀北か新津
			Ｑｔ－３・Ⅲタイプ・Ｆｅ２Ｏ３						
1	3	3	S-8(255)	B	須恵器	折縁杯	９世紀前半	地蔵潟Ａ	阿賀北
			Ｑｔ－３・Ⅳタイプ・Ｆｅ２Ｏ３						
1	4	3	S-2(84)	B	須恵器	無台杯	８世紀末頃か	地蔵潟Ａ	小泊（Ｋ―402号窯以前）



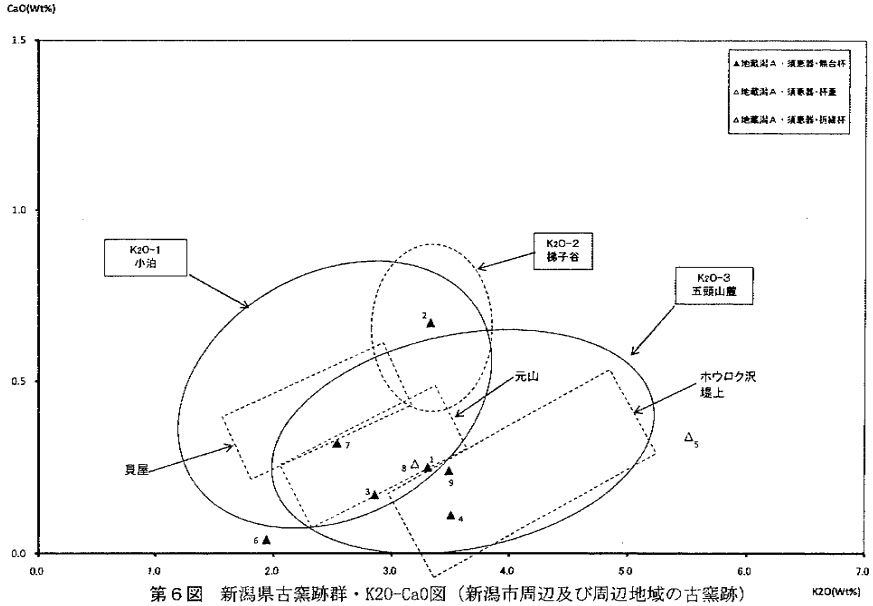
第３図　新潟県古窯跡群・Qt-Pl図（新潟市周辺及び周辺地域の古窯跡）



第４図　新潟県古窯跡群・SiO2-Al2O４図（新潟市周辺及び周辺地域の古窯跡）



第５図　新潟県古窯跡群・Fe2O3-TiO2図（新潟市周辺及び周辺地域の古窯跡）



第６図　新潟県古窯跡群・K2O-CaO図（新潟市周辺及び周辺地域の古窯跡）

2　地蔵潟A遺跡出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

地蔵潟A遺跡は新発田市中ノ目に所在し、越後平野北部に位置する奈良～平安時代の集落遺跡である。遺跡では掘立柱建物跡や流路の護岸施設などが検出され、柱根や板材、杭などが出土した。ここではこれらの木材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、3号・5号・6号・11号掘立柱建物の柱根各1点、10号掘立柱建物の柱根と板材2点、1・2号柵列の柱根各1点、1号流路の杭と板材2点の計10点の木材である。各遺構の時期は、奈良～平安時代と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

木製品の樹種同定は、横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）の3断面について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。なお、作製したプレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではスギ1分類群と、広葉樹ではヤナギ属とクリ、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、エゴノキ属の4分類群の計5分類群が産出した。スギが最も多く4点で、ヤナギ属とクリが各2点、コナラ節とエゴノキ属が各1点産出した。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

表1　地蔵潟A遺跡出土木製品の樹種同定結果

樹種	遺構 / 器種	掘立柱建物 柱根	掘立柱建物 板材	柵列 柱根	流路 杭	流路 板材	合計
スギ		3				1	4
ヤナギ属				2			2
クリ		1	1				2
コナラ属コナラ節					1		1
エゴノキ属		1					1
	合計	5	1	2	1	1	10

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の光学顕微鏡写真を示す。

(1)スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　スギ科　図版1　1a-1c・2c(No.4・No.10)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列となり、2～6列となる。分野壁孔は大型のスギ型となり、1分野に2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

(2)ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　図版1　3a-3c(No.8)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、単列となる。

ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉小高木の広葉樹である。材は軽軟で靭性が強く、切削加工などは容易である。また水湿にも強い。

(3)クリ　*Castanea crenata* Siebold. et Zucc.　ブナ科　図版1　4a-4c(No.3)

年輪の始めに大型の道管が1～3列並び、晩材部にかけて徐々に径を減じて火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(4)コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版1　5a-5c(No.9)

年輪の始めに大型の道管が 1～3 列並び、晩材部では急に径を減じた壁が薄くて角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靭で、切削加工はやや難しい。

(5)エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　図版1　6a-6c(No.6)

小型の道管が単独ないし 2～4 個放射方向に複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、1～3 列となる。

エゴノキ属は温帯から亜熱帯の低山地、原野に分布する落葉小高木の広葉樹である。材はやや重くて靭性があり、切削加工などは容易である。

4. 考察

同定の結果、掘立柱建物跡の柱根にはスギが 3 点、クリとエゴノキ属が 1 点みられ、板材ではクリが 1 点産出した。また流路の護岸施設では杭がコナラ節、板材がスギであった。

スギは大径木に生長しやすく、木理通直で素直な樹種である。掘立柱建物跡の柱根でスギが比較的多くみられたのは、ねじれなどがなく素直に生育するスギを柱材として選択していたためと考えられる。また護岸施設のスギの板材も、無駄なく多くの板材を得やすい板目取りで板材を得ていたと考えられる。

掘立柱建物の柱根と板材でみられたクリは、重硬で強靭な材質で、耐朽性も高い樹種である。また護岸施設の杭でみられたコナラ節、掘立柱建物の柱根でみられたエゴノキ属も、クリ同様に重硬で強靭な樹種である。耐朽性を重視した用材選択がなされていた可能性が考えられる。

柵列の柱根は 2 点ともヤナギ属であった。ヤナギ属は軽軟で加工性がとても良く、水湿に強い樹種である。この性質が柱に適しており、そのために柱根として利用されていた可能性が考えられる。

新発田市内に所在する荒神裏 B 遺跡では、奈良・平安時代の木製品の樹種同定が行われている（吉川純子, 2006）。荒神裏 B 遺跡の奈良・平安時代の柱根ではクリが 3 点、スギとコナラ節、ケンポナシ属が各 2 点産出し、井戸杭ではスギが 3 点、杭ではクリが 2 点とスギが 1 点産出している。スギについては、同じ新発田市内の青田遺跡で行われている花粉分析の結果、弥生時代以降にスギ林が拡大したことが示唆されている（吉川昌信, 2004）。

地蔵潟 A 遺跡では掘立柱建物の柱根でスギが多く産出し、遺跡周辺に生育していたと考えられるスギが柱材として用材利用されていた可能性がある。しかし一方で、掘立柱建物ではクリやエゴノキ属、柵列ではヤナギ属がみられるなど、スギ以外の広葉樹も利用されていた。荒神裏 B 遺跡でも建築材や土木用材にスギだけでなくクリやコナラ節などの広葉樹が利用されており、新発田市周辺では、古代において建築材にスギ材だけでなく用途に応じた様々な広葉樹を用材選択していたと考えられる。

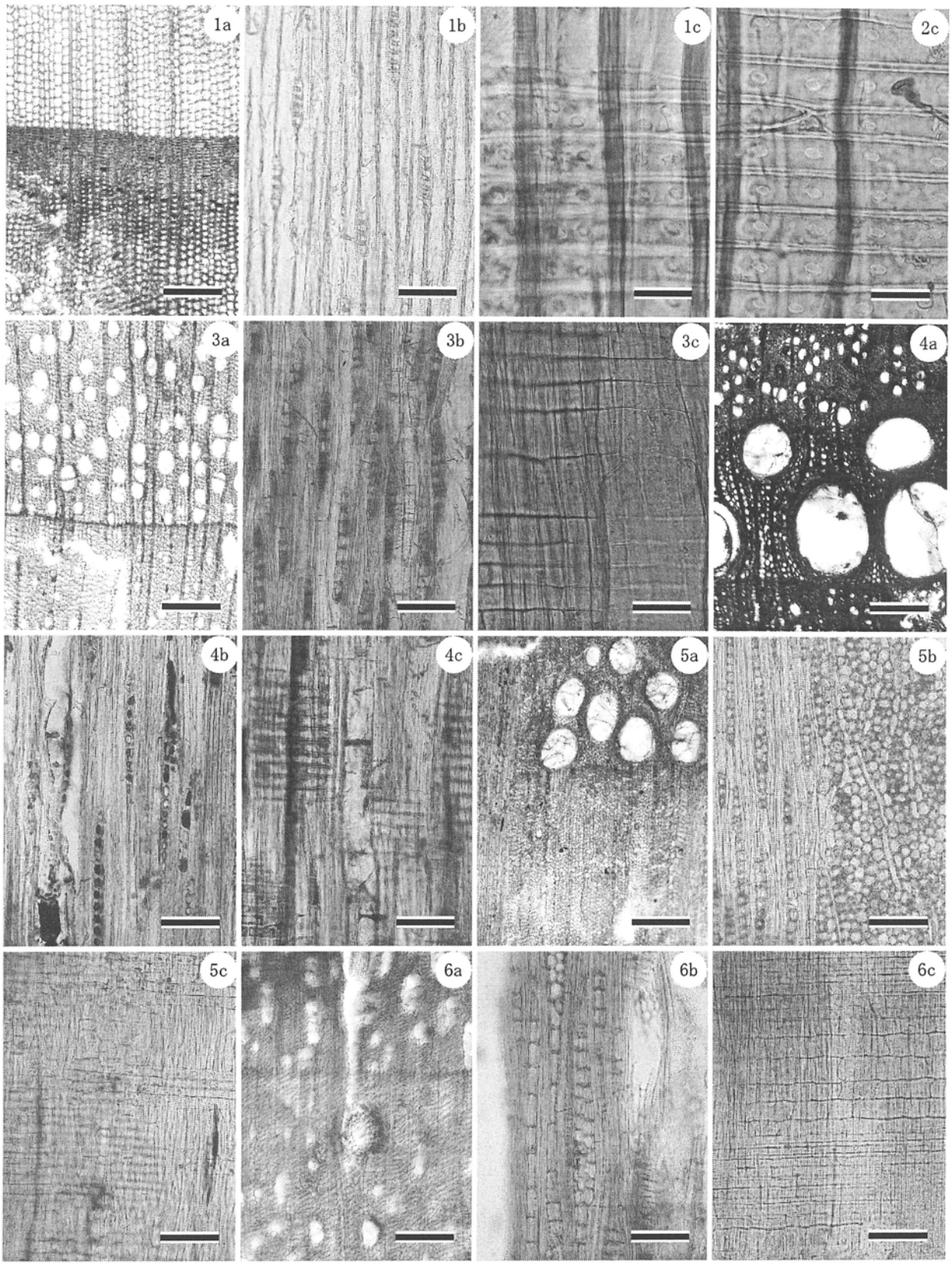
引用文献

吉川純子（2006）加工材の樹種．新発田市教育委員会編「荒神裏 B 遺跡発掘調査報告書」：161-163，図版 30，新発田市教育委員会．

吉川昌信（2004）青田遺跡における縄文時代晩期以降の花粉化石群．新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編「青田遺跡　関連諸科学・写真図版編」：35-42，新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団．

付表1　地蔵潟A遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

試料No.	遺構名	器種	樹種	木取り	時代
1	3号掘立柱建物　P5	柱根	スギ	芯持丸木	古代
2	5号掘立柱建物　P7	柱根	スギ	芯持丸木	古代
3	6号掘立柱建物　P3	柱根	クリ	芯去みかん割り	古代
4	10号掘立柱建物　P1	柱根	スギ	芯去みかん割り	古代
5	10号掘立柱建物　P7	板材	クリ	板目	古代
6	11号掘立柱建物　P1	柱根	エゴノキ属	芯持丸木	古代
7	1号柵列　P3	柱根	ヤナギ属	芯持丸木	古代
8	2号柵列　P16	柱根	ヤナギ属	芯持丸木	古代
9	1号流路　護岸施設	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	古代
10	1号流路　護岸施設	板材	スギ	板目	古代



図版１　地蔵潟Ａ遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. スギ (No. ４)　2c. スギ (No. 10)　3a-3c. ヤナギ属 (No. 8)　4a-4c. クリ (No. 3)　5a-5c. コナラ属コナラ節 (No. 9)　6a-6c. エゴノキ属 (No. 6)

a: 横断面（スケール=250 μ m）　b: 接線断面（スケール=100 μ m）　c: 放射断面（スケール=1-2:25 μ m・3-6:100 μ m）

3　地蔵潟A遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

地蔵潟A遺跡は、新潟県新発田市下中ノ目字道下1940-3ほかに所在する。旧加治川扇状地の扇端部に位置し、旧地形は小河川等に挟まれた細長い微高地である。測定対象試料は、掘立柱建物の柱材、柵列の杭材、流路護岸施設の杭材と板材、土坑出土加工材から採取された木片合計10点（No.1：IAAA-102307～No.10：IAAA-102316）である（表1）。

2　測定の意義

柱材の年代値を手掛かりに建物の造営時期を、杭材の年代値を手掛かりに柵列の造営時期を、杭材と板材の年代値を手掛かりに護岸施設の構築時期を、加工材の年代値を手掛かりに土坑の存続時期を推測する。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参

考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

各遺構から出土した柱材、杭材、板材、加工材から採取された木片の測定結果について、遺構の種類ごとに検討する。

掘立柱建物出土試料の ^{14}C 年代は、3号掘立柱建物 P5 出土柱材 No.1 が 1230±30yrBP、5号掘立柱建物 P7 出土柱材 No.2 が 1300±30yrBP、6号掘立柱建物 P3 出土柱材 No.3 が 1300±30yrBP、10号掘立柱建物 P1 出土柱材 No.4 が 1430±30yrBP、11号掘立柱建物 P1 出土柱材 No.5 が 1300±30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、No.1 が 710～862cal AD の間に3つの範囲、No.2 が 670～767cal AD の間に2つの範囲、No.3 が 670～767cal AD の間に2つの範囲、No.4 が 606～646cal AD の範囲、No.5 が 670～767cal AD の間に2つの範囲で示される。

柵列出土試料の ^{14}C 年代は、1号柵列 P3 出土杭材 No.6 が 1220±30yrBP、2号柵列 P16 出土杭材 No.7 が 1350±30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、No.6 が 729～870cal AD の間に2つの範囲、No.7 が 651～681cal AD の範囲で示される。

1号流路護岸施設出土試料の ^{14}C 年代は、杭材 No.8 が 1270±30yrBP、板材 No.9 が 1600±30yrBP である。2点は同じ遺構の構成材であるが、明らかに年代差が認められる。No.9 については転用材の可能性も指摘されている。暦年較正年代（1σ）は、No.8 が 688～771cal AD、No.9 が 423～533cal AD の間に各々複数の範囲で示される。

1号土坑出土加工材 No.10 の ^{14}C 年代は 1330±30yrBP、暦年較正年代（1σ）は 655～688cal AD の範囲である。

試料の炭素含有率はすべて 50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表 1

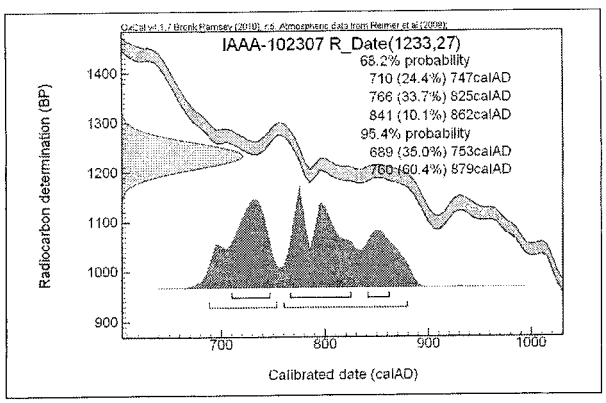
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102307	No.1	3 号掘立柱建物 P5 柱穴(柱材)	木片	AAA	**-25.40 ± 0.59**	**1,230 ± 30**	**85.77 ± 0.29**
IAAA-102308	No.2	5 号掘立柱建物 P7 柱穴(柱材)	木片	AAA	**-24.42 ± 0.58**	**1,300 ± 30**	**85.11 ± 0.29**
IAAA-102309	No.3	6 号掘立柱建物 P3 柱穴(柱材)	木片	AAA	**-25.37 ± 0.65**	**1,300 ± 30**	**85.10 ± 0.30**
IAAA-102310	No.4	10 号掘立柱建物 P1 柱穴(柱材)	木片	AAA	**-23.44 ± 0.62**	**1,430 ± 30**	**83.64 ± 0.28**
IAAA-102311	No.5	11 号掘立柱建物 P1 柱穴(柱材)	木片	AaA	**-26.75 ± 0.47**	**1,300 ± 30**	**85.10 ± 0.29**
IAAA-102312	No.6	1 号柵列 P3 Ⅳ層(杭材)	木片	AAA	**-30.56 ± 0.43**	**1,220 ± 30**	**85.91 ± 0.30**
IAAA-102313	No.7	2 号柵列 P16 Ⅳ層(杭材)	木片	AAA	**-30.50 ± 0.50**	**1,350 ± 30**	**84.54 ± 0.30**
IAAA-102314	No.8	1 号流路 護岸施設(杭) Ⅳ層(杭材)	木片	AAA	**-27.89 ± 0.47**	**1,270 ± 30**	**85.35 ± 0.28**
IAAA-102315	No.9	1 号流路 護岸施設(板材) Ⅳ層	木片	AAA	**-24.48 ± 0.38**	**1,600 ± 30**	**81.97 ± 0.27**
IAAA-102316	No.10	1 号土坑 加工材 4 層(底面)	木片	AAA	**-23.81 ± 0.65**	**1,330 ± 30**	**84.72 ± 0.27**

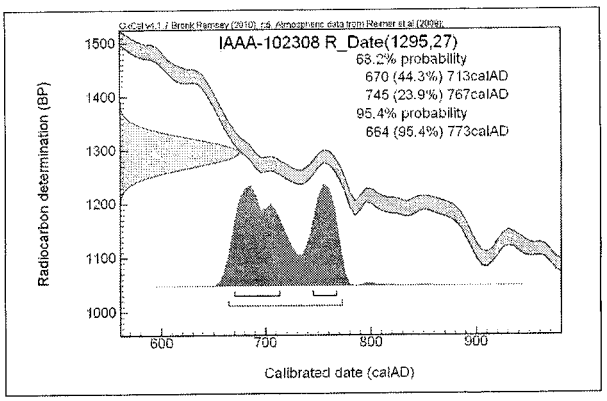
[#4002]

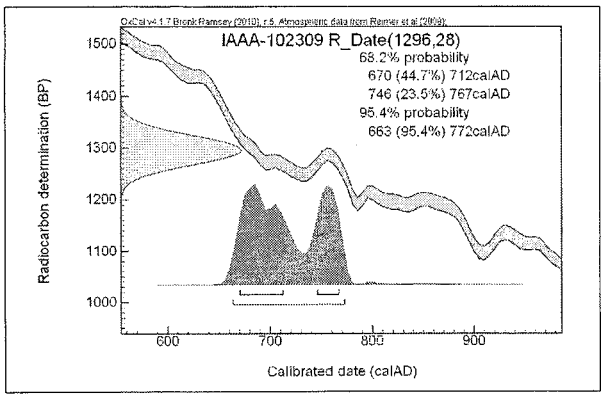
表 2

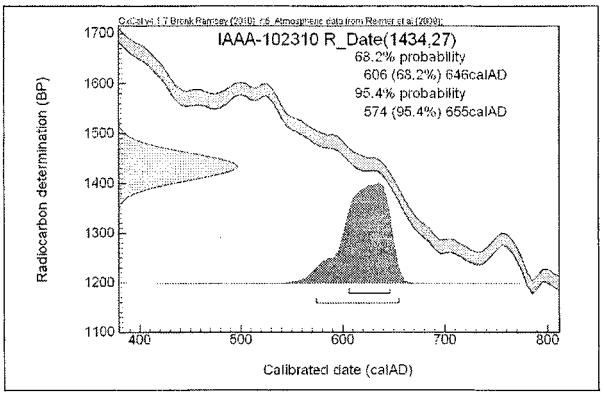
測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102307	1,240 ± 30	85.70 ± 0.27	1,233 ± 27	710calAD - 747calAD (24.4%) 766calAD - 825calAD (33.7%) 841calAD - 862calAD (10.1%)	689calAD - 753calAD (35.0%) 760calAD - 879calAD (60.4%)
IAAA-102308	1,290 ± 30	85.21 ± 0.28	1,295 ± 27	670calAD - 713calAD (44.3%) 745calAD - 767calAD (23.9%)	664calAD - 773calAD (95.4%)
IAAA-102309	1,300 ± 30	85.03 ± 0.28	1,296 ± 28	670calAD - 712calAD (44.7%) 746calAD - 767calAD (23.5%)	663calAD - 772calAD (95.4%)
IAAA-102310	1,410 ± 30	83.91 ± 0.26	1,434 ± 27	606calAD - 646calAD (68.2%)	574calAD - 655calAD (95.4%)
IAAA-102311	1,320 ± 30	84.80 ± 0.27	1,295 ± 27	670calAD - 713calAD (44.3%) 745calAD - 767calAD (23.9%)	664calAD - 773calAD (95.4%)
IAAA-102312	1,310 ± 30	84.93 ± 0.29	1,220 ± 28	729calAD - 736calAD (3.6%) 772calAD - 870calAD (64.6%)	693calAD - 748calAD (19.1%) 765calAD - 887calAD (76.3%)
IAAA-102313	1,440 ± 30	83.59 ± 0.29	1,348 ± 28	651calAD - 681calAD (68.2%)	641calAD - 711calAD (88.4%) 746calAD - 767calAD (7.0%)
IAAA-102314	1,320 ± 30	84.85 ± 0.27	1,272 ± 26	688calAD - 724calAD (37.2%) 740calAD - 771calAD (31.0%)	667calAD - 780calAD (94.3%) 794calAD - 802calAD (1.1%)
IAAA-102315	1,590 ± 30	82.06 ± 0.26	1,596 ± 26	423calAD - 442calAD (17.1%) 453calAD - 461calAD (5.5%) 484calAD - 533calAD (45.7%)	413calAD - 539calAD (95.4%)
IAAA-102316	1,310 ± 20	84.93 ± 0.25	1,332 ± 26	655calAD - 688calAD (68.2%)	649calAD - 714calAD (81.6%) 745calAD - 768calAD (13.8%)

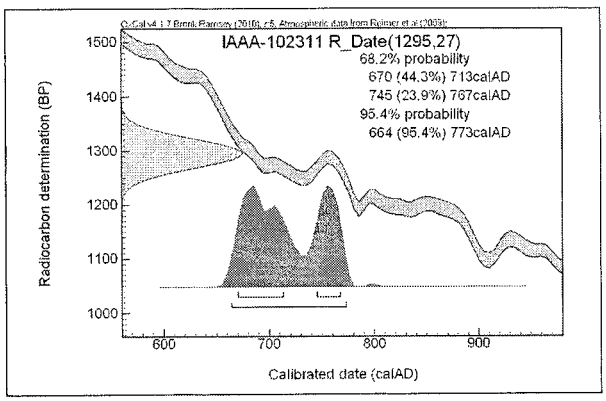
[参考値]

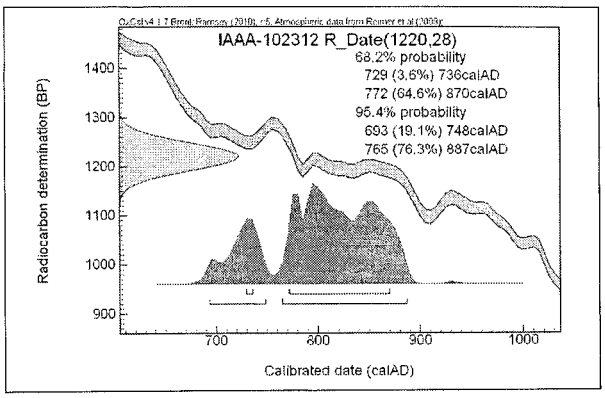


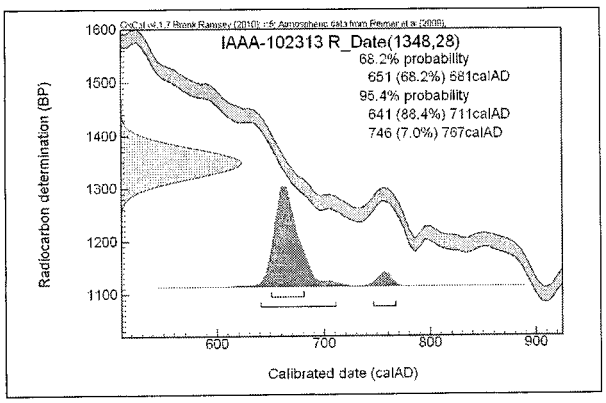


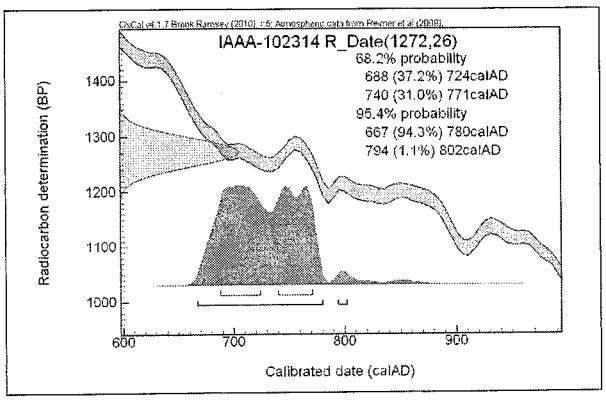


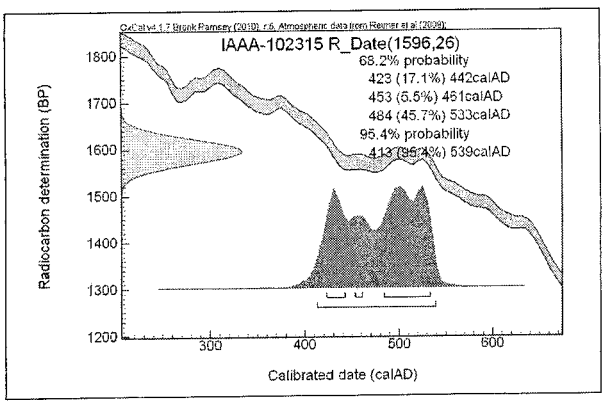


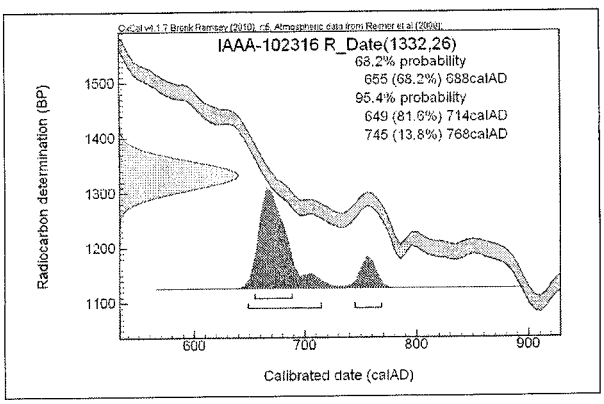












[参考]暦年較正年代グラフ

第V章　ま　と　め

1　掘立柱建物群の構成

今回の調査では，掘立柱建物11棟，柵列2列，井戸1基，土坑17基，ピット90基，溝41条，杭列3列，流路1筋を検出した。遺構，特に建物跡からの遺物出土量は少なく，遺物からだけでは遺構の時期を判断することが難しい。そのため，建物の主軸方位や遺構相互の重複・新旧関係，配置など総合的に検討を加えて遺構の帰属時期を判断し，遺跡の変遷を追っていきたい。まずはその前段となる作業として，集落の主要施設である掘立柱建物の群構成について検討を加える。

（1）　建物の平面と規模

検出した11棟の掘立柱建物は，およそ50m四方の限られた範囲に建てられているが，重複関係にある建物は少ない。まずここでは検出されている掘立柱建物とその他の建物を，平面形態と規模の点から以下のように分類・整理し，用途を推察する。

a類：桁行3間×梁行2間の側柱の掘立柱建物で，平面積20㎡以上の長方形を基調とする。今回検出されている中では1・2・7号掘立柱建物がある。この中には調査区外へと続いているために全容が不明な6号掘立柱建物と，梁間が多柱となる8号掘立柱建物も含む。2号掘立柱建物に付随する4号溝から，煮炊きに使用された土師器甕類がまとまって出土しており，a類は居住施設と考える。

b類：桁行3～2間×梁行2～1間の側柱の掘立柱建物で，平面積は20㎡未満の方形を基調とする。3・4・11号掘立柱建物がある。a類に比べると小規模で，付属的な施設と推測する。

c類：桁行2間×梁行2間の総柱の掘立柱建物で，平面積は15㎡未満の方形の建物である。9・10号掘立柱建物があり，倉庫と考えられる。

d類：桁行3間×梁行2間の掘立柱建物で，束柱または間仕切りを有する。平面積は20㎡以上の長方形で，5号掘立柱建物が該当する。配置状況から倉庫であろう。

e類：周囲を溝で囲んだ平地式建物と考えられる建物である。1号掘立柱建物に先行する建物（以下「1号平地式建物」と呼称する）や，12号溝及び25号溝で区画された建物を一括して含める。建物形式が異なることから，b類とは違う機能の付属的な施設であろう。

（2）掘立柱建物の主軸方位と群構成

第63図上図は，掘立柱建物の主軸方位または主軸に直交する方位が，真北に対し何度東へ傾いているかを示した主軸方位分布図である。掘立柱建物は，その主軸方向から三つの建物群に分類できる。

〈掘立柱建物A群〉　南北棟の主軸方位が東偏31.5°～33.5°，東西棟が西偏56.5°～58.5°を示す建物群である。a類とb類の建物で構成され，c類の建物は含まれていない。調査区のほぼ中心に位置する7号掘立柱建物と，その東に平行に建てられている片廂で雨落ち溝を有する2号掘立柱建物，7号掘立柱建物からL字状に配置される8号掘立柱建物，これらの建物より比較的小規模となる4号掘立柱建物，7号掘立柱建物の付属施設と考えられる11号掘立柱建物で構成される。調査区の中央部とその周辺に建物が集中している。

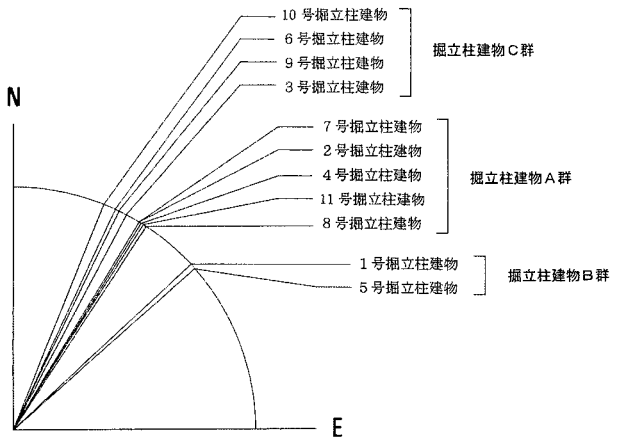
〈掘立柱建物B群〉　東西棟の主軸方位が東偏47°～48.5°，南北棟が西偏41.5°～43°を示す建物群である。a類とd類の掘立柱建物で構成される。南東側以外の三方を周溝に囲まれる1号掘立柱建物，1号掘立柱建物と同じく南東側以外の三方を周溝に囲まれる5号掘立柱建物で構成される。5号掘立柱建物は1号流路に面した場

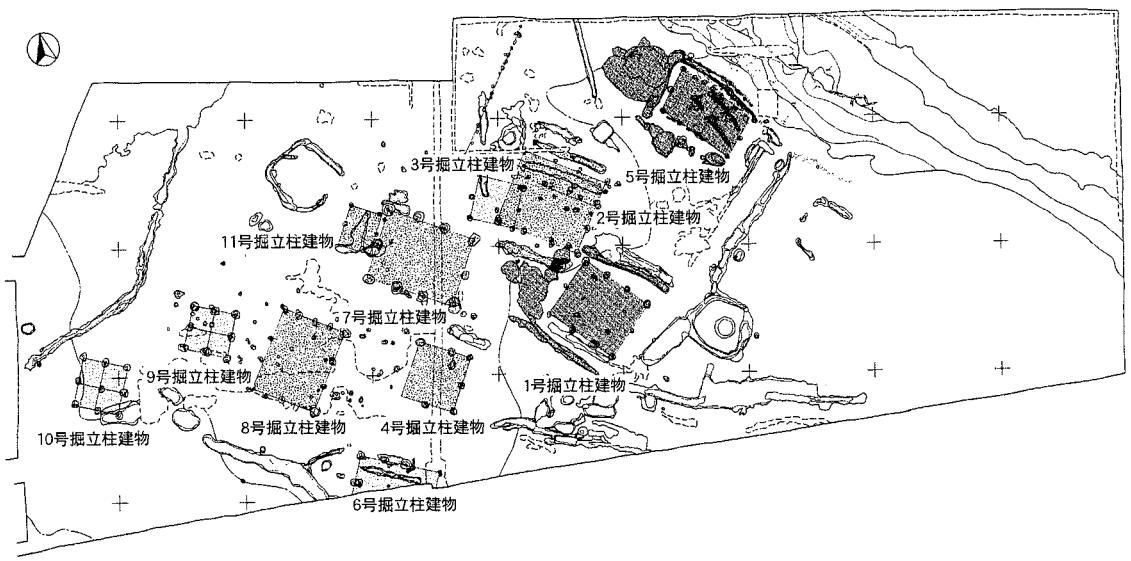
所に建てられており，倉庫であろう。この建物には，目隠し塀と見られる１号柵列が，流路側に設置されている。建物は調査区中央部の東側に偏って配置され，Ａ群やＣ群に比べ真北からの傾きが大きい。５号掘立柱建物が１号流路に面して建てられていることから，流路の方向に沿わせるように建てられているためであろう。

〈掘立柱建物Ｃ群〉 南北棟の主軸方位が東偏22°～28°，東西棟が西偏62°～68°を示す建物群である。ａ・ｂ・ｃ類の掘立柱建物で構成される。調査区外へと延びている６号掘立柱建物と，６号掘立柱建物からやや離れて位置する３号掘立柱建物，最も西側で検出された９・10号掘立柱建物で構成される。調査区中央部の南西側にやや偏って配置され，Ａ群やＢ群の建物群に比べると建物の密集の度合いが低く，散漫な分布をしているとの印象を受ける。また，この分布状態が影響しているのか，主軸方位もＡ群やＢ群は1.5°から２°の偏差であるのに対し，Ｃ群の建物は偏差が６°と少し幅が大きい。

掘立柱建物群は，主軸方位から以上の３群に分けられる。各群の先後関係は，Ａ群の２号掘立柱建物とＣ群の３号掘立柱建物が重複関係にあるが，柱穴同士の直接的な切り合いはなく，その新旧関係は不明である。また，Ｂ群の建物群はＡ群・Ｃ群いずれの建物とも切り合い関係はなく，両者との先後関係は不明である。Ａ群とＣ群

〈掘立柱建物の主軸または主軸直交方位分布図〉





Ａ群　Ｂ群　Ｃ群　0 (1/600) 20m

第63図　掘立柱建物の群構成

の建物群の時期が異なると推測できるほかは，各建物群の先後関係は重複や切り合いでは判断できない。次節の遺物の検討をふまえて考察する。

2　遺物の時期的な位置付けと特徴

地蔵潟Ａ遺跡から出土した遺物は，土器と木製品である。このうち遺構から一括出土した土器は少ないが，建物に関係するものがあり，建物群の時期決定に有益な情報が得られた。また，組成もある程度把握でき，８世紀後半～９世紀前半の当地域の土器様相がおおよそ理解できる状況にある。

そこで，遺構出土土器を須恵器窯資料と，当地域の古代土器編年の基準となっている山三賀Ⅱ遺跡の資料[注1]と比較して，地蔵潟Ａ遺跡出土土器の時期的な位置付けや組成を提示し，その特徴を明らかにしたい。

（１）　遺構出土土器について（第64図）

遺構資料の中で，時期的にまとまりがある資料は，１・２・６号掘立柱建物関連遺構，27･28･33号溝出土土器である。27･28号溝は，溝とするよりは土坑として扱ったほうがよいであろう。このうち，遺構の切り合い関係から新旧が判明しているものは，27号溝で，７号掘立柱建物に切られている。７号建物は，２号建物と主軸がおおむね一致し，配置状況からと同時存在した可能性が高く，27号溝資料が２号建物資料より古いと考えられる。また，新旧関係は不明であるが，１号掘立柱建物と２号掘立柱建物は，雨落ち溝が重複していることと建物の主軸が異なることから，別時期に存在したと考えられる。よって，遺構出土遺物の時期は，遺構の検出状況から少なくとも３時期以上に分かれると推測できる。次に，遺構出土土器の特徴･組成等について説明する。

27号溝出土土器　須恵器有台杯Ａ類４点，無台杯Ｂ類１点がある。遺存度が高く，すべて堤上窯に類似した胎土であることから，一括搬入されて使用された後，同時に廃棄された可能性が高い。有台杯Ａ類が多い点は，須恵器食膳具の組成として古い様相を示す。有台杯は，93･95が器高指数30以下の扁平器形で，ほかは器高指数30を超える深身である。法量は，口径12.6～14.0㎝で，13㎝以上が３点と比較的大型品で占められる。以上の土器の特徴･組成と遺構の新旧関係から，27号溝資料は，遺構資料中最も古く位置付けられる。

28号溝出土土器　須恵器無台杯と有台杯Ｄ類がある。有台杯Ａ類が無く，27号溝資料の土器組成とは異なる。無台杯は，99･100がＡ類，98がＢ類で，すべて外傾器形となる。法量は，口径11.7～12.6㎝で12㎝を切るものが３点と多い。よって，組成と法量から，28号溝資料は，27号溝資料より新しいと捉えられる。

２号掘立柱建物雨落ち溝出土土器　２号建物は，先述したように27号溝を切る７号掘立柱建物と同時存在した可能性が高い。２号建物は，建物の柱穴が幾つか重複し，雨落ち溝と考えられる４号溝が建物東面の柱列と廂の間にあることから，建て替えや建て直しが想定される。土器は，この４号溝からまとまって出土しており，新旧どちらかの建物に属することになろう。出土土器は，須恵器有台杯Ａ類(20)，Ａ類蓋(23)，有台杯Ｂ類(22)，無台杯Ａ類(21)，土師器甕Ｃ類３点，甕Ａ類１点，鍋Ａ類１点があり，多様な器種構成である。また，土師器は，煮炊具に限られる。雨落溝に土師器煮炊具がまとまって廃棄されていた状況は，建物内または周辺に炊事場が存在したことを示唆する。法量は，20が口径13.1㎝，21が口径12.6㎝，22が口径15.0㎝である。20は，法量が27号溝の有台杯に近似するが，薄手で高台が内側に付されるなど，器形が異なる。土師器は，甕Ａ類，鍋Ａ類に口縁端部の摘み上げが認められる。須恵器食膳具が多器種で構成されることと，法量や器形の特徴，２号建物と７号建物との配置状況から，27号溝より新しく28号溝より古い資料と位置付けられる。

１号掘立柱建物雨落ち溝出土土器　雨落ち溝が東西にそれぞれ２条あり，主軸も若干異なる。明確な建て替えの痕跡はないが，建て直しなどで一定期間建物が存続した可能性が高い。食膳具に偏るものの土器量は多く，器種も多様である。県内では出土例が少ない赤彩土器高杯(16)や土師器有台盤(７)，須恵器有台盤(８)があり，居

住者の身分などに関わるものであろう。溝ごとに組成や土器の特徴が異なり，溝の配置状況から時期差を示すと考えられる。

8号溝出土土器は，須恵器無台杯(5・6)が口径13㎝を超えやや大型だが，扁平，外反器形となる点は新しい要素とみなせる。

7号溝の折縁杯(3)は，口径12.8㎝と小形で口縁端部の摘み上げが弱く，折縁杯では新しいと判断できる。

5号溝は，唯一土師器無台椀(2)が出土している。また，糸切底を残す須恵器無台杯(1)は，薄手で椀形に近い。よって，5号溝資料は，遺構資料中最も新しい時期に位置付けられる。

14号溝出土の小泊窯群産須恵器無台杯(4)は，箱形器形であるものの，口径12㎝以下で器高指数28とやや深身で薄手なことから，3段階とするのが妥当であろう。

38号溝は，一部5号溝と重複する。須恵器食膳具の法量と器形から，10･12･14･15と9･11･13の二つにまとめられると捉えた。後者の一群は，胎土も共通し，同時期とできよう。5号溝と7号溝の配置状況から，後者の資料は本来5号溝に伴う可能性が高いが，椀形で小形の折縁杯13は，さらに新しくなる可能性が高い。前者の一群は，8号溝資料と法量，器形が類似し，おおむね同時期となろう。8号溝には県内での出土例が少ない有台盤(7・8)が在り，16の赤彩土器高杯は，前者の資料に伴うと考えられる。

6号掘立柱建物出土土器　柱穴と溝から破片資料が出土している。P3から出土した小泊窯群産無台杯(47)は，14号溝(4)と比較すると薄手扁平で，より新しいと判断できる。P2出土の折縁杯(48)は，7号溝(3)とおおむね同時期とできよう。31号溝出土の土師器甕B類(50)は，口縁部が肥厚する。

2号土坑出土土器　溝状遺構と重複する。70は，法量から8号溝(5)よりは新しい。71は，38号溝(15)とおおむね同時期と考えられる。2号土坑資料は，時期が異なる資料からなり，どちらかが混入したと判断している。

3号土坑出土土器　小泊窯群産須恵器無台杯(72)は，薄手で腰部が丸みを帯び，外傾気味に開くことから，14号溝(4)よりは明らかに新しく，6号堀立柱建物P3の(47)と同時期かやや新しいと判断した。

10号溝出土土器　椀形の無台杯C類(90)がある。薄手で小形深身であり，最も新しい資料であろう。

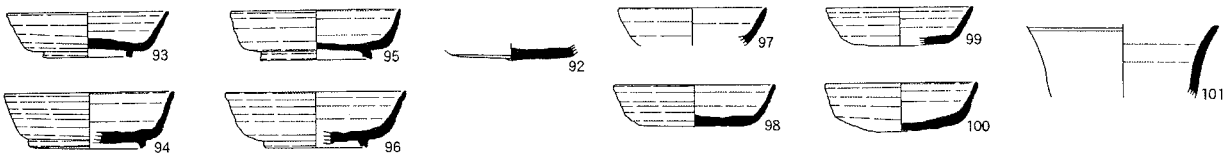
33号溝出土土器　須恵器食膳具が無台杯のみで，28号溝の組成と共通する。113･114は，口径が13㎝を超え古くなる可能性があるが，ほかの無台杯は法量･器形が一致する。溝資料であり，ある程度の時期幅を含む可能性あろう。108･110は，小泊窯群産須恵器で3段階以降に位置付けられる。頸部にリング状の凸帯が付く長頸瓶115は，赤彩土器高杯や有台盤などとともに特別な用途が考えられる。

以上の検討から，遺構資料を古い方から順に時期区分すれば，1期が27号溝資料，2期が2号堀立柱建物4号雨落ち溝，1号平地式建物8号溝，38号溝の古手の資料，3期が1号堀立柱建物7号雨落ち溝，28号溝資料，4期が6号掘立柱建物，3号土坑，10号溝資料となる。よって，遺構出土資料は，土器の検討から4時期に区分でき，遺構の切り合い･重複関係ともおおむね整合する。また，区画溝と推測される33号溝資料は，2・3期にまたがると資料と位置付けられ，建物群の存続期間内に機能していたと推定される。

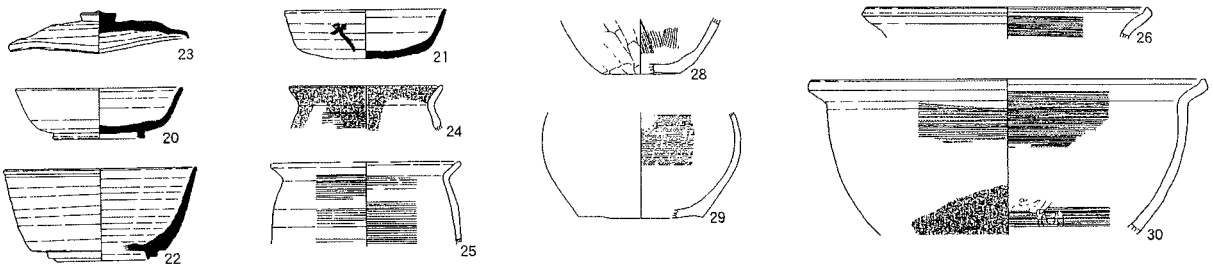
次に，在地の須恵器窯資料の編年上の位置付けを整理した後，遺構出土資料と対比させ，並行関係を整理する。

(2)　阿賀北地方の須恵器窯資料の時期区分について(第65図)

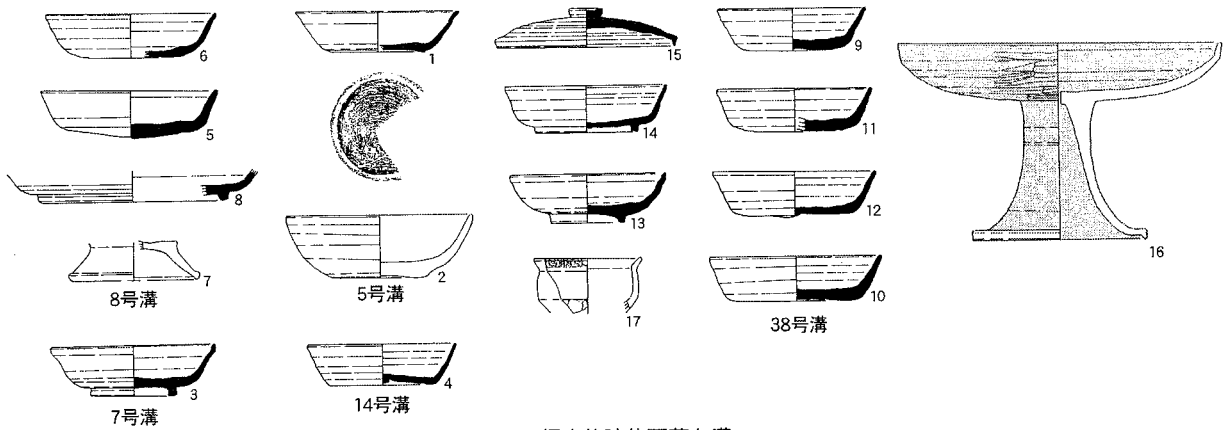
阿賀北地方の須恵器窯資料の時期的な位置付けは，研究者により若干異なるが，おおむね8世紀前半(春日編年Ⅲ期　春日1999)が下小中山窯(戸根1973)，志村山窯(川上1999)，8世紀中葉(Ⅳ1期)が岡屋敷窯，元山4号窯(吉井ほか1999)，8世紀後半(Ⅳ2期)が貝屋窯(川上1982)，8世紀末(Ⅳ3期)が高山寺窯，9世紀前半(Ⅴ1期)が馬上3号窯，9世紀前半～中頃(Ⅴ2期)が狼沢2号窯(中川･土井・川上1973)と認識されている(笹沢1999・春日ほか2004)[注2]。ここでは，遺跡に関わる部分について窯資料を再検討し，新たに8世紀中葉以降の時期区分を提示



27号溝　　28号溝

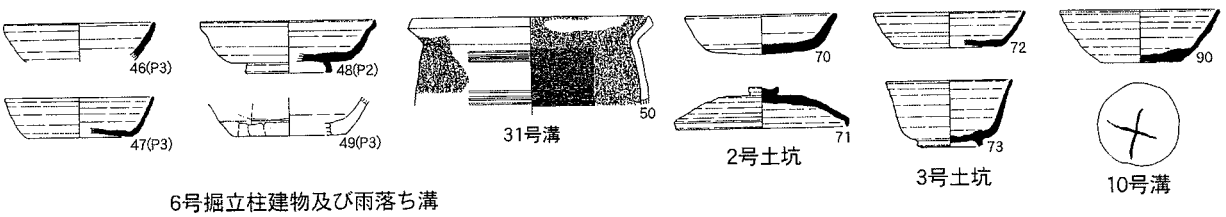


2号掘立柱建物雨落ち溝（4号溝）

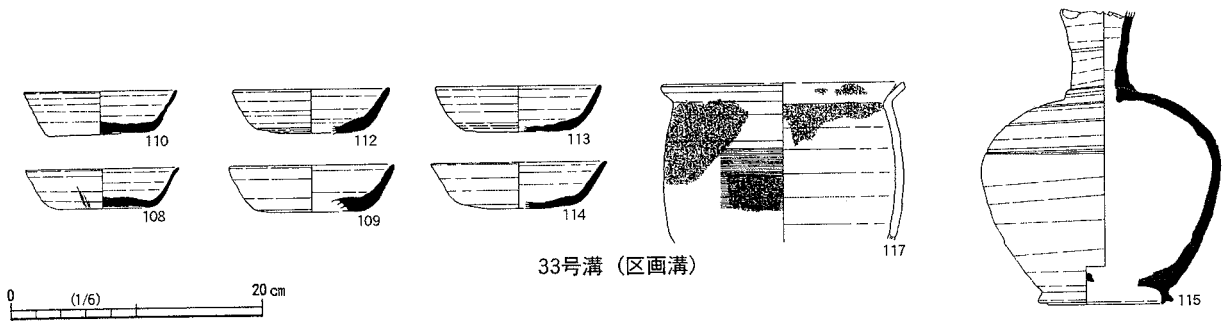


8号溝　5号溝　38号溝　7号溝　14号溝

1号掘立柱建物雨落ち溝



6号掘立柱建物及び雨落ち溝　31号溝　2号土坑　3号土坑　10号溝



33号溝（区画溝）

第64図　地蔵潟A遺跡の遺構出土一括資料

する。なお，ここでの時期区分は，検討用に示したものであることをはじめに断わっておく。

笹神丘陵窯跡群１期（８世紀中葉） 岡屋敷窯窯体内資料をこの段階にあてた。隣接地域では山崎窯（川上 1981）が同段階に位置付けられるが，法量の違いから時期的に若干先行し古期となる。

食膳具の器種組成は，有台杯Ｃ類がなく有台杯Ａ類が１法量の単純な組成である。山崎窯も同様であるが，稜椀が伴う点で異なる。

法量は，有台杯Ａ類が口径 13.2～14.8 cm，有台杯Ｂ類が口径 14.3～17.2 cm，無台杯が口径 11.6～15.0 cmで，有台杯Ａ類と無台杯は口径 13～14 cm台に集中し，かなり規格化されている。岡屋敷窯と山崎窯は，春日編年Ⅳ1 期に位置付けられ，北陸の古代土器編年の基準となっている田嶋編年Ⅳ1 期（田嶋 1988）に並行する（春日ほか 2004）とされるが，ともに田嶋編年Ⅳ1 期の指標となる有台杯の３法量組成[注3]が認められない。

笹神丘陵窯跡群２期（８世紀後半） 笹神丘陵に，この段階の窯資料が存在しないため，近在する元山４号窯窯体内・灰原資料と貝屋窯窯体内・灰原資料をこの段階にあてた。元山４号窯が古期，貝屋窯が新期となる。貝屋窯の灰原は，遺物量が多く報告書の記述（川上 1982）にあるようにほかの窯の資料を含む可能性もあるが，法量・器形から明確に区別できず，ここでは同時期の資料として扱った。

２期の指標は，有台杯Ａ類がⅠ・Ⅱに法量分化することと，有台杯Ｃ類の出現・定着とした。

古期は，有台杯Ａ類Ⅰ（13），Ⅱ（14），Ｂ類（15），Ｃ類（16），無台杯（17～20）で食膳具が構成され，１期に比べ有台杯が多様化する。新期は，古相の器種組成に折縁杯（28）が加わり，図示していないが有台杯Ａ・Ｂ・Ｃ類のバリエーションが増えて，有台器種がさらに多様となり，複雑な器種組成となる。ただし，器種のバリエーションが豊富なわりに法量のばらつきが少なく，一定の規格のもとに生産が行われたことが伺える。

元山４号窯の法量は，有台杯Ａ類Ⅰが口径 12 cm前後，Ⅱが口径 12.7～13.2 cm，無台杯が口径 11.8～14.3 cmで，有台杯Ａ類Ⅱと無台杯は口径 13 cm前後に集中する。

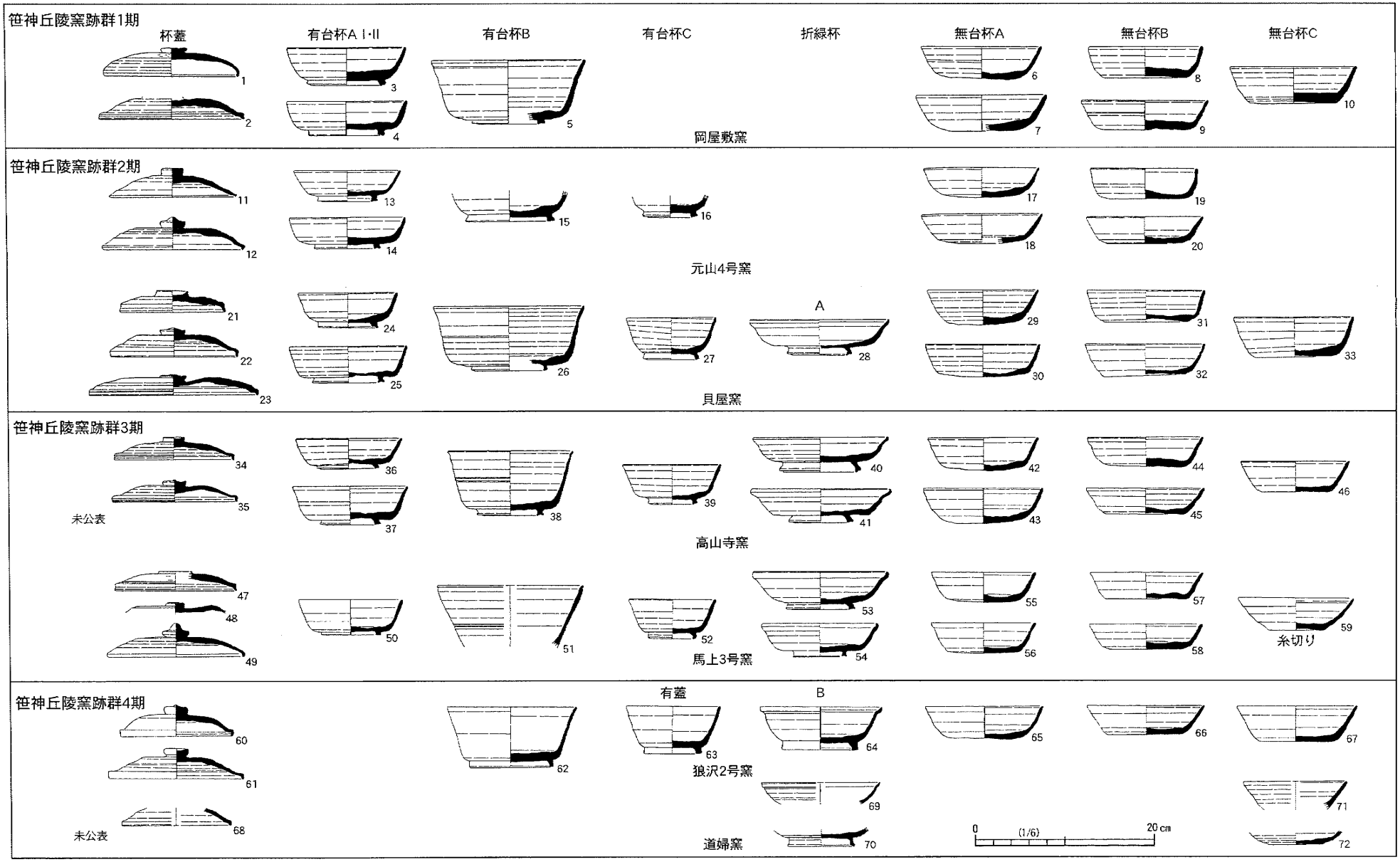
貝屋窯の法量は，有台杯Ａ類Ⅰが口径 9.8～11.2 cm，Ⅱが口径 12～13.2 cm，有台杯ＢⅠ類が口径 12～14 cm，Ⅱが口径 15～18 cm，有台杯Ｃ類が 9.0～10.2 cm，折縁杯が口径 15～16 cm，無台杯が 11.0～13.4 cmで，有台杯Ａ類Ⅱは口径 12.5 cm前後，無台杯は口径 12.5～13 cmに集中する。なお，貝屋窯の食膳具に深身で薄作りのもの（25・30・32）が定量あり，３期への傾斜を示すものとして注目される。

笹神丘陵窯跡群３期（８世紀末～９世紀前半） 高山寺窯窯体内・灰原出土資料と馬上３号窯窯体内出土資料をこの段階にあてた。高山寺窯が古期，馬上３号窯が新期となる。また，第 66 図の堤上窯表採資料と滝沢表採資料がそれぞれ３古・新期に該当するが，堤上周辺の窯資料は，どの時期も器壁が厚く，器壁の厚さが時期の指標とならない。

３期の指標は，古期で有台杯Ａ類の法量分化が不明瞭となり，新期で１法量となること，食膳具が全体に薄作りとなり口縁部の外傾度が増すこと，法量の縮小が進むこととした。また，有台器種が減少する半面，折縁杯の生産はピークを迎え，松山１・２号窯のように折縁杯が多器種化して有台器種の主体となる窯も出現する。

古期は，２期の器種組成とほとんど変わらないが，折縁杯以外の有台器種の生産量が減少する。２期との大きな違いは，器壁が薄くロクロ襞が明瞭となり，白色を呈するものや硬質焼成のもの，火襷き痕がある個体が増えることである[注4]。また、折縁杯は，口縁端部の摘み上げが強調されて定形化する。

法量は，有台杯Ａ類が口径 11.6～13.4 cm，有台杯Ｂ類Ⅰが 12 cm前後，Ｂ類Ⅱが口径 14 cm前後，有台杯Ｃ類が口径 10 cm前後，折縁杯Ａ・Ｂ類が口径 13～15.2 cm，有台杯Ｄ類が口径 15 cm前後，無台杯が口径 12～13.8 cmで，有台杯Ａ類が口径 12.5 cm前後，無台杯が口径 12～13 cmに集中する。２新期に比べ若干法量の縮小がみられる。新期は，食膳具の法量の縮小と器種の淘汰が一層進み，有台器種が各１法量に統一される。また，椀形器種（53・



第65図　阿賀北地方における8世紀中葉以降の窯跡出土須恵器変遷案

59)が増加する。

法量は，有台杯A類が口径 12 cm以下，有台杯C類が口径 10 cm以下，折縁杯が 12～14.8 cm，無台杯が口径 13 cm以下で，有台杯A類と無台杯の法量が口径 12 cm前後となる。

笹神丘陵窯跡群４期（９世紀中葉頃） 狼沢２号窯旧灰原出土資料と道婦窯表採資料をこの段階にあてた。４期の指標は，有台杯A類の消滅と，それに伴う大･小深身の有台杯による２法量組成の成立とした[注5]。また，椀形指向が顕著となり，一部の無台杯を除き，椀形器形へ転換する。道婦窯は，有台器種が折縁杯のみで，無台杯ともども椀形であり，狼沢２号窯を古相，道婦窯を新相と捉えた。４期は，食膳具が杯形から椀形器種へと移行した，在地須恵器生産の最終段階に位置付けられる。

（３） 遺構出土須恵器と須恵器生産地および山三賀Ⅱ遺跡資料との比較（第 64～66 図）

地蔵潟A遺跡の遺構出土資料と前項で時期区分した須恵器窯出土資料を比較すると，１期の 27 号溝資料は，有台杯A類Ⅰ(93)の存在とA類Ⅱの法量，95 の器形から，笹神丘陵窯跡群２古期の元山４号窯に並行すると判断した。92 の無台杯の底径値からも問題はないと考える。２期の２号建物４号雨落ち溝資料は，有台杯A類(20)と無台杯A類(21)が口径 13 cm前後，有台杯B類(22)が口径 15 cmで，すべて外反口縁の２類であり 22 を除き薄手なことから，笹神丘陵窯跡群３古期の高山寺窯におおむね並行すると考えられる。１号平地式建物８号溝資料と 38 号溝の古手の資料も同３古期とできよう。３期の１号堀立柱建物５・７号溝資料と 28 号溝資料は，４期まで降る可能性が高い第 66 図 13 を除き笹神丘陵窯跡群３新期，４期の６号建物，３号土坑，10 号溝資料が第 66 図 48 を除き同４古～新期に比定され，33 号溝資料は笹神丘陵窯跡群３古～新期となる。以上の在地窯産須恵器との並行関係は，共伴する小泊窯群産須恵器が３段階～５段階であり，小泊窯群資料の変遷とも大きく矛盾しない。

次に山三賀Ⅱ遺跡資料と在地窯産資料との並行関係を整理する。第 66 図に示した資料は，SI14 が山三賀$Ⅱ_2$期，SI15･339 が$Ⅲ_1$期，SI６が$Ⅲ_2$期，SI1320 が$Ⅳ_1$期，SI1201 が$Ⅳ_2$期とされ(坂井 1989)，時間的な前後関係と推移は妥当と考える。図示した資料は，在地窯産資料の時期区分(第 64 図)に対比させれば，有台杯A類が２法量化する以降の様相を示し，笹神丘陵窯跡群２期以降の資料と判断できる。ここでは，法量，組成，器形の特徴から，SI14 が笹神丘陵窯跡群１新期[注6]，SI 339 が２古期，SI15 が２新期，SI６が３古期，SI1320 が３新期，SI1201 が４古～新期と判断した。また，SI1320･1201 には小泊窯群産無台杯(85～88･94～96)と有台杯B類(80)，有台杯C類(93)が伴う。SI1320 の小泊窯群産無台杯は，箱形器形だが薄手で，口径 12 cm前後であることから４段階となる。SI1201 の無台杯は，扁平で口縁部の外傾度が強く口径 12 cmを切るものが主体であり５段階とできよう。

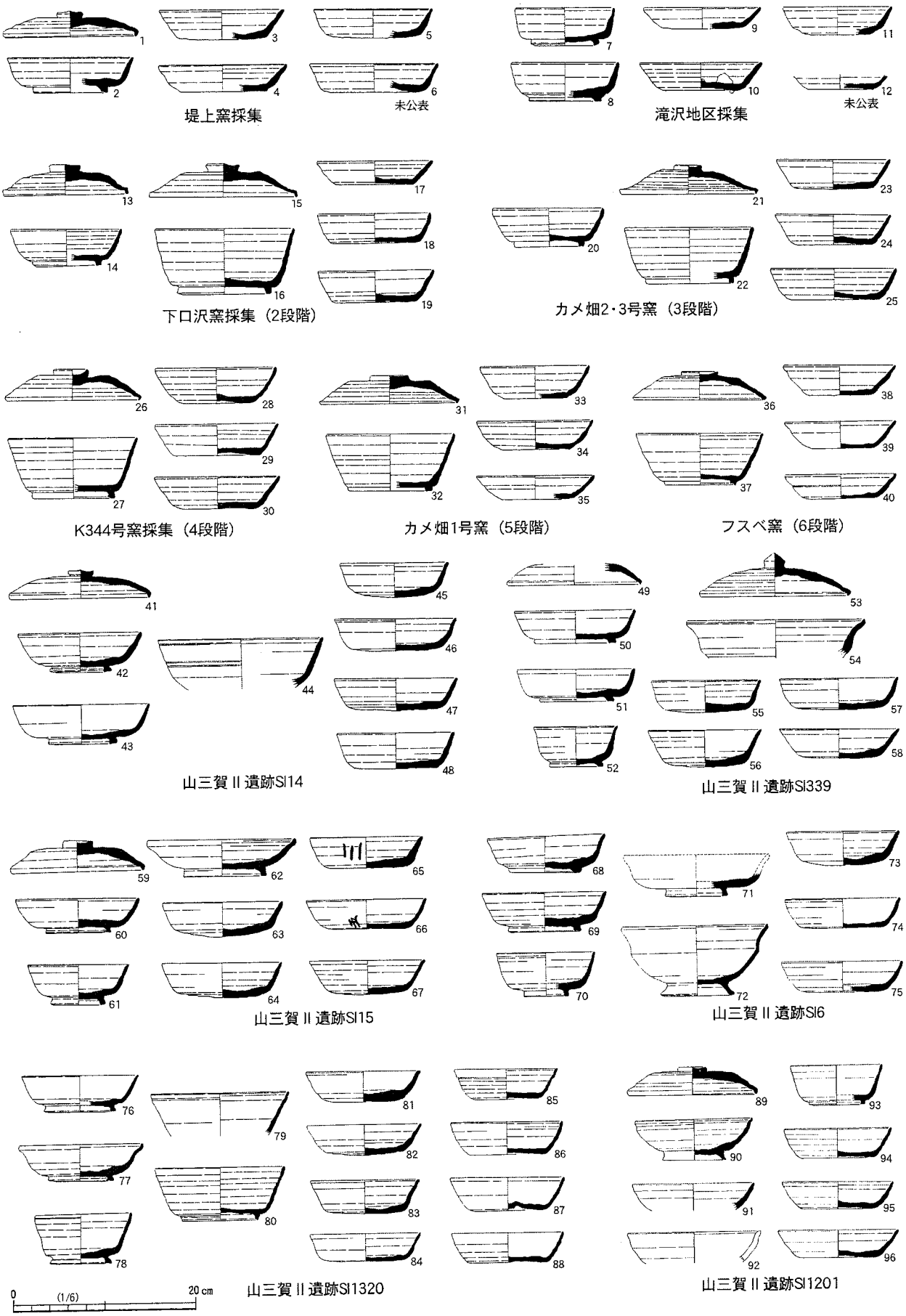
以上の検討から，地蔵潟A遺跡資料と在地須恵器窯，小泊窯群産須恵器，山三賀編年との並行関係は，１期の 27 号溝資料が笹神丘陵窯跡群２古期，山三賀$Ⅲ_1$期に，２期の２号堀立柱建物４号雨落ち溝，１号平地式建物８号溝･14 号溝，38 号溝の古手の資料が笹神丘陵窯跡群３古期，小泊窯群２～３段階，山三賀$Ⅲ_2$期に，３期の１号堀立柱建物５・７号雨落ち溝，28 号溝資料が笹神丘陵窯跡群３新期，小泊窯群３～４段階，山三賀$Ⅳ_1$期に，４期の６号掘立柱建物，３号土坑，10 号溝資料が，笹神丘陵窯跡群４古～新期，小泊窯群５段階，山三賀$Ⅳ_2$期に並行すると整理できる。

なお，１期と２期の間が１時期空白期となるが，建物群の成立が２期であることから，建物群の成立以前と以後の遺跡内での土地利用に関係するものであろう。

３ 地蔵潟A遺跡の変遷

（１）建物群の変遷と遺跡の時期区分（第 67・68 図）

前節の遺物の検討に基づき，建物群の時期比定と先後関係を整理する。各建物群の出土遺物を見ると，A群の



第66図　地蔵潟A遺跡出土資料との比較資料

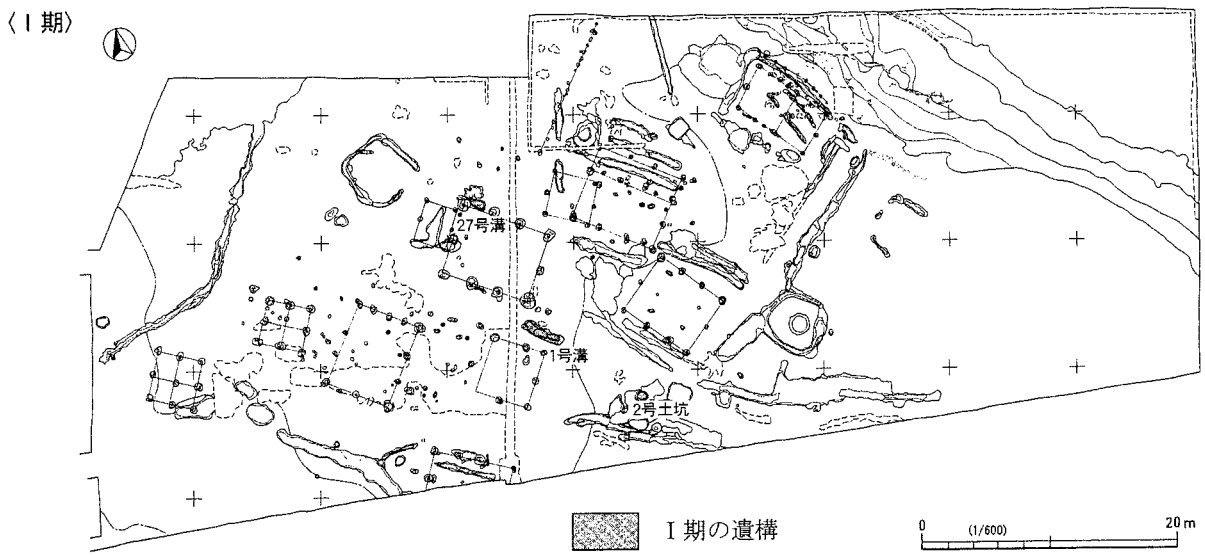
２号掘立柱建物の雨落ち溝からは２期の遺物が出土し，Ｂ群の１号掘立柱建物雨落ち溝からは３期の遺物が出土している。さらにＣ群の６号掘立柱建物からは４期の遺物が出土している。以上の点から建物群の変遷はＡ群→Ｂ群→Ｃ群の順で変遷していると考えられ，この変遷は先述した建物の重複関係とも矛盾していない。また前節の検討の結果，27 号溝などの遺構は建物群形成前に遡る遺構と考えられることから，地蔵潟Ａ遺跡は建物群形成前と建物群形成後３期の計４時期に区分できると言えよう。以下，各期の遺構の構成について記す。

〈Ⅰ期〉　掘立柱建物群が形成される前の段階である。１・27 号溝，２号土坑で構成され，１期（８世紀後半）の遺物を伴う時期である。25 号溝に区画されるｅ類の建物は遺物が出土していないため所属時期は不明だが，この時期またはⅡ期に含まれる可能性がある。調査区北東部を流れていた１号流路ａからは，１期の遺物が出土していないことから，この時期には別の場所を流れていたと考えられる。調査区内に居住域を形成する前に，どのような土地利用がなされていたのかを示す手掛かりはほとんど得られていない。

〈Ⅱ期〉　調査区内に建物群が形成され，建物群が調査区中央部に配置される時期である。２期（８世紀末～９世紀初頭）の遺物を伴っている。西側を 29 号溝，南側を 33 号溝で居住域の内外を区画して，その中央部にＡ群（２・４・７・８・11 号掘立柱建物）の掘立柱建物群が建てられている。またその他には，１号平地式建物や，Ｃ群に分類される９号掘立柱建物がこの時期に存在していたと考える。なお，９号掘立柱建物であるが，出土遺物が２期の遺物である点や，８号掘立柱建物との間に小規模な目隠し塀状の柱穴列（Ｐ61・62・65・73）が確認できることから，この時期の建物に含まれると判断した。これらの建物の他には，１・14 号土坑が当該期の遺構である。

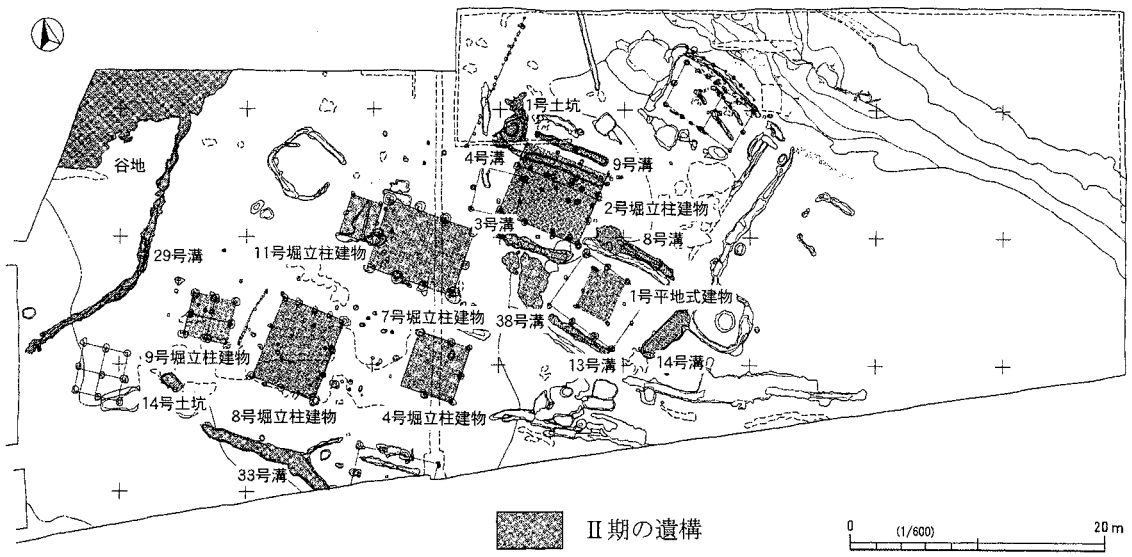
〈Ⅲ期〉　建物群が１号流路側に集約する時期である。３期（９世紀前半）の遺物を伴う。1 号流路が調査区北東部を流れるようになり，流路沿いに５号掘立柱建物，そこから南へ少し離れた場所に１号掘立柱建物，南東側には 12 号溝で区画される建物が造られる。また，土手状及び板や杭で造られた護岸施設が整備され，道路も敷設される。北西部には２号柵列を巡らし，一辺 20～25m程の区画を設けている。流路沿いに建てられた５号掘立柱建物は，おそらく倉庫として使用されていたであろう。また，１号井戸・６号溝もこの時期には掘削され，井戸はその後埋められている。これらの遺構の他に，７号土坑・28・40 号溝がこの時期の遺構であり，１号流路岸での祭祀も本期に行われたものであろう。

〈Ⅳ期〉　今回検出された遺構群の最末期にあたり，４期（９世紀中葉頃）の遺物を伴う。１号流路は依然とし

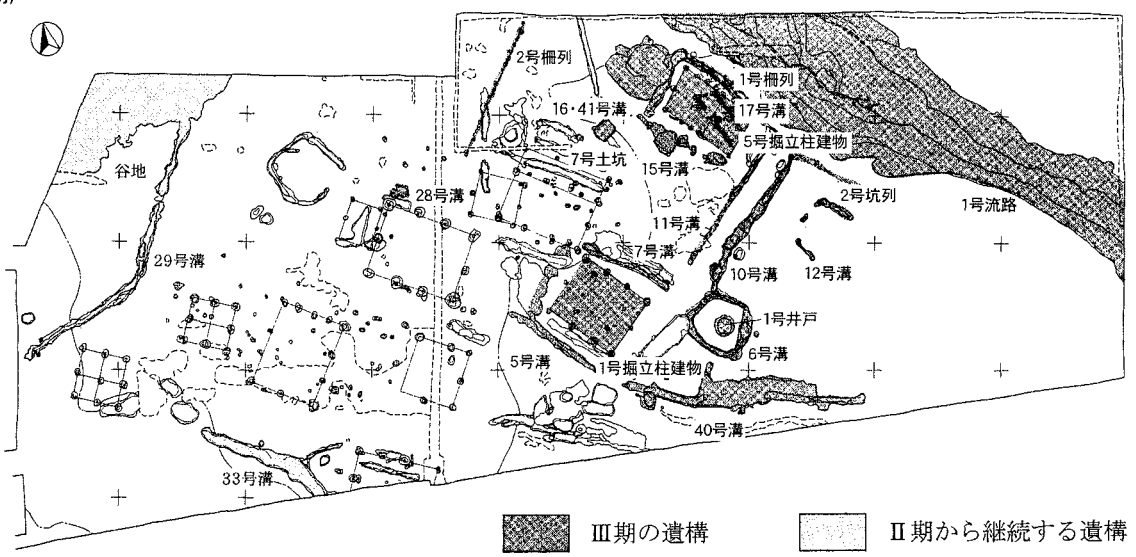


第67図　地蔵潟A遺跡の変遷（1）

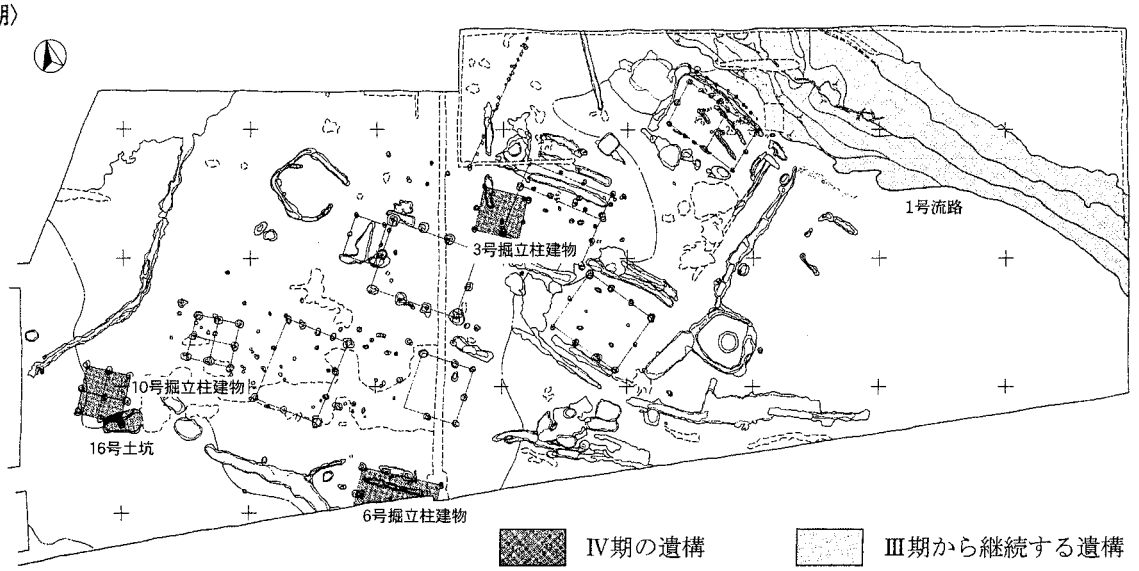
〈Ⅱ期〉



〈Ⅲ期〉



〈Ⅳ期〉



第68図　地蔵潟A遺跡の変遷（2）

て調査区の北東部を流れるが，建物群は流路から少し離れて造られる。Ⅱ期の建物とした９号掘立柱建物以外の，Ｃ群の建物群が建てられる時期である。10 号掘立柱建物は，４期の遺物を含む 16 号土坑より新しいことから，この時期の遺構と判断した。建物は，軸をそろえてはいるものの散漫な配置である。

（２）地蔵潟Ａ遺跡の変遷と性格

Ⅰ期は，今回調査した箇所に建物群が造られる以前の様相を示している。土坑や溝がわずかに掘削され，それらに伴う遺物が出土しているが，土地利用の具体像を見出すことはできない。

Ⅱ期になると遺跡の状況は大きく変わり，溝で区画した範囲に建物群が形成される。建物群の構成は，居住施設（建物ａ類）３棟，付属施設３棟（建物ｂ類２棟，建物ｅ類１棟），倉庫（建物ｃ類）１棟となる。人々が居を構え生活を営み始めた段階と考えられ，おそらくは農業生産に従事したのであろう。なお，建物群は居住施設と捉えたａ類建物１棟と，付属施設としたｂ類またはｅ類建物１棟からなる建物セットを基本単位とし，これに倉庫１棟を伴って構成されている。上記の建物構成は，集落の終焉であるⅣ期まで引き継がれている。

Ⅲ期は，遺跡の北東部に流路が形成されたことに伴い，流路に沿って建物群と護岸施設や道路・井戸が配置される。建物群は，居住施設（建物ａ類）１棟と付属施設（建物ｅ類）１棟に倉庫（建物ｄ類）１棟で構成される。上記の遺構は，①流路沿いに倉庫を設ける。②建物の軸を流路に合わせる。③建物の周囲をコの字状の溝または雨落ち溝が囲む。④流路から建物に向かい道路を敷設する。といった構成をとり，官衙関連とされる胎内市蔵ノ坪遺跡（飯坂・霜鳥ほか 2002）と共通する。円面硯や赤彩土師器等を保持し，官衙関連遺跡に類する遺構配置が見られることから，内水面のなんらかの権益を持って，物資の流通を掌握していた可能性がある。律令制の動揺による統治機構の変化と，有力集落の台頭を示すものであろうか。このような集落が，10 世紀に出現する新発田市桑ノ口遺跡や長岡市門新遺跡のような，館に住む有力者層を中心とした集落の出現へと繋がっていくと想定される。

Ⅳ期になると再び集落の様相は一変する。Ⅲ期の官衙関連遺跡に類する様相は見られなくなり，流路から少し離れて建物が配置される。居住施設（建物ａ類）１棟に，付属施設（建物ｂ類）１棟と倉庫（建物ｃ類）１棟という建物構成は変わらないが，その配置は散漫となる。集落の衰退期の様相を示しているであろう。なお，Ⅲ期からⅣ期へと，集落の様相が変化する背景を示す材料は得られていない。周辺遺跡の状況と合わせて，今後明らかとなることに期待したい。

調査の結果，地蔵潟Ａ遺跡が８世紀後半から９世紀中葉までの約 100 年の間に，建物群の再編を繰り返しながら変遷していく状況を看て取ることができた。地蔵潟Ａ遺跡の居住者の中には，赤彩土師器高杯や須恵器有台盤など周辺地域での出土例が乏しい遺物を入手できた者もおり，ある程度の有力者が存在していたであろうと推測できる。ただし，地蔵潟Ａ遺跡を直接官衙と関連づけることは難しく，官衙関連以外の集落で，内水面を掌握して一定の財力を得ていたと推測される本遺跡のような集落を，どのように評価していくかは今後の課題である。

坂井氏や川村氏，春日氏により古代集落遺跡に関する整理・検討（坂井ほか 1989，川村 1989，春日 1995）が行われてからしばらく経ち，その後も平野部での古代集落遺跡の調査例は増加している。これまで９世紀以降の越後の古代集落は，律令制の動揺により集団が自立化し，それに伴い集村から散村へと移行すると考えられてきた（坂井 1989）。今回の調査成果も，集落の散村化や建物小群を構成する集団の自立化の流れという，社会全体に現れている集落の変化を反映したものと言え，これまでの見解をおおむね是認するものとできる。だが，集団の自立化の方向は，従来の説よりも早く進行していた可能性も指摘されよう。

短期間でその役割を終えているが，阿賀北地域において内水面との密接な関連を示す官衙関連以外の集落遺跡の検出事例は，本遺跡が初例である。越後平野における古代の官衙や集落の成立・展開の背景には，内水面の果

たした役割が大きかったとされる（坂井 1996）。本遺跡から南へ約 2.6 kmの，福島潟の潟端の自然堤防上に位置する曽根遺跡は，内水面を利用して須恵器や土師器，鉄の流通に関連した官衙遺跡と言われている遺跡である。本遺跡との関連を検討するまでには至らなかったが，内水面を介しての両者のつながりが想定できる。今後，当地域における古代官衙・集落遺跡の調査・研究が進展し，検討されることが望まれよう。

<注>

1） 山三賀Ⅱ遺跡の時期区分は，成形・調整手法の違いにより分類された土師器甕の組成・型式変化を基軸とし，佐渡小泊窯群産須恵器の共伴関係と器形の特徴を加味して組み立てられたもの(坂井 1989)である。このため，須恵器食膳具の組成・型式変化とは一致しないが点があることを，春日真実氏により指摘されている(春日 2005)。ここでの筆者の分析も，春日氏と同様に須恵器食膳具の組成・器形の特徴から山三賀Ⅱ遺跡の資料の位置付けを行ったが，春日氏の位置付けとは異なる結果となった資料もある。

2） 阿賀北地方の須恵器窯跡出土須恵器の位置付けは，これまで，多くの研究所によって試みられている(坂井 1989，笹沢 1999，吉井 1999，春日 2004，小林 2004)。おおよその時間的な推移は一致するものの，各窯の並行関係や時期区分については研究者により異なる。

3） 田嶋編年(田嶋 1988)Ⅲ期に，多様な器種分化と法量の規格性が顕著な平城宮都の食膳具様式が導入され(北野 1989)，新たに出現した大・小深身の有台杯がⅣ1 期に定着して３法量に整理される(望月 1994)とする。山崎窯で稜椀が生産されていることと，食膳具の法量や器形の特徴から，１期が北陸のⅣ1 期並行とするこれまでの見解は妥当と考えるが，器種組成は明らかに異なっており，越後の古代土器様式を再評価していく必要があろう。なお，Ⅳ1 期は，北陸での古代土器生産の確立期(田嶋 1989)で、基幹窯場での須恵器と土師器の一体的生産を前提とする「北陸型土器生産体制」（望月 1997)が形成される画期と評価されている。

4） 望月精司氏は，石川県能美窯跡群などでの検討において，田嶋編年Ⅳ2 新期以降，須恵器食前具の細部の作りがシャープで薄作りとなること，器形が椀形指向となること，胎土選択や焼成方法に変化が生じること，瓶Ｂ類(なで肩球胴形の長頸瓶)の出現と瓶Ｄ類(北陸型双耳瓶)の定形化および法量分化などを指標として，田嶋編年Ⅴ1 期よりもⅣ2 新期の画期を重視する立場を示した(望月 2005・2010)。

5） 石川県戸津窯跡群(望月 1991)や南加賀の集落遺跡では，田嶋編年Ⅴ1 期以降須恵器有台杯の淘汰と法量の統合が進み，Ⅴ1 期でほぼ大小２法量に統一され，Ⅴ2 期になると有台杯が深身椀形に統一される。また，Ⅶ1 期では，有台杯の小法量が激減して大法量生産主体に移行し，Ⅶ2 期には，小法量の有台杯が無台化して有台杯小法量が事実上消滅する(望月 2010)。

6） 本稿の須恵器窯場での１期と２期の区分に関わるが，消費遺跡では，頸城地方で田嶋編年Ⅳ1 期並行の基準資料とされる今池遺跡 SK24(坂井ほか 1984)，同上越市教委調査地区 SK158(笹澤・春日 2003)，岡原遺跡 SK18(笹川 1995)資料に有台杯Ａ類Ⅰ(口径 12 cm前後)が伴う。ただし，これらの資料は，いずれも有台杯Ａ類Ⅱ数個体に対して有台杯Ａ類Ⅰ１個体が組成するに過ぎず，有台杯の３法量組成が定立していたとは見做し難い。これは，山三賀Ⅱ遺跡 SI14 も同様である。一方，頸城郡の須恵器窯場でも、下越地方の須恵器生産地同様に，上記の消費遺跡と同時期の須恵器窯(日向５号窯　秦・小林・三辻 1997)で有台杯Ａ類Ⅰの生産が確認できず，定量生産されるようになるのは，末野窯跡(小島・秦・水沢 1983)以降である。よって，本稿では，有台杯Ａ類の法量分化の定立を指標に１期と２期を区分した。

引用文献

飯坂盛泰・霜鳥正道ほか　2002『一般国道７号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書　蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会

家田順一郎　1981「Ⅳ 問題点の抽出」『曽根遺跡Ⅰ』新潟県豊浦町教育委員会

家田順一郎ほか　1982『曽根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会

加治川水害豫防組合　1926『加治川治水沿革史』上

春日真実　1989「第５章 考察　３ 窯詰めの方法」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室

春日真実　1995「古代集落の展開 ―越後を事例として― 」『研究紀要』1995　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1999「第４章 古代　第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』古志書院

春日真実ほか　2004『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

春日真実　2004「報告編　第Ⅲ章 沼垂郡の土器様相　４ 海岸部(南部)」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

春日真実　2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について ―「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に― 」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会

加藤学　1999「第Ⅴ章 上層の調査　１．遺構」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡（本文・観察表編）』新潟県教育委員会

加藤学・猪狩俊哉　2004「第Ⅴ章 遺物　5 木製品　B 柱根・礎板・根絡み　2 柱根の観察・計測項目」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡（本文・観察表編）』新潟県教育委員会

川上貞雄　1981『山崎須恵窯址』五泉市教育委員会

川上貞雄　1982『貝屋須恵窯址』加治川村教育委員会

川上貞雄　1991『発久遺跡発掘調査報告書』新潟県笹神村教育委員会

川上貞雄　1999『志村山須恵窯址』新潟県豊浦町教育委員会

川上貞雄　2002『腰廻遺跡』新潟県笹神村教育委員会

川村浩司　1989「越後の古代集落の素描 ―遺跡の類型とその展開― 」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会

北野博司　1989「１ 北陸における須恵器生産　（１）編年の概要」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

桑原正史　1980「第一編　第二章 古代の新発田」『新発田市史』上巻　新発田市

国土地理院　1993『１：25,000　土地条件図　新発田』

小島幸雄・秦繁治・水沢省吾　1983『保倉川流域』新潟県教育委員会

小林　弘　2004ａ「報告編　第Ⅲ章 沼垂郡の土器様相　３五頭山麓窯跡群」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

小林　弘　2004ｂ「資料編　第Ⅱ章 沼垂郡　(26)高山寺窯跡，(29) 堤上窯，(32)道婦窯」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

坂井秀弥ほか　1984『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告　Ⅰ　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1989「第Ⅴ章 出土遺物　３ 奈良・平安時代」，「第Ⅶ章 まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1996「水辺の古代官衙遺跡 ―越後平野の内水面・舟運・漁業― 」『越と古代の北陸』名著出版

笹川修一　1995『岡原遺跡・大野遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会

笹沢正史　1999「第４章 古代　第４節 生産と流通　第２項 窯業」『新潟県の考古学』古志書院

笹澤正史・春日真実　2003「第５章 古代　第２節 15 今池遺跡」『上越市史資料編２　考古』上越市

笹澤正史　2011「第Ⅶ章 総括」『七社遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

関雅之・本間信昭　1981『真木山製鉄遺跡 ―新潟県北蒲原郡豊浦町真木山製鉄遺跡の発掘調査報告― 』新潟県豊浦町教育委員会

田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

田嶋明人　1989「加賀・能登における古代手工業生産の様相　（１）加賀・能登の古代土器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

田中耕作　2011「第Ⅰ章 遺跡の位置と環境」『七社遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

田中靖　2003『下ノ西遺跡Ⅳ』新潟県和島村教育委員会

鶴巻康志　2003「Ⅴ まとめ　８．桑ノ口遺跡の性格」『桑ノ口遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会

戸根与八郎　1986「付編二　生産遺跡　真木山窯址群」『新潟県史』通史編１原始・古代　新潟県

戸根与八郎　1973「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯跡」『越佐研究』第三十三集　新潟県人文研究会

戸根与八郎ほか　1992『北陸自動車道関係発掘調査報告書　木崎山遺跡』新潟県教育委員会

中川成夫・土井義雄・川上貞雄　1973『狼沢窯址群の調査』新潟県笹神村教育委員会

中川成夫ほか　1962「新潟県北蒲原郡における二窯址の調査」『豊浦村文化財報告』一　新潟県北蒲原郡豊浦村教育委員会

奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代編』

秦繁治・小林義廣・三辻利一　1997『日向古窯跡発掘調査報告書』三和村教育委員会

水澤幸一　2004「報告編　第Ⅳ章 各論　５ 木製食器の様相」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会

望月精司　1991『戸津古窯跡群Ⅰ』石川県小松市教育委員会

望月精司　1994「南加賀古窯跡群における８世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会

望月精司　1997「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

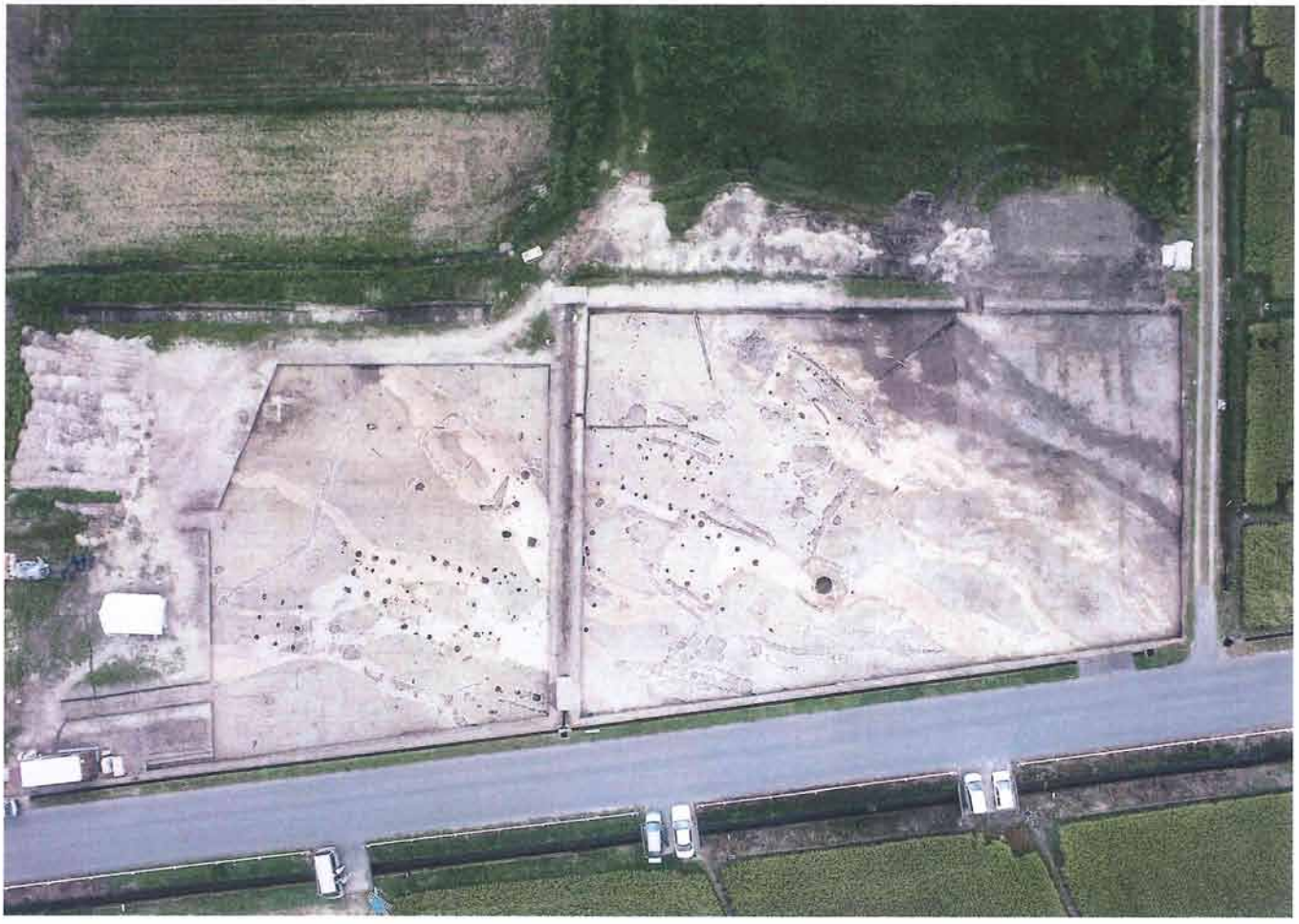
望月精司　2005「第８章 考察 ―能美窯跡群の８世紀後半～９世紀中頃の須恵器編年と窯場動向― 」『和気後山窯跡群』石川県辰口町教育委員会

望月精司　2010「第Ⅵ章 総括　―三湖台地集落遺跡群の古代後半期の土器様相― 」『額見町遺跡Ⅴ』石川県小松市教育委員会

吉井雅勇ほか　1999『元山窯跡群』新潟県荒川町教育委員会

渡邊美穂子　2001「第Ⅵ賞　まとめ」『坂ノ沢Ｃ遺跡Ⅱ（平安時代編）』新発田市教育委員会

調査区遠景（西から）



調査区全景（南から）

図版2　38号溝出土赤彩土師器高杯

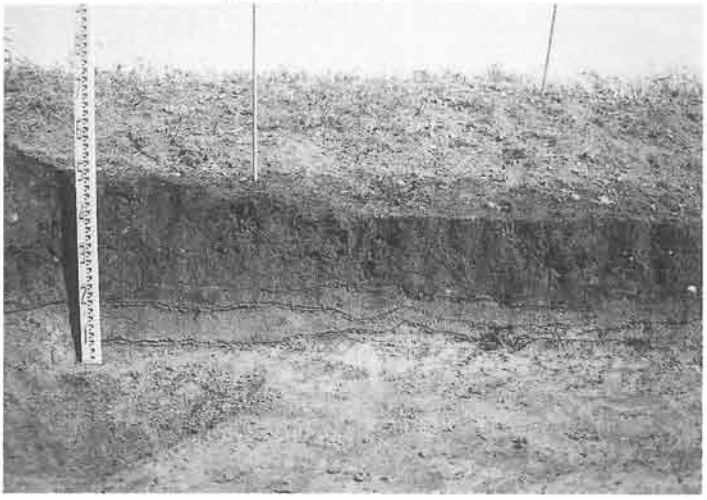
38号溝　遺物出土状態（南東から）

38号溝出土　赤彩土師器高杯

調査区近景（南東から）

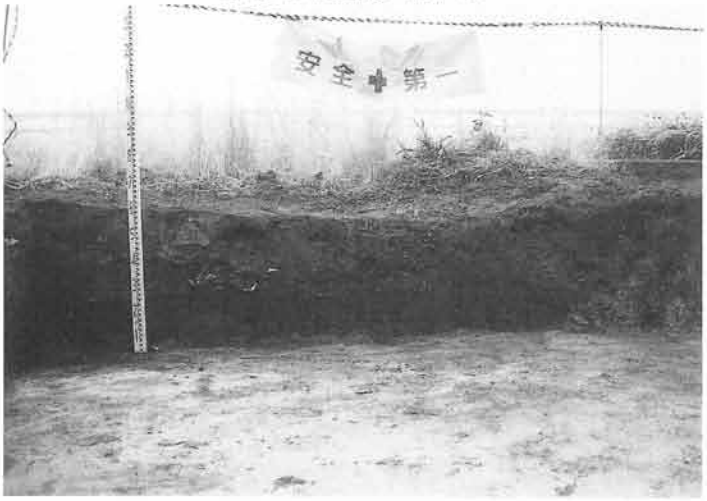
調査区基本土層①（南から）

調査区基本土層③（南から）

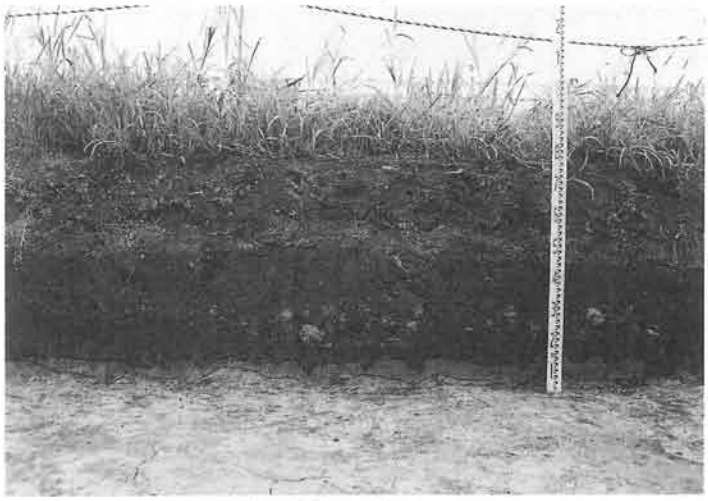


調査区基本土層⑧（西から）

調査区基本土層⑨（西から）



調査区基本土層⑪（北から）

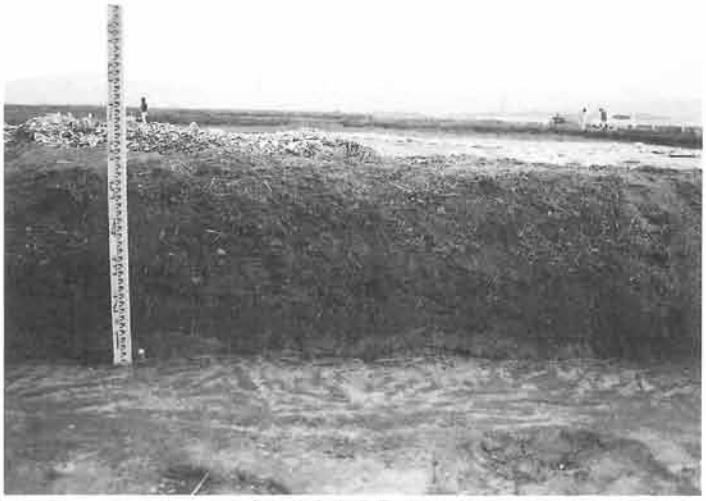


調査区基本土層⑯（北から）

調査区基本土層⑱（東から）

図版4　基本土層（2）・調査風景・1号堀立柱建物と関連遺構

調査区基本土層⑳（東から）

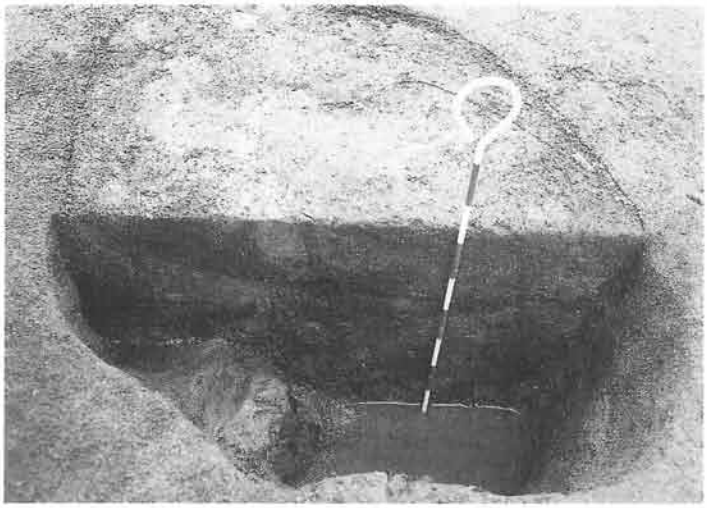


調査区基本土層㉒（西から）

調査風景

調査風景

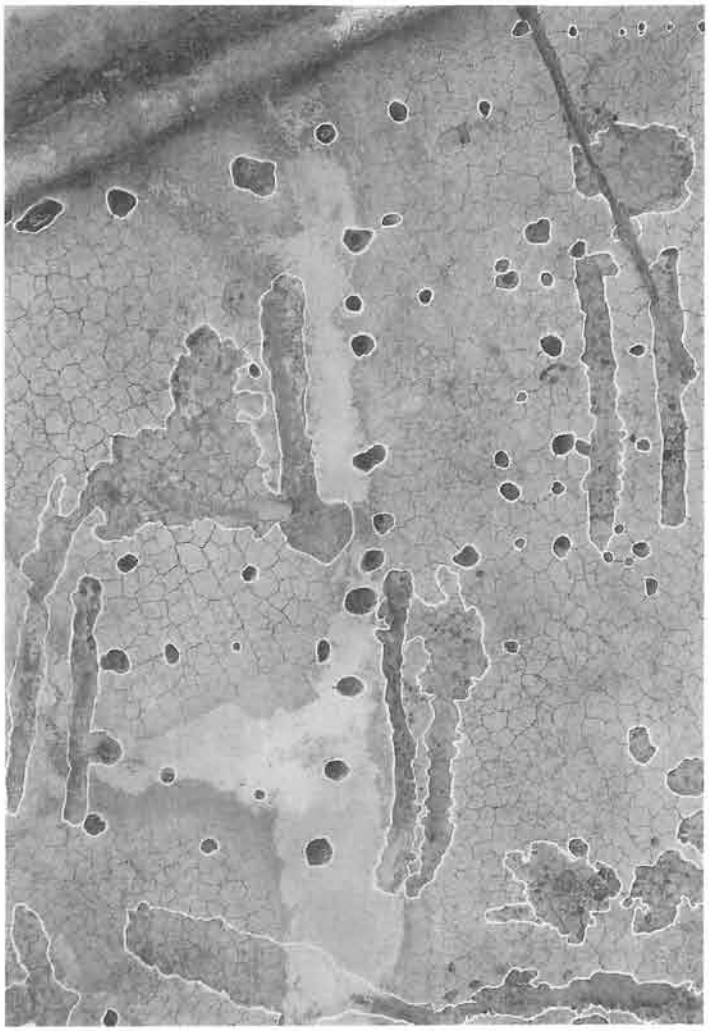
1号掘立柱建物　完掘（南東から）



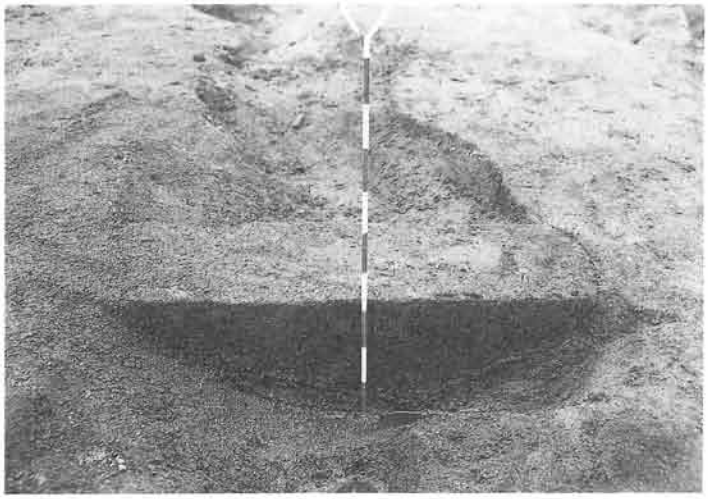
1号掘立柱建物P1　土層断面（北東から）

1号掘立柱建物P2　土層断面（北東から）

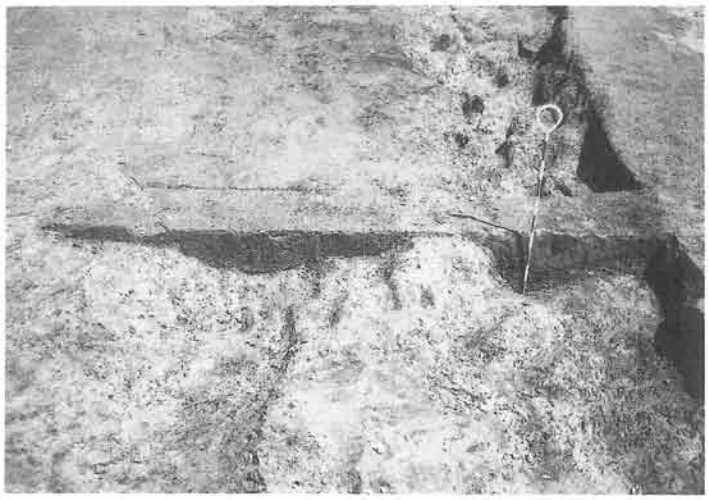
5号溝　遺物出土状態（西から）



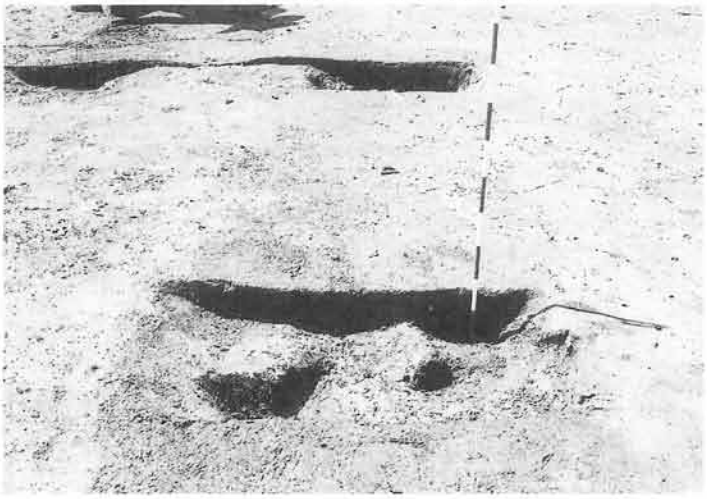
1～3号掘立柱建物　完掘（南東から）



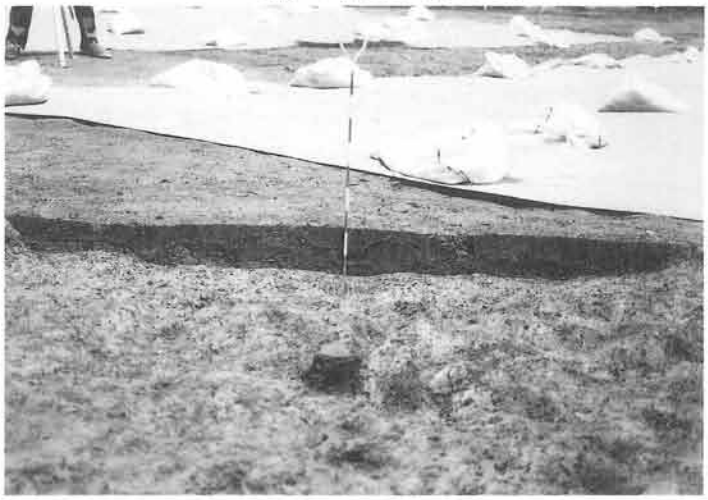
5号溝　土層断面（南東から）



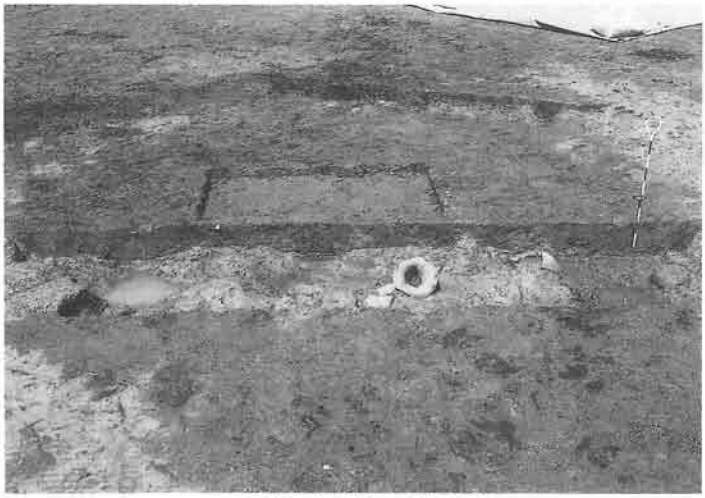
7・8号溝　土層断面（北西から）



13号溝　土層断面（南東から）



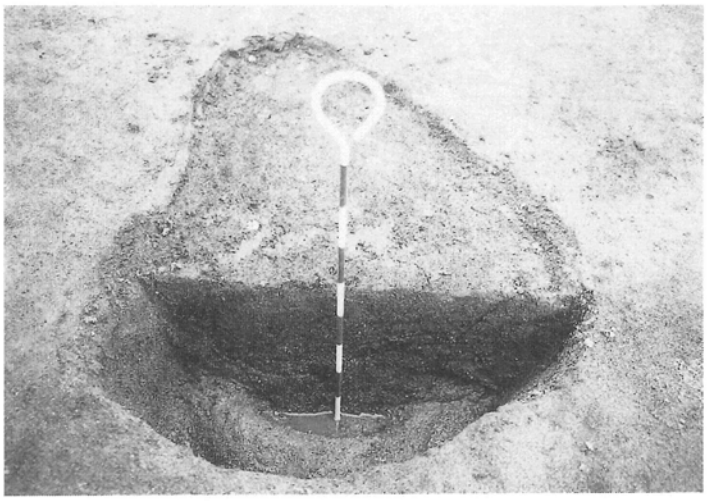
14号溝　土層断面（南西から）



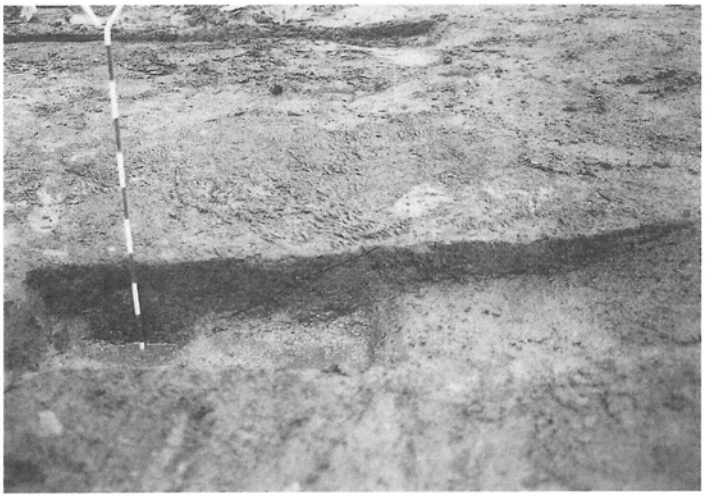
38号溝　土層断面（南から）

2号掘立柱建物　完掘（南東から）

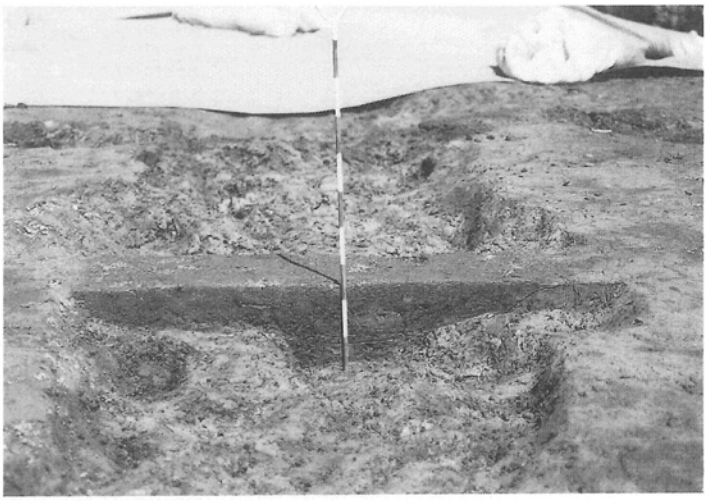
図版6　2～4号掘立柱建物と関連遺構



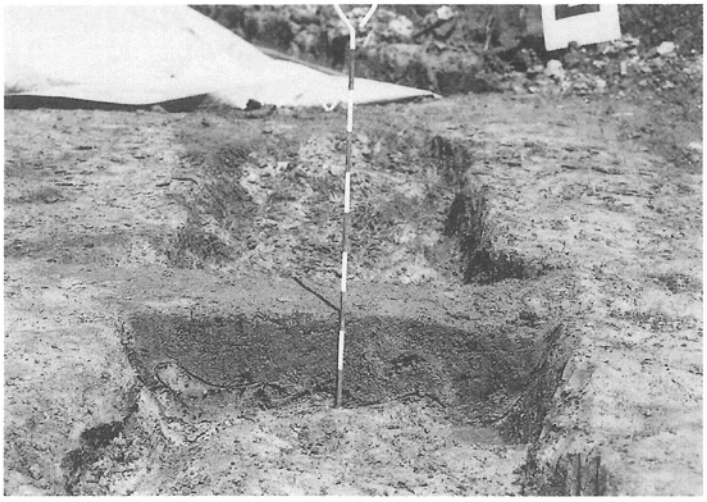
2号掘立柱建物P9　土層断面（南西から）



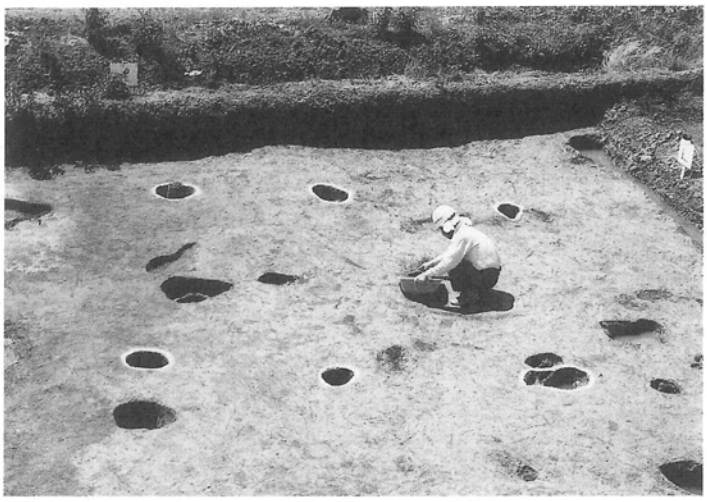
3号溝　土層断面（東から）



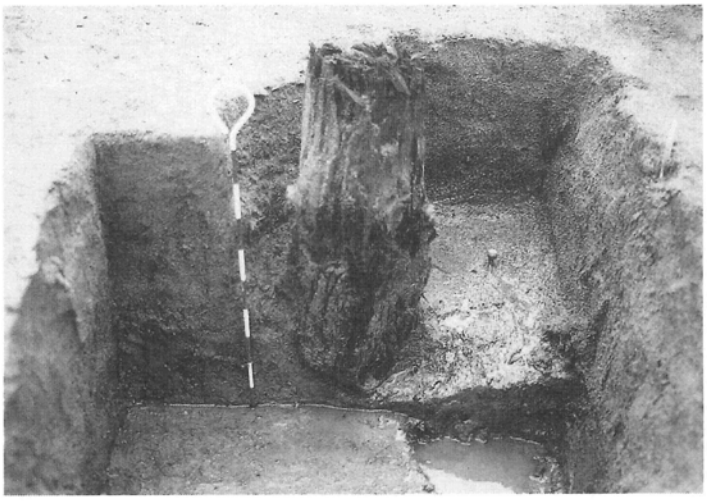
4号溝　土層断面（南東から）



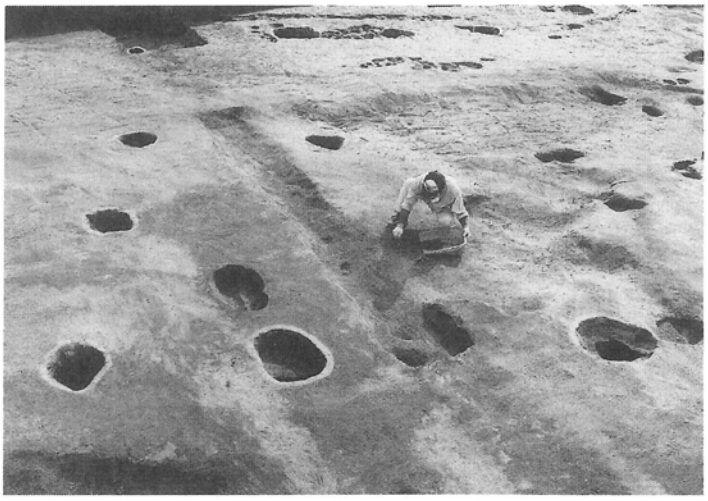
9号溝　土層断面（南東から）



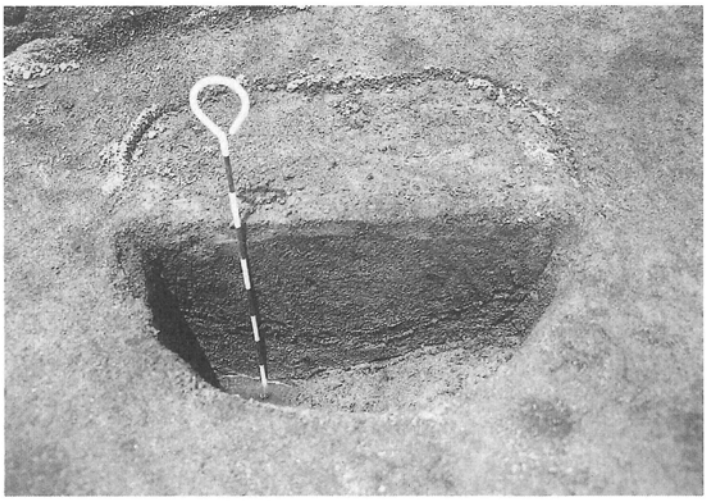
3号掘立柱建物　完掘（南東から）



3号掘立柱建物P5　柱根検出状態（北西から）



4号掘立柱建物　完掘（北から）

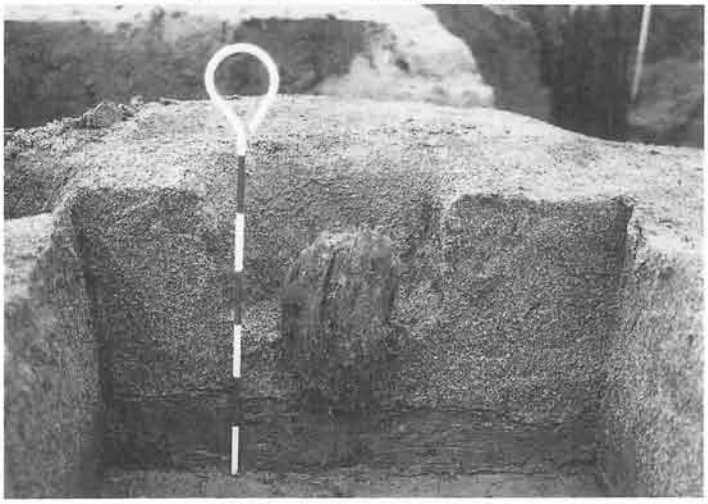


4号掘立柱建物P4　土層断面（南東から）

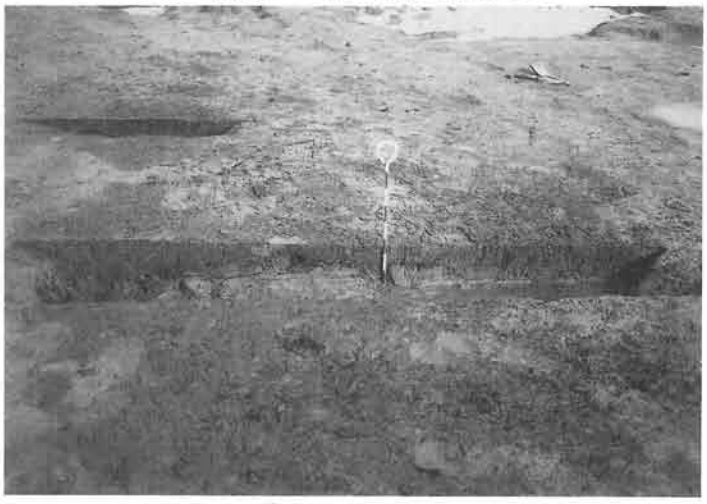
5号掘立柱建物　完掘（南東から）

5号掘立柱建物P7　柱根検出状態（南から）

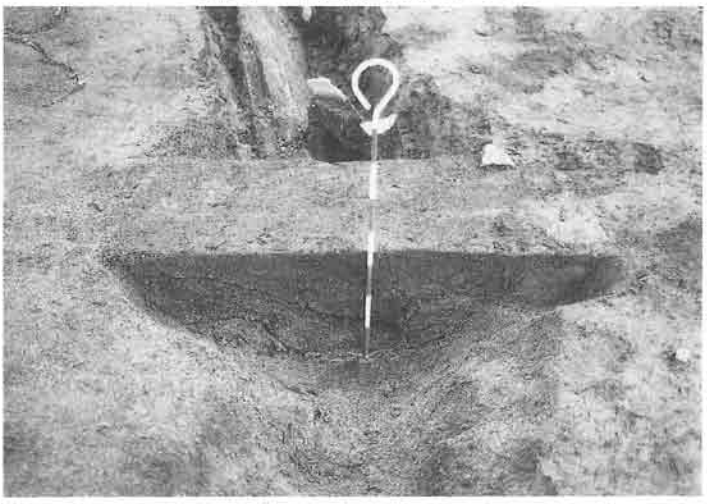
1号柵列・17号溝　完掘（南東から）



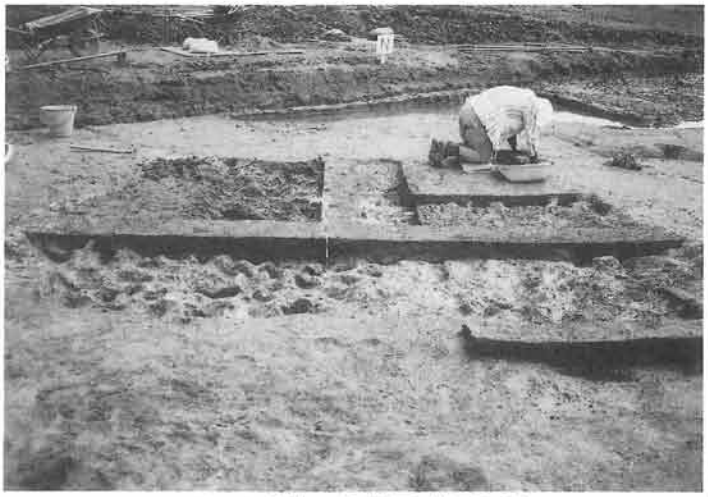
1号柵列P7　柱根検出状態（北東から）



15号溝　土層断面（南西から）



17号溝　土層断面（北西から）

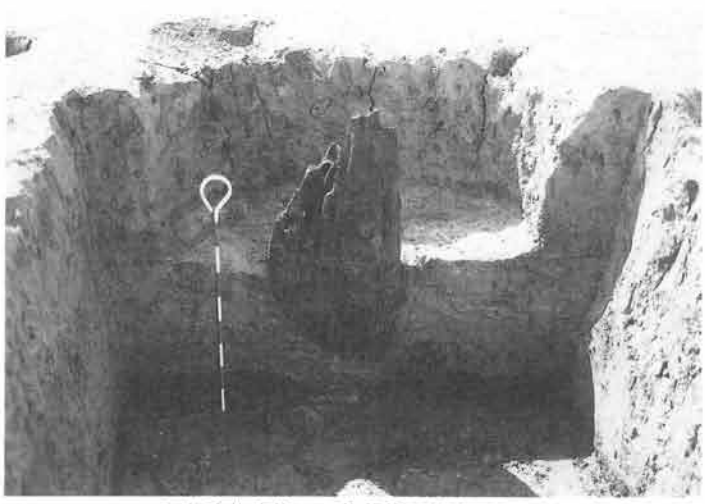


16・41号溝　土層断面（南西から）

1号杭列　杭検出状態（南西から）

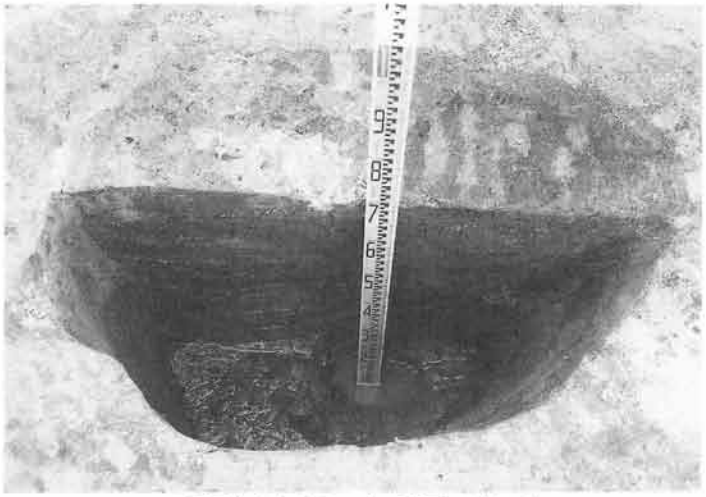
図版8　6～10号掘立柱建物

6号掘立柱建物　完掘（北西から）

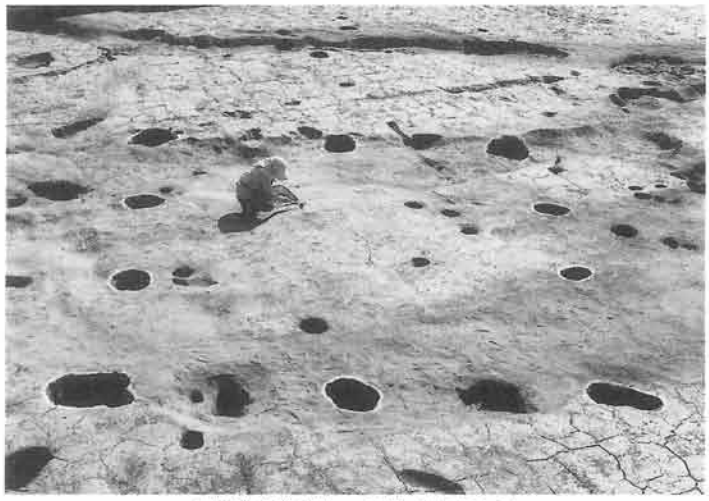


6号掘立柱建物P3　柱根検出状態（北から）

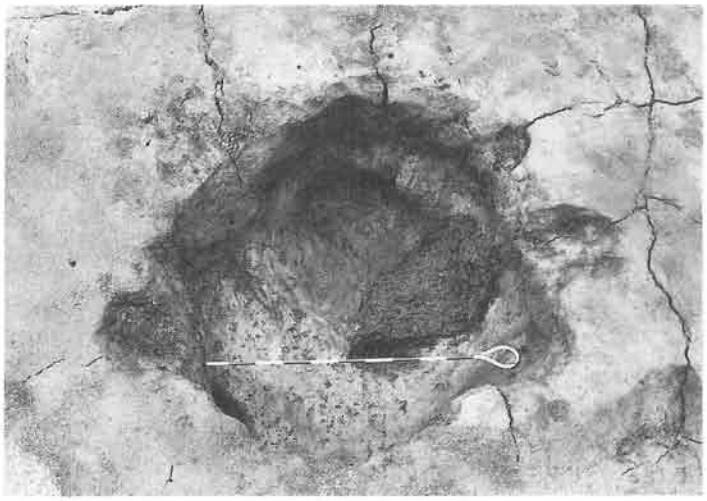
7号掘立柱建物　完掘（南東から）



7号掘立柱建物P9　土層断面（南から）



8号掘立柱建物　完掘（北東から）

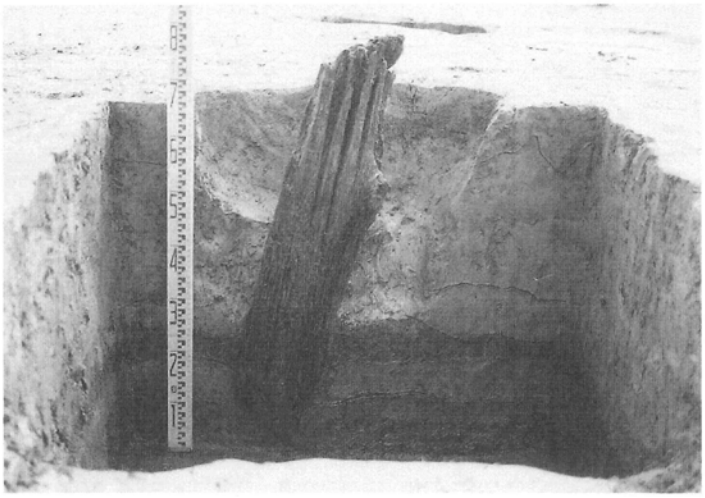


8号掘立柱建物P8　完掘（北から）

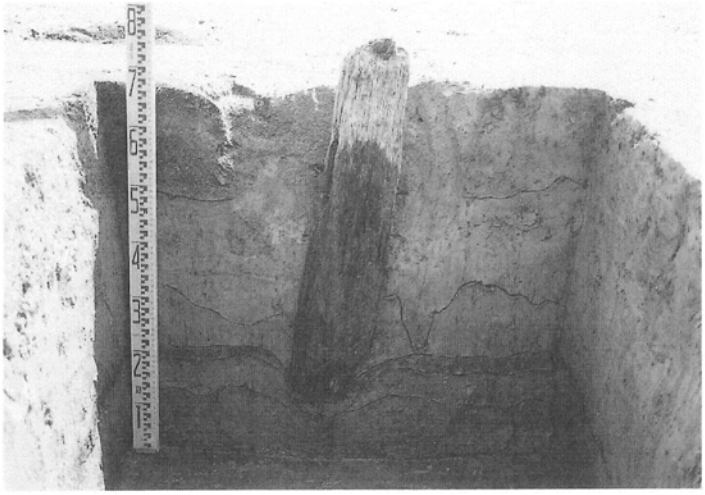
9号掘立柱建物　完掘（南から）

10号掘立柱建物　完掘（南東から）

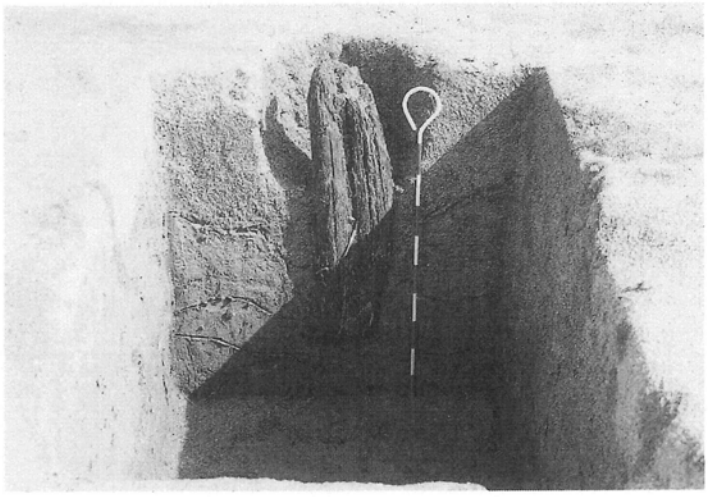
8～10号掘立柱建物　完掘（南東から）



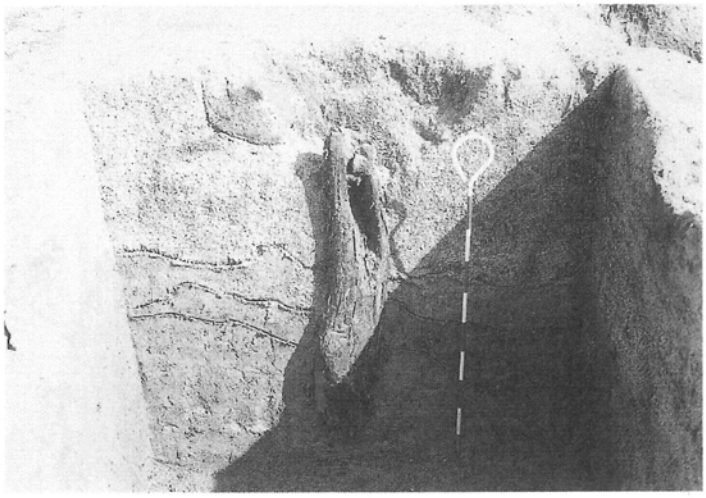
10号掘立柱建物P1　柱根検出状態（西から）



10号掘立柱建物P8　柱根検出状態（西から）

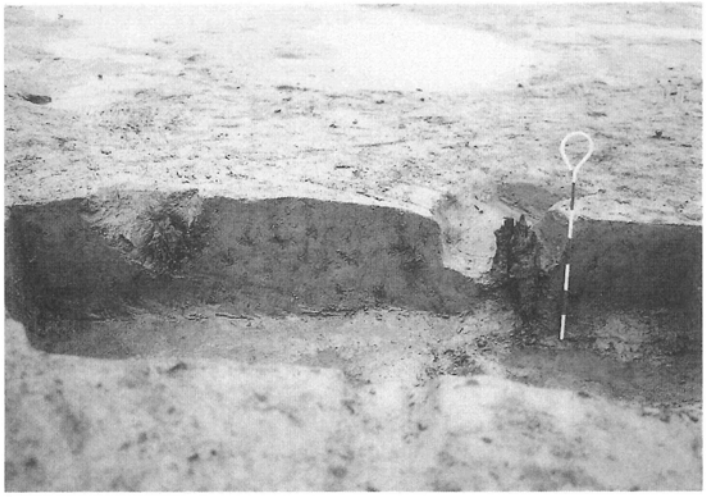


11号掘立柱建物P1　柱根検出状態（南から）



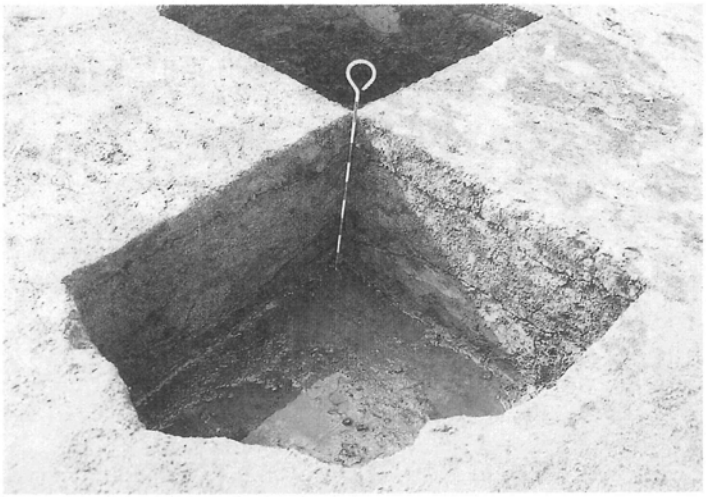
11号掘立柱建物P2　柱根検出状態（南から）

2号柵列　完掘（南から）

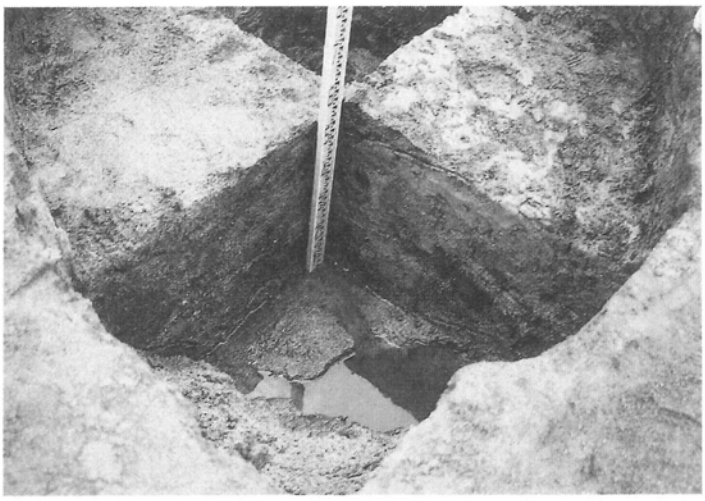


2号柵列P1・2　柱根検出状態（北西から）

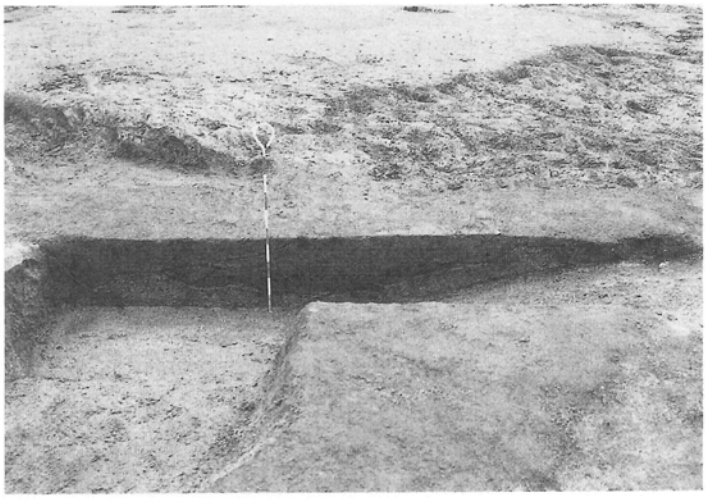
図版10　1号井戸・6号溝・1号土坑



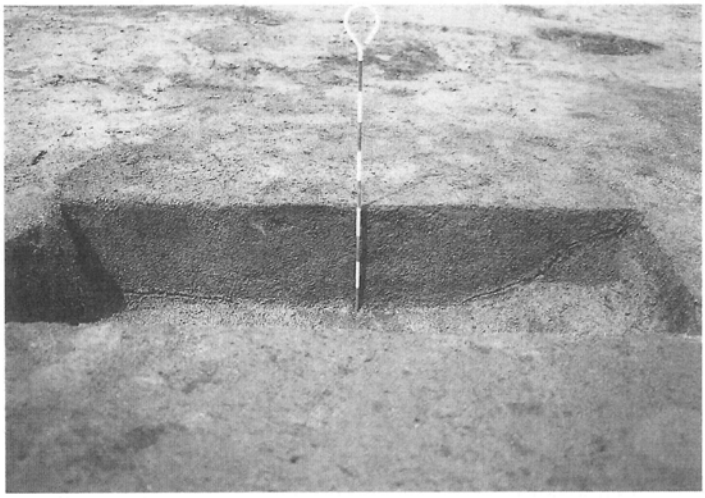
1号井戸　上半土層断面（南東から）



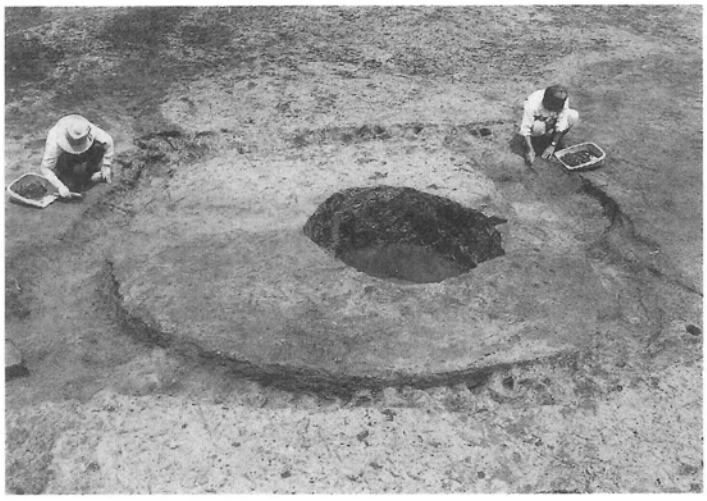
1号井戸　下半土層断面（南東から）



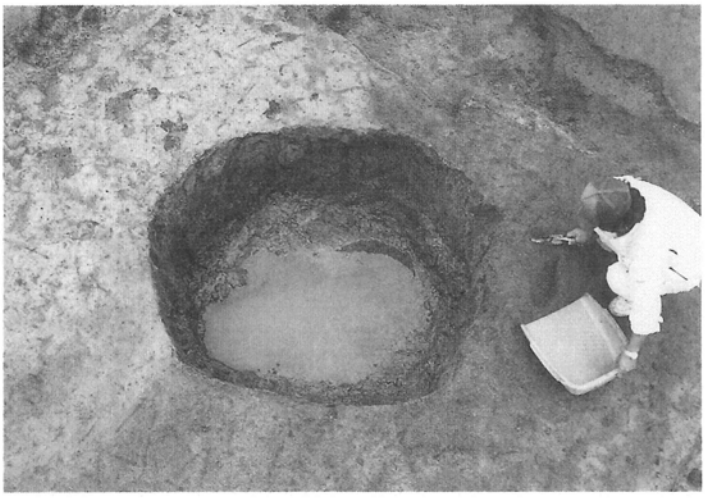
6・14号溝　土層断面（北から）



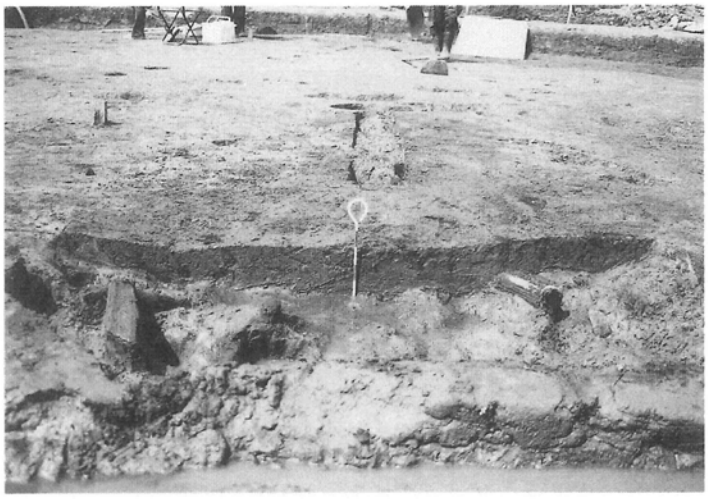
6号溝　土層断面（南から）



1号井戸・6号溝　完掘（南から）

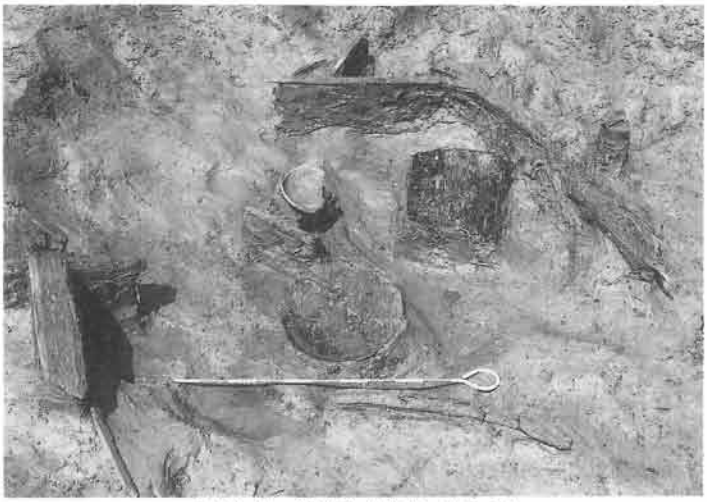


1号井戸　完掘（南西から）

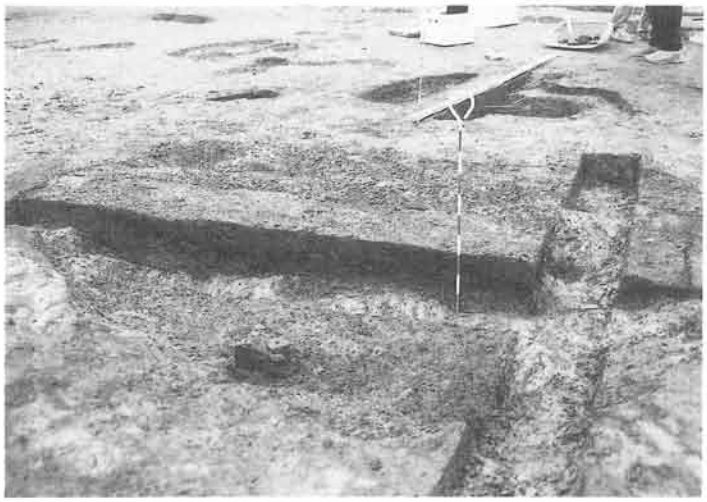


1号土坑　土層断面（南から）

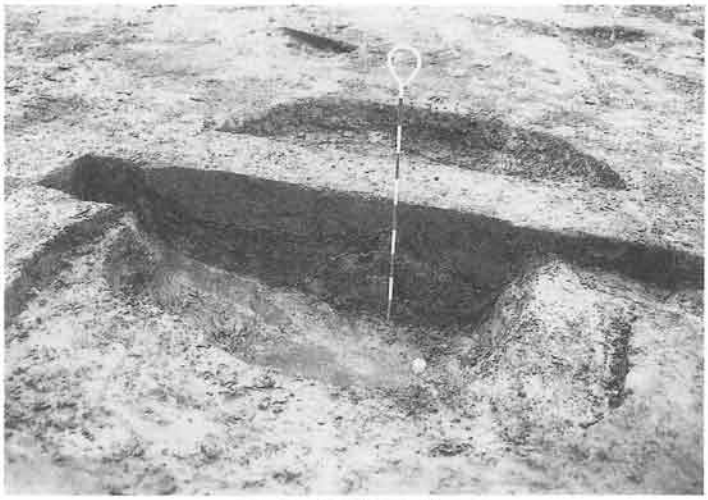
1号土坑　完掘（南から）



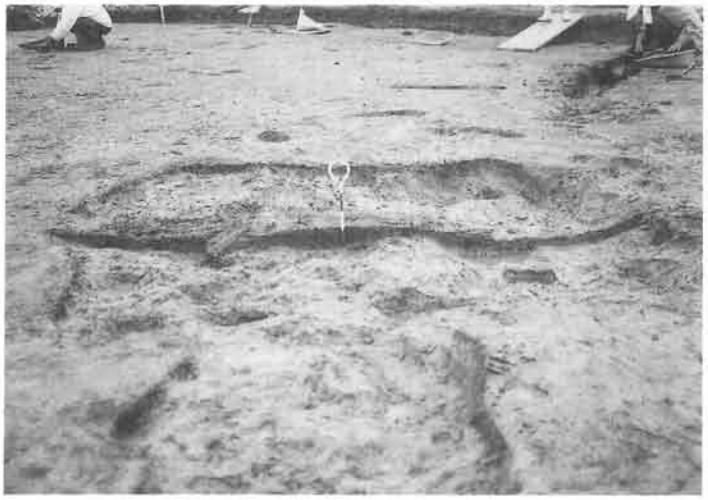
1号土坑　遺物出土状態（南から）



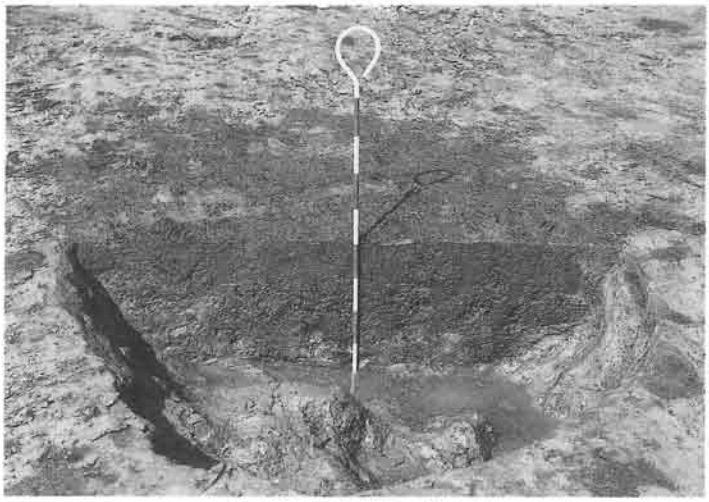
3号土坑　土層断面（東から）



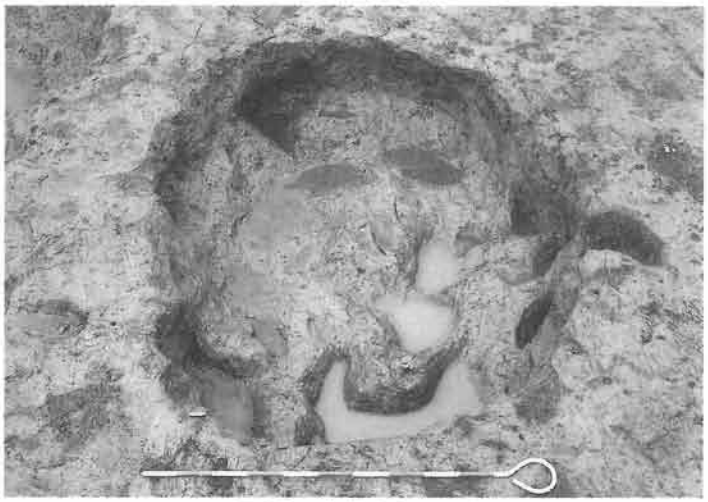
4号土坑　土層断面（東から）



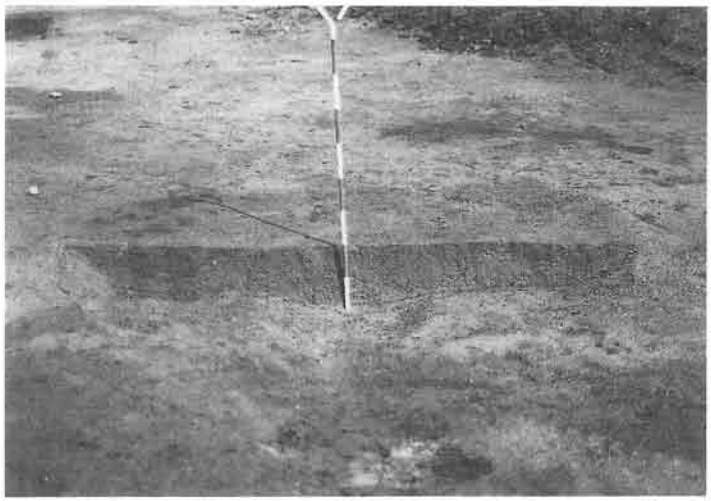
7号土坑　土層断面（南東から）



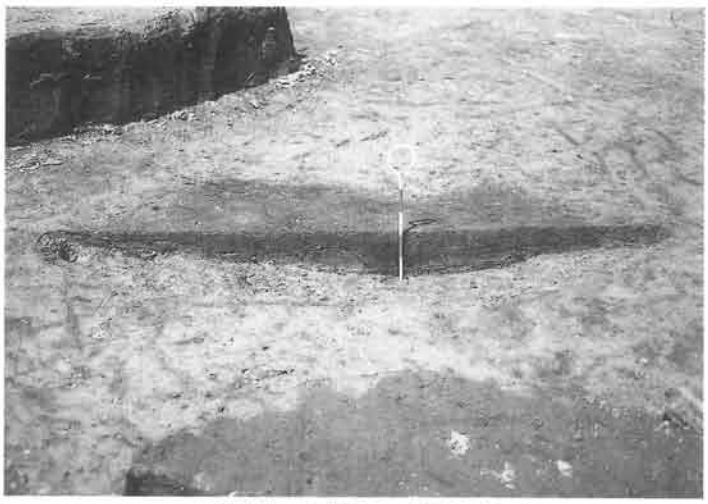
8号土坑　土層断面（南から）



8号土坑　完掘（南西から）

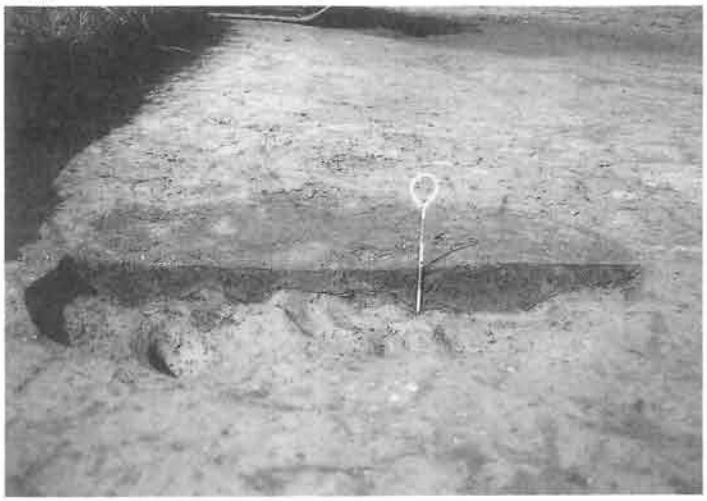


9号土坑　土層断面（南東から）

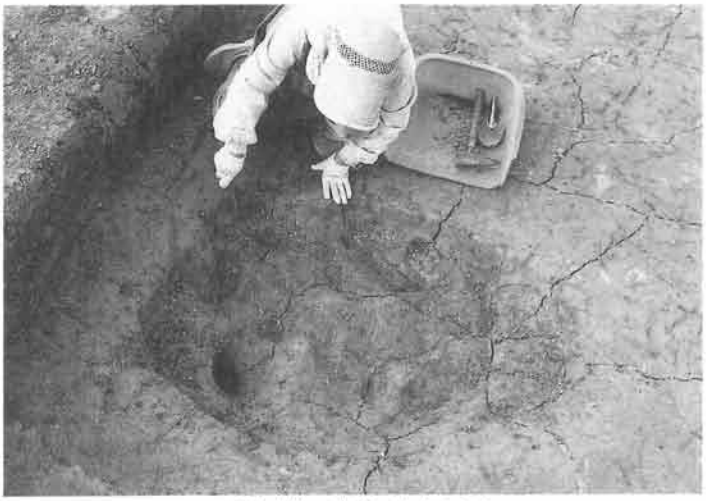


11号土坑　土層断面（南東から）

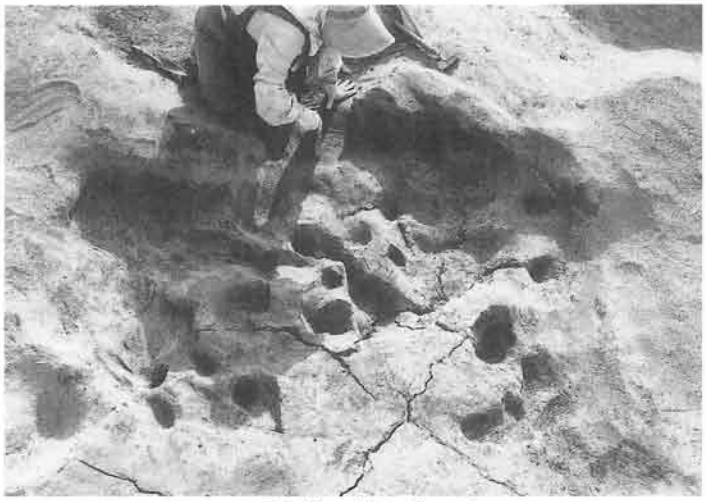
図版12　13～17号土坑・ピット



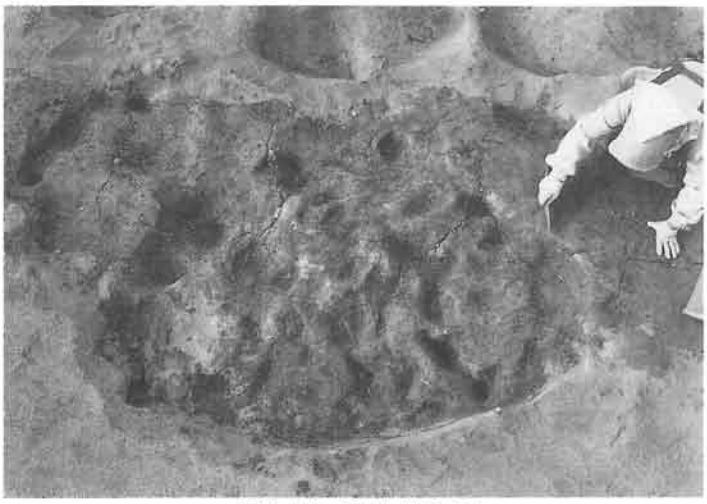
13号土坑　土層断面（南から）



13号土坑　完掘（南東から）

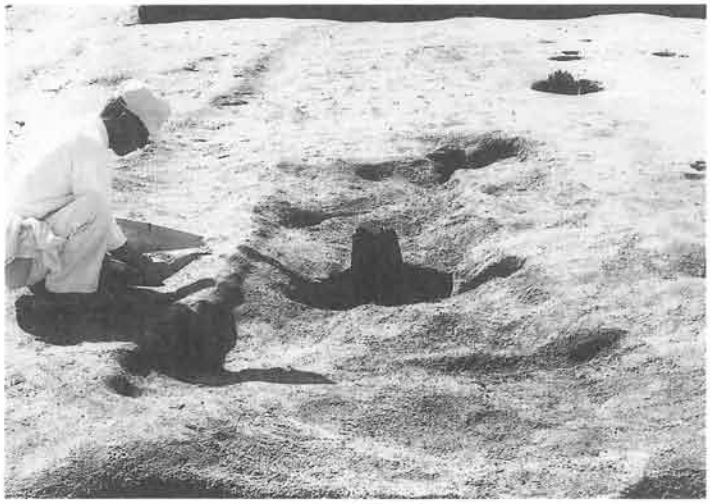


14号土坑　完掘（北から）

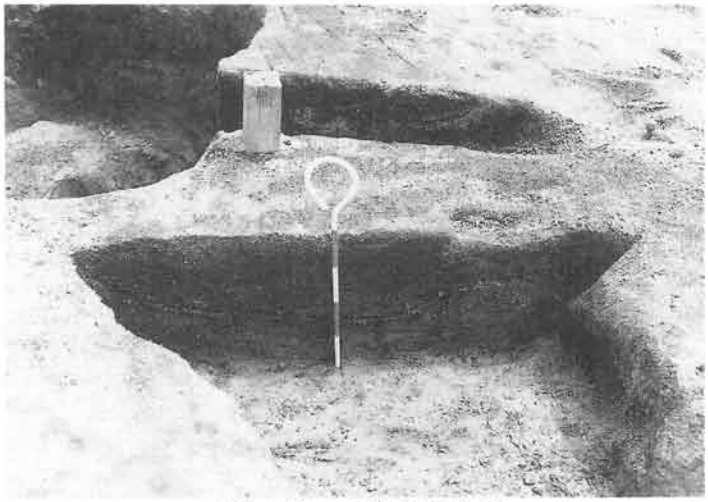


15号土坑　完掘（南から）

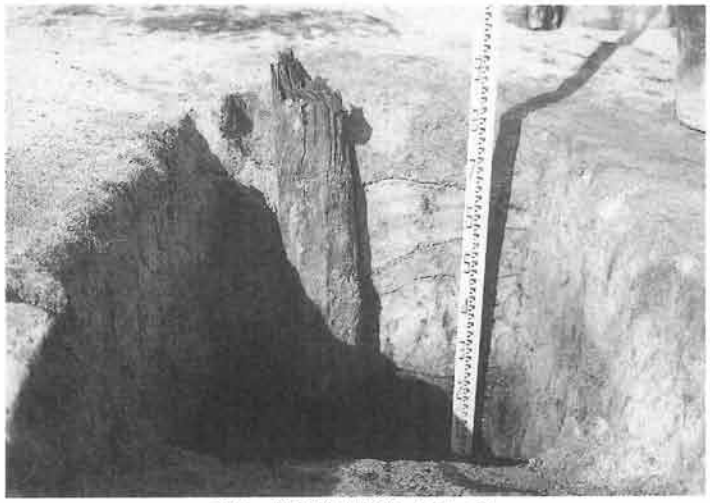
16号土坑　土層断面（東から）



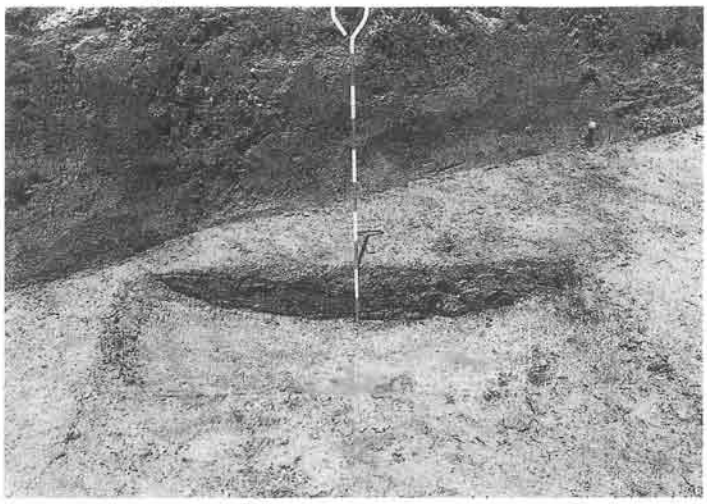
16号土坑　完掘（東から）



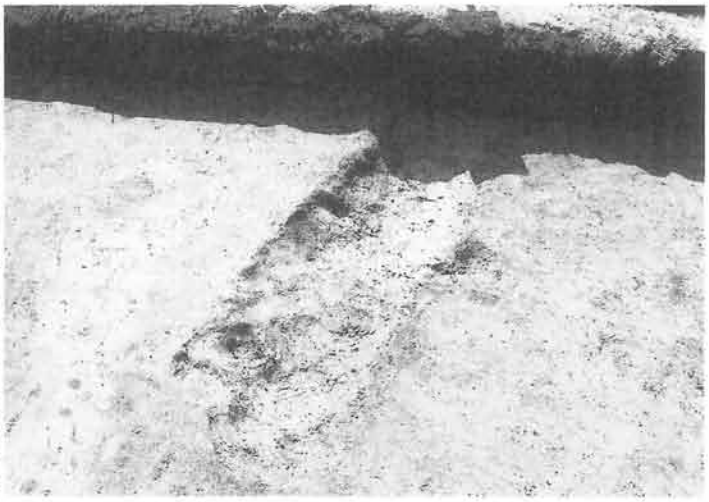
17号土坑　土層断面（西から）



P81　柱根検出状態（南から）

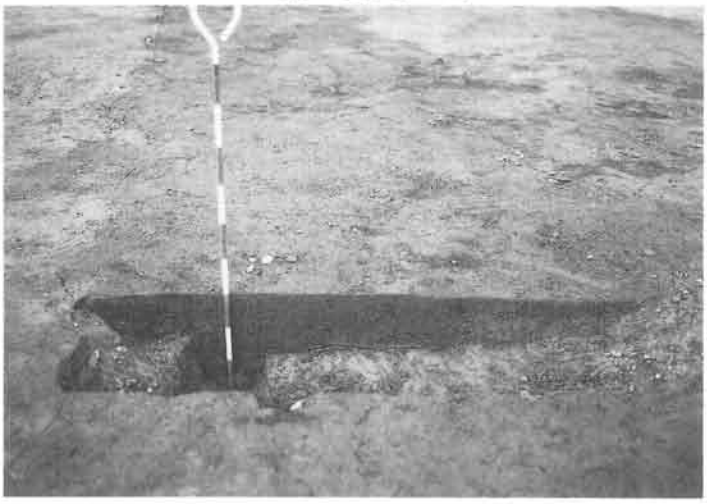


1号溝　土層断面（南東から）

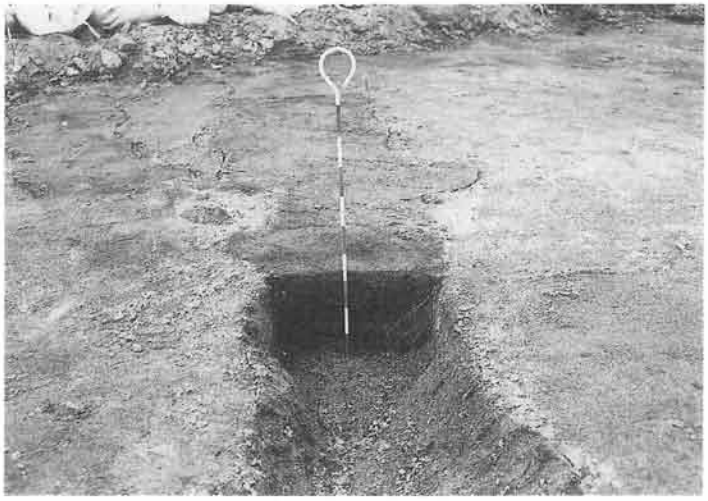


1号溝　完掘（東から）

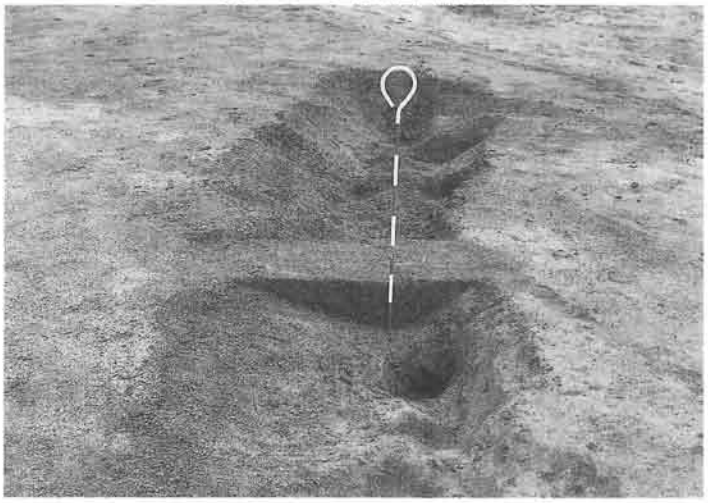
10・11号溝　完掘（南西から）



10号溝　B-B´土層断面（南西から）

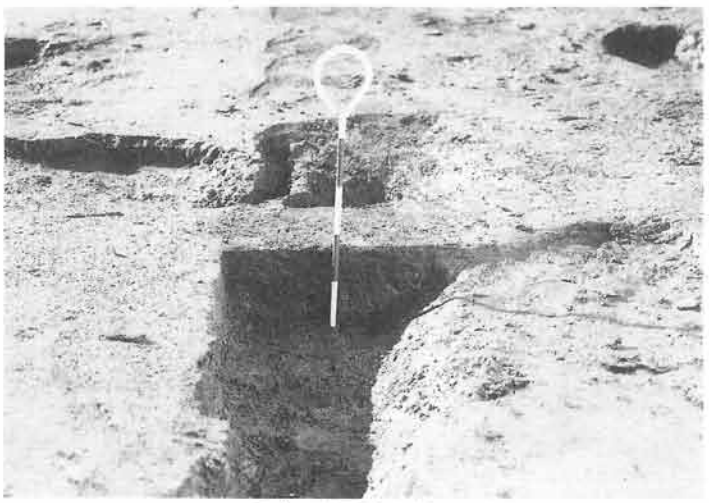


11号溝　土層断面（南西から）



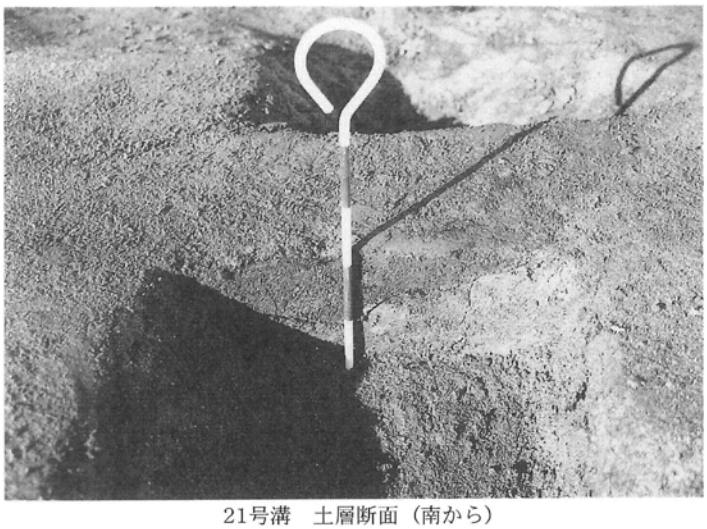
12a号溝　土層断面（西から）

18・20号溝　完掘（南東から）



18a号溝　土層断面（東から）

図版14　21～29号溝



21号溝　土層断面（南から）

22号溝　A-A′土層断面（南東から）

23号溝・P26　土層断面（北西から）

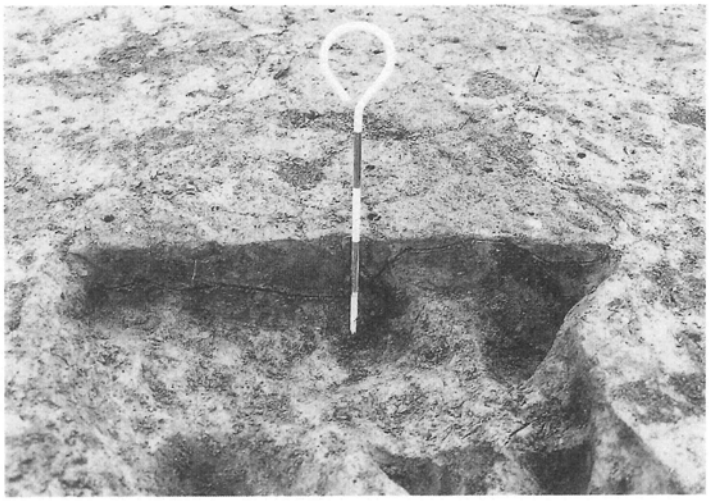
23号溝　完掘（南東から）

25・26号溝　完掘（南東から）

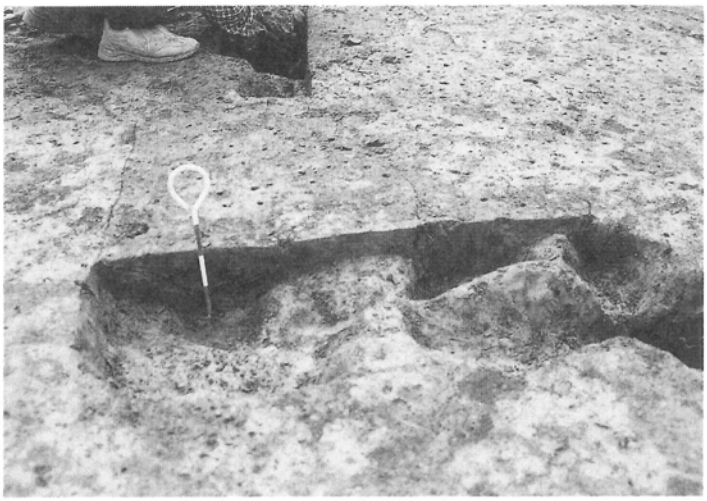
29号溝　完掘（南西から）

28号溝　土層断面（南西から）

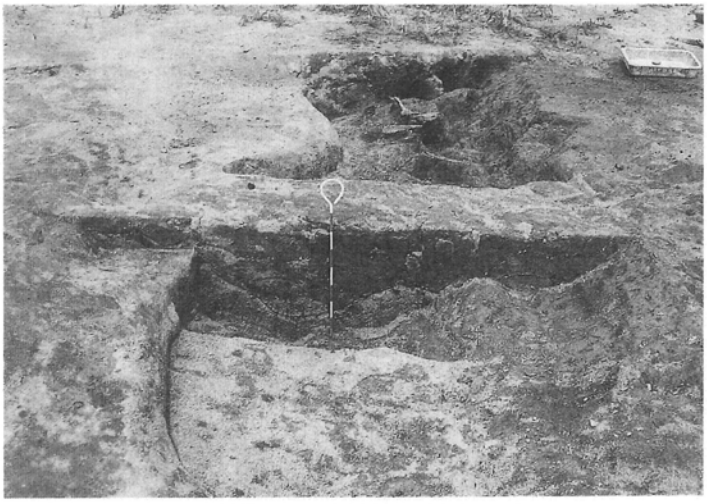
28号溝　遺物出土状態（北から）



30号溝　土層断面（北西から）



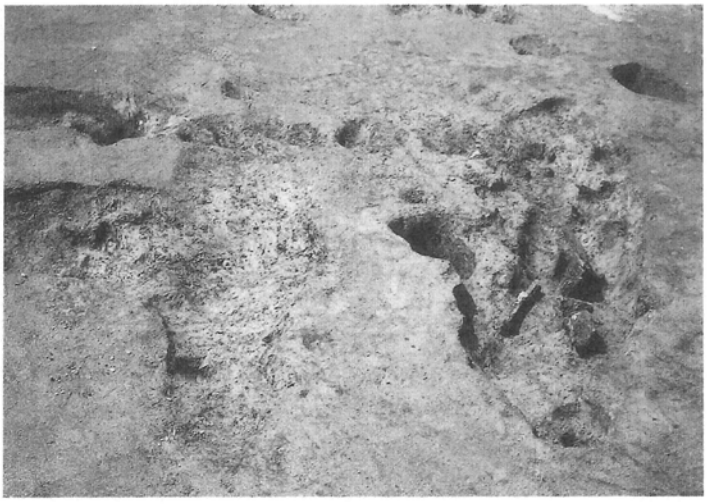
31号溝　土層断面（北西から）



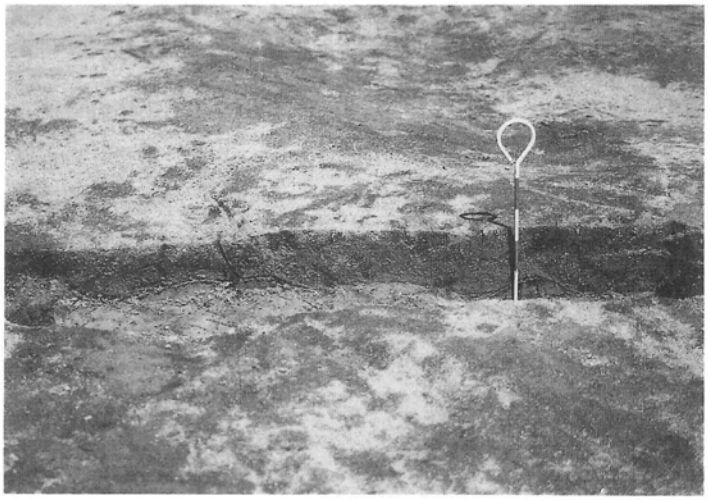
33号溝　B-B′土層断面（南東から）

33号溝　遺物出土状態（南東から）

33号溝　完掘（南東から）



35・36号溝　完掘（東から）



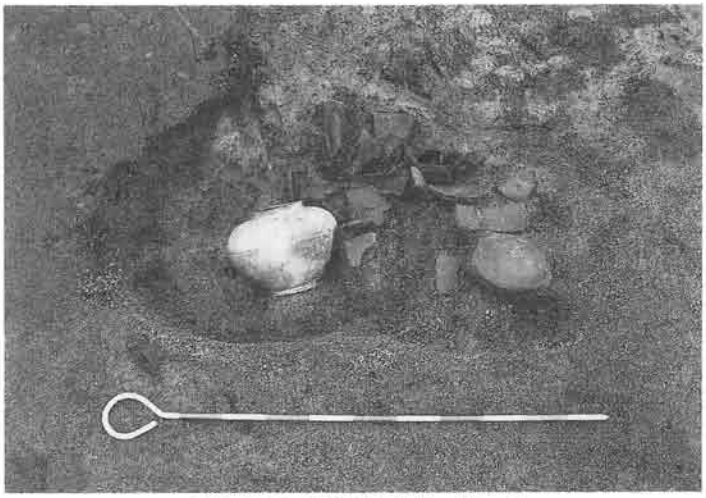
34号溝　土層断面（南から）

34号溝　完掘（南から）

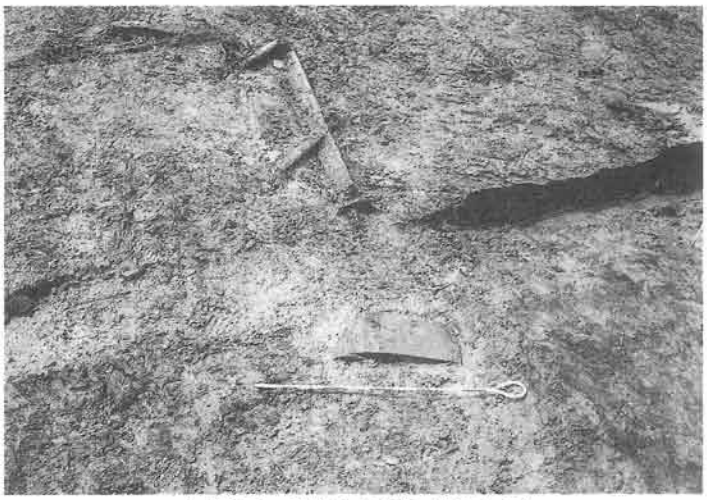
図版16　39・40号溝・1号流路・護岸施設

39号溝　完掘（東から）

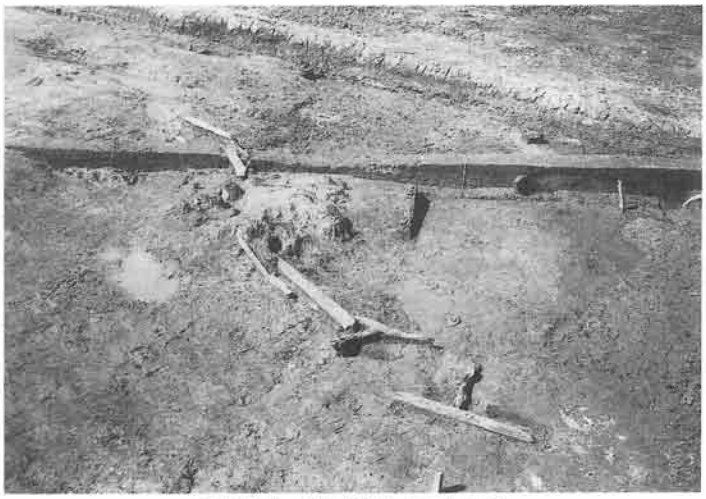
40号溝　完掘（北西から）



1号流路岸　遺物出土状態（南から）

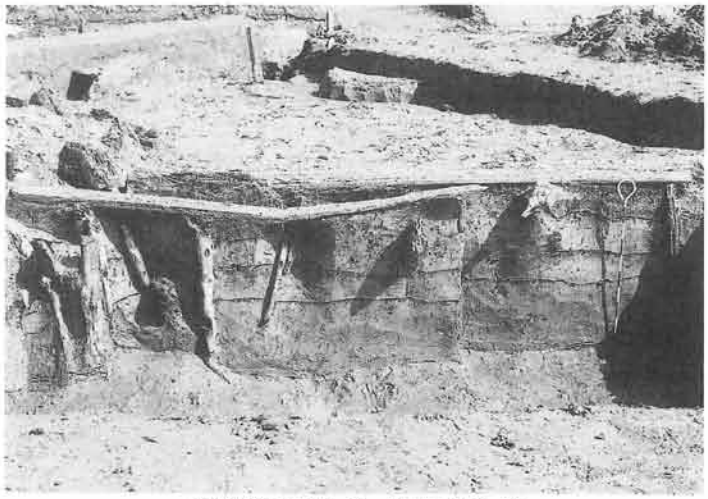


1号流路　遺物出土状態（南東から）

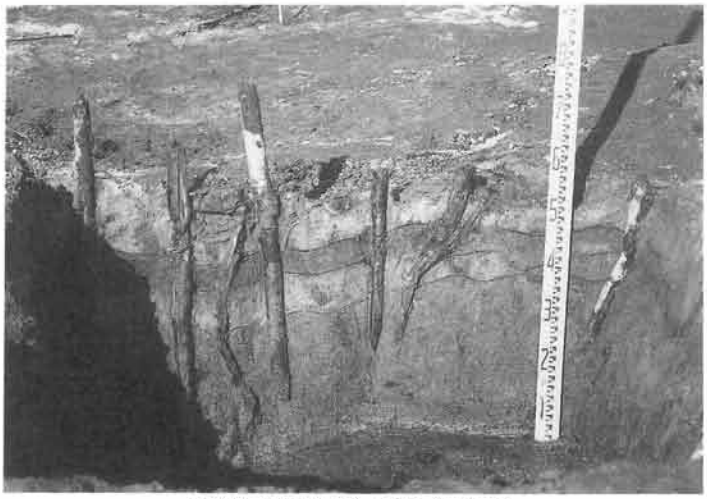


護岸施設　検出状態（南東から）

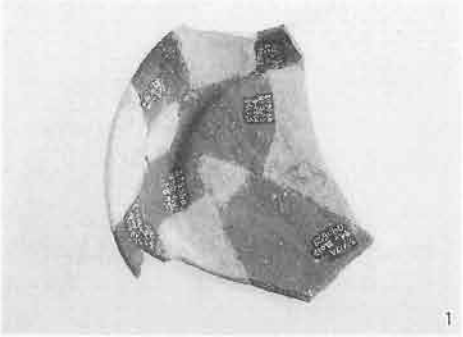
護岸施設　検出状態近接（南から）

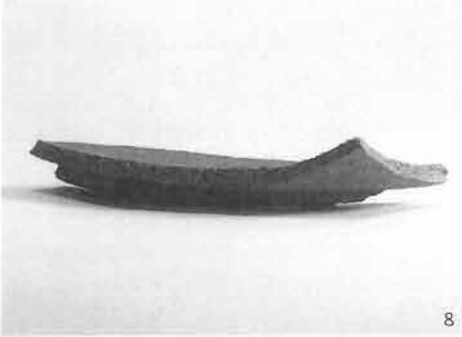


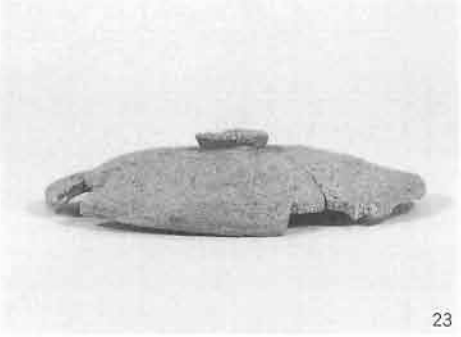
護岸施設杭列A-A′　断面（南から）

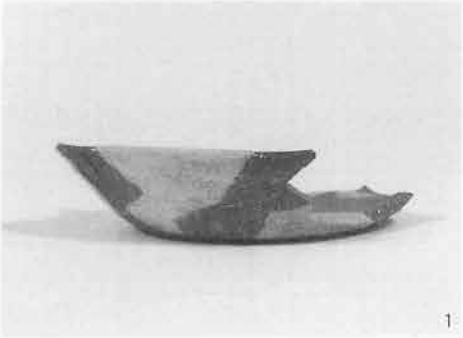


護岸施設杭列B-B′　断面（西から）

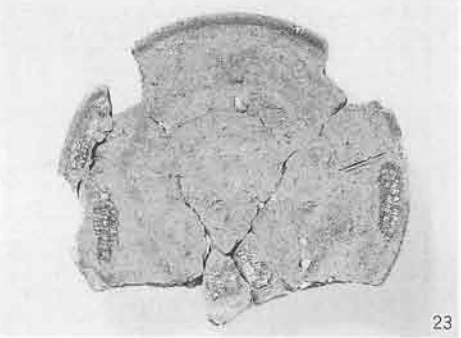

1


8

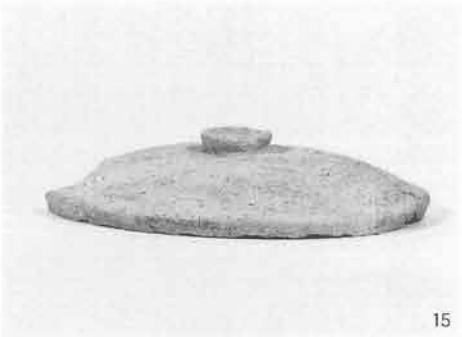

23


1

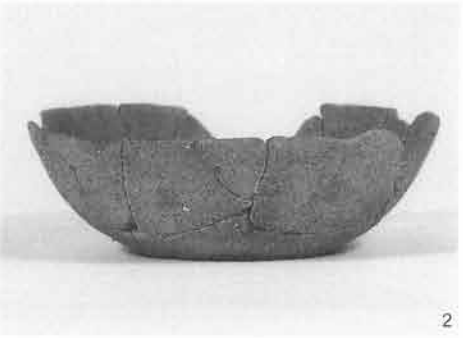
13


23

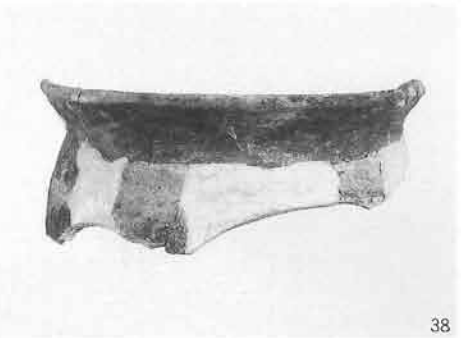
1


15

30


2

17


38

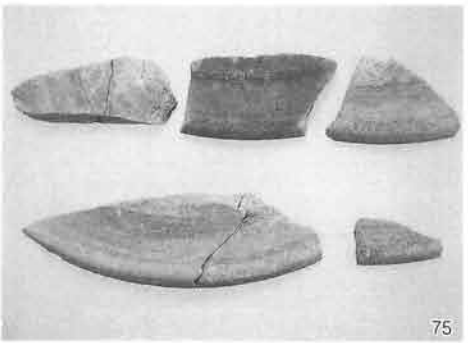
2

20

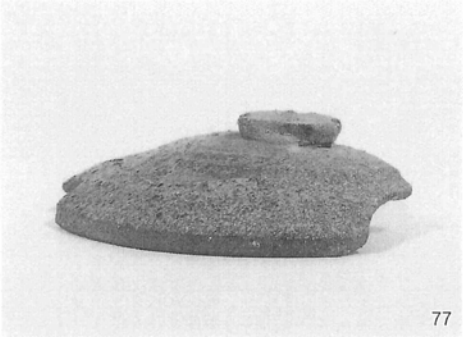
65

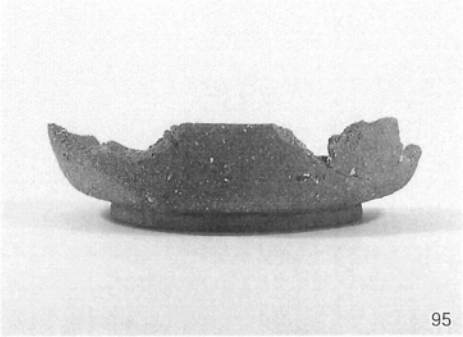
7

21

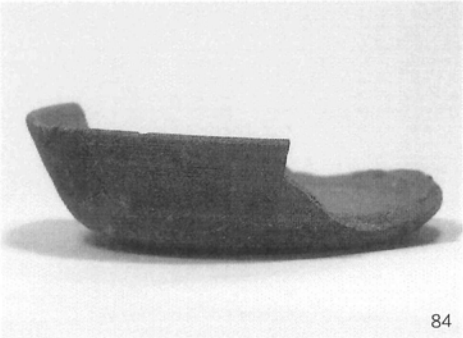

75

図版18　遺構出土遺物（2）

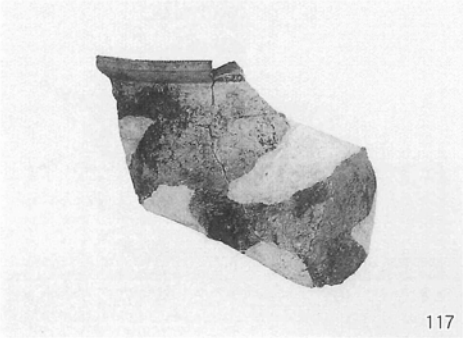

77


95

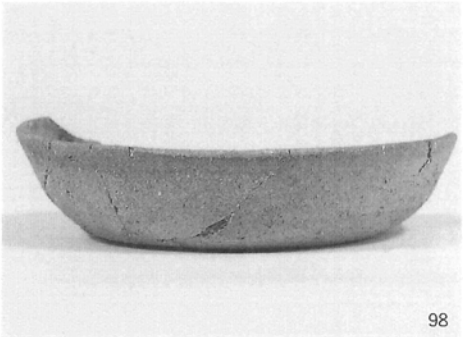
115

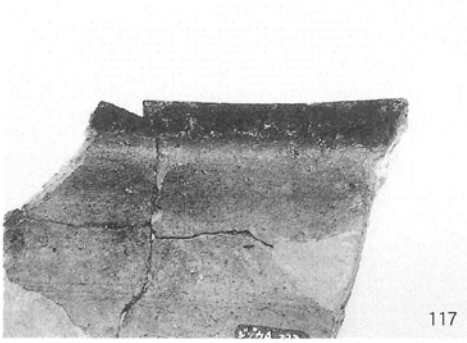

84

95


117

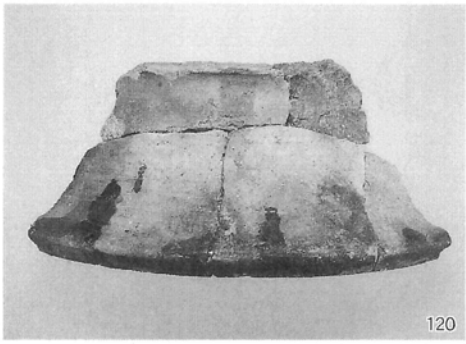
84

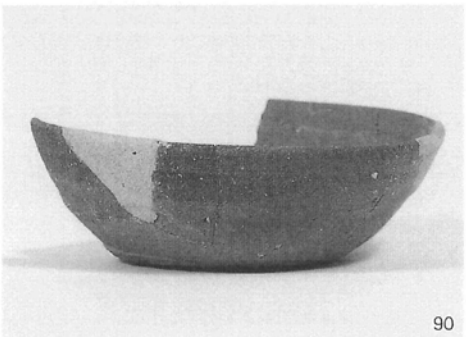

98


117

89

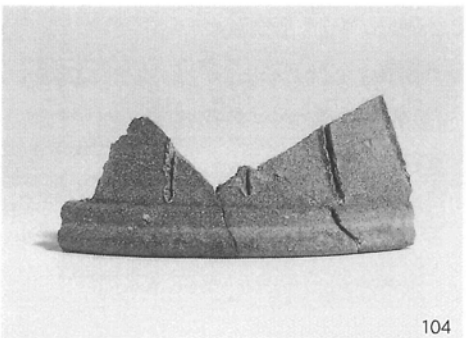
98


120


90

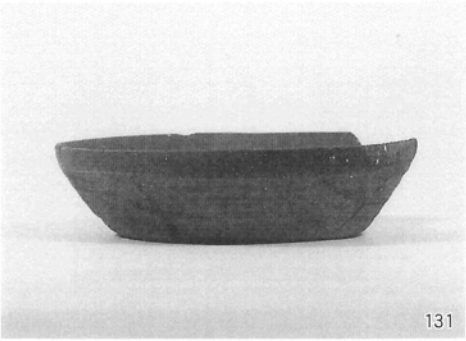
106

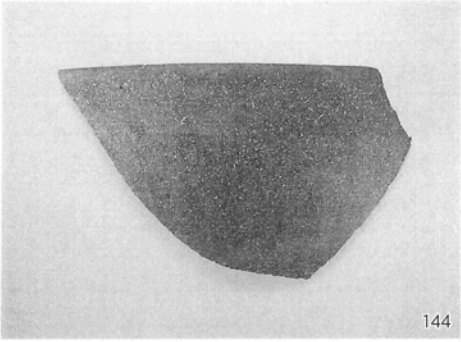
129

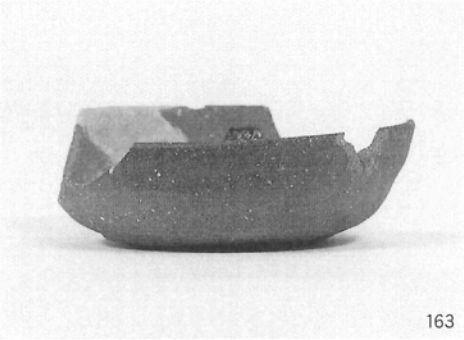

104

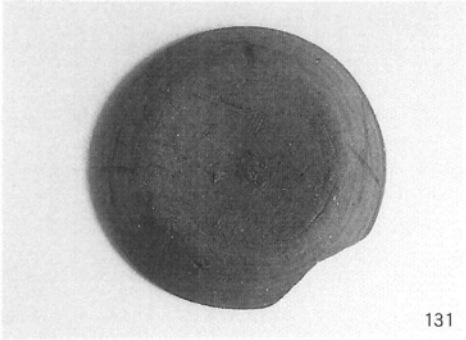
107

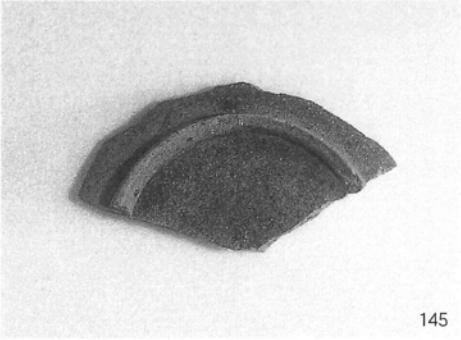
130


131


144


163


131

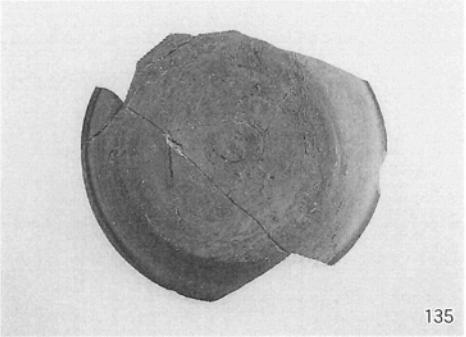

145

163

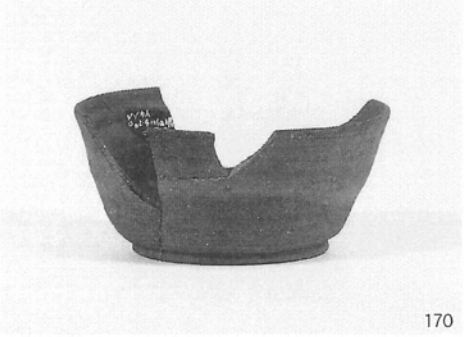
135

148

168


135

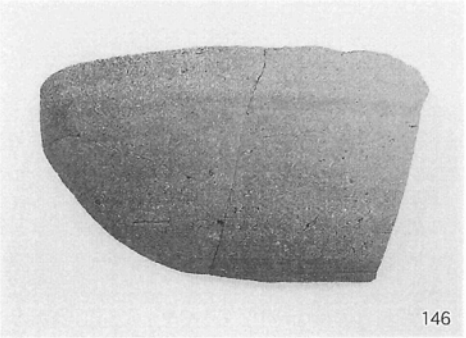
148

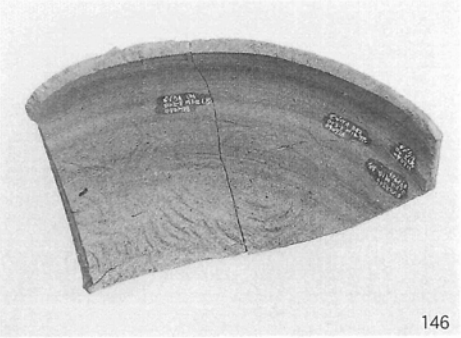

170

142

158

172

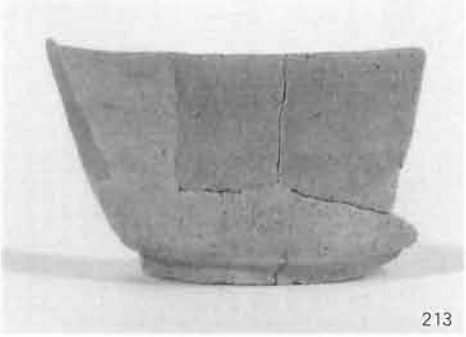

146


146

172

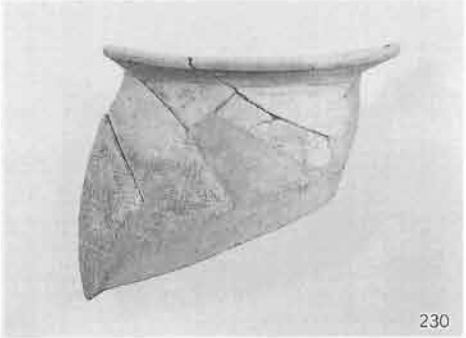
図版20　遺構出土遺物（4）・遺構外出土遺物（1）

173

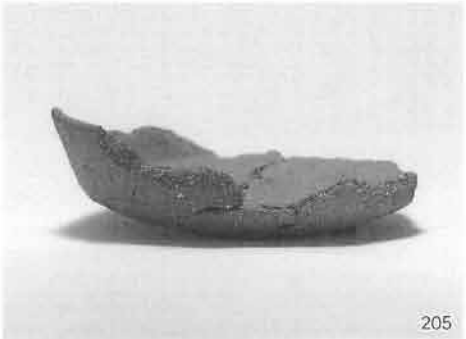

213

222

200


230

222


205

219

244

205

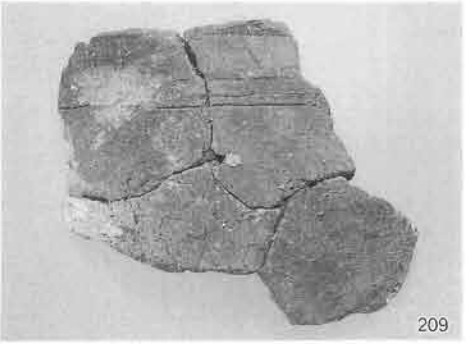
219

245

208

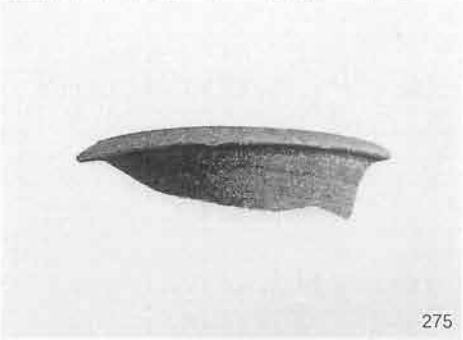
219

251


209

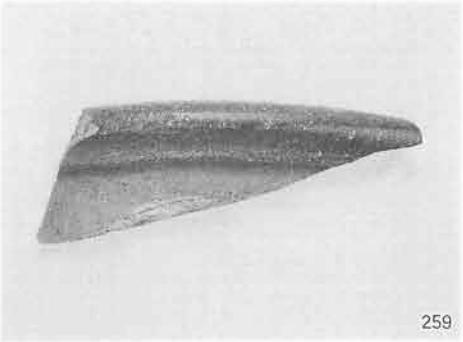
242

251

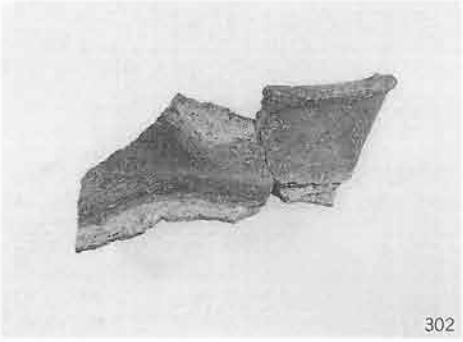

275

280

300


259

280


302

265

288

303

277

288

304

277

296

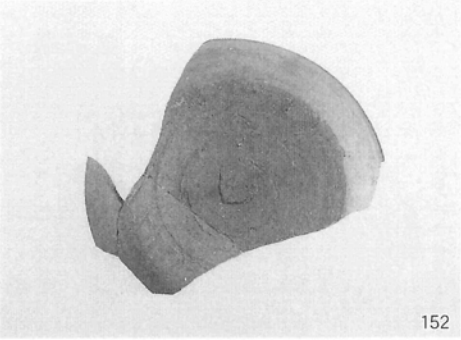
96

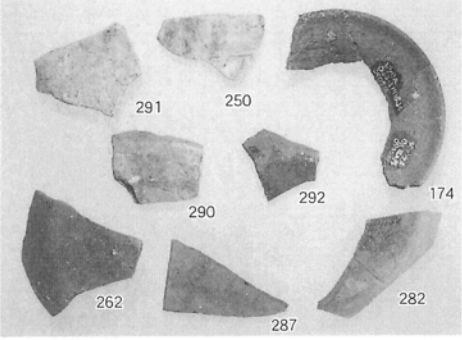
285

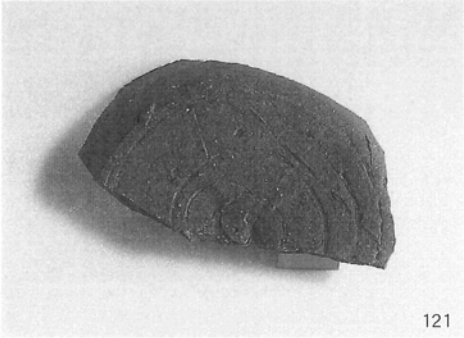
298

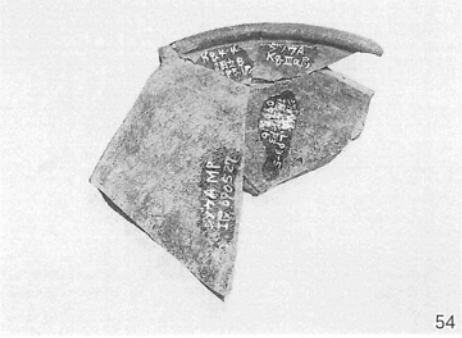
227

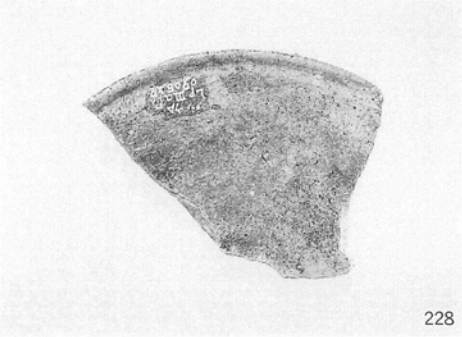
図版22　墨書土器・転用硯ほか

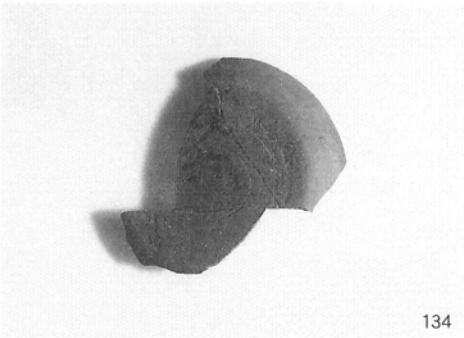


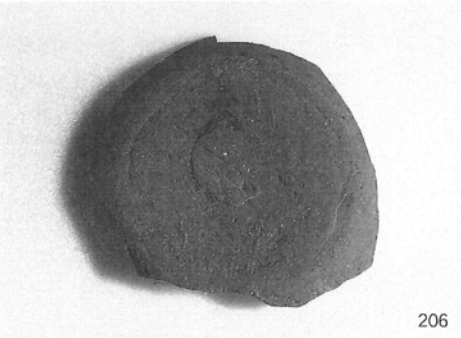


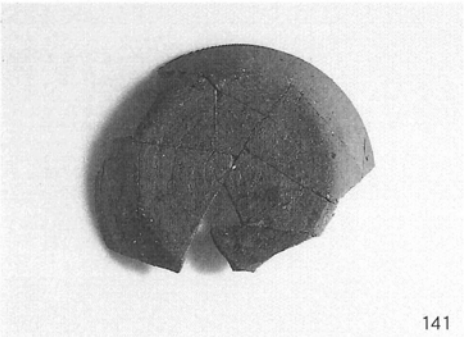


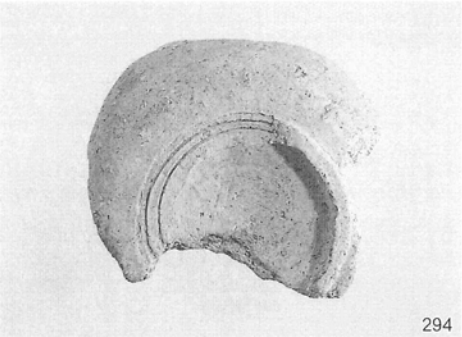


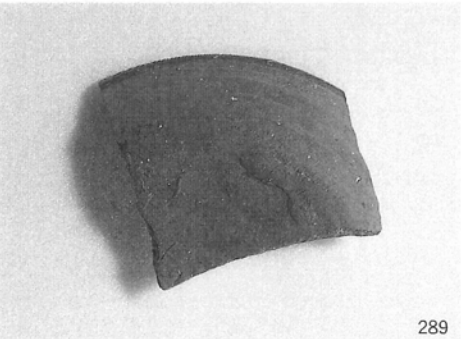


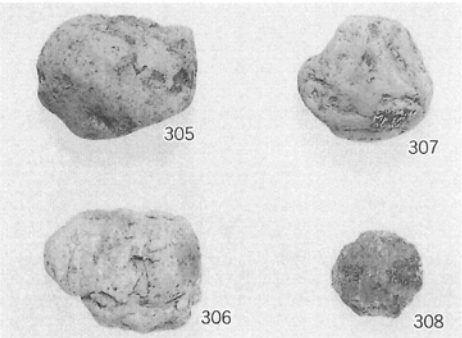








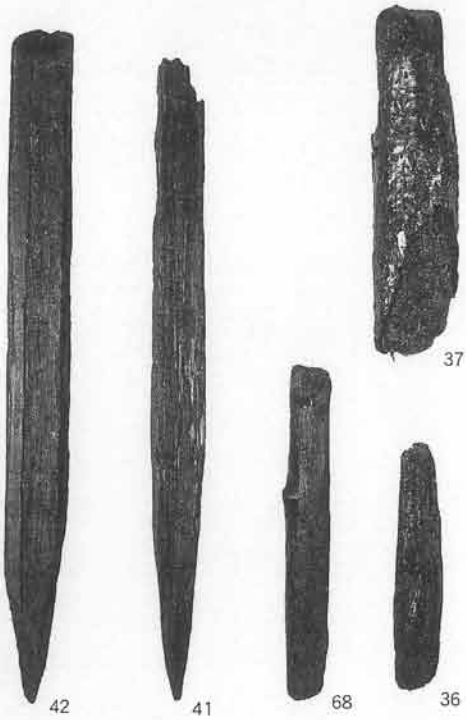


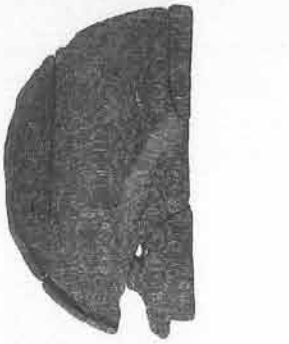


40

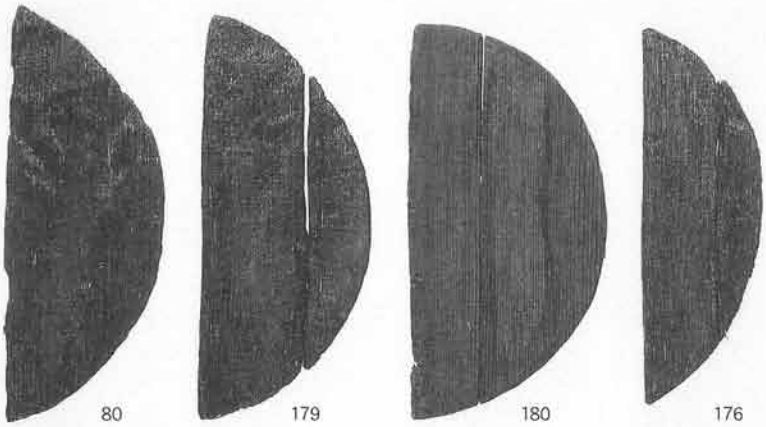
69

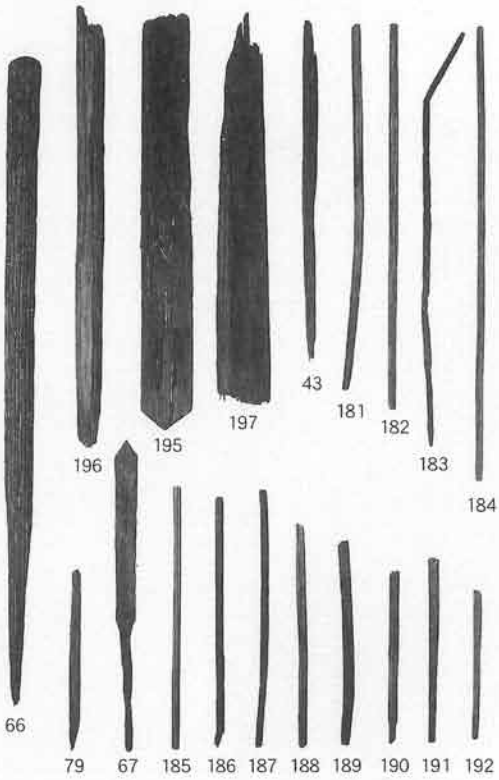
69


42 41 68 36 37


177

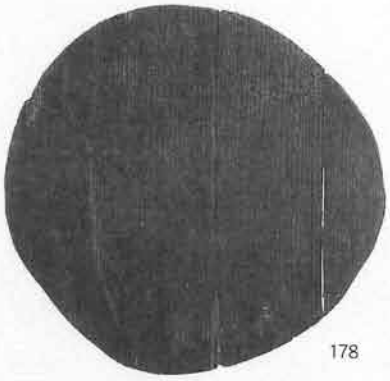
177


80 179 180 176


66 79 67 185 186 187 188 189 190 191 192 196 195 197 43 181 182 183 184

175

82

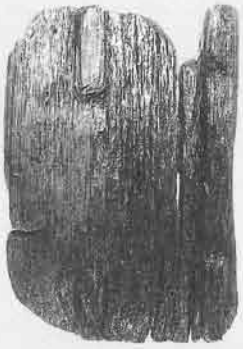

178

198

199

図版24　木製品（2）・柱・机・板ほか

193


193

194

194

34

45

59

61

128

60

87

126

125

309

310

311

要　　約

1　地蔵潟Ａ遺跡は，新潟県新発田市飯島字地蔵潟 1154 番地ほかに所在する。遺跡は，標高約３ｍの旧加治川扇状地の扇端部にある細長い微高地上に立地し，現況は水田である。

2　調査は，県営経営体育成基盤整備事業（佐々木南部郷２期地区）に伴い，新潟県新発田地域振興局から依頼を受けた新発田市教育委員会が，平成 21 年５月 25 日から９月 28 日にかけて現地調査を実施した。調査面積は 2,865 ㎡である。

3　調査の結果，地蔵潟Ａ遺跡は古代（奈良～平安時代）の集落跡と判明した。

4　遺構は，掘立柱建物 11 棟，柵列２列，井戸１基，土坑 17 基，ピット 90 基，溝 41 条，杭列３列，護岸施設１列，流路１筋を検出し，遺物は土師器，須恵器，漆器椀，木製盤，曲物側板・底板，箸状木製品，田下駄，斎串，刀形木製品などが出土した。出土遺物から，遺跡の時期は８世紀後半から９世紀中葉である。

5　本遺跡出土土器の検討のため在地窯出土資料の再検討を行い，８世紀中葉以降の笹神丘陵窯跡群出土資料の区分と変遷を再構成した。笹神丘陵窯跡群出土資料の変遷は大きく４期に区分でき，笹神丘陵窯跡群１期は８世紀中葉，同２期は８世紀後半，同３期は８世紀末から９世紀前半，同４期は９世紀中葉に比定できる。なお，２・３期はそれぞれ古期と新期に細分することができる。

6　本遺跡出土土器は，笹神丘陵窯跡群出土資料との対比から４時期に分けられる。１期は元山４号窯出土資料を指標とする笹神丘陵窯跡群２古期，２期は高山寺窯出土資料を指標とする笹神丘陵窯跡群３古期，３期は馬上３号窯出土資料を指標とする笹神丘陵窯跡群３新期，４期は狼沢２号窯出土資料・道婦窯表採資料を指標とする笹神丘陵窯跡群４古から新期にそれぞれ比定できる。なお，この変遷は小泊窯群産須恵器及び山三賀編年の変遷とも矛盾しない。

7　遺跡は，掘立柱建物群を中心とした遺構の変遷と，遺構出土遺物の組成からⅠ～Ⅳ期の変遷をたどる。Ⅰ期は８世紀後半に位置づけられる。建物群が形成される前の時期であり，具体的な土地利用の様子は不明である。Ⅱ期は８世紀末から９世紀初頭に位置づけられる。建物群を構成し，その周囲を溝で区画する。人々が居を構え，農業生産に従事したと推測する。Ⅲ期は９世紀前半に位置づけられる。流路が形成され，流路沿いに建物群が配置される段階である。護岸施設の整備や道路の敷設，井戸の掘削も行われている。流路沿いに倉庫が建てられ，内水面を利用し，物資の流通を掌握していたと考えられる。Ⅳ期は９世紀中葉頃に位置づけられる。建物分布が散漫になり，集落の衰退を感じさせる様相となる。このような遺跡の変遷は，集落の散村化や建物小群を構成する集団の自立化といった社会全体に見られる集落の変化を反映したものであろう。

8　本遺跡を直接官衙と関連づけることは難しく，官衙関連以外の遺跡で，内水面を利用して物資の流通を掌握していたと考えられる集落は，阿賀北地域では初の検出事例である。本遺跡のような性格を有する集落を，どのように評価するかは今後の課題である。

報告書抄録

ふりがな	じぞうがたえーいせき
書　名	地蔵潟A遺跡 発掘調査報告書
副書名	県営経営体育成基盤整備事業(佐々木南部郷2期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第44
編著者名	本田祐二・笹澤正史・浅井勝利・井上　巖・小林克也・㈱加速器分析研究所
編集機関	新発田市教育委員会（教育部　生涯学習課　文化行政室　埋蔵文化財係）
所在地	〒959－2323　新潟県新発田市乙次281番地2　　TEL　0254-22-9534
発行年月日	平成24(2012)年3月19日
体裁	A4判　横組1段　本文121頁　写真図版24頁

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じぞうがた 地蔵潟A遺跡	しばたしいいじま 新発田市飯島 じぞうがた 字地蔵潟1154 番地ほか	15206	550	37° 55′ 34″	139° 16′ 31″	20090525～ 0928	2,865	県営経営体育成基盤整備事業 (佐々木南部郷2期地区)

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古　代	掘立柱建物11棟 柵列2列，杭列3列 流路1筋，井戸1基 溝41条，土坑17基	赤彩土師器高杯，墨書土器，円面硯，須恵器，土師器，斎串，木製盤，田下駄	8世紀中葉～9世紀中葉の笹神丘陵窯跡群の編年を4期に再編

要　約

地蔵潟A遺跡は，標高約3mの旧加治川扇状地の扇端部にある，南北に細長い微高地上に立地している。調査の結果，奈良時代から平安時代前期(8世紀後半から9世紀中葉頃)の遺構・遺物を検出した。遺跡は，出土遺物と掘立柱建物を中心とした遺構の状況から，その変遷を4時期に区分することができる。Ⅰ期とする建物群形成前の時期と，Ⅱ期とする建物群を形成し，農業生産に従事していたと考えられる時期，Ⅲ期の内水面を利用した物資の流通を掌握していた時期，Ⅳ期の集落衰退期とに区分できると判断した。当遺跡からは，周辺地域での出土例に乏しい赤彩土師器などが出土しており，有力者の存在を感じさせる。建物構成や配置は官衙関連遺跡に類するものの，出土遺物の様相からは本遺跡を直接官衙と結び付けることは難しい。官衙関連以外の遺跡で，内水面を利用して物資の流通を掌握していたと推測される集落の検出例は，阿賀北地域では初例となる。越後平野における古代の官衙や集落の成立・展開の背景には，内水面の果たした役割が大きかったとされる。今回の調査は，当地域の古代集落を考える上で，重要な例となるであろう。

地蔵潟Ａ遺跡 発掘調査報告書

県営経営体育成整備事業（佐々木南部郷２期地区）に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

発　行　　平成24（2012）年３月19日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市大字乙次281番地２
印　刷　　株式会社　エンジュ